熊本県文化財調査報告　第64集

上の原遺跡 II

1984

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第64集

上の原遺跡 II

1984
熊本県教育委員会

序　文

下益城郡城南町は、古くから文化財の宝庫として知られ、塚原古墳群、御領貝塚、阿高・黒橋貝塚などの国指定史跡をはじめ、各種の文化財が点在しております。

ここに報告する上の原遺跡は、塚原古墳群の東南に隣接した複合遺跡で、圃場整備事業に伴って昭和53～55年度に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、旧石器～歴史時代の各種の遺構・遺物が検出されました。なかでも、古墳時代の住居址は400軒以上を数え、塚原古墳群との関連において、集落と古墳群とが有機的に把握できる貴重な資料を得ることができました。

昭和57年度に『上の原遺跡Ⅰ』を刊行し、旧石器～弥生時代の遺構と遺物、古墳について調査成果を報告いたしましたが、本年度は６～７世紀の住居址、歴史時代の遺構と遺物について報告書を刊行する運びとなりました。

この報告書が広く県民の皆様に利用され、郷土や文化財の理解・愛護に活用されることを期待いたします。

最後に、調査を進めるにあたり、城南町、県農政部、県宇城事務所をはじめ、多くの方々から御指導・御協力を賜わりましたことに対して、ここに厚く御礼を申しあげます。

昭和59年３月31日

熊本県教育長　外　村　次　郎

例　　言

1．本報告書は、熊本県下益城郡城南町塚原に所在する上の原遺跡の調査報告である。

2．調査は県営圃場整備事業に伴う事前調査として、熊本県農政部（熊本県宇城事務所）の依頼により熊本県教育庁文化課が行った。

3．調査内容が多岐にわたるため、本書には６～７世紀の住居址、歴史時代の遺構と遺物について報告した。また、塚原古墳群（上の原支群）出土の馬歯についての調査結果を付論として収録した。

4．昭和57年度、「上の原遺跡Ⅰ」（熊本県文化財調査報告第58集）を刊行し、旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物、古墳に関する調査成果を報告したが、本書は上の原遺跡の第２分冊にあたる。

5．挿図の実測・製図は挿図目次に示すとおりである。掲載写真の撮影は、現地調査に関するものは各年度の調査員が行い、遺物写真については松本健郎・野田拓治が行った。

6．本書に使用した地形図（$\frac{1}{5000}$）の原図は、熊本県宇城事務所から提供を受けた。

7．本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ章を松本健郎、第Ⅱ章を野田拓治が行った。付論については、西中川　駿氏（鹿児島大学農学部助教授）から玉稿を賜った。

8．本報告書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、松本健郎が担当した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と調査の概要

1．上の原遺跡の位置……1
2．調査の契機と経過概要……2
3．成果の概要と本報告書の構成……3
4．調査の組織……4

第Ⅱ章　53・54年度調査の成果

1．調査の概要……5
2．竪穴住居址……7
3．掘立柱建物址……36
4．考察……39

第Ⅲ章　55年度調査の成果

1．調査の概要……49
2．竪穴住居址……51
3．墳墓……71
4．掘立柱建物……74
5．道路遺構……75
6．歴史時代の遺物……76
7．考察……85

第Ⅳ章　総括……92

付論　塚原古墳群(上の原支群)出土の馬歯について……97

挿　図　目　次

第１図　上の原遺跡の位置(西住作成)……1
第２図　上の原遺跡周辺地形図(松本作成)……1
第３図　上の原遺跡　昭和53・54年度調査区地形図
(野田作成)……5
第４図　上の原遺跡　53・54年度調査区全図(野田作成)…6
第５図　上の原50号住居址実測図(中原実測、野田製図)…7
第６図　上の原50・52号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……8
第７図　上の原52号住居址実測図(中原実測、野田製図)…9
第８図　上の原53号住居址実測図
(中原・野田実測、野田製図)……10
第９図　上の原53号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……11
第10図　上の原54号住居址実測図
(中原・野田実測、野田製図)……12
第11図　上の原54・56号住居址出土土器実測図
(54号＝1～5・56号＝6～7)(野田実測・製図)……13
第12図　上の原55号住居址実測図
(森山・野田実測、野田製図)……14
第13図　上の原56号住居址実測図(中原実測、野田製図)…15
第14図　上の原８号住居址実測図(野田実測・製図)……16
第15図　上の原８号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……17
第16図　上の原10号住居址実測図
(江本・大田・高谷実測、野田製図)……18
第17図　上の原10号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……19
第18図　上の原12号住居址実測図(吉田実測、野田製図)…20
第19図　上の原12号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……21
第20図　上の原47号住居址実測図
(村井・島津実測、野田製図)……22
第21図　上の原第47号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……23
第22図　上の原64号住居址実測図
(村井・島津実測、野田製図)……25
第23図　上の原64号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……26
第24図　上の原89号住居址実測図
(野田・高野実測、野田製図)……27
第25図　上の原89号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……28
第26図　上の原91号住居址実測図(高野実測、野田製図)…29
第27図　上の原91・93号住居址(91号＝1・2、93号＝3～8)
出土土器実測図(野田実測・製図)……30
第28図　上の原93号住居址実測図(高野実測・野田製図)折込
第29図　上の原100号住居址実測図(古庄実測・野田製図)…31
第30図　上の原100号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……32
第31図　上の原106号住居址実測図
(村井・島津実測、野田製図)……33
第32図　上の原106号住居址出土土器実測図
(野田実測・製図)……34
第33図　上の原106号住居址出土砥石(野田実測・製図)……35
第34図　上の原１号掘立柱建物址
(野田・広瀬実測、野田製図)……37
第35図　上の原遺跡出土の歴史時代土器(野田実測・製図)・38
第36図　住居規模の比較(野田作成)……40
第37図　竪穴住居址の主軸方位(野田作成)……41
第38図　集落の単位と変遷(野田作成)……45
第39図　古代浜戸川流域の集団関係(野田作成)……47
第40図　55年度調査区全体図(松本・和田作成)……49
第41図　住居址配置図
(松本・勢田・浦田実測、松本・和田製図)……51
第42図　Ｄ－１－１・２号住居址実測図
(高野実測、松本・和田製図)……52
第43図　Ｄ－１－１号住居址竈実測図
(高野実測、松本・和田製図)……53
第44図　Ｄ－１－２号住居址出土遺物実測図
(松本実測・製図)……53
第45図　Ｄ－１－７・８号住居址実測図
(森山実測、松本・和田製図)……54
第46図　Ｄ－１－８号住居址出土遺物実測図
(松本実測・製図)……54
第47図　Ｅ－１－３号住居址実測図
(森山実測、松本・和田製図)……55
第48図　Ｅ－１－３号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……56
第49図　Ｅ－１－６号住居址実測図
(古森実測、松本・和田製図)……57
第50図　Ｅ－１－６号住居址竈実測図
(古森実測、松本・和田製図)……57
第51図　Ｅ－１－６号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……58
第52図　Ｅ－２－６・７号住居址実測図
(松本・勢田実測、松本・和田製図)……59
第53図　Ｅ－２－６号住居址竈実測図
(松本・勢田実測、松本・和田製図)……59
第54図　Ｅ－２－６号住居址出土遺物実測図
(松本実測・製図)……60
第55図　Ｅ－２－７号住居址出土遺物実測図
(松本実測・製図)……60
第56図　Ｆ－２－３・５号住居址実測図
(森山実測、松本・和図製図)……61
第57図　Ｆ－２－３号住居址竈実測図
(森山実測、松本・和田製図)……62
第58図　Ｆ－２－３号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……62
第59図　Ｆ－２－５号住居址竈実測図
(森山実測、松本・和田製図)……63
第60図　Ｆ－２－５号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……64
第61図　Ｆ－２－６・７・10・13号住居址実測図
(森山実測、松本・和田製図)……折込
第62図　Ｆ－２－６号住居址竈実測図
(森山実測、松本・和田製図)……65
第63図　Ｆ－２－６号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……65
第64図　Ｆ－２－７号住居址竈実測図
(森山実測、松本・和田製図)……66
第65図　Ｆ－２－７号住居址出土遺物実測図
(田尻実測、松本製図)……67

第66図　Ｆ－２－10号住居址出土遺物実測図
（田尻実測、松本製図）……67
第67図　Ｆ－２－13号住居址出土遺物実測図
（田尻実測、松本製図）……68
第68図　Ｆ－３－13号住居址実測図
（勢田実測、松本・和田製図）……69
第69図　Ｆ－３－13号住居址竈実測図
（勢田実測、松本・和田製図）……69
第70図　周溝墳墓実測図（松本・勢田実測、松本製図）……71
第71図　周溝墳墓主体部実測図
（松本・勢田実測、松本製図）……72
第72図　周溝墳墓出土土器実測図（広瀬実測、松本製図）…73
第73図　周溝墳墓出土鉄製品実測図（松本実測・製図）……73
第74図　土壙墓実測図（村井・広瀬実測、松本製図）……74
第75図　Ｃ－10－１号土壙墓出土須恵器実測図
（西住実測、松本製図）……74
第76図　道路３実測図
（村井・清田実測、松本・和田製図）……75
第77図　道路３出土須恵器実測図（松本実測・製図）……75
第78図　須恵器実測図
（松本・西住・田尻実測、松本製図）……77
第79図　須恵器実測図
（松本・西住・田尻実測、松本製図）……78
第80図　須恵器実測図
（松本・西住・田尻実測、松本製図）……79
第81図　須恵器実測図
（松本・西住・田尻実測、松本製図）……80
第82図　土師器・黒色土器実測図
（松本・西住実測、松本製図）……81
第83図　輸入陶磁器・須恵質土器・瓦質土器実測図
（松本・西住実測、松本製図）……82
第84図　布目瓦実測図（松本実測・製図）……83
第85図　金属製品・土製品実測図（松本実測・製図）……84
第86図　住居址の規模と方位（松本作成）……86
第87図　上の原遺跡遺構配置図
（宇城事務所原図、松本製図）……93

表　目　次

第１表　住居址一覧表（野田作成）……39
第２表　55年度調査区住居址一覧表（松本作成）……85
第３表　住居址出土遺物の構成（松本作成）……87

図　版　目　次

図版１　上の原遺跡空中写真
図版２　上の原遺跡遠景
図版３　上の原遺跡空中写真（昭和53・54年度調査区）
図版４　上の原50・52号住居址
図版５　上の原53・54号住居址
図版６　上の原55・56号住居址
図版７　上の原８・10・12号住居址
図版８　上の原47・64・89号住居址
図版９　上の原91・93号住居址
図版10　上の原100・106号住居址、掘立柱建物址
図版11　53・55・12・47号住居址出土遺物
図版12　47・106号住居址、掘立柱建物周辺出土遺物
図版13　Ｄ－１－１・２号住居址
図版14　Ｄ－１－２・８号住居址
図版15　Ｅ－１－３号住居址
図版16　Ｅ－１－６号住居址
図版17　Ｅ－１－６号住居址
図版18　Ｆ－２－３・５号住居址
図版19　Ｆ－２－３号住居址
図版20　Ｆ－２－３号住居址竈
図版21　Ｆ－２－５号住居址
図版22　Ｆ－２－６・７号住居址
図版23　Ｆ－２－７号住居址
図版24　Ｆ－２－10・13号住居址
図版25　Ｅ－２－６、Ｆ－３－13号住居址
図版26　Ｄ－１－２・８、Ｅ－１－３・６号住居址出土遺物
図版27　Ｅ－２－６・７、Ｆ－２－３号住居址出土遺物
図版28　Ｆ－２－３・５号住居址出土遺物
図版29　Ｆ－２－６・７・10・13号住居址出土遺物
図版30　周溝墳墓と出土遺物
図版31　土壙墓と出土遺物
図版32　歴史時代の遺構と遺物

〔参考資料〕熊本県文化財調査報告第58集『上の原遺跡Ⅰ』目次

第Ⅰ章　調査の契機と調査概要

第１節　調査の契機と経過概要……1
第２節　調査の組織……2
　１．53年度調査……2
　２．54年度調査……2
　３．55年度調査……3
　４．56年度調査……3
　５．57年度調査……3
第３節　成果の概要と本報告書の構成……4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　上の原遺跡の位置……5
第２節　上の原遺跡周辺の地形と地質……6
第３節　歴史的環境……7

第Ⅲ章　53・54年度調査の成果

第１節　調査の概要……13
　１．53年度調査……13
　２．54年度調査……14
　３．遺跡の層位と層序……16
第２節　調査経過……16
　１．53年度調査……16
　２．54年度調査……17
第３節　先土器・縄文時代の遺構と遺物……17
　１．集石遺構……18
　２．その他の出土遺物……22
第４節　弥生時代の遺構と遺物……60
　１．竪穴住居址……60
　２．甕棺墓……88

第Ⅳ章　55年度調査の成果

第１節　調査の概要……93
　１．調査の概要……93

2．調査経過……93
第2節　縄文時代の遺構と遺物……96
1．集石遺構……96
2．土壙……96
3．縄文土器……97
4．石器……113
5．小結……128
第3節　弥生時代の遺構と遺物……131
1．甕棺墓……131
2．弥生土器……131
3．小結……135
第4節　塚原古墳群（上の原支群）の調査……137
1．古墳の配置と調査方法……137
2．1号墳……138
3．2号墳……145
4．3号墳……150
5．4号墳……157
6．5号墳……160
7．6号墳……161
8．7号墳……168
9．9号墳……170
10．10号墳……172
11．11号墳……172
12．12号墳……174
13．小結……186

第V章　考察

第1節　出土遺物の検討……194
1．55年度調査区出土縄文土器の検討……194
2．弥生土器の編年……198
3．古墳出土須恵器の検討……203
第2節　弥生時代住居址と集落の構造……207
1．住居の構造……207
2．集落の構造……209
第3節　塚原古墳群をめぐる二・三の問題……211
1．将軍塚古墳の再検討……211
2．塚原古墳群の範囲……220

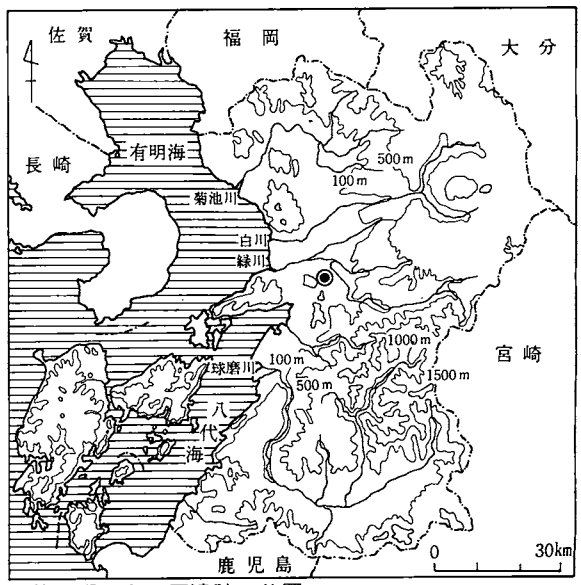
第Ⅰ章　遺跡の位置と調査の概要

1．上の原遺跡の位置

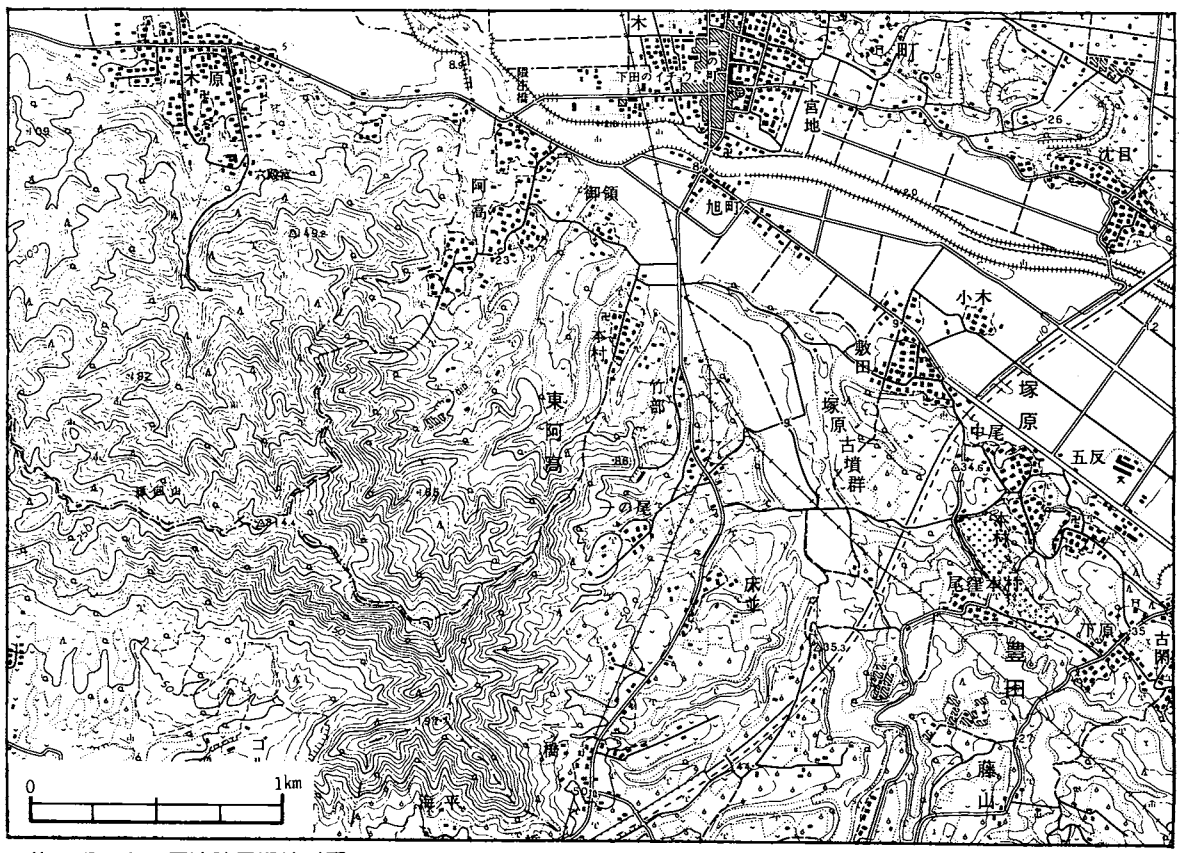
上の原遺跡は、熊本県下益城郡城南町塚原字上の原を中心として、塚原字破田（やつだ）、藤山字東原の一部にわたって所在する旧石器～歴史時代の複合遺跡である。

下益城郡城南町は、熊本平野の東南端に位置し、熊本市街からは直線距離にして約10kmの距離にある。熊本平野は白川・緑川の二大水系を中心として形成された県内最大の沃野で、西側は有明海に面し、北・東・西側は台地・丘陵・小山塊によって画されている。

熊本平野の南端を緑川の一支流である浜戸川が流れている。遺跡の立地する塚原台地は、頂部標高30～40mを測る中位段丘で、浜戸川の左岸にある。最大幅約500m、長さ約2.30kmを測る台地の西端には塚原古墳群（国史跡）が占地し、上の原遺跡はその東南に隣接し、その接触点においては古墳と住居址とが混在して検出された。



第１図　上の原遺跡の位置



第２図　上の原遺跡周辺地形図

2．調査の契機と経過概要

昭和52年７月、城南町教育委員会から、国史跡・塚原古墳群の東側に隣接する城南町大字塚原字上の原・破田のほぼ全域、大字藤山字東原の一部の約15haについて圃場整備の計画があるので、文化財の有無、調査について照会があった。これに対して、現地の東南部の一角に黒木塚遺跡という周知の遺跡が含まれており、圃場整備を実施する場合には調査が必要である旨回答がなされた。

同年10月、城南町企画課・県耕地一課・文化課で協議が行われた。文化課から調査は最低２年、調査経費もかなり多額になることを説明したが、城南町から、計画地区と塚原古墳群国指定地区の地権者がほとんど同一であり、地元としては是非とも圃場整備を実施したいという強い意向が伝えられた。その他、調査を実施する場合の費用負担、休耕補償の問題等が協議された。

同年12月、再度上記の三者協議が行われ、文化課に対して再度調査実施についての強い要請があった。

これらの協議を通じて、塚原古墳群指定地との関係もあり、53・54年度に調査を実施する方針が決定された。

53年度調査は、国庫補助事業として53年10月に着手し、54年３月までの間、施工予定地区約15haの全域試掘と藤山地区、上の原地区の一部の発掘調査を行った。試掘の結果、遺跡の範囲は約５haに及ぶものと推定され、53年度の発掘では約30軒の住居址等が検出された。調査費は7,000,000円（国庫補助）。

引続いて、54年４月から54年度調査が開始された。当初予算は8,000,000円（国庫補助）の予定であったが調査量の増大により国庫補助分を2,000,000円増額し、さらに農政部局から約1,000,000円の負担があり、総経費は約11,000,000円となった。55年３月までの間に、上の原地区について発掘を行い、縄文時代の集石遺構、弥生時代・古墳時代の住居址（約90軒）等を調査した。さらに、54年度調査区の北側部分約1.2haの表土剝ぎ、遺構確認が実施された。

54年９月頃から一時期、調査の進展・終了時期等について地元・農政部局と齟齬を生じた。これらの問題を解決するため、55年３月中旬～４月中旬、城南町企画課・県耕地一課・県宇城事務所耕地一課・文化課による現地視察、調査工程等についての協議が行われた。

54年度調査終了時点において、未調査部分は約2.4haを残していた。その中で、55年２月に表土剝ぎを行った約1.2haの範囲に約140軒の住居址が確認され、さらに表土剝ぎ未了部分の約1.2haについてもほぼ同数の遺構数が予想された。文化課としては、残りの調査面積（約2.4ha）、推定される遺構数（住居址270～280軒）からみて単年度調査は困難であることを主張したが、一連の流れの中で、最終的には55年度中に現地調査を完了することで了解点に達した。

55年度の調査は55年５月に着手し、調査員常時10名、経費48,000,000円（国庫補助14,000,000円、農政部局負担34,000,000円）を投入する大規模調査となった。調査の進展に伴い、調査面積は約３haに拡大し、住居址数は約350軒を数えた。さらに、53年度の試掘では確認されていなかった古墳も11基検出された。以前からのいきさつにより、調査期間の延長は望むべくもなく、調査量の増大は調査員への負担過重、調査内容の質的転換によってかろうじて相殺され、56年３月31日をもってすべての現地調査を完了した。

56年度以降は、現地の補足調査と資料の整理作業を行い、報告書作成を目途しているが、資料が膨大なため全資料の消化には至っていない。

３．成果の概要と本報告書の構成

調査は、県営圃場整備事業に伴う事前調査として、国庫補助事業および農政部負担のもとに、昭和53～55年度に現地の発掘調査を行い、昭和56年度から資料整理を進めている。

３ヵ年度にわたる発掘調査では約6.80 ha を発掘し、旧石器～歴史時代の各種遺構・遺物を検出した。

旧石器時代に属するものは、54年度調査で６点の石器（ナイフ形石器・三稜尖頭器・掻器・削器）が出土したが、竪穴住居址の覆土中や耕作土からの出土であり、層位的な出土状態ではない。このことによって、調査地区の下部に旧石器の包含層が存在することが明らかになったが、圃場整備事業によって包含層が削平される恐れがないため、下部の発掘調査は行っていない。

縄文時代の遺物は古墳時代に次いで多く、時期的にも早期から晩期へと連続しているが、早期の押型文土器と晩期の土器が圧倒的に多い。大半の遺物は古墳時代住居址の覆土中など、他時期の遺構や撹乱層に含まれていたもので、遺構に伴って出土したものは少ない。調査地の大半が第Ⅲ層（黄褐色火山灰土、所謂アカホヤ層）上面までの掘開であった関係もあり、縄文時代の検出遺構は少なく、押型文土器を伴う集石遺構と、時期不明の小土壙を検出したにすぎない。

弥生時代は、調査区のほぼ全域から前期～後期の土器が出土しているが、散発的な出土状態で、縄文土器に比べて少量である。遺構としては、53・54年度調査区から住居址　　（前期後半～中期前半）と甕棺２基（中期前半）、55年度調査区で甕棺１基（中期後半）が検出された。これらの住居址群（集落）は、南側の一部分が調査地区外のため未調査であるが比較的まとまった状態であり、その出土資料はこの地域の基準資料となり得るものである。

遺構の主体を占めるのは古墳時代の住居址群で、４世紀後半～７世紀の住居址は約450軒に達した。６・７世紀の住居址は31軒と少なく、大半は４・５世紀に属し、塚原古墳群とほぼ並行する大集落である。住居址に伴う土器の量は莫大なもので、その他鉄製品・玉類などが出土している。

調査区（集落）の北端には11基の円墳が検出された。墳丘を削平され、周溝と主体部の掘方の一部が地下に埋没していた。そこでは古墳と住居址が混在しており、塚原古墳群の範囲や古墳と集落の動態を考える上で貴重な資料となった。

歴史時代の包含層は、耕作などによる削平などもあって検出した遺構・遺物は少ないが、周溝墳墓・土壙墓・掘立柱建物・道路遺構などが散発的に検出された。遺物としては古代～近世の須恵器・土師器・布目瓦・青磁・白磁・須恵質土器・瓦質土器・近世陶器・円面硯・銙帯金具などが出土している。中でも、墨書土器、越州窯青磁、円面硯、銙帯金具の出土は注目すべき遺物であるが、それらを含む遺構の性格については明らかではない。

以上が上の原遺跡の概要であるが、３ヵ年度の発掘調査によって作成した実測図等の資料、出土した遺物の量がきわめて多く、昭和56年度から整理作業を進めているが完了には至っていない。これらの全てを同時に出版するのは物理的にも無理があるので、数冊に分冊して報告する計画である。

昭和57年度、「上の原遺跡Ⅰ」（熊本県文化財調査報告第58集）を刊行し、旧石器・縄文・弥生時代の遺構と遺物、古墳について報告を行った。今回は上の原遺跡の第２分冊として、６～７世紀の住居址、歴史時代の遺構と遺物について報告する。

また、特殊な遺物について専門的な調査を依頼して進めているが、今回は昨年度報告した塚原古墳群（上の原支群）出土の馬歯についての報文を収録した。第１・２分冊の刊行によって、未報告となるのは４～５世紀の住居址群である。資料の整理を待って、59年度以降に刊行する計画である。

4．調査の組織

昭和53～57年度の調査組織は「上の原遺跡Ⅰ」において報告したが、昭和58年度の調査組織は下記のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会	
調査総括	米村嘉人(文化課長)	岩崎辰喜(前文化課長)
	林田茂一(文化課長補佐)	隈　昭志(文化課文化財調査係長)
調査総務	大塚正信(文化課経理係長)	花田隆二(文化課参事)
	松崎厚生(前文化課参事)	谷喜美子(文化課主事)
専門調査員	大迫靖雄(熊本大学教育学部助教授)	
	西中川駿(鹿児島大学農学部助教授)	
調査員	53・54年度資料整理担当	野田拓治(文化課学芸員)
	55年度資料整理担当	松本健郎(文化課技師・主査)
		田尻悦子(文化課嘱託)
調査協力	県農政部耕地第一課	県宇城事務所耕地第一課
	城南町教育委員会	城南町歴史民俗資料館

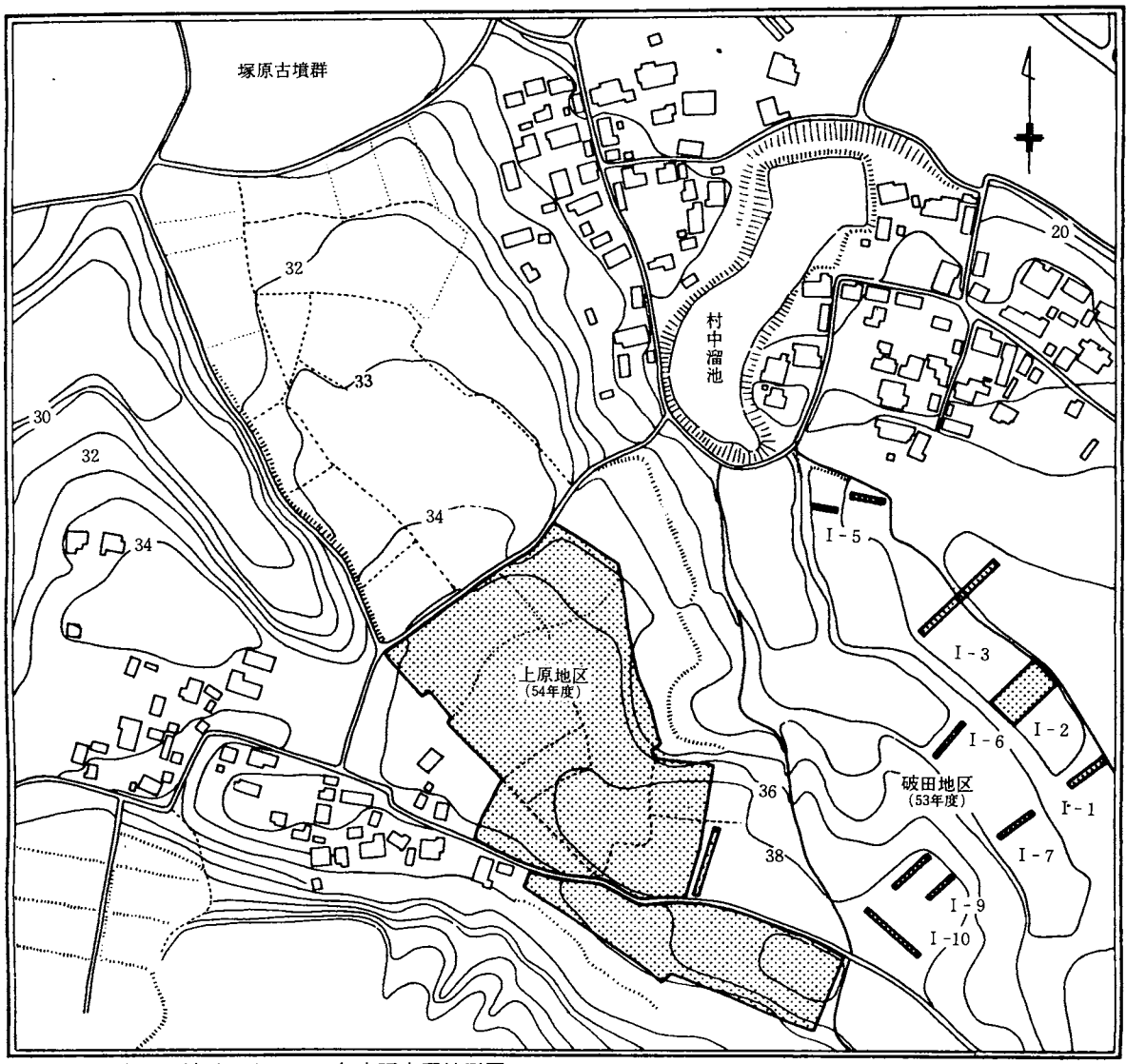
その他、写真については渡辺正一（文化課臨時職員)、製図については和田由美子(文化課臨時職員)、原稿・図版などの作成には瀬丸延子・木下春千代（文化課臨時職員）が協力した。

第II章　53•54年度調査の成果

1．調査の概要

昭和57年度に刊行した『上の原遺跡Ⅰ』では、昭和53・54年度に調査を実施した中で、特に先土器・縄文・弥生時代の遺構・遺物についての報告を行った。今回刊行する『上の原遺跡II』では、遺跡の主体となる4～5世紀代を中心とした集落址についてはふれず、古墳時代終末期から歴史時代にかけての竪穴住居址および掘立柱建物址についての報告を行なう。なお昭和53・54年度における調査の概要については『上の原遺跡Ⅰ』で述べたので重複はさけたい。

古墳時代後期以降の竪穴住居址は、すべて壁面に造り付けの竈を設けたもので計16軒検出した。なお、昭和53・54年度調査に検出した竪穴住居址の総数は119軒であった。したがって、『上の原遺跡Ⅰ』で報告した弥生時代の竪穴住居址13軒と今回報告する16軒を除くと、残る90軒が5世紀代を中心とする時期の所産となる。



第3図　上の原遺跡昭和53・54年度調査区地形図　0　50　100　150　200m

第4図　上の原遺跡昭和53・54年度調査区全図

また掘立柱建物址については１棟分検出するにとどまった。

調査地区には、竪穴住居址・掘立柱建物址の他に、長短６条の溝状の遺構を検出した。築造・使用年代については、出土遺物が少なく明確な解答を得るに至らなかった。しかし各溝状遺構の埋土中に染付陶磁器の細片が含まれ、年代的にも近世以前には遡り得ない。また、溝１を除く５条については調査前の畑地の地割線との重なりが認められる。したがって溝の多くは、開墾当時地割の為の溝であったものが埋もれ、現在まで境界線としてその痕跡を残していたものと考えられる。溝１については、現在の畑の境界線との重なりが認められなかったが、溝の埋土の堆積状況は溝２～５と類似しているので、おそらく同様の性格であったと考えられる。

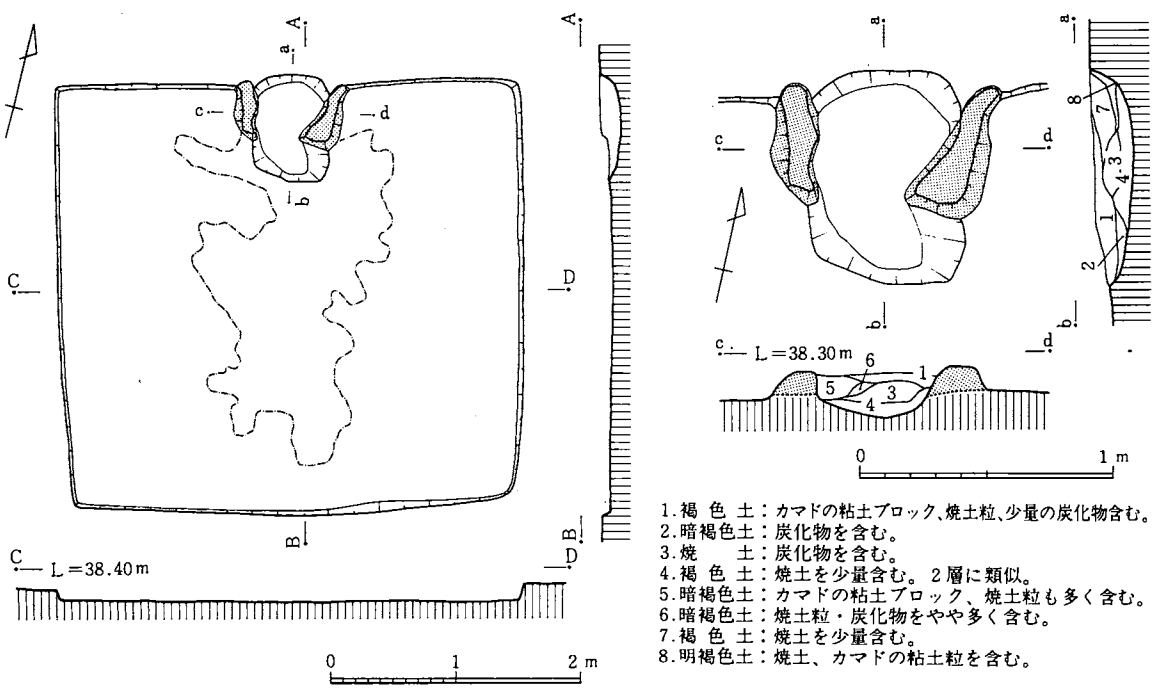
２．竪穴住居址

竪穴住居址は計16軒検出した。これらの分布状態をみると、概ね二ヶ所に集中して分布している。Ⅰ群は調査区の南端部にあり、海抜38.50ｍを中心に東西約20ｍ、南北約30ｍの範囲に分布している。Ⅱ群は調査区の北側、海抜37.00ｍを中心に東西約50ｍ、南北約50ｍのやや広い範囲に分布している。２つの群は、その中心部で約130～140ｍの隔たりをもって分布している。なおⅡ群については住居址の方向性・規模・配置にばらつきが認められるので、さらに小さな単位に分かれる可能性がつよいが、詳細については後にふれることとする。

(1)　Ⅰ群

調査地区南端のⅠ群は、上の原50号・52号・53号・54号・55号・56号の６軒で、弥生時代の集落とその分布が重なっている。以下各住居址ごとに、住居の規模・構造や出土遺物について説明を加える。

①　上の原50号住居址（第５図）



第５図　上の原50号住居址実測図

Ⅰ群の北端に位置し、北側壁面のほぼ中央部に竈を設置している。住居の規模は中軸線上で南北3.47m・東西3.67mを測る。四辺の長さは、北壁が3.65m・南壁が3.45m・東壁が3.23m・西壁が3.30mを測り、やや東西に長い略方形を呈する。確認できた地山面からの掘り込みの深さは10cm前後で、上部からかなり削平されたものであろう。床面はほぼ水平面を保ち、竈部分から南壁に向って中央部分に踏み固められた硬化面を確認したが、柱穴は認められなかった。

竈は、両袖部に使用した粘土基底部を確認したが、上部からの削平が著しく、焚口・煙道等の構造については不明である。ただ両袖部は粘土のみを使用し、焚口部から壁に向って浅くくぼんでいた。竈内は確認面から地山直上まで細かく8枚の土層堆積が認められ、最終使用時以降の崩壊の過程を示している。竈を通る中軸線の方位はN－18°－Wを測った。

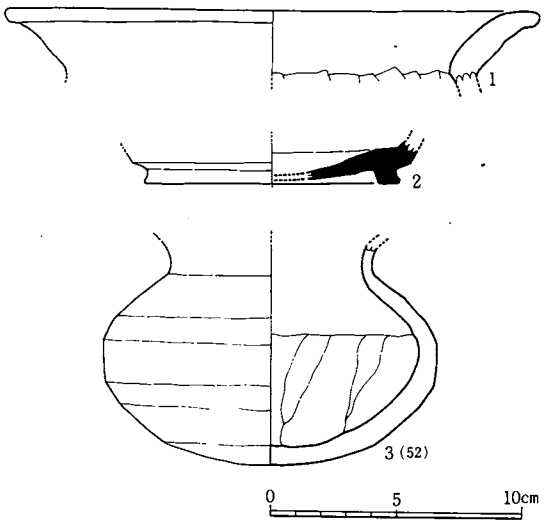
なお調査終了直前に床面を一律に掘り下げ、地山面を露出したが、柱穴を認めることは出来なかった。

〔出土遺物〕（第6図）

出土遺物は少なく、細片が多く、図示できるものは2点にすぎない。1は土師器甕の口縁破片である。復原口径21.1cmを測った。口縁部は頸部から「く」の字状に屈曲し、端部でさらに外側へ開く。器壁は頸部がやや薄く口縁部は全体として肥厚し、端部は丸くおわる。口縁部は内外面横ナデ調整し、内面は頸部の屈曲部以下で縦方向のヘラ削りを施している。全体に黄褐色を呈し、胎土中には小石粒を多く含んでいる。焼成はやや悪い。2は須恵器高台付坏の底部破片である。底径10.1cmを測る。高台は底部より内側に貼り付けられている。高台の断面形は方形に近く、外側へ開き、端部でさらに小さく尖出している。体部は横ナデ調整し、底部は回転ヘラ削りのあと高台を貼り付け、接合部を横ナデしている。淡灰色を呈し、よく焼きしまっている。胎土中に小石粒を含むが、全体として緻密である。

② 上の原52号住居址（第7図）

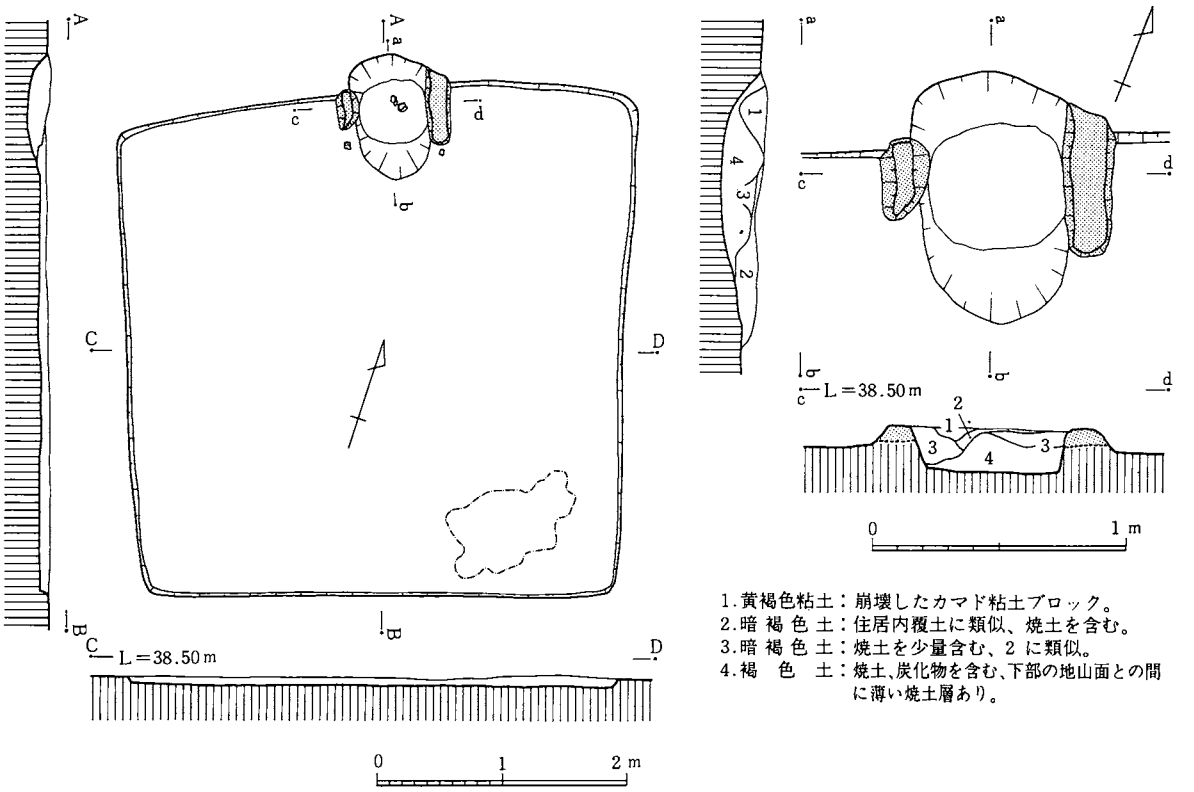
上の原50号住居址の南西約11mの地点に位置している。北側壁面の中央より、やや東寄りに竈を設置している。住居の規模は、中軸線上で、南北4.25m・東西3.44mを測る。四辺の長さは、北壁4.10m・南壁3.65m・東壁3.80m・西壁3.60mを測り、北壁にやや広がる略方形を呈する。壁の高さは約5cm前後で、わずかに床面の基底を残した状態で、前述した50号住居址と同様、上部からかなり削平を受けたものと考えられる。



第6図　上の原50・52号住居址(50号＝1・2、52号＝3)出土土器実測図

床面はほぼ水平面を保ち、四壁に沿った周溝や柱穴は認められない。床面全体は上部からの植物根によって攪乱をうけていて、わずかに南西部隅の狭い範囲に明瞭な硬化面を確認したが、他の部位では認められなかった。竈を通る中軸線の方向はN－18°－Wで、磁北よりやや西にふれている。

竈は両袖部の粘土基底部と焼成部の浅い落ち込みを確認するにとどまり、焚口部や煙道部の構造を知ることは出来ない。また、袖部は東側で長さ0.61m、同じく西側で0.33mが残存し、袖部の幅は約0.20mであった。燃焼室内部の幅は基底部で最少で0.52mを測った。



第７図　上の原52号住居址実測図

〔出土遺物〕（第６図３）

出土遺物は少なく細片が多い。計11点出土したが、ほとんどは土師器甕の胴部破片で図示できるものは少ない。３は土師器壺で、竈内４層および竈周辺の床面に密着した状態で出土した細片の接合資料である。口縁部は欠失し、頸部は強くくびれ、胴部は扁球形を呈し、底部は丸底である。胴部外面は横方向の刷毛調整が施されているが、器面が磨滅しているので細部の観察は出来ない。頸部内外面は横ナデにより仕上げられ、内面は底部から胴部まで縦方向のヘラ削りが施されている。色調は赤味を帯びた黄褐色で、胎土に小石粒を多く含んでいる。器面に２次的な火を受けていて剥落・磨滅が進んでいる。

③　上の原53号住居址（第８図）

52号住居址の南側約９ｍに位置し、これよりさらに約７ｍの地点に55号住居址があって、これら３軒の住居址は、ほぼ北から南に、一定の間隔をおいて一列に並んでいる。53号住居址は、Ⅰ群６軒の中で唯一竈を西に向けている。住居の規模は中軸線上で東西4.45ｍ・南北4.62ｍ、四辺の長さは西壁が4.60ｍ・東壁が4.50ｍ・北壁が4.40ｍ・南壁が4.20ｍで、ほぼ正方形に近い方形プランである。

地山面から確認できた壁面の深さは、最大で0.15ｍで、他の住居址同様、全体が上部からかなり削平を受けたものと考えられる。床面は中央部がわずかに高まりがみられるものの、全体として水平面を保っている。また床面全体が硬く踏みしめられた硬化面をなしていて、明瞭な柱穴は認められなかった。しかし、床面の北東隅の１ヶ所に浅い柱穴状の落ち込みを認めたが、落ち込み基底面は軟かく、柱穴と断定することは出来ない。

竈は西壁のほぼ中央部に設置されているが、崩壊が著しく裾部は北側で0.52ｍ・南側で0.43ｍが残存して

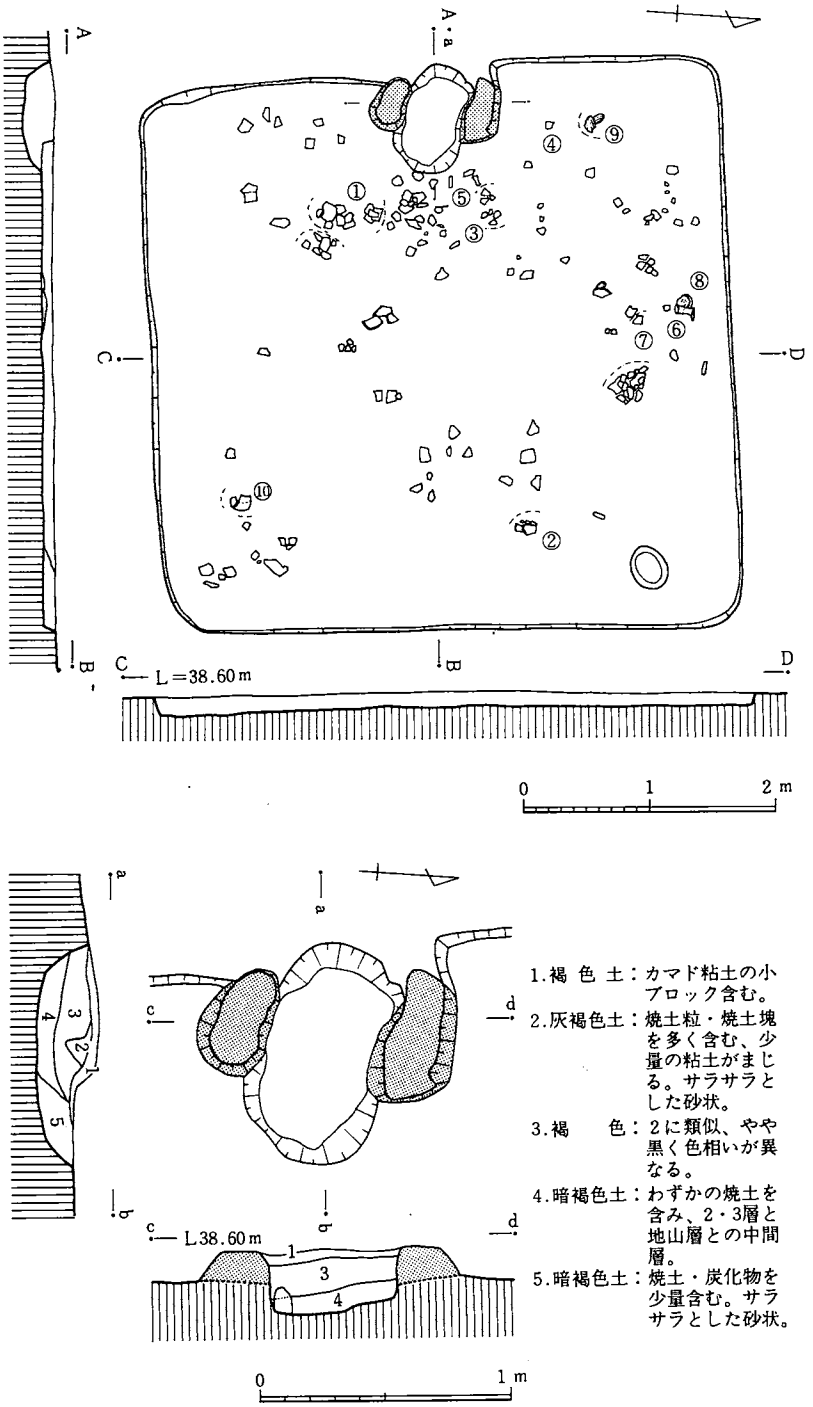
いた。いずれも基底部で焚口・煙道など竈の詳細な構造を知ることは出来なかった。竈の燃焼室は浅い楕円形プランの土壙状となっていて、この中に5枚の土層堆積が認められた。

出土遺物はⅠ群6軒の中で最も多く、床面全体に散乱し、あるいは一個体分が押しつぶされた状態で出土していて、その多くはこの住居址の廃絶時期を示すものと考えられる。

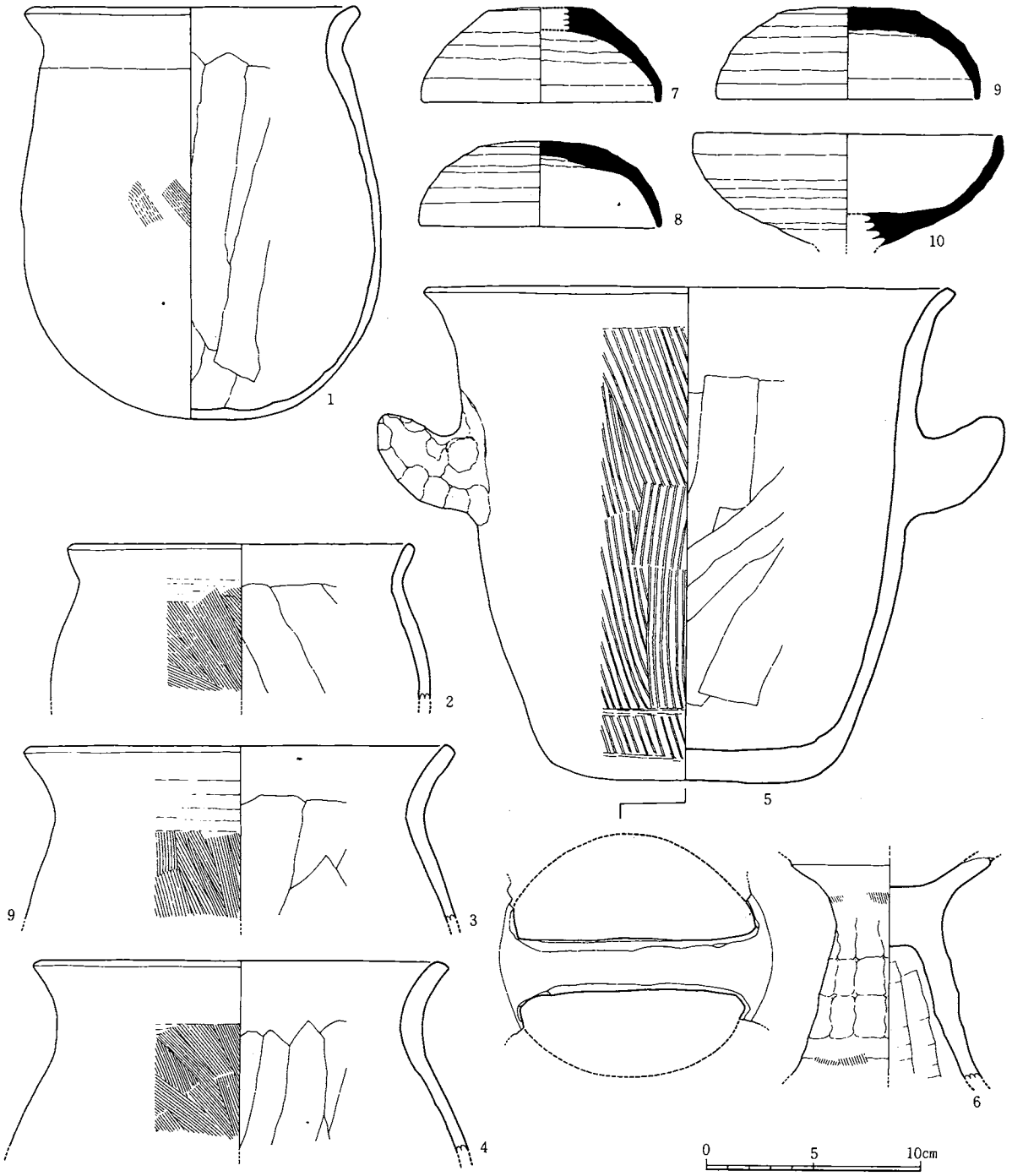
〔出土遺物〕（第9図）

出土遺物は土師器と須恵器で、計100点を数えた。このうち土師器は甕約11個体分（口縁部による個体数）・甑2点・高坏1点、須恵器は坏蓋5点・坏身2点・高坏1点・甕胴部破片30点であった。その他はすべて土師器甕の破片である。以上のうち図化できたもの10点を選んだ。

1～4は土師器甕である。1は口径15.8cm・器高19.3cm・胴部最大径16.8cm、比較的小型の甕である。頸部のくびれは弱く、口縁部はゆるやかに外反する。胴部の膨みはよわく、最大径は中位より以下にある。底部は丸底である。器体外面は著しく磨滅しているが、胴部に刷毛目を残している。内面は縦方向のヘラ削りのあと、口縁部内外面を横方向のナデ調整で仕上げている。色調は赤味を帯びた黄褐色、内面は胴部から底部にかけて炭化物が付着し、暗褐色をなす。胎土は粗く、大小の石粒を多く含むが、焼成は良好である。2は復原口径16.3cmである。頸部のくびれは弱く、口縁部は小さく外反し、端部は角ばる。体部外面は細かな刷毛目を施し、内面は左上りのヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げる。器壁は全体に薄くつくられている。色調は暗褐色で、胎土は粗い。内面には炭化物が付着し、外面は二次焼成の為、器面が剥落している。3は復原口径20.3cm・4は19.6cmを測るやや大型の甕である。いずれも胴部以下を欠失している。3・4いずれも頸部のくびれは弱く、口縁部は「く」字状に外反し、端部は角ばっている。また、外面を細かな刷毛目、内面を右上りのヘラ削りのあと口縁部内外面を横ナデ調整



第8図　上の原53号住居址実測図



第９図　上の原53号住居址出土土器実測図

により仕上げている。色調は２点とも赤味を帯びた黄褐色で、胎土中に砂粒を多く含むが焼成は極めて良好である。５は土師器の甑である。口径25.0cm・器高23.0cmで、胴部上位に一対の把手を有し、底部中央にブリッヂを残し、半円形の二孔を穿っている。胴部はやや膨み気味に立ち上り、口縁部でさらに外反する。体部外面は粗い刷毛目で調整し、内面は胴部上半部で縦方向、下半部から底部にかけて右上り方向のヘラ削りを施している。口縁内外面は横方向のナデ調整で仕上げている。器壁は薄くつくられている。色調は黄褐色で、米粒大の石粒を含む。焼成も良好である。胴部外面に黒斑が１ヶ所認められる。６は土師器高坏である。坏部は上半部と下半部との接合部より失なわれ、さらに脚裾部を欠失している。外面は部分的に刷毛目を残すが、全体として手及び指によって成形し仕上げられている。内面はヘラ削りである。器壁は厚く、全体に粗雑なつくりである。７～９は須恵器坏蓋である。７は口径11.40cm・器高4.40cm。８は口径11.5cm・器高

4.00cm。9は口径12.20cm・器高4.30cmを測る。3点とも口径に比較して器高が高い。7は口縁部が短く垂直に下り、端部は丸く仕上げられている。成形は巻上げ、水引きによる。天井部は回転ヘラ削りされ、平らである。8の口縁部はわずかに下外方に開き、天井部もやや平坦化している。9の口縁部は7と同じく短く垂直に下り、体部は全体に丸味をもち天井部は平らである。色調は7・9が淡い灰色を呈し、8が黄褐色で土師質である。10は須恵器高坏で脚部を欠失している。口径14.30cm・坏部の器高5.10cmを測る。成形は巻上げ、水引きにより仕上げている。淡灰色を呈し焼成良好である。

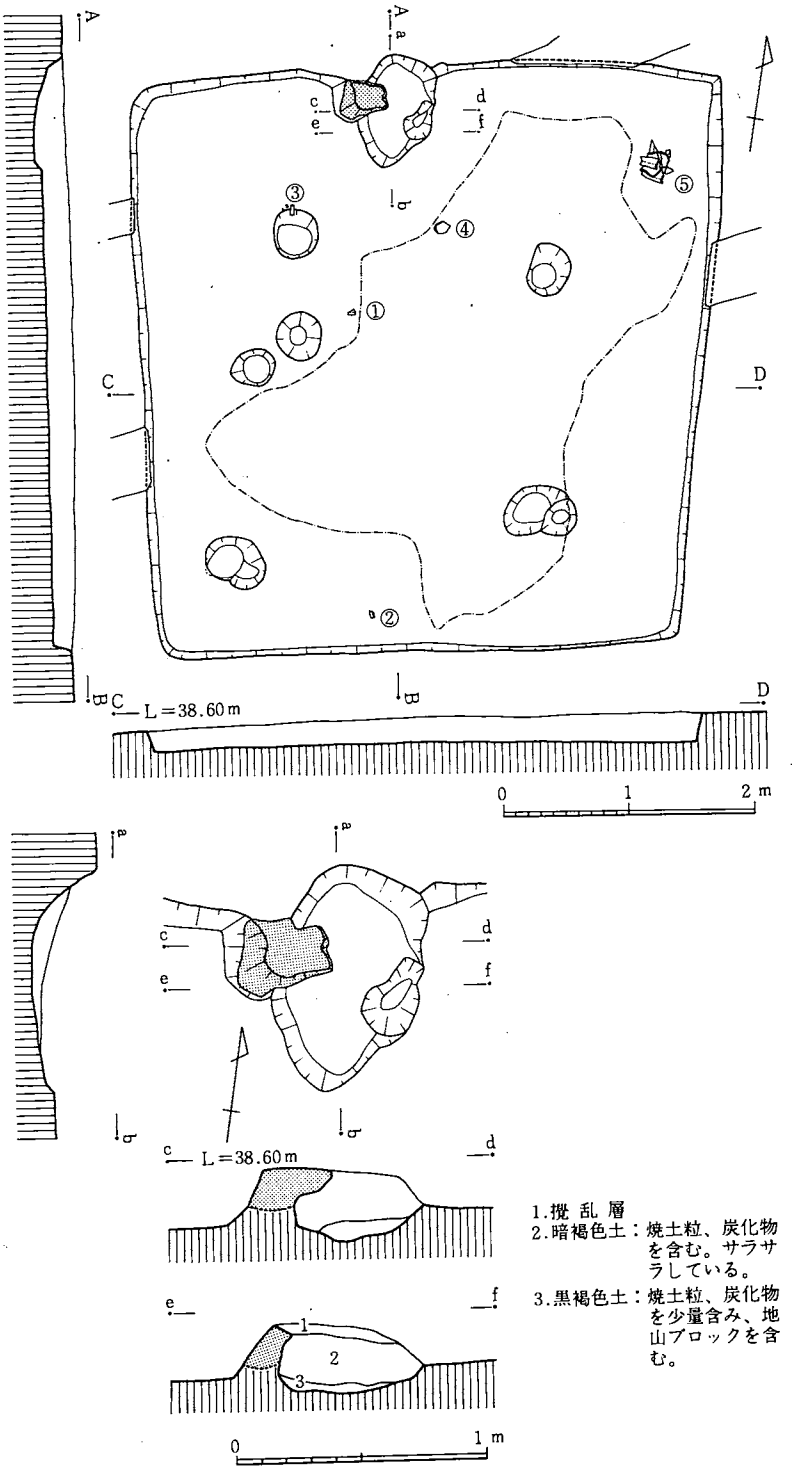
④ 上の原54号住居址

（第10図）

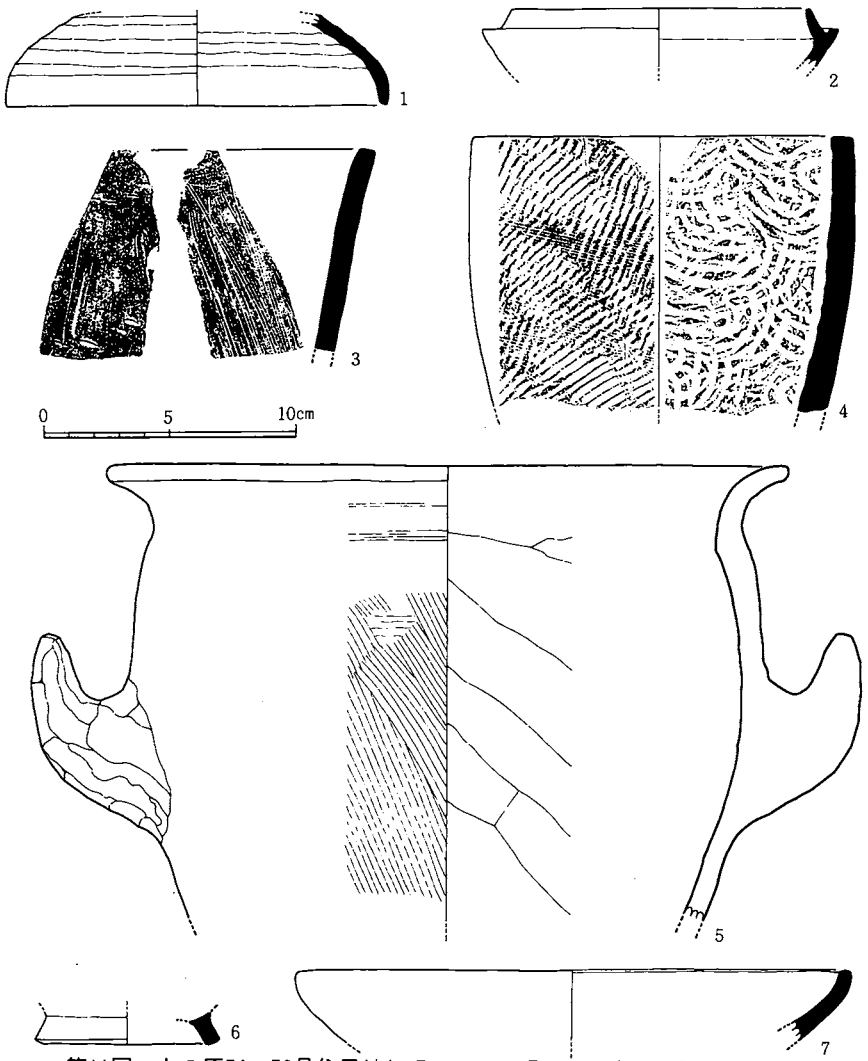
53号住居址の東南部、55号住居址の東側に隣接し、竈を北壁の中央部よりやや西側に設置した住居址である。規模は中軸線上で南北4.60m・東西4.25m、四辺の長さは、北壁4.58m・南壁4.04m・東壁4.44m・西壁4.40mを測り、南壁が短い略方形を呈している。確認できた地山面から床面までの深さは、最大で0.25mを測ったが、竈の残存状況から上部からかなり削平されたものと考えられる。床面はほぼ水平面を保ち、周溝等の施設は認められなかった。床面には7個の柱穴を検出したが、P1・P2の2個以外は不揃いである。

竈は東袖部が失われ、西袖部の粘土基底部を残すのみで、焚口・煙道の構造は不明である。燃焼室は浅い土坑状の落ち込みとなっていて、内部に上下2層の土層が認められた。

住居の竈を通る中軸線の方位はN－8°30′－Wでほぼ磁北に近い。



第10図　上の原54号住居址実測図



第11図　上の原54・56号住居址(54号＝1～5、56号＝6・7)出土土器実測図

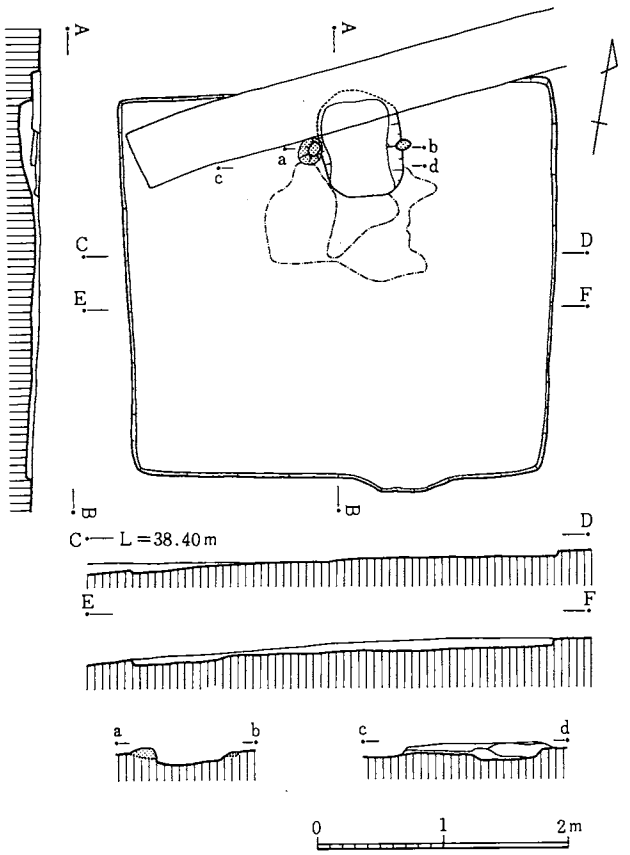
〔出土遺物〕

（第11図1～5）

1は須恵器坏蓋あるいは有蓋高坏の蓋であろうか。復原口径15.10cmを測る。天井部を欠失するが、体部はゆるやかな丸味を有し、口縁部は短かく垂下して、端部は丸く仕上げる。全体に薄いつくりで、赤味を帯びた黄褐色で、土師質を呈する。2は坏身あるいは高坏の坏部であろう。口径11.0cm、たちあがりはおり込み手法によって接合され、受部に沈線を残している。たちあがりは、短かく内傾する。淡灰色を呈し、胎土は緻密である。3は須恵器鉢の口縁部破片である。体部から口縁部にかけて直線的に外反し、端部は角ばる。内外面ともヘラ削りにより仕上げている。青灰色を呈し、焼成良好である。4は須恵器鉢である。口縁端部は焼成後に粗く研磨されていて、おそらく甕形土器を再加工して鉢として転用したものと考えられる。復原口径15.20cmを測る。外面は平行タタキ目文、内面に同心円タタキ目文を残している。5は土師器把手付甑で、胴部下半以下を欠失している。口径27.10cm・胴部最大径25.30cmを測る。頸部のくびれは弱く、口縁部は外弯気味に大きく開く。胴部はやや膨み、中位に一対の把手をもっている。外面は単位の大きな刷毛目を施し、内面は左上りのヘラ削りのあと、口頸部内外面を横ナデ調整で仕上げている。黄褐色を呈し、焼成良好である。

⑤　上の原55号住居址（第12図）

54号住居址の西側に隣接し、竈も54号住居址同様北側に設置したⅠ群の中では最も小型の住居址である。54号住居址西壁と55号住居址東壁とは約1.00m間隔をおいて並んでいる。住居址の規模は中軸線上で南北に3.02m・東西3.33m、四辺の長さは北壁3.44m・南壁3.20m・東壁3.03m・西壁2.90mを測り、やや東西に長い略方形プランを呈している。地山面から床までの深さは、約0.05m前後で、上部からの削平が著しい。また壁面及び、床面は後世の攪乱によって失われた部分が多い。床面は竈部分が最も高く、南東側に向って低くなっている。また柱穴は皆無で床面全体は硬く踏みしめられていた。



第12図　上の原55号住居址実測図

竈は壁側を後世の溝で壊され、さらに上部からの削平によってほとんど失なわれていた。わずかに両側裾部の粘土塊が残存しているにすぎない。竈燃焼室は楕円形プランで浅い土坑状の落ち込みとなっている。竈焚口部分から床面中央部にかけて、炭化物を含む焼土、崩壊した竈の小さなブロックが散乱していた。

出土遺物は竈西裾部に土師器甕の胴部細片１点にすぎない。

⑥　上の原56号住居址（第13図）

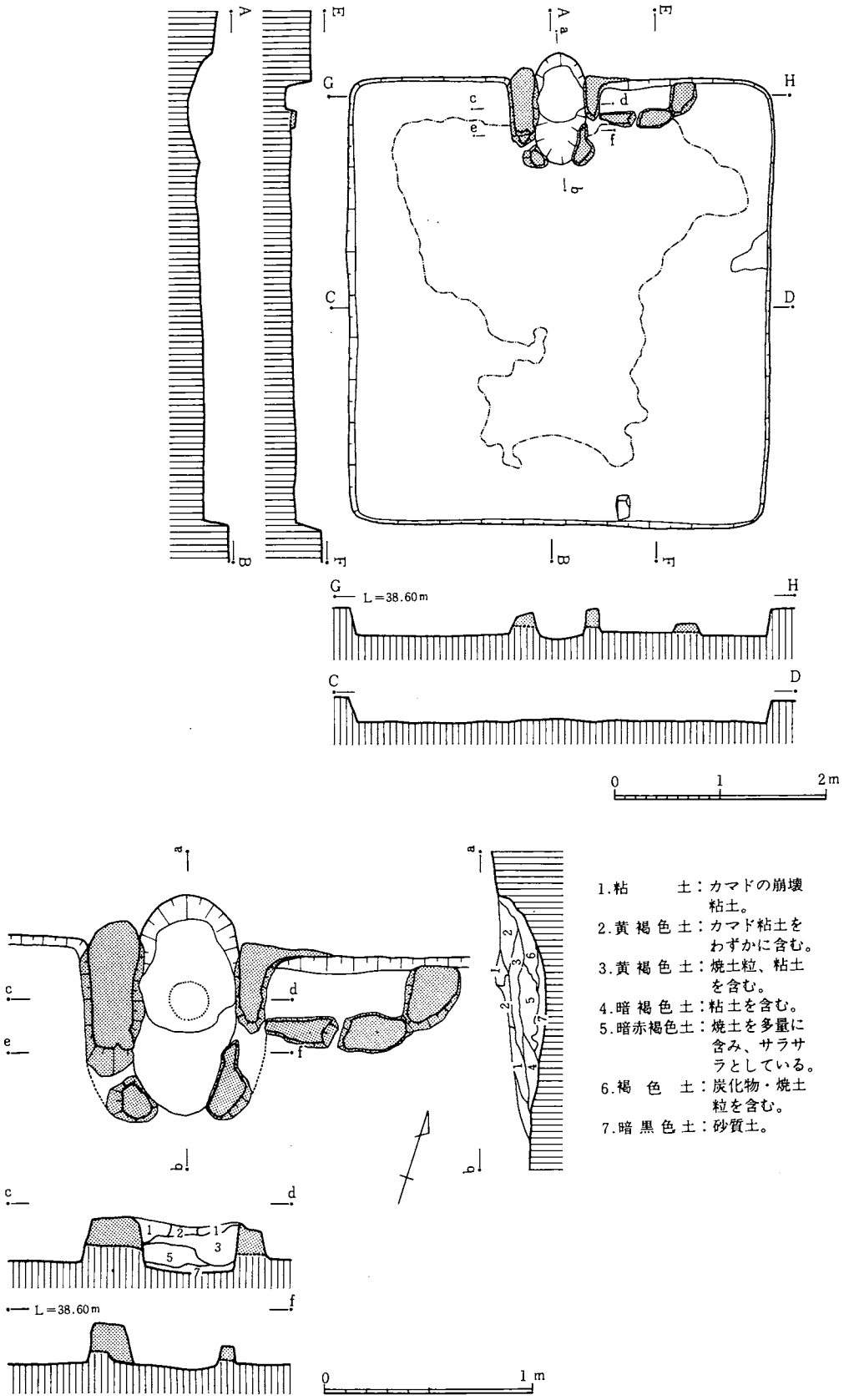
Ｉ群の中で最も東にあり、53号住居址の西16ｍの地点に位置している。竈を北壁中央部に設置し、住居の南東部コーナーを中心として、57号住居址（弥生前期）と重複している。規模は中軸線上で南北4.45ｍ・東西4.02ｍ、四辺の長さは北壁4.04ｍ・南壁3.92ｍ・東壁4.16ｍ・西壁4.10ｍで、ほぼ正方形のプランである。地山確認面から床までの深さは最大で0.28ｍを測り、Ｉ群６軒の中で最も深く残存状態が良好であった。竈部分から床面中央部、さらに南壁側にかけて踏み固められた硬化面が残るが、柱穴は皆無であった。

竈は北壁中央部よりやや西寄りに設置され、両袖部の残存状態は比較的良好である。焚口部の巾は0.46ｍ、燃焼室の巾は0.60ｍ・奥行1.03ｍで北壁をさらに約0.20ｍ掘り込んでいる。煙道部は失なわれていて構造は不明である。また竈東袖に隣接して、粘土で囲まれた施設が設けられていた。この部分は巾0.20ｍ・長さ0.66ｍの長方形プランを呈し、西側は竈袖部を共用し、北側は壁面を使用している。全体に火を受けた痕跡はなく、竈に付帯する施設と考えられ、貯蔵穴あるいは燃料の保管等に使用されたものであろうか。本遺跡においては類例は認められない。

出土遺物は極めて少なく土師器甕破片６点、須恵器高台坏・高盤各１点で、いずれも細片のため図化できたものは少ない。すべて住居址内覆土下層から出土したものである。

〔出土遺物〕（第11図６・７）

６は須恵器坏の高台破片で、底径7.30cm・高台高0.90cmを測る。高台は肉厚で、下外方に強く開き、端部は角ばる。黄褐色で土師質を呈する。７は皿あるいは高盤の破片と考えられるが、細片であるため判断できない。口縁部は小さく立ち上り、端部は丸く仕上げている。淡灰色を呈し、胎土緻密である。



第13図　上の原56号住居址実測図

(2) II群

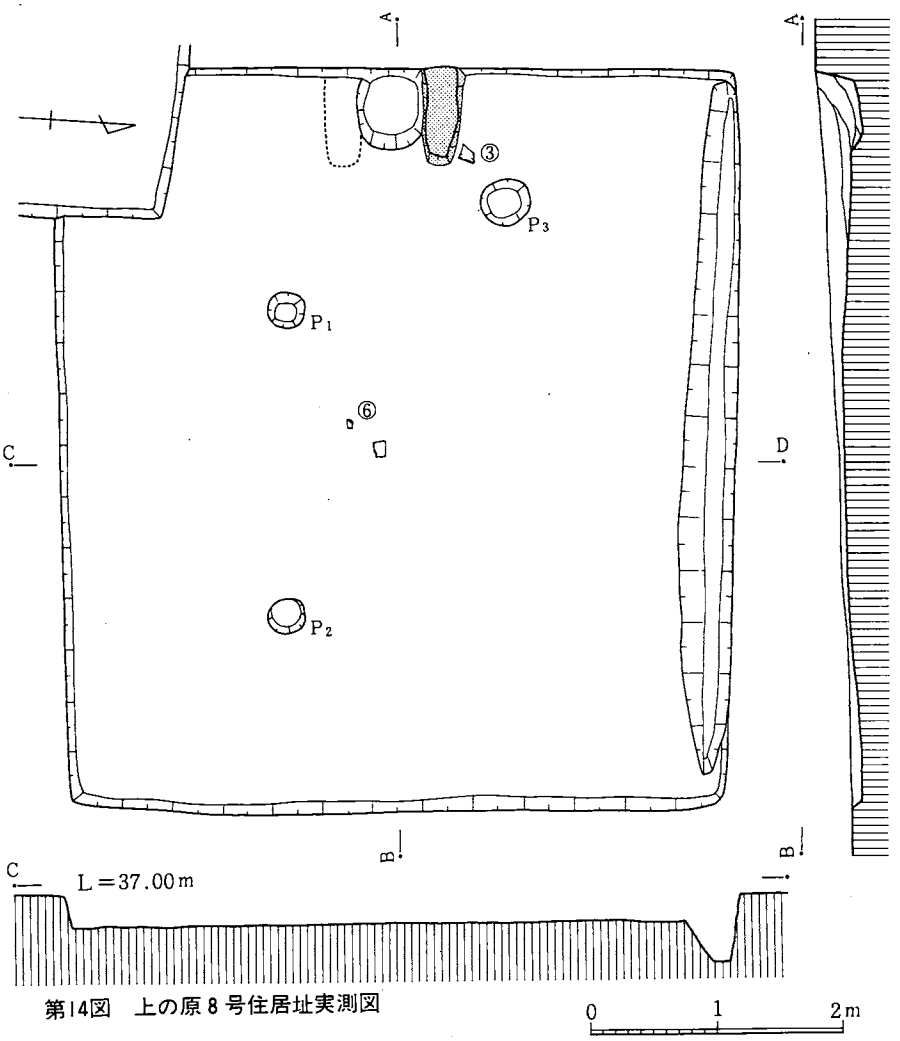
II群は上の原８号・10号・12号・47号・64号・89号・91号・93号・100号・106号の10軒で、これらは住居の方向性や規模の面でかなりのばらつきが認められる。特にＩ群に比べて、全体に大型の住居が多い。またII群は後章で述べる昭和55年度調査における住居址群と有機的な関連をもつものとみられる。

① 上の原８号住居址（第14図）

II群の中で北側に位置し、100号住居址に接し、108号住居址の北東部隅と重複している。竈を西壁の中央部に設置し、規模は中軸線上で東西5.85ｍ・南北5.38ｍを測った。四辺の長さは南壁・西壁は不明で、東壁5.20ｍ・北壁5.72ｍを測り、南北に長い方形プランである。確認できた地山面から床面までの深さは0.20ｍ前後である。床面は中央部が高く、壁側が低く、北壁に沿って周溝が認められた。周溝の巾は最大で0.44ｍ・深さは床面から最大で0.34ｍで、壁面の両隅に向に従って狭く浅くなる。柱穴は３個検出したが、仮に４本柱を前提とすると、Ｐ1・Ｐ2に対応すべき柱穴は認められなかった。なお竈を通る中軸線の方位はＮ－94°－Ｗで、ほぼ西向きとなる。

竈は南袖部が失なわれ北袖部のみ残している。焚口・煙道部については崩壊し、その構造を知ることは出来なかった。燃焼室は隅丸方形プランの土壙状の落ち込みとなり、奥行0.61ｍ・巾は中央部で0.53ｍを測った。竈内部には５枚の土層堆積が認められた。これらは住居廃絶後の自然の埋没過程を示すものであろう。

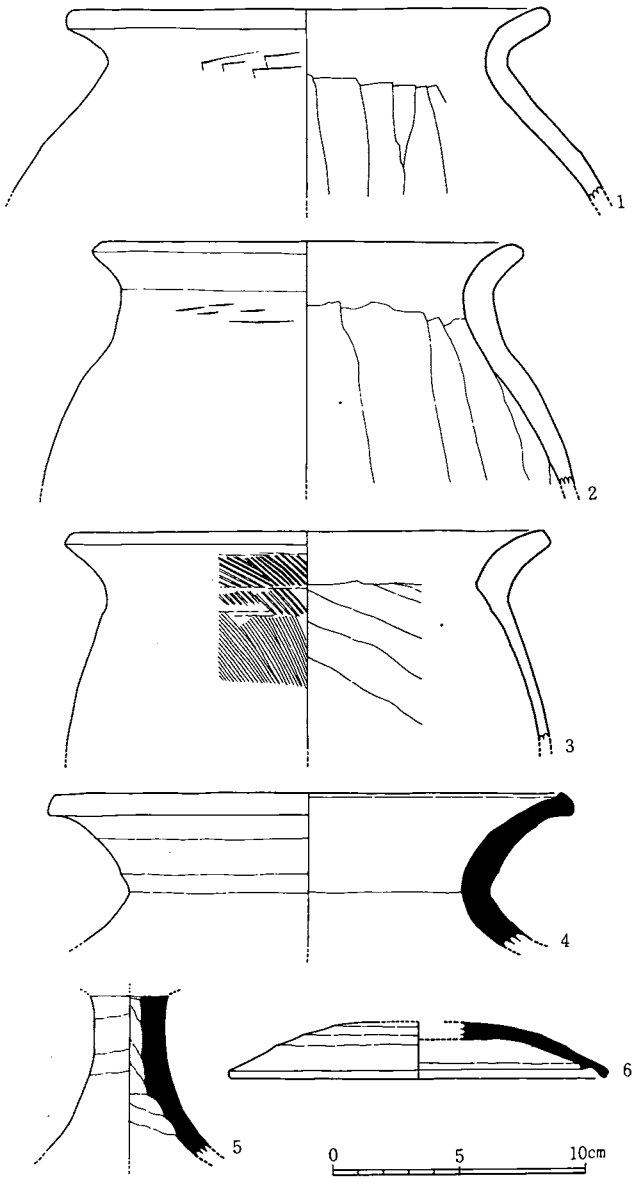
出土遺物は20点出土し、多くは細片で図化できるものは少ない。しかし、これらはすべて床面に接して出土したもので、住居址の使用年代の手がかりとなるものである。



第14図　上の原８号住居址実測図

〔出土遺物〕（第15図）

１～３は土師器甕でいずれも、胴部以下を欠失している。このうち１は、床面中央部に密着して、２・３は竈内から出土したものである。１は口径19.1cmで胴部が強く張り、頸部強く屈折し口縁部は外弯気味に大きく開き端部は丸くなる。器壁は口頸部から胴部までほぼ一定した厚さである。体部外面は刷毛は認められず、ナデ調整し、内面は縦方向のヘラ削りのあと、口縁部内外面を横ナデ調整で仕上げている。２は口径17.0cmで、胴部の膨みは１に比べて弱いが、口縁部は外弯気味に開き、端部は丸くなる。内外面の調整は１と同様である。器壁は頸部でわずかに厚みを増すが、全体的に一定している。３は口径19.20cmで、１・２に比べて胴部が薄い。頸部で強く屈折し、口縁部は外弯気味に開く。外面は細かな刷毛目、内面は左上りのヘラ削りのあと、口頸部内外面を横ナデ調整で仕上げる。器壁は胴部から頸部にかけて、非常に薄く丁寧に仕上げられている。頸部から口縁部色調は１・２とも黄褐色を呈し、米粒大の石粒を含む。二次焼成のため器面が荒れている。３はやや赤味を帯びた黄褐色、焼成は極めて良好である。４は須恵器甕で口径20.90cmを測る。頸部は強くくびれ、口縁部は外弯気味に大きく外反する。口縁端部内面は上方へ小さくツマミ上げられる。頸部外面は細かな平行タタキ目文が縦方向に施される。口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げている。灰白色を呈し、胎土緻密である。５は須恵器高杯の柱状部破片である。小型で透し孔はない。内外面横ナデ調整で付上げている。黄白色を呈し、焼成不良である。６は須恵器坏蓋で、復原口径15.00cm、同器高2.30cmを測り比較的小型で扁平なものである。天井部は平らで、口縁端部の内側に小さなかえりを持っている。かえりは成形後に貼り付けたものである。ツマミの有無は判明しないが、おそらく宝珠様のツマミが付されたものと思われる。色調灰褐色で二次焼成の痕跡を残している。胎土は緻密で焼成は良好である。



第15図　上の原８号住居址出土土器実測図

② 上の原10号住居址（第16図）

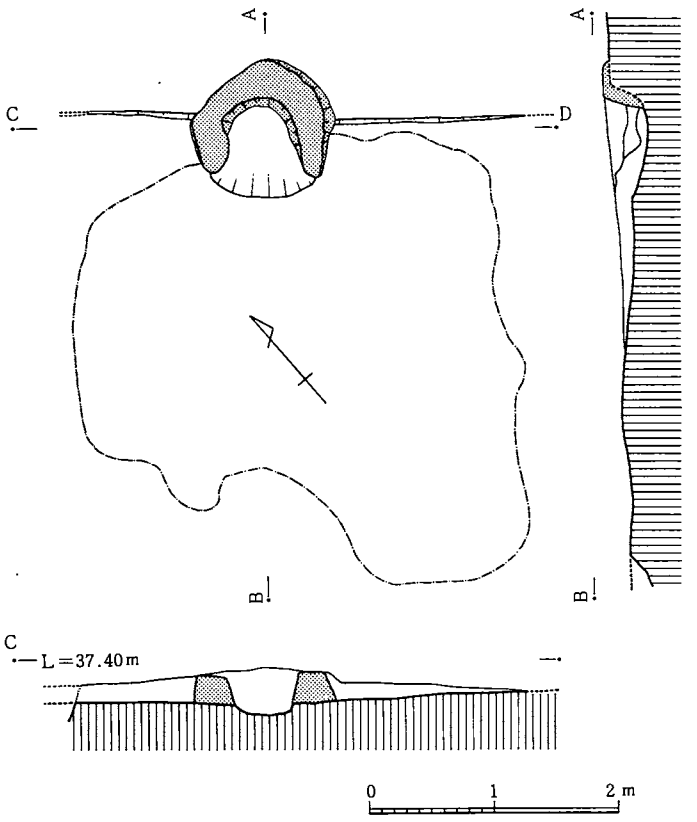
竈を北東部の壁に設置した住居址であるが、上からの削平が著しく、竈とこれにつづく壁の一部および硬化した床面の一部を検出したにすぎない。したがって住居址のプラン・規模については明らかにすることは出来なかった。竈を通る中軸線の方位はN－41°30′－Eで、12号住居址とともに、竈の設置位置としては数少ない例である。

竈は西裾部比較的良く残しているが、焚口・煙道部は失なわれていた。燃焼部は浅い土壙状の落ち込みとなっていて、内部に3枚の土層堆積がみられた。

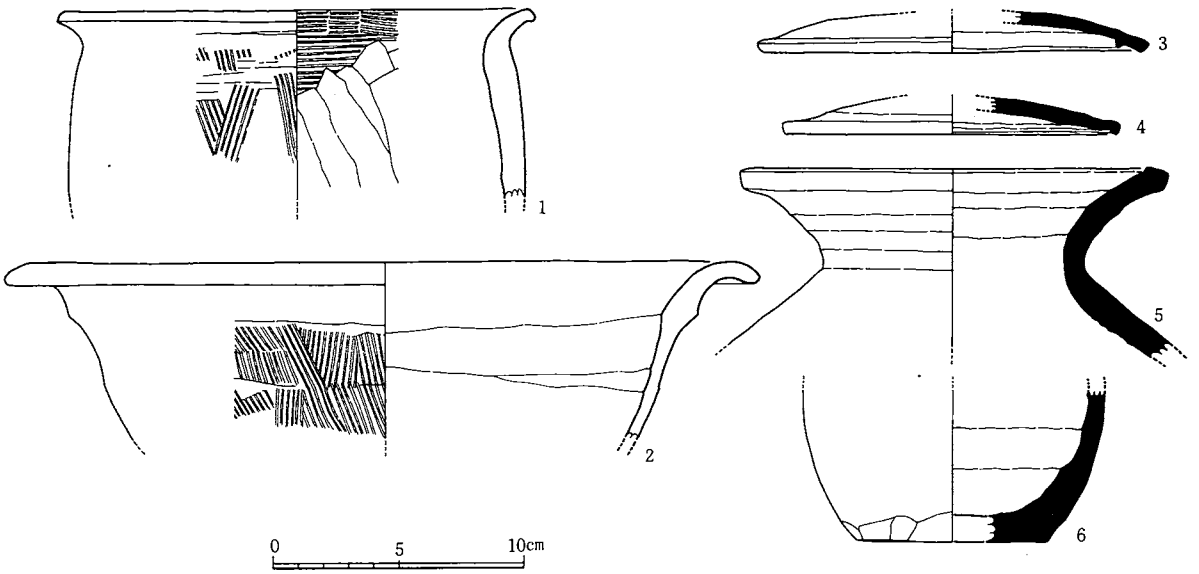
出土遺物はすべて硬化した床面に散乱した状態で出土したもので、計30点余りを数えたが、このうち図化できたものは6点で、すべて床面に密着して出土したものである。

〔出土遺物〕（第17図）

1は土師器甕で、口径19.00cmを測る。胴部の膨みはほとんど認められず、頸部はわずかにくびれ、口縁部は短かく外反し、端部は角ばる。器体外面は粗い櫛目状の刷毛目のあと横ナデ調整し、内面は口頸部を粗い横方向の刷毛目のあと、胴部以下を左上りのヘラ削りを施している。器壁は胴部から頸部にかけて肥厚し、口縁部は短かく薄いつくりとなっている。2は土師器鉢形土器で、口径30.10cmを測る大型品である。体部はやや膨み気味に外反し、口縁部は強く外弯し、端部は下方へ垂下している。外面は粗い刷毛目、内面は横方向のヘラ削りのあと、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げている。器壁は体部が薄く、口縁部で肥厚する。胎土中に多量の石粒を含み、全体として粗雑なつくりである。3・4は須恵器坏蓋で、いずれも天井部が失なわれているためにツマミの有無は不明である。3は復原口径15.50cm・同器高約1.80cmで、比較的大型で扁平なものである。天井部は平らで、口縁部内側にかえりをもつ。かえりは口縁端部よりやや上部にあり、断面三角形を呈している。天井部は、回転ヘラ削りされる他は、すべて横ナデ調整である。かえりは成形後に貼り付けられたものである。4は復原口径13.30cm・同器高約1.50cmである。天井部は平らで、口縁部にかえりをもたず、端部で内方に小さく屈曲している。天井部外面は回転ヘラ削りされ、内面はナデ調整が施される他は、横ナデにより仕上げられている。淡い灰色を呈し、胎土は極めて緻密である。5は須恵器甕で、口径16.90cmを測るやや小型品である。頸部は強くくびれ、口縁部はラッパ状に大きく開き、端部は角ばり内側で小さく尖出する。体部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで成形し、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げている。淡い灰色を呈し、胎土も緻密で、焼成良好である。6は小型壺の胴部下半の破片で底



第16図　上の原10号住居址実測図



第17図　上の原10号住居址出土土器実測図

径7.50cmを測る。胴部から底部は回転ヘラ削りで調整し、胴部と底部の境はヘラ削り調整され明瞭な平底となっている。胴部内面は横ナデ、底部は不定方向のナデ調整が施されている。黄色味を帯びた灰色を呈するが、焼成良好で胎土も緻密である。

③　上の原12号住居址（第18図）

II群の中で最も南側に位置し、10号住居址同様竈を北東部壁面に設置した住居址である。規模は竈を通る中軸線上で南北5.20m・東西5.12m、四辺の長さは北壁で4.16m・南壁で4.80m・東壁で4.98m・西壁で5.24mでほぼ方形プランである。床面は中央部でやや高くなり同辺部から壁面に沿って低くなる。床面には柱穴はなく、全面よく踏みしめられた硬化面が認められた。地山面から床面までの深さは最大0.10cmで、床面中央部では、プラン確認時点ですでに硬化面が露出していた。竈を通る中軸線の方位はN－35°－Eである。

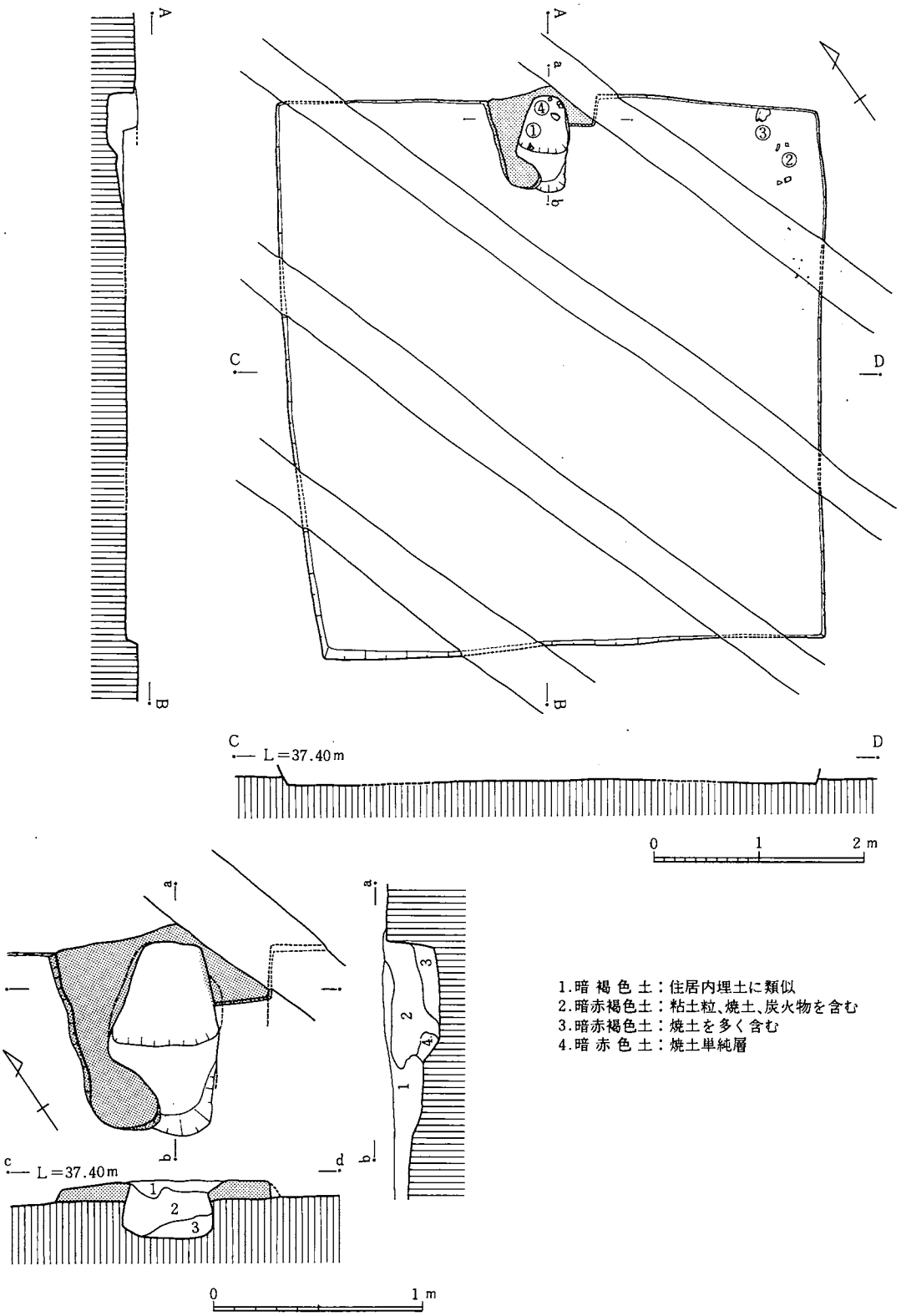
竈は西隅が後世の溝によって攪乱を受け、また全体が上部からの削平を受けたため基底部を残しているにすぎない。西袖部は完全に崩れ、東側は比較的良く残り、袖部から焚口部にかけて内側へ屈折している。竈の奥行は約0.90m・燃焼室内の巾0.43mで、横断面は袋状を呈し、内部に4枚の土層堆積が認められた。出土土器のうち1・4（第19図）は竈内2層から出土したもので、2・3は床面の西隅に出土したものである。

〔出土遺物〕（第19図）

1は須恵器坏蓋で、口径13.50cmを測る。天井部は欠失するが、復原すれば器高約5cm前後となり、さらに宝珠様のツマミをもつものと考えられる。口径に比べ器高が著しく高いので、坏以外の蓋とも考えられる。口縁部内面に小さなかえりを付している。かえりは成形後に貼り付けたものである。天井部外面は回転ヘラ削りされ、他は横ナデ調整で仕上げている。

2は須恵器鉢あるいは椀であろう。口径16.00cmで底部は欠失する。体部は膨み気味に立ち上り、口縁部で外方へ小さく屈曲し、端部は角ばる。体部内外面は横ナデ調整し、底部は手持ちヘラ削りによる調整を施している。体部と底部の境は不明瞭である。黄褐色を呈した土師質で、器面が磨滅してザラザラしている。

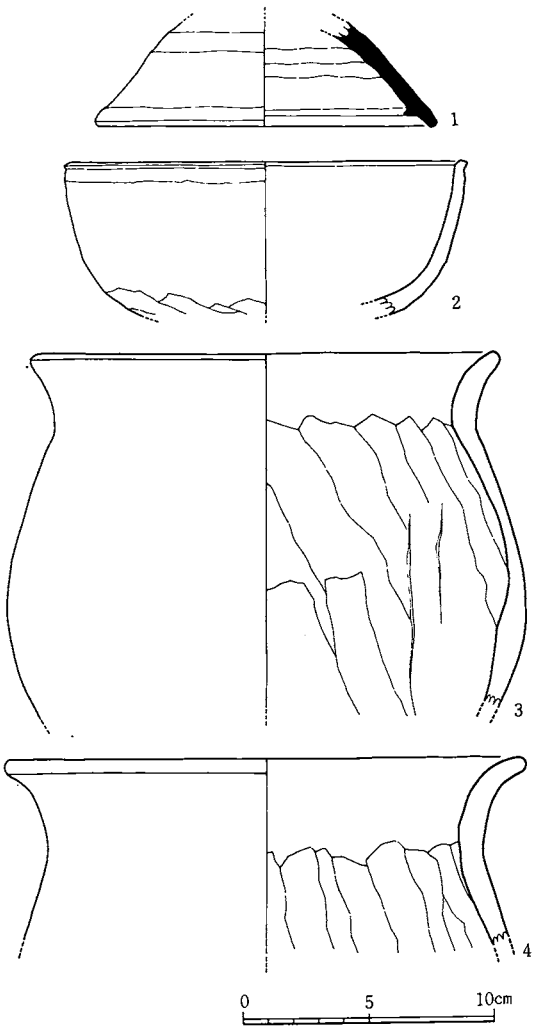
3・4は土師器甕である。3は口径18.60cm・胴部最大径20.60cmで、胴部下半を欠失する。胴部は球形で、



第18図　上の原12号住居址実測図

頸部のくびれは弱く、さらに口縁部は短かく外反する。器壁の厚さは部位によってまばらであるが、全体として薄く仕上げ、口縁部を肥厚させている。外面の刷毛調整は器面の磨滅によって消えている。胴部内面は左上りのヘラ削りのあと、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げる。なお口縁部から肩部にかけて炭化物が付着している。4は口径20.70cm測り、3に比べてやや大型の甕である。頸部のくびれは弱く、口縁部は外弯気

味に開き、端部は丸くなる。胴部外面はナデ調整、内面は左上りのヘラ削りのあと、口縁部内外面を横ナデ調整で仕上げている。黄白色を呈し、焼成不良である。



第19図　上の原12号住居址出土土器実測図

④　上の原47号住居址（第20図）

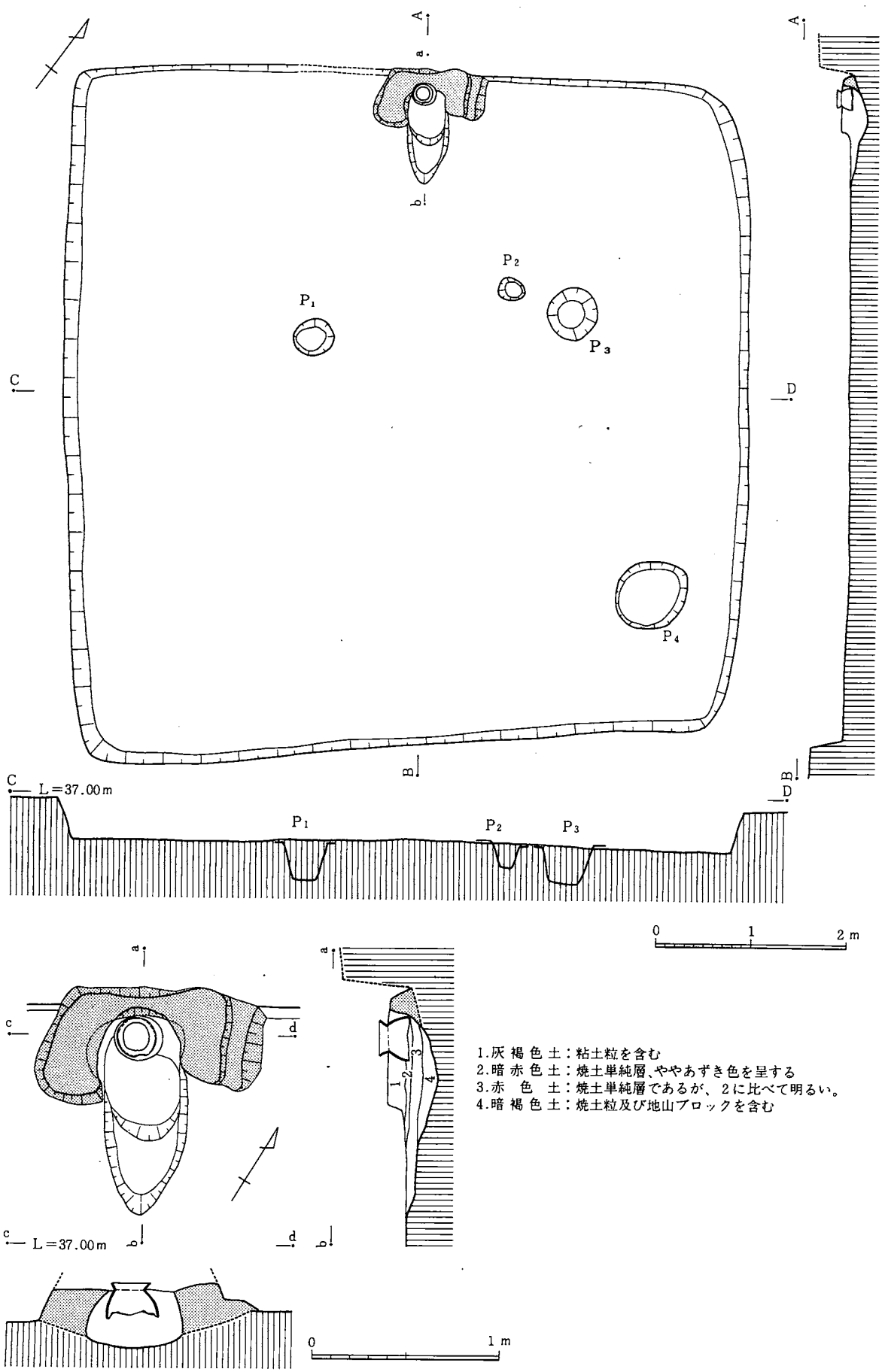
II群の中央部から東寄りに位置する住居址で、北壁の中央よりやや東側に竈を設置している。住居の規模は中軸線上で南北7.03m・東西7.22m、四辺の長さは北壁6.70m・南壁6.50m・東壁6.70m・西壁7.30mを測る隅丸方形を呈している。地山面から床面の深さは最大で0.50m、最小でも0.40mで他の住居地に比較して深く、残存状態が良好であった。床面は中央部が高く硬化面を残すが、四壁沿った周辺部は低く床も軟弱である。柱穴は竈前面に大小3個検出し、また床面の南東部隅寄りに長径0.82m・短径0.70mの隋円形プランの土壙を検出した。おそらく貯蔵穴様のものであったと考えられる。なお竈を通る中軸線の方位はN－35°40′－Wであった。

竈は北壁より東寄りに設置され一部壁面から張り出すが、大部分は住居内に納まっている。焚口・煙道は失なわれていたが、両袖部の一部と竈内部のカケ口部に当る部位に胴部以下を打ち欠いた甕が出土した。おそらくカケ口に使用したものと考えられる。焚口から燃焼室にかけては浅い二重の土壙状となり燃焼室の横断面形は袋状となり、巾は最大で0.50mを測った。

出土遺物は質量とも豊富で、計120点余りが出土した。これらのうち最も量が多いのは土師器甕65点（細片も含む）と須恵器甕27点で、他は土師器坏及び須恵器坏の破片であった。これらのうち18点を図示したが、このうち第21図2の甕は竈内から出土し、他はすべて住居内覆土中から出土したもので、住居廃絶後に流入したか、廃棄されたものと考えられる。

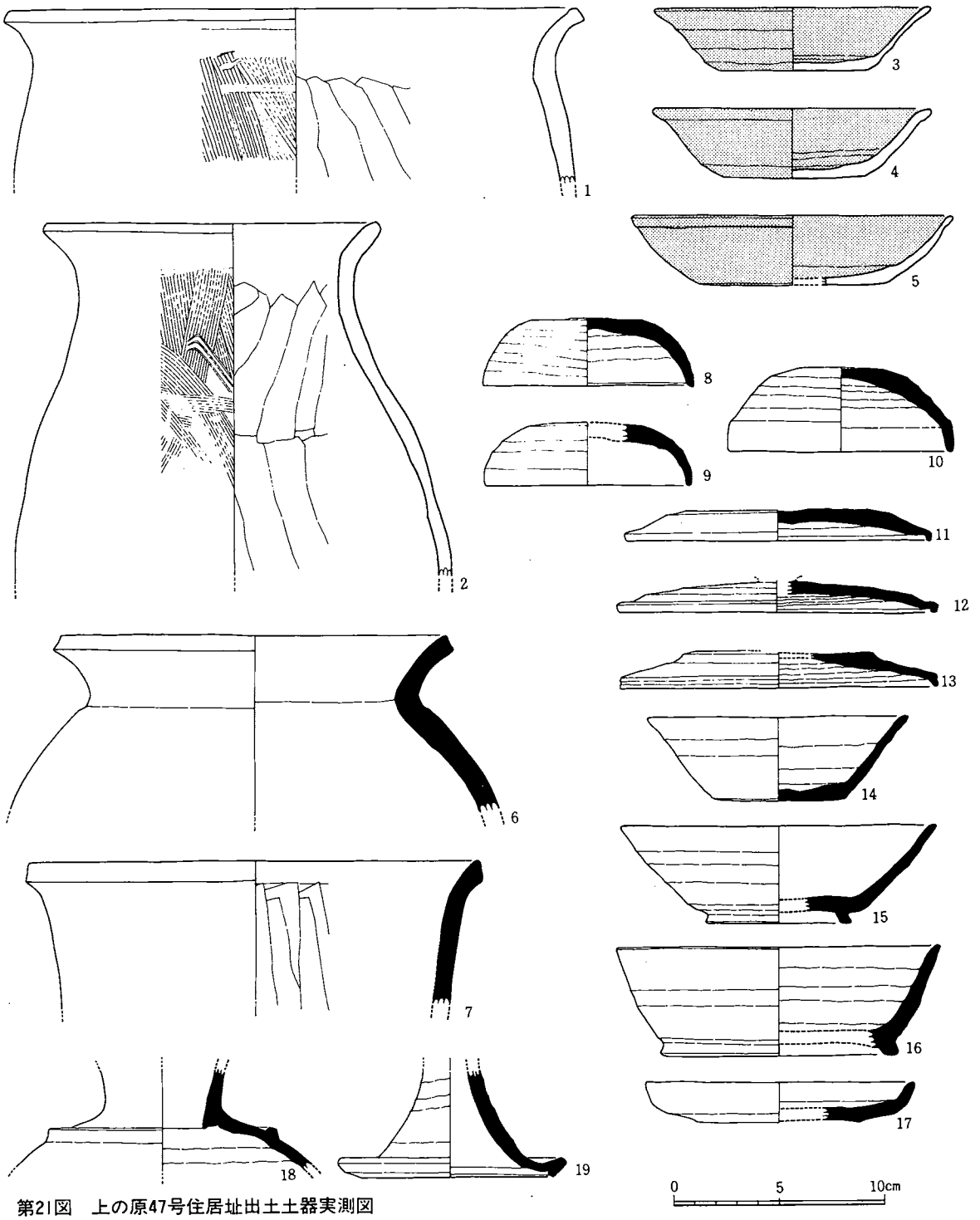
〔出土遺物〕（第21図）

1は土師器大型甕の口頸部破片で、口径27.80cmを測る。頸部のくびれは弱く口縁部は外弯気味に開き、端部は角ばる。器体外面は刷毛目、内面は左上りのヘラ削りのあと、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げる。全体として薄くシャープなつくりである。色調は黄褐色で焼成良好である。2は長胴甕で口径16.10cm・胴部最大径21.00cmで、口の狭い甕である。器体外面は縦および不定方向の刷毛目、内面はヘラ削りを施こし、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げている。胴部内面の中位以下には炭化物が付着している。3～5は土師器坏で、3点とも全面丹塗りである。3は口径13.10cm・器高3.00cmである。底部は平らで、体部は外反して立ち上る。底部外面は回転ヘラ削り、体部内外面は回転横ナデ、底部内面はナデ調整する。4は口径13.20cm・器高3.20cm、器形・成形・調整方法は3と同様である。5は口径15.20cm・器高3.30cmでやや大型の坏である。



1.灰 褐 色 土：粘土粒を含む
2.暗 赤 色 土：焼土単純層、ややあずき色を呈する
3.赤　色　土：焼土単純層であるが、2に比べて明るい。
4.暗 褐 色 土：焼土粒及び地山ブロックを含む

第20図　上の原47号住居址実測図



第21図　上の原47号住居址出土土器実測図

底部は平らで体部との境は明瞭である。体部は膨み気味に立ち上る。成形・調整・手法は３・４と同じである。

６は須恵器甕で口径19.10cm、口縁部は短く外反し、端部は角ばる。胴部外面は右下りの平行タタキ、内面は同心円タタキで成形し、口頸部内外面は回転による横ナデ調整で仕上げている。全体に厚いつくりである。７は須恵器鉢で、口径21.70cmを測る。体部は直線的に立ち上り、口縁部でわずかに外反する。口縁端部は外側から面取りされ、稜をもっている。器体外面は横ナデ、内面はヘラ削りで仕上げている。色調は黄褐色で土師質を呈する。８～10はいずれも小型の須恵器坏蓋である。８は口径10.10cm・器高3.00cm。９は口径9.90

cm・器高3.00cm。10は口径10.10cm・器高4.00cmを測る。8・9とも天井部は平坦で体部は丸味をもっている。いずれも天井部外面を回転ヘラ削り、他は内外面とも回転横ナデ調整で仕上げる。灰白色を呈し、胎土はきめ細かく、焼成良好である。10の天井部の径は4.00cmと小さく、口縁部は屈曲して端部は垂直に下がっている。この屈曲部外面に稜を有する。色調は黄褐色で土師質を呈する。11～13は須恵器坏蓋で、12はツマミを持っている。11は口径14.40cm・器高1.40cm。12は口径15.00cm・器高1.40cm。13は口径15.00cm・器高1.80cmを測った。3点とも法量に大きな差はない。いずれも口縁部が屈曲し、端部は垂直に下がるもの（11・13)、屈曲して内方に突出されるもの（12）など細部に変化が認められる。14は須恵器坏である。口径12.30cm・器高4.00cmである。体部は直線的に立ち上り、底部は平らで、体部と底部の境は明瞭である。14・15は須恵器高台付坏である。14は口径14.90cm・器高4.60cmを測る。体部はやや膨みをもって大きく開く。高台は小さくやや外方に開いている。高台は底部のわずかに中心寄りに貼り付けられている。16は復原口径15.30cm・同器高5.20cmを測る。高台は扁平で外方へ開いている。17は須恵器小皿である。口径12.20cm・器高1.90cmである。底部は回転ヘラ削りでわずかに上げ底となっている。全体に厚いつくりである。18は須恵器長頸壺で、肩部に一条の貼付凸帯をめぐらせている。この種の壺としては小型である。色調は暗灰色で、胎土は緻密で、焼成良好である。19は須恵器高坏の脚部破片である。脚部はラッパ状に大きく開き、端部で弯曲して上部にはね上り、さらに端部を内側に折り曲げている。内外面とも横ナデ調整で仕上げている。

⑤ 上の原64号住居址（第22図）

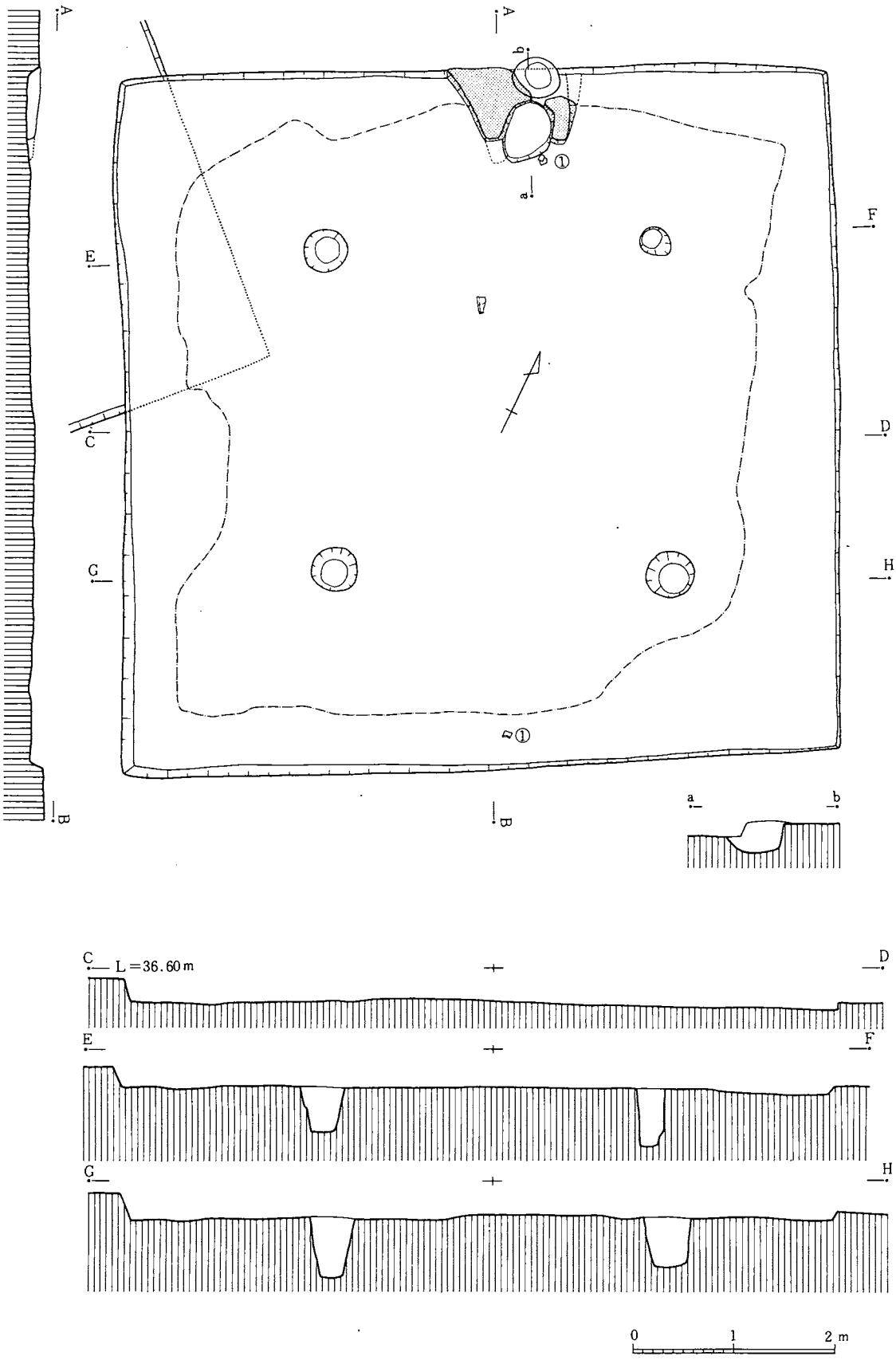
II群の北東部端に位置している。北西で35号住居址を壊してつくられ、竈中央部は、掘立柱建物の南西部コーナーの2つの柱穴堀形によって壊されている。規模は中軸線上で南北6.90m・東西7.06m、四辺の長さは北壁7.02m・南壁7.14m・東壁6.64m・西壁6.85mで東西にやや長い略方形プランを呈する。地山面から床面までの深さは最大で0.28mを測ったが、特に北・東側で上部からの削平が著しい。床面には4個の柱穴が整然と配置され、四壁に沿った部分をのぞき硬化面が残っている。柱穴堀形の深さは床面から0.24～0.30mであった。なお、竈を通る中軸線の方位はN－25°－Wである。

竈は北壁中央より東寄りに設置されているが、先に述べたように、中央部分を堀立柱建物の柱穴掘形によって壊されていて、左右の袖部の粘土塊を残しているにすぎない。したがって、各部位の構造について知ることはできない。

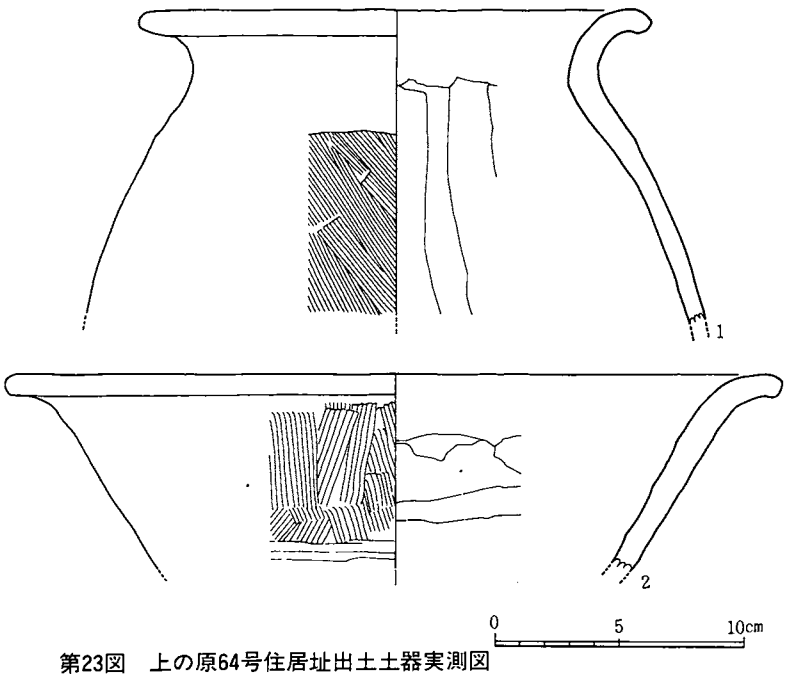
出土遺物は計14点ですべて土師器である。しかし、細片が多く図化できるものは少ない。

〔出土遺物〕（第23図）

1は土師器甕で口径20.40cmを測る。胴部は膨み、頸部は強くくびれる。口縁部は強く外弯し、先端部は下方へ垂下がる。器体外面は細かな刷毛目、内面は縦方向のヘラ削りを施し、口頸部は横ナデ調整で仕上げる。頸内面に明瞭な稜を残す。色調は赤褐色で砂粒を多く含んでいる。2は土師器鉢あるいは鍋様のものである。口径31.00cmの大型品である。底部は欠失し、体部はラッパ状に開き、口縁部でさらに外弯している。器体外面は、粗い刷毛目で調整し、内面は横方向（右→左）のヘラ削りが施される。全体として肉厚で粗いつくりである。黄褐色を呈し、焼成は不良である。



第22図　上の原64号住居址実測図



第23図　上の原64号住居址出土土器実測図

⑤　上の原89号住居址

（第24図）

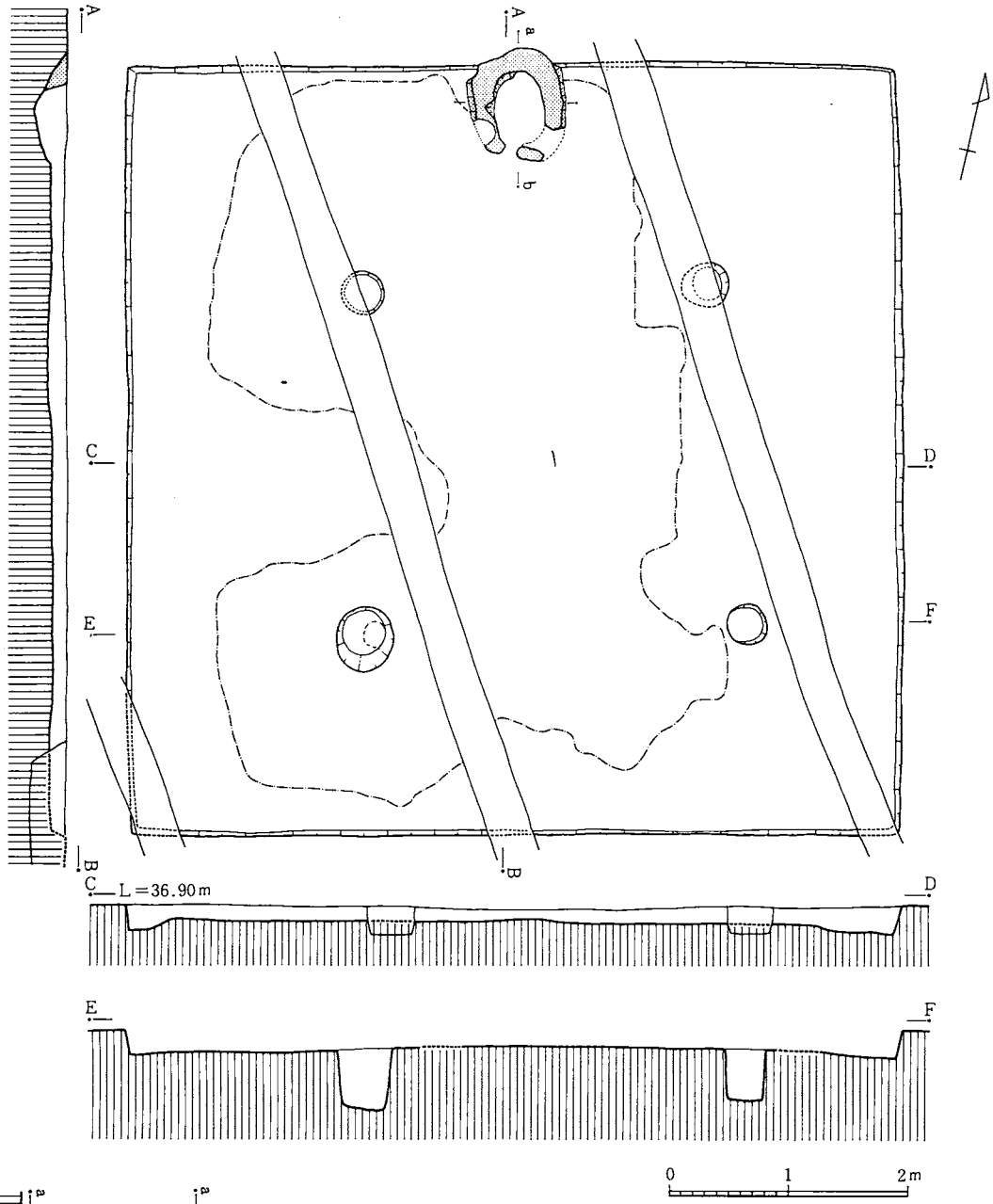
II群の中では、91号住居址とともに西側に位置する比較的大型の住居址である。前の64号同様北壁の中央部より東寄りに竈を設置している。規模は中軸線上で南北6.52m・東西6.53m、四辺の長さは、北壁6.43m・南壁6.43m・東壁6.40m・西壁6.39mで、ほぼ正方形プランを呈する。地山面から床面までの深さは0.25mで、床面中央部が高くなり周辺部が壁に移るに従って低くなっている。床面は64号住居址と同じく、4個の柱穴が整然と配置され、柱穴掘形は竈側の2個が後世の溝によって攪乱を受けている。柱穴の径はそれぞれ異なるが、深さは床面から0.40～0.55mの範囲内にあり、ほぼ一定している。なおP3の柱穴の基底部は径20cm前後の範囲が突き硬められていた。なお竈を通る中軸線の方位はN-13°20′-Wであった。

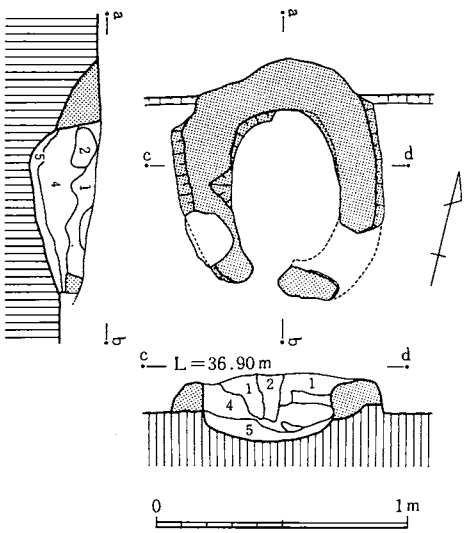
竈はかなり崩壊しているものの、両袖部は焚口近くの部分的に崩れていたが、焚口部は残存し、巾は基底部で0.10mを測った。竈の奥行は0.94m・巾0.84mを測る。また燃焼室内の奥行きは0.62m・巾は最大0.52mで、横断面形は袋状をなす。焼道部は削平され残存していない。竈内には4枚の土層堆積が認められ、最も上層に竈の天井部の壁材とみられる粘土ブロックが転落していた。

出土遺物は少なく、計25点を数えたが、すべて破片で、しかも細片が多い。すべて住居址内覆土中に混入していたものである。

〔出土遺物〕（第25図）

1は土師器坏で、外面と口縁部内面に赤色顔料が残っている。口径13.70cm・器高3.60cmを測る。体部と底部の境は明瞭で、体部は膨み気味に立ち上る。全体として厚いつくりで、底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整し、体部内外面は回転横ナデ調整で仕上げている。2は土師器高台付椀である。口縁部を欠失し、底径は9.80cmを測る。高台は低く底部外面の周縁に貼りつけられている。底部外面は不定方向の手持ちヘラ削りで調整し、内面はナデ調整、体部内外面は横ナデ調整で仕上げている。3は須恵坏蓋の口縁部破片で、復原口径16.30cmを測った。口縁端部は屈折し、下方へ小さく突出させる。端部は角ばっている。4・5は須恵器坏である。4の復原口径は14.80cm、5は13.30cmを測った。2点ともうすいつくりである。6は口径25.70cmの土師器大型甕である。口縁部は「く」の字状をなし、端部は丸くなる。大部分は横ナデにより消されている。内面左上り方向のヘラ削り調整される。口縁部内外面は横ナデ調整される。器壁は極めて薄く仕上げられている。色調は明褐色を呈し、焼成は良好で、良く焼きしまっている。7は須恵器鉢の口縁部破片で、復原口径26.30cmを測った。体部はやや膨み気味に立上り、端部は角ばり内傾している。内外面は回転による横ナデ調整で仕上げている。



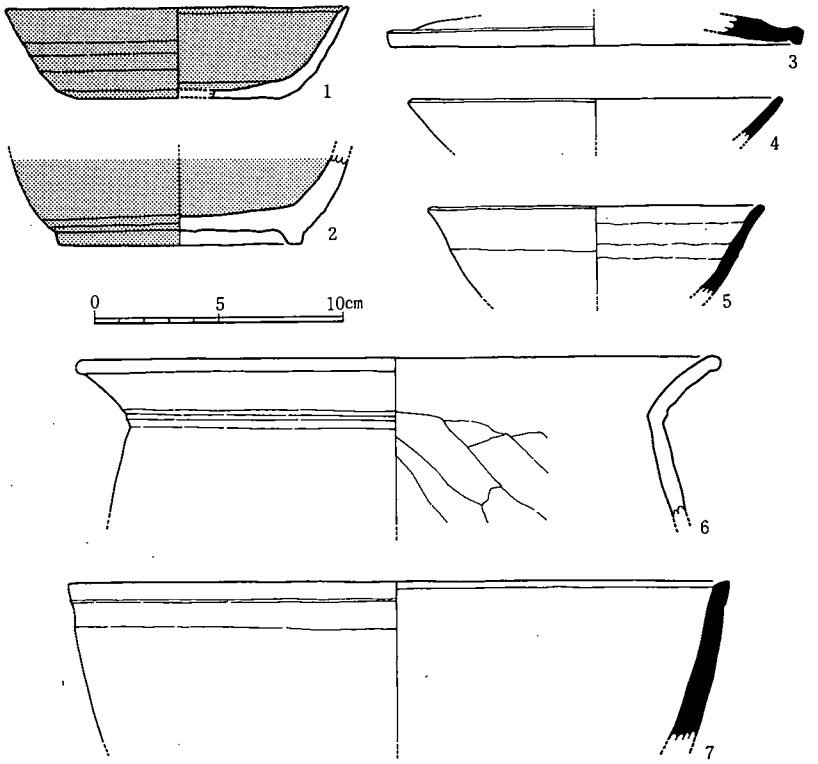


1.黒褐色土層：焼土粒・炭化物・土器片を含み、住居内覆土と同一。
2.カマドの粘土ブロック：天井部・袖部が転落したもの。
3.焼　土　層：サラサラした砂質。
4.黒 褐 色 土：焼土・粘土・炭化物を含む。
5.黒色砂質層：残位層。

第24図　上の原89号住居址実測図

⑥　上の原91号住居址

（第26図）



第25図　上の原89号住居址出土土器実測図

89号住居址の北側にあり、93号住居址の西側にあって、これら３軒は、かぎの手状にほぼ等間隔に配置されている。II群では唯一、西壁面の中央部より北寄りに竈を設置した住居址である。規模は中軸線上で、東西5.78ｍ、南北5.28ｍ、四辺の長さは西壁5.20ｍ、東壁5.18ｍ・北壁5.64ｍ、南壁5.76ｍで、やや東西に長い方形プランである。地山面から床面までの深さは最大でも15cm前後で、かなり上部から削平されたものと考えられる。床面は竈周辺から床面中央にかけて硬化面を残しているが、柱穴は皆無であった。なお竈を通る中軸線の方位はN－85°20′－Wであった。竈は西壁の北寄りに設置されていて、壁からわずかに張り出す程度で、ほとんど住居内に納まる。両袖部は弧状にのび、焚口部で狭くなる。奥行きは0.93ｍ残存し、巾1.06ｍを測る。竈内の燃焼室は楕円形プランで底部は二重の落ち込みとなり、内部に４枚の土層堆積が認められた。

出土遺物は少なく、しかも細片が多い。図示した２点は床面に密着した状態で出土したものである。

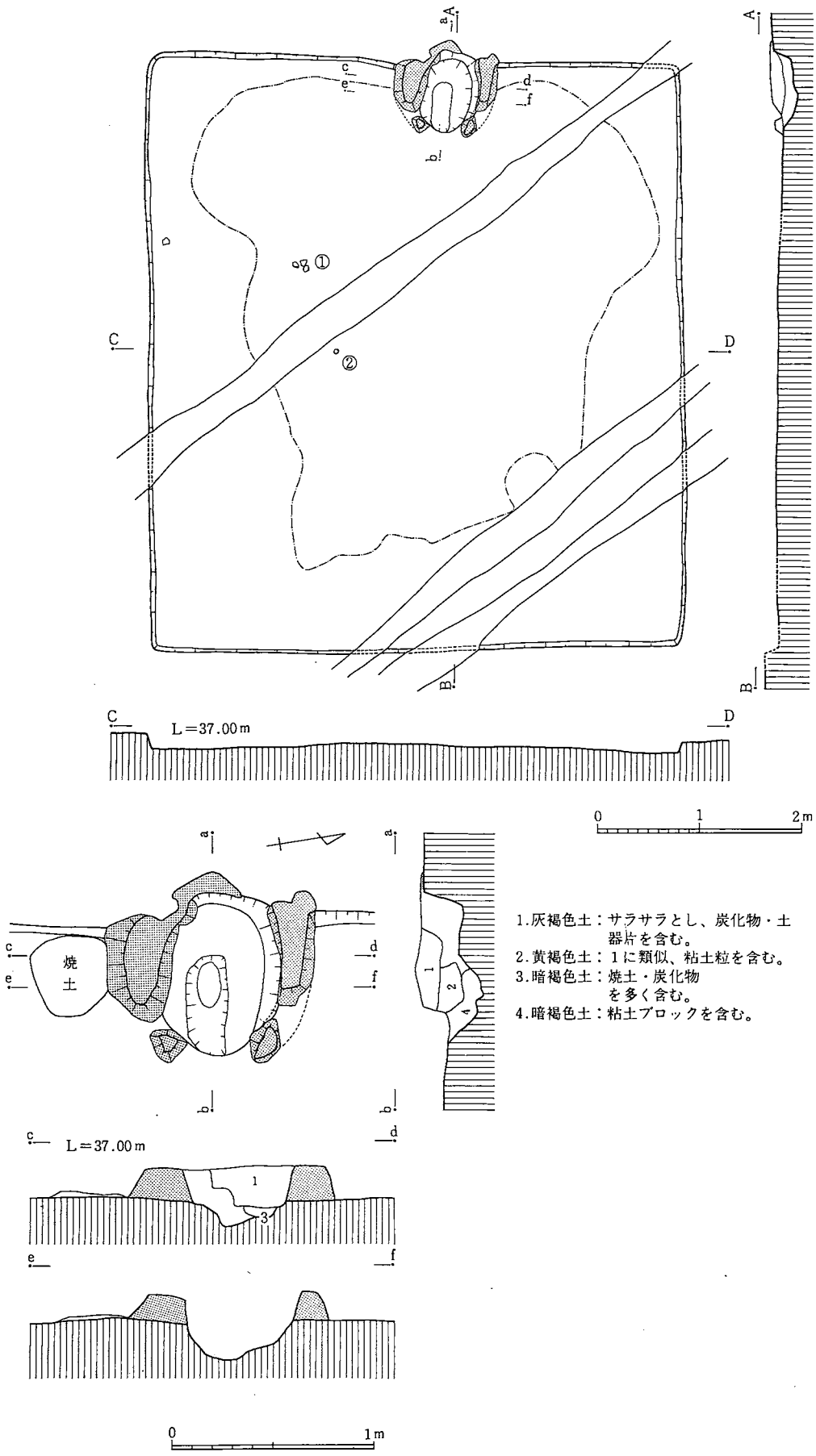
〔出土遺物〕（第27図１・２）

１は土師器高坏の坏部破片である。口径20.90cm、坏部上半部と下半部の境は明瞭である。上半部は大きくラッパ状に開く。器体内面は刷毛目調整され、さらに内外面に赤色顔料が塗られている。全体として薄いつくりである。２は須恵器坏底部破片である。底径7.80cmを測る。底部外面は回転へラ削りのまま未調整、内

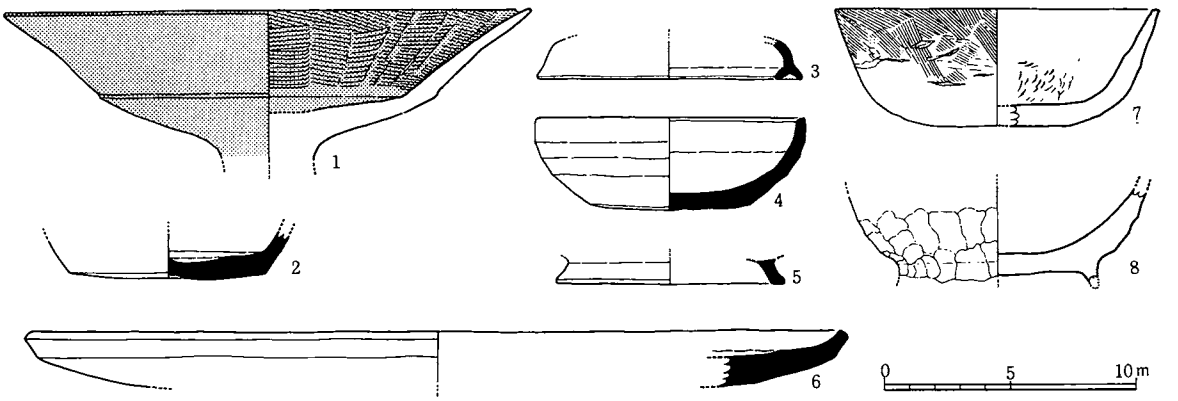
底径7.80cmを測る。底部外面は回転へら削りのまま未調整、内面および体部内外面は横へら調整で仕上げている。

⑦　上の原93号住居址（第28図）

91号住居址と100号住居址の間に位置し、65号住居址と完全に重復し、94号住居址の北側３分の１程と重なっている。65、94号はいずれも５世紀代の住居址である。竈を北壁中央部よりわずかに東寄りに設置している。住居址の規模は、中軸線上で南北6.70ｍ、東西6.72ｍで、四辺の長さは北壁約6.65ｍ、南壁6.69ｍ、東壁約6.70ｍ、西壁6.47ｍで、ほぼ正方形プランを呈している。地山面から床面までの深さは、最大で0.25ｍである。床面は中央部がわずかに高く、周辺部が低くなっている。柱穴掘形は４個検出したが、このうち主柱掘形はＰ1・Ｐ2の２個である。仮に64、89号住居址のような４本柱を想定すると、Ｐ1・Ｐ2に対応すべ



第26図　上の原91号住居址実測図



第27図　上の原91・93号住居址(91号＝1・2、93号＝3－8)出土土器実測図

き柱穴は認められなかった。また南壁に平行し、約1.35mの間隔をおいて2個の小柱穴を検出した。床面は竈前面からほぼ主柱穴の内側部分に硬化面が認められ、南側で壁面近くまで張り出している。住居址の竈を通る中軸線の方位はN－33°－Wであった。

竈は中央部を後世の耕作溝で切断されていて、竈奥行きは0.98m、巾約1.15mを測る。また燃焼室は奥行き約0.60m、巾約0.50mを測り、浅い土壙状の落ち込みとなっている。

出土遺物は少なく細片が多い。すべて住居内覆土に混入して出土したものである。

〔出土遺物〕（第27図3～8）

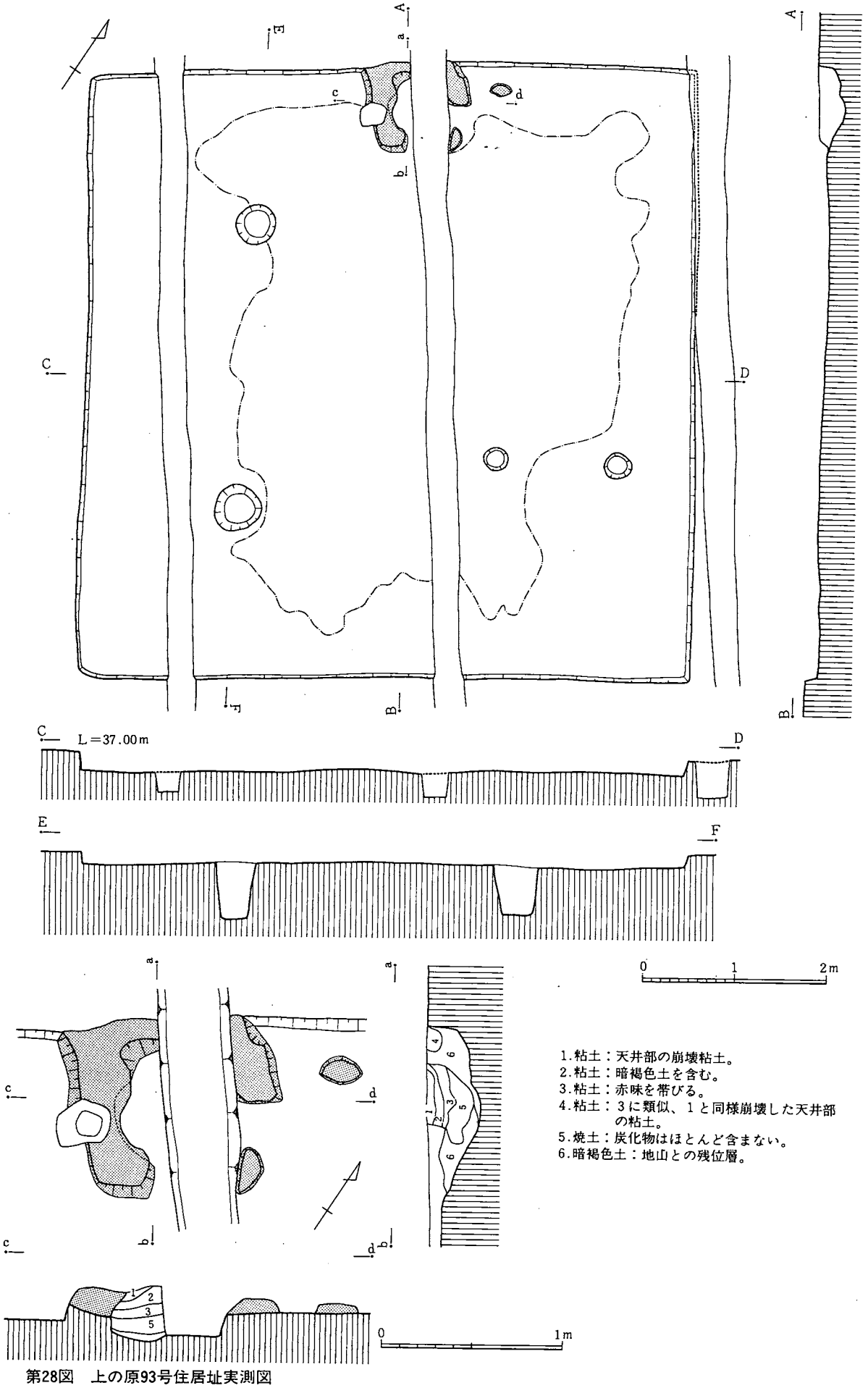
3は須恵器蓋の口縁部破片である。口縁端部とほぼおなじ長さのかえりを有する。おそらく天井部につまみを有する形態である。復原口径10.06cmを測る。4は須恵器坏身である。口径10.08cm、器高3.60cmを測る。底部と体部の境は明瞭で、体部は膨み気味に立ち上る。口縁部は直立し、端部は内傾する。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整、体地内外面は横ナデ調整で仕上げる。全体に肉厚である。5は須恵器高台付坏の高台部の破片である。高台は高く外方へ開いた安定した形態となっている。復原底径9.2cmを測る。6は須恵器台付盤あるいは高坏の口縁部破片である。復原口径32.08cmの大型品である。口縁は屈折して外反し、端部は角ばる。

7は土師器坏で口径12.09cm、器高4.6cmを測る。体部と底部の境は不明瞭で、丸底気味の平底となる。体部は直線的に外反し、端部は角ばる。外面は粗い刷毛目で調整し、内面は指頭によるナデ調整を施し、体部下半から底部にかけて、無数の爪痕が残っている。成形、調整とも粗雑である。8は土師器高台付坏で、口縁部および高台端部を欠失する。成形は手づくねによる粗雑なつくりである。

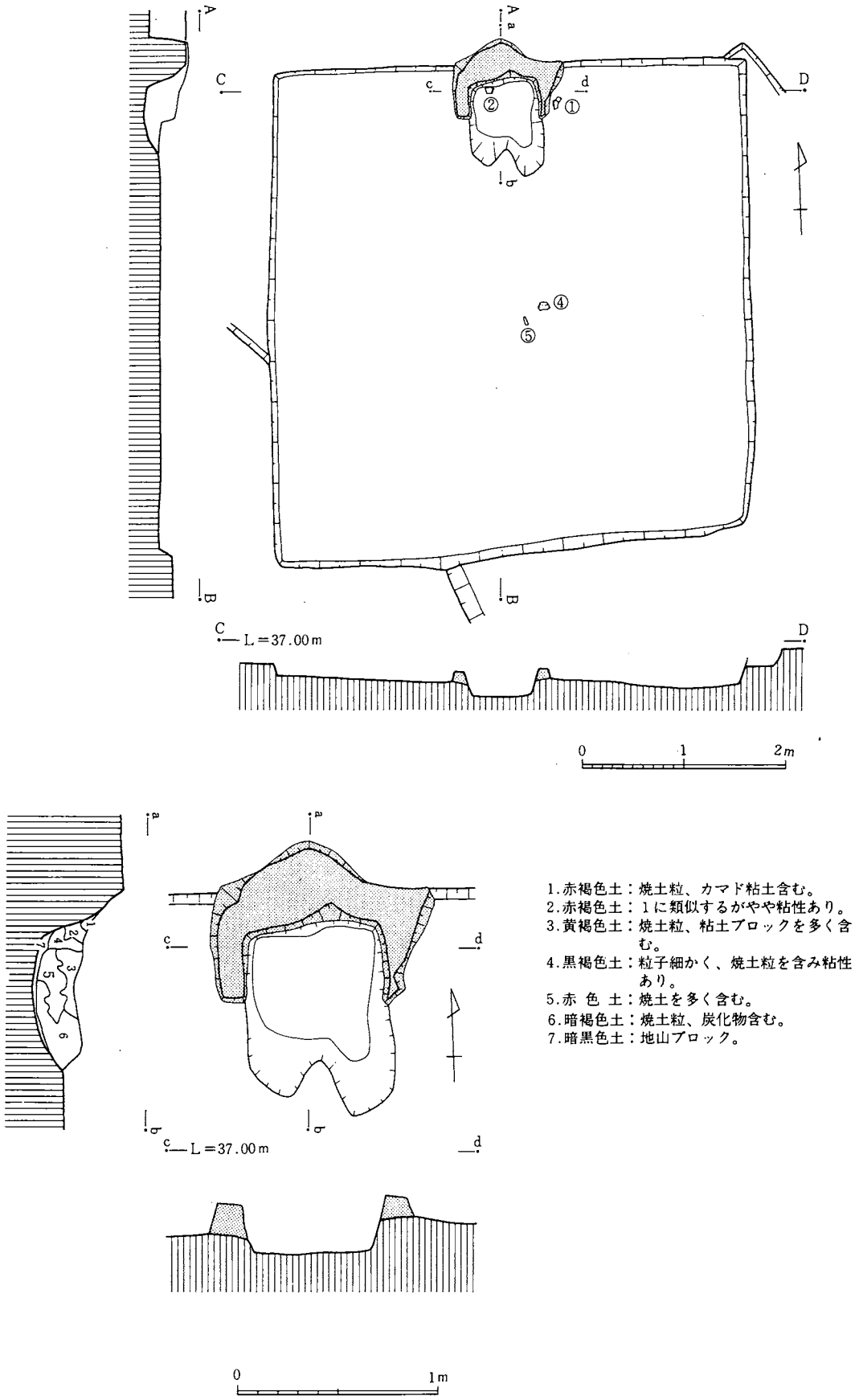
⑧　上の原100号住居址（第29図）

住居址の北東部隅が8号住居址の南西部の隅に近接し、また77、105、108号の3軒の住居址と重複している。北壁中央部に竈を設置し、II群の中では比較的小型の住居址である。住居の規模は軸線上で南北5.08m、東西4.80m、四壁の長さは北壁4.66m、南壁4.60m、東壁4.56m、のほぼ略方形プランを呈する。地山面から床面までの深さは最大で0.20mを測ったが、旧状は0.40m以上あったと考えられる。床面はほぼ水平面を保ち、東壁側が低くなっている。柱穴は皆無であった。なお竈を通る中軸線の方位はN－2°30′－Eで、ほぼ磁北を向いている。

竈は壁面から張り出して設置され、両袖は中央部から焚口部にかけて失われている。燃焼室は不整な方形

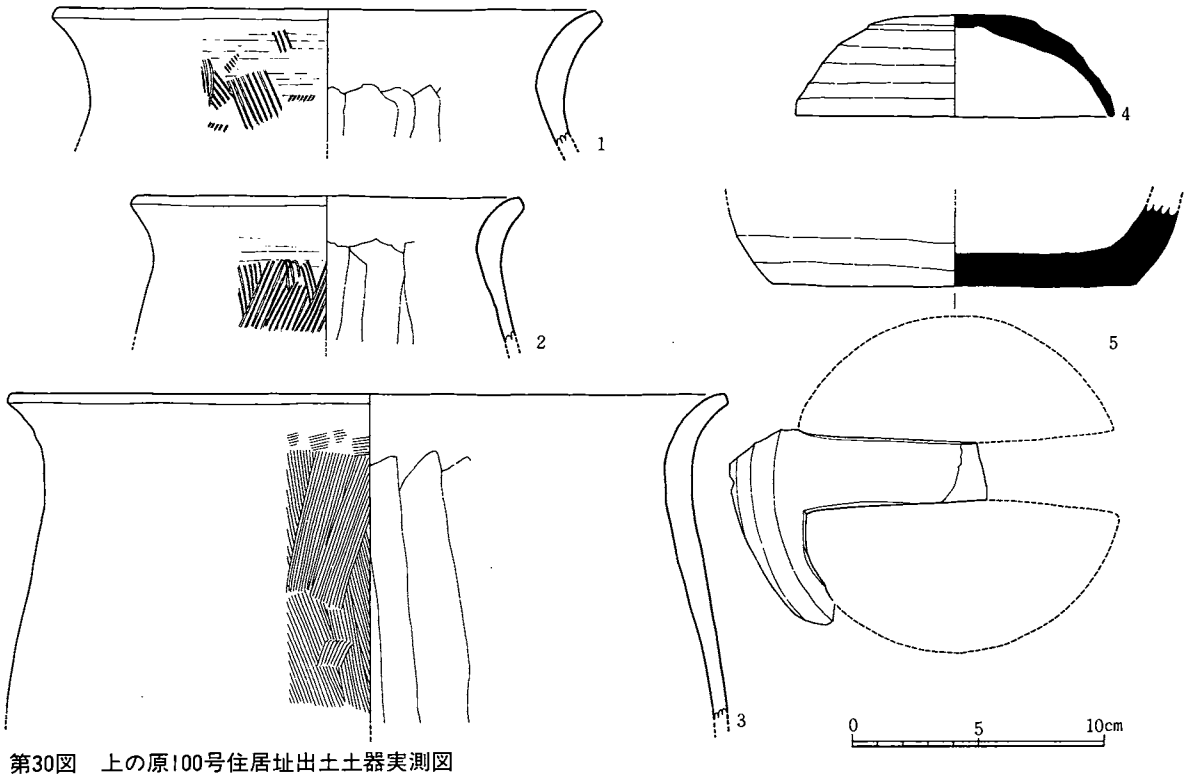


第28図　上の原93号住居址実測図



1.赤褐色土：焼土粒、カマド粘土含む。
2.赤褐色土：1に類似するがやや粘性あり。
3.黄褐色土：焼土粒、粘土ブロックを多く含む。
4.黒褐色土：粒子細かく、焼土粒を含み粘性あり。
5.赤 色 土：焼土を多く含む。
6.暗褐色土：焼土粒、炭化物含む。
7.暗黒色土：地山ブロック。

第29図　上の原100号住居址実測図



第30図　上の原100号住居址出土土器実測図

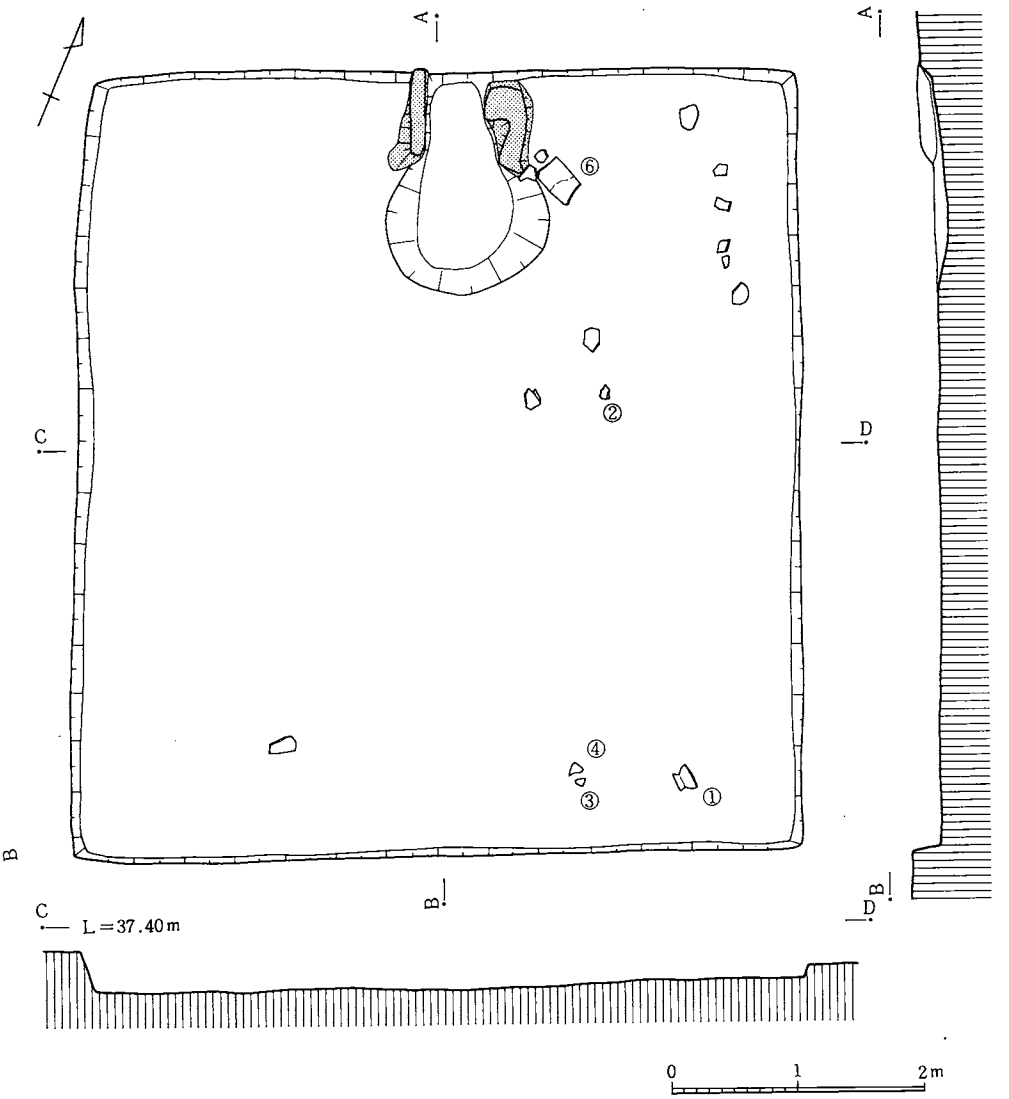
プランの土壙状の落ち込みとなる。燃焼室の巾は底部で0.57m、残存部最上面で0.71mを測り、この部分の横断面は、逆梯形を呈している。

出土遺物は、竈内および東壁部、床面中央部の三ヶ所に、計5点が出土した。竈内部出土の甕（第30図の2）は7層最下層から、他は床面に密着して出土したものである。

〔出土遺物〕（第30図）

1～3は土師器甕である。1は復原口径21.8cm、2は15.6cm、3は28.7cmを測る。それぞれ大型、小型の甕がそろっている。いずれも形態、成形手法は類似している。口縁部は「く」の字状に外弯し、内面に稜を残す。1、2の外面は粗い刷毛目、内面は縦方向のヘラ削りを施こし、口縁部内外面は横ナデ調整で仕上げている。3の外面は単位の密な刷毛目調整である。

4は須恵器坏蓋である。口径12.6cm、器高4.1cmを測る。天井部はやや丸味をもつが、体部との境は明瞭である。体部は膨みをもち、口縁部も下外方へ開いている。底部は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ調整で仕上げている。色調は赤味を帯びた黄褐色で、土師質を呈している。5は須恵器甑の底部破片である。底部は中央にブリッヂを残し、半円形の孔を2つ穿った形態である。復原底径14.06cmを測った。底部は平底で、体部はやや膨み気味に立ち上る。外面および孔はヘラ削り調整され、内面はナデ調整で仕上げている。内外面とも淡褐色で胎土も緻密である。



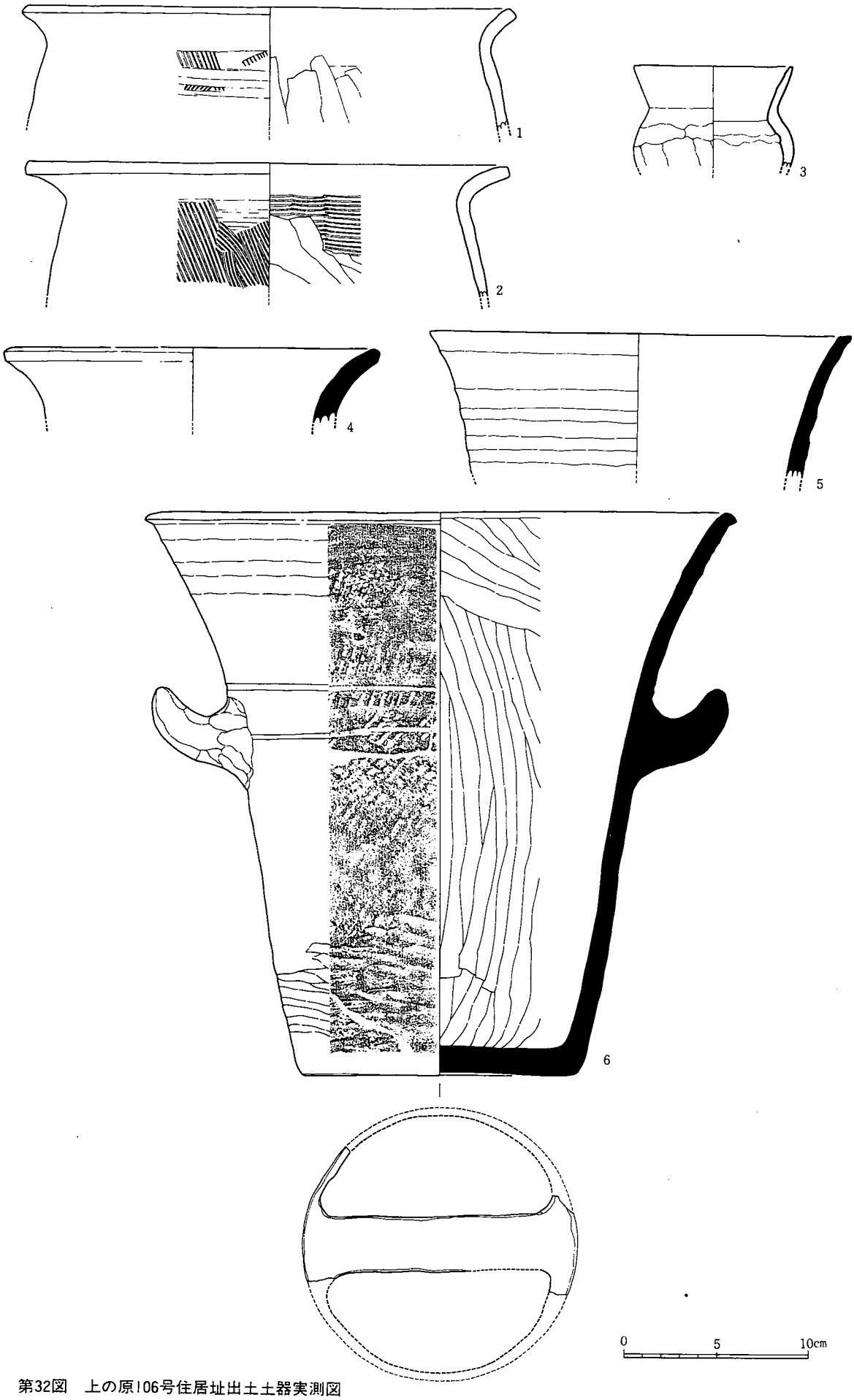
第31図　上の原106号住居址実測図

⑨　上の原106号住居址（第31図）

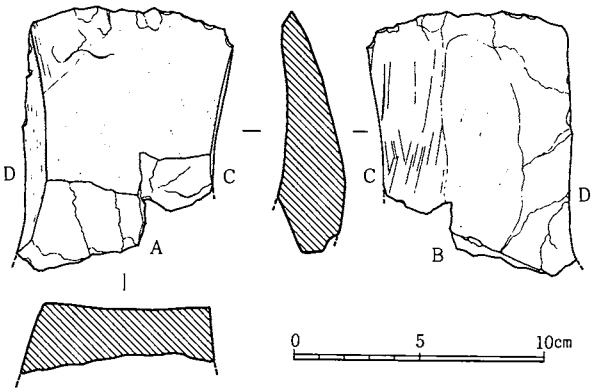
10号住居址の東側に位置し、北壁の中央部よりやや東寄りに竈を設置した住居址である。住居址の規模は中軸線上で、南北6.17m・東西5.76m、四辺の長さは北壁5.58m・南壁5.80m・東壁6.09m・西壁6.09mで、やや南北に長い方形プランである。地山面から床面の深さは最大、西壁側で0.45mを測ったが、東壁側は傾斜し、壁面をわずかに残しているにすぎない。床面は部分的に凹凸がみられるもののほぼ水平面を保っている。床面は全体が硬く踏みしめられていて、柱穴は認められなかった。なお竈を通る中軸線の方位は、N－20°30′－Wであった。

竈は煙道部と両壁先端が失なわれている。竈の奥壁は住居址内にとどまり、裾部内側から竈前面にかけて浅い土壙状の落ち込みとなり、内部に焼土粒・炭化物を含む土層の堆積が認められた。

出土遺物は少なく、計16点で6個体分と、砂岩砥石1点である。これらはすべて床面に密着した状態で出土したものである。



第32図　上の原106号住居址出土土器実測図



第33図　上の原106号住居址出土砥石実測図

〔出土遺物〕（第32・33図）

1・2は土師器甕である。1の口径は27.00cm、2は26.4cmでほぼ同様な法量の土器である。1・2とも「く」の字状に小さく外反し、端部は角ばり、シャープに仕上げている。外面は粗い刷毛目、内面はヘラ削りされ、全体に薄いつくりである。やや白味をおびた黄褐色で、焼成は極めて良好である。3は土師器小型丸底土器で底部を欠失する。口径および胴部最大径は8.70cmである。胴部外面はヘラ削り、内面はナデ調整している。

4は須恵器甕口縁部破片で、復原口径20.30cmである。口縁部はラッパ状に大きく開き、端部は面取りされている。5は須恵器鉢ないし、甑であろう。復原口径22.90cmを測るやや小型品である。内外面とも回転を利用した横ナデ調整で仕上げている。6は須恵器甑で、底部の一部を欠失するが、ほぼ完形に復原できた。口径32.20cm・底径15.00cm・器高30.40cmを測る。底部は平坦で体部下半部はやや膨み気味に立ち上り、上半部から口縁部にかけてラッパ状に開く。体部中位より上部に2.70cmの間隔で上下2本の沈線をめぐらし、この2本の沈線を目安として、一対の把手を成形後貼り付けている。器体外面は左下りの平行タタキ目（木目に直行して刻んだもの）によって成形し、さらに回転を利用した横ナデ調整を施こし、体部の下半では回転を利用したヘラ削りで仕上げている。内面は底部から体部下半で右上りのヘラ削り、体部は縦方向、口縁部は横方向に近い左上りのいずれもていねいなヘラ削りを施している。底部は中央部に巾3cmのブリッヂを残し、半円形2孔を穿った形態である。色調は黄褐色で部分的に赤味を帯びた土師質である。形態および外面の成形にタタキ目を用いる点は須恵器に通有に認められるが、内外面のヘラ削りや焼成方法は、極めて土師器に近いものである。ここでは一応須恵器により近い形態・手法の土器という意味で須恵器として取り扱った。

また床面の両西部壁寄りに砥石（第33図）1点が出土した。石材は黄褐色の縞模様をもつ砂岩である。表裏（A・B面）と左右（C・D面）の側面に使用面を残している。このうちA・B・C面は使い込まれて使用面が内弯し、B面は剝落後のわずかな使用痕を残している。

3．掘立柱建物址

昭和53・54年度において検出した掘立柱建物は１棟で、調査地区の北端に位置し、９号・64号・103号・105号・109号の５軒の竪穴住居址と重復している。建物は桁行２間、梁行２間の総柱建物である。

桁行長は3.87ｍ・梁行長4.28ｍで、各柱穴間の距離はP_1から順に、1.95・2.00・2.25・2.10・1.90・1.90・2.25・2.00ｍを測った。これらを復原すると桁行1.95・1.92ｍ、梁行2.10・2.15ｍとなった。柱穴掘方の平面プランは略円形で、確認面での大きさは最も残存状態の良いP_8で0.65×0.65ｍ、P_9で0.65×0.60ｍであった。またP_4・P_5に接しあるいは隣接したP_{10}・P_{11}を検出したが、周辺部においてこれに対応する柱穴は認められなかった。

柱穴掘方そのものには、遺物は出土しなかったが、P_9とP_{10}との中間地点の暗褐色の包含層中から円面硯（第35図１）、P_6とP_{11}との間の同じく包含層中から凸帯付長頸壺（第35図２）が出土した。これらは掘立柱建物址との関連が強いものではないかと考えられる。また、９号住居址覆土上層出土の土器群（第35図４～10）については、住居址そのものの年代が５世紀代に遡るものであり、掘立柱建物の西側桁行（P_1～P_3）との重復を考慮すれば、やはりこの一群の土器も掘立柱建物との関係が予測される。なお、底部外面に「長」と墨書された土師器坏は、８号住居址南約２ｍの地点の包含層中から出土したものである。

〔出土遺物〕

◎掘立柱建物址周辺の出土遺物（第35図１・２）

１は須恵器台付円面硯で硯部の小破片から復原したものである。これによると硯部の径22.00cm・器高約9.00cm前後で、台部に方形の透し孔を５個有する形態となる。硯部は陸の部分を欠失するが、おそらく海との境界が不明瞭なものであろう。また残存する台部には透し孔以外の文様は持たない。

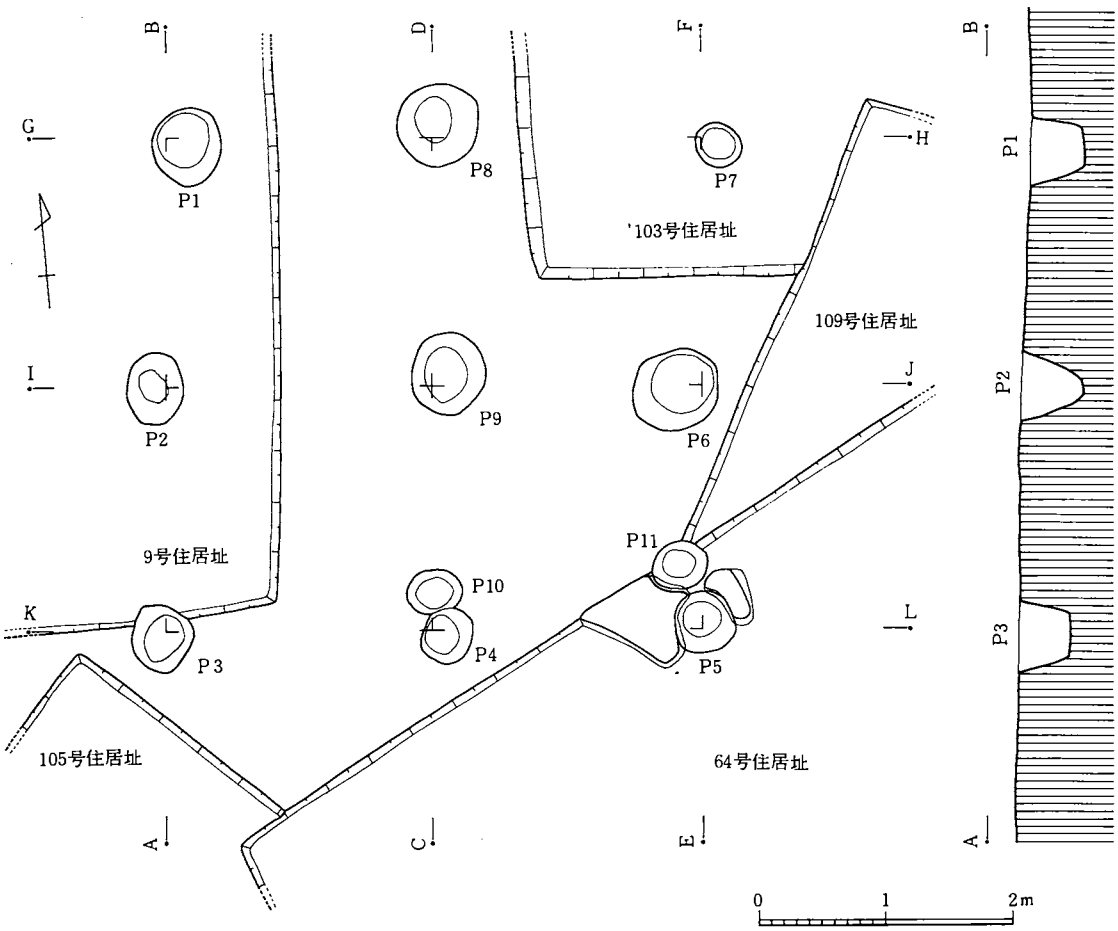
２は須恵器凸帯付長頸壺である。口頸部および底部を欠失する。肩部に二条の貼付凸帯をめぐらせている。上部の凸帯は断面逆台形を呈し、下部の凸帯は断面三角形で、肩部と胴部の間の屈折部に貼り付けられている。

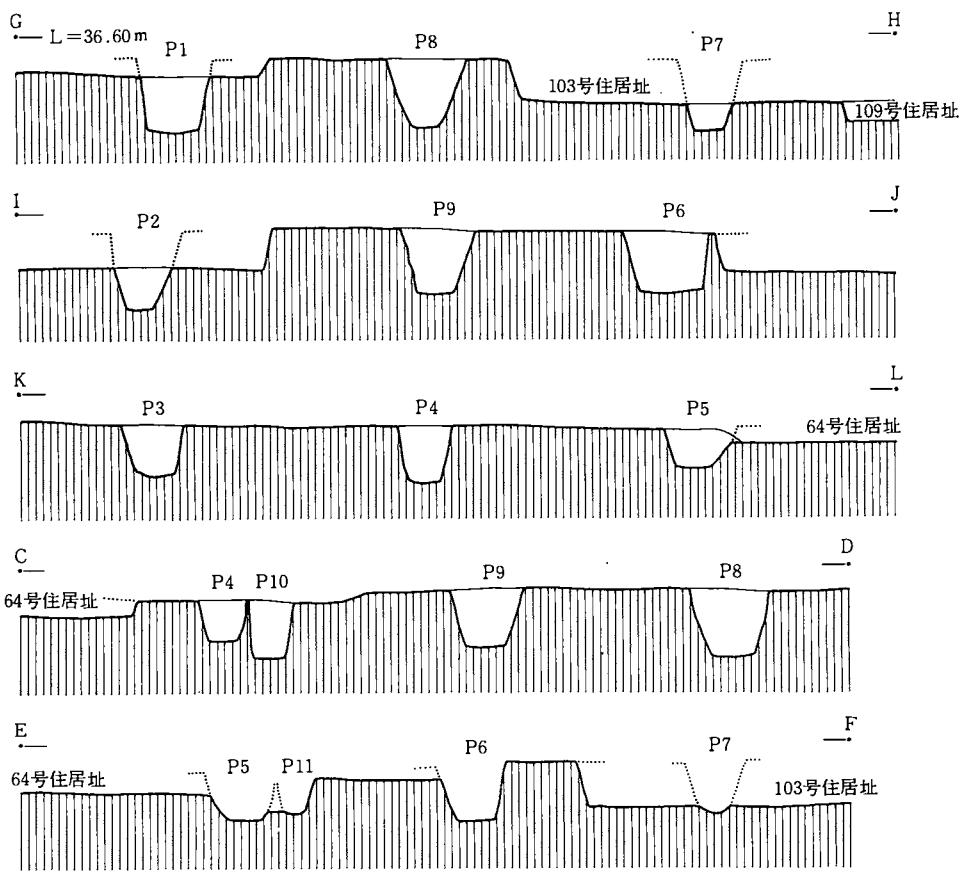
◎８号住居址南側採集の墨書土器（第35図３）

全面に赤色顔料を塗布した土師器坏で、口径12.30cm・器高3.50cmを測る。器体外面は底部から体部の下から３分の１程まで回転ヘラ削りを施こし、その他は内外面横ナデ調整で仕上げている。胎土は緻密で、全体に薄いつくりである。外底面の中央部に黒書が認められる。かなり薄れて不鮮明な部位もあるが、「長」と判読できる。

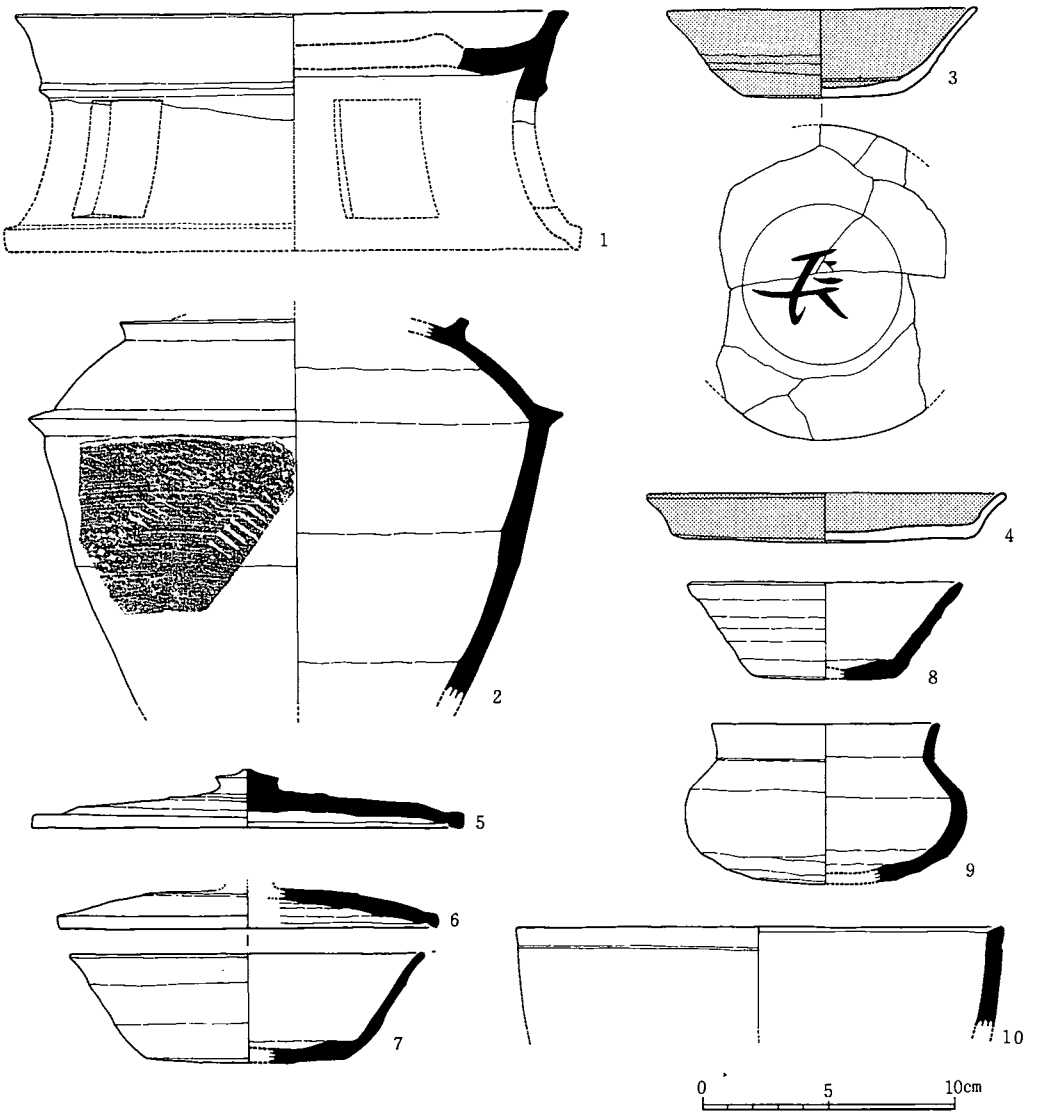
◎９号住居址上層の土器群（第35図４～10）

４は土師器小皿である。口径14.20cm・器高2.00cmを測る。底部は平らで、体部は外弯して立ち上る。全体に薄くつくられている。内外面に赤色顔料が塗布されている。5は須恵器椀蓋である。口径17.10cm・器高2.25cmを測る。ツマミは径2.50cmで、中央部が宝珠状に突出している。口縁端部は角ばって内面に明瞭な段をもっている。６は須恵器坏蓋である。口径15.00cm・器高1.50cmを測る。ツマミは欠失している。天井部は平らで、口縁端部は下外方へ丸味をもって小さく突出する。７は坏身で６の坏蓋とセットをなすものと考えられる。口径14.00cm・器高4.20cmで、口径に比べてやや器高の高い坏である。底部は膨み気味の平底で、体部は直線的に外反し、口縁部でわずかに開いている。底部外面から体部下半までは回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ、底部内面はナデ調整で仕上げている。８は須恵器坏身で、口径10.90cm・器高3.80cmの小型品である。底部はやや膨みをもち、体部は直線的に外反して立ち上る。底部外面は回転ヘラ削り、体部内外面は横ナデ、





第34図　上の原Ⅰ号掘立柱建物址実測図



第35図　上の原遺跡出土の歴史時代土器実測図
（1・2：掘立柱建物址、3：8号住居址南側出土、4～10：9号住居址上層）

底部内面はナデ調整で仕上げている。9は小型の短頸壺で口径9.00cm・胴部最大径11.10cm・器高6.20cmを測る。胴部は扁球形を呈し、口縁部は外弯気味に立ち上る。頸部の外面に明瞭な段を有する。底部外面は回転によるヘラ削り、他は内外面横ナデ調整を施している。10は須恵器鉢の口縁部破片で復原口径19.40cmを測る。口縁部はわずかに外反気味に直立し、端部は内傾して、内面に稜を有する。また口縁部外面は強く横ナデを施された際の小さな段が一条めぐっている。

4. 考　察

今回報告する遺構は、壁面に造り付けの竈を有する竪穴住居址と掘立柱建物址である。このうち竪穴住居址は計16軒を数え、調査地区の２ヶ所に一定のまとまりをもって分布し、これらを仮にⅠ群、Ⅱ群と呼んだ。Ⅰ群は６軒、Ⅱ群は10軒からなっている。いまこれらの住居址について規模・形態・構造・時期・出土遺物等できるかぎり普遍的な事実を抽出し、一定の方向性を見い出し、住居の単位（集落）および変遷過程の一端にふれてみたい。

(1) 住居の群構成

16軒の住居址は、面的分布から調査区内の二個所に一定のまとまりをもっている。そして、南側のものをⅠ群、北側のものをⅡ群と仮称した。Ⅰ群は50・52・53・54・55・56号の６軒の住居址から構成され、調査区内では、南端の最も高い丘陵の尾根部分にあり、南北約29.00ｍ・東西21ｍの長方形に納まる範囲に分布している。また、群の垂直分布の範囲は、海抜38.00～38.50ｍである。住居址相互の重複・切合い関係は認められないが、54号及び55号住居址は約１ｍの間隔をおいて並んでいる。したがって住居の上部構造次第では、上屋の裾部が重なり合うことになり、同時併存は困難となる。

Ⅱ群は調査区の北端にあり、Ⅰ群との距離は分布の中心間で約125ｍであった。Ⅱ群は８・10・12・47・64・89・91・93・100・106号の10軒で、南北57.00ｍ×東西50.00ｍの長方形に納まる範囲に分布している。Ⅰ群の占布範囲と比較すると面積的に４倍である。群の垂直分布は、海抜36.50ｍ～37.50ｍである。この中で、８号及び100号住居址は、住居址のプラン確認面での重複は認められないが、上部からの削平と、上屋の構造を考え合わせれば、同時併存は不可能である。その他の重複は認められない。

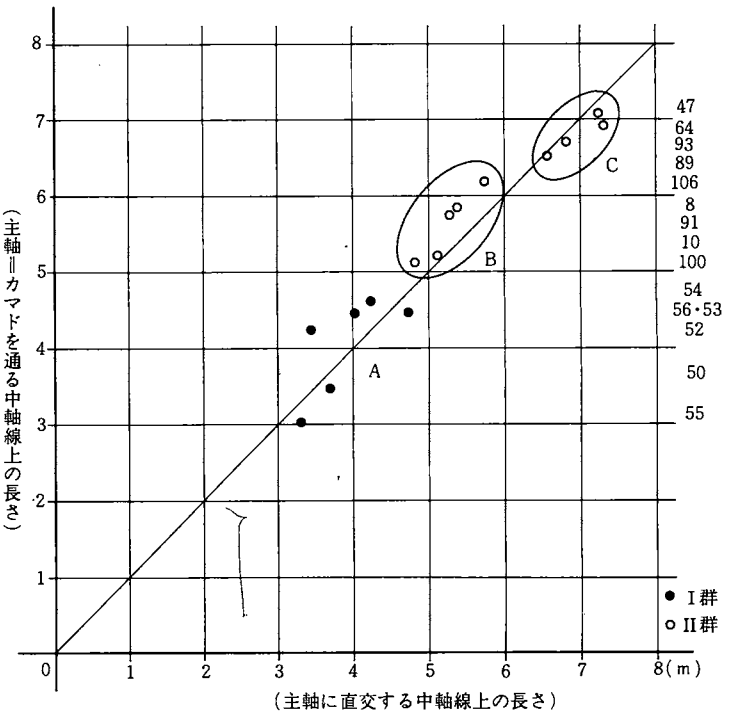
また昭和55年度調査地区の南端、すなわちⅡ群の北側にも、15軒の竈を設置した住居址群が検出されていて、これら15軒とⅡ群の10軒を合わせて25軒の住居址群がどのような関係にあったかが問題である。

第１表　住居址一覧表

群	住居番号	規　模	床面積	カマドの設置方向	カマドの位置	柱　穴	主軸方向(位)	重復関係
Ⅰ群	50号	3.47×3.69ｍ	12.80㎡	北	中央	無	N－14°30′－W	無
	52号	4.25×3.44ｍ	14.62㎡	北	右(東)寄り	無	N－ 18° －W	無
	53号	4.45×4.62ｍ	20.56㎡	西	右(北)寄り	無	N－ 95° －W	無
	54号	4.60×4.25ｍ	19.55㎡	北	左(西)寄り	有	N－ 8°30′－W	無
	55号	3.02×3.33ｍ	10.06㎡	北	右(東)寄り	無	N－ 11° －W	無
	56号	4.45×4.02ｍ	17.89㎡	北	中央	無	N－ 18° －W	＞57号
Ⅱ群	8号	5.85×5.38ｍ	31.47㎡	西	中央	有	N－ 94° －W	＞100号　＞108号
	10号	？×？ｍ	不明	(北)東？	不明	不明	N－41°30′－E	11号
	12号	5.20×5.12ｍ	27.98㎡	(北)東？	中央	無	N－ 35° －E	無
	47号	7.03×7.22ｍ	50.76㎡	北	右(東)寄り	有	N－35°40′－W	無
	64号	6.90×7.06ｍ	48.72㎡	北	右(東)寄り	有(４本柱)	N－ 25° －W	＜掘立柱建物 ＞35号・109号
	89号	6.52×6.53ｍ	42.57㎡	北	右(東)寄り	有(４本柱)	N－13°20′－W	＞88号・＞90号
	91号	5.78×5.28ｍ	30.52㎡	西	右(北)寄り	無	N－85°20′－W	111号
	93号	6.70×6.72ｍ	45.02㎡	北	右(東)寄り	有	N－ 33° －W	＞65号・＞94号
	100号	5.08×4.80ｍ	24.69㎡	北	中央	無	N－ 2°30′－W	＞８号
	106号	6.17×5.76ｍ	35.54㎡	北	右(東)寄り	無	N－20°30′－W	無

(2) 住居の規模と床面積

住居址の規模については、竈を通る中軸線上での長さとこれに直交する中軸線上の長さを計測した。これらをまとめたものが第36図である。これらを概観すると、15軒の住居址は3×3mから8×8mの範囲内に納まり、概ね5×5m以下で床面積25m²以下の住居（Aタイプ）と、5×5mから6×6m以内で床面積25m²～40m²以下の住居（Bタイプ）、さらに6×6m以上で床面積40m²以上の最も大型の住居（Cタイプ）の三段階に分けることができる。類例が増加すればこのように明確に分離することは困難であるが、あくまで一定の傾向を把握する上で類別しておく。



第36図　住居規模の比較

以上のような分類によって観察すると、最も小型のAタイプの住居址はI群に限られ、II群には認められない。したがってI群の住居はII群のどの住居に比較しても小型の住居址によって構成され、II群の中にはBタイプの中型住居と、Cタイプの大型住居址が混在しているのである。

(3) 竈について

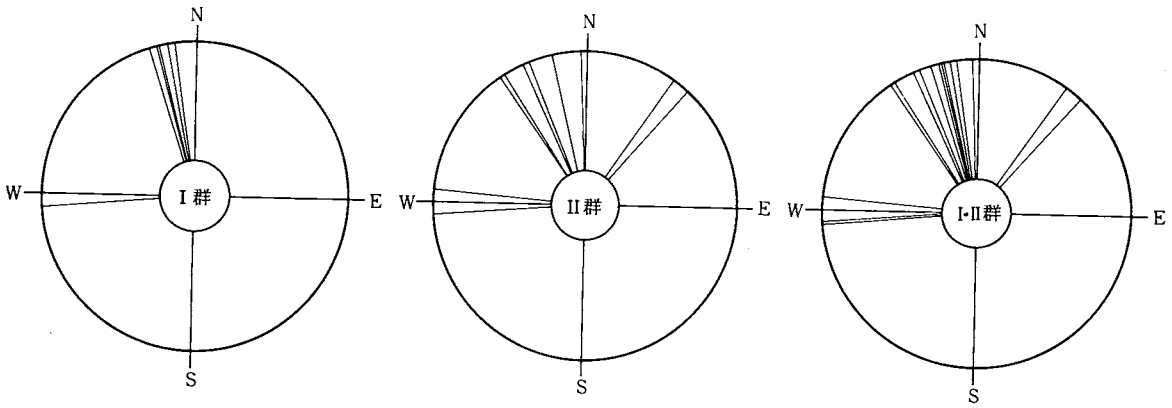
竈の設置方向＝主軸方位

竈は壁面に1ヵ所設置され、複数の竈を有する例は無い。竈は北壁に設置される場合が多いが、中には東西の壁の場合もある。しかし、南壁の例は皆無であった。いま竈を通りかつ住居址の中軸線上の方向を計測し、円グラフに整理したものが、第37図である。

I群では53号住居址のみ西壁面に設置されるが、他の5軒は北壁に設置され、主軸方位はすべて磁北からわずかに西に振れる程度で、その差は10°以内に納まるものである。II群では、北壁に設置された住居址は6軒ですべて磁北から西に振れその差は28°で、I群に比べてさらにばらつきが目立つ。また西壁3軒に加えて、主軸方向が北から大きく東に振れ北東壁に竈を設置した例が2軒（10・12号住居址）認められた。こうした例はI群の中には見い出せなかったものである。いずれにしても、西壁・東北壁に設置した計5例を除き、北壁に設置する8例すべての住居址の主軸方位が磁北から西に振れていて、東に振れる例は認められなかった。

竈の設置位置

前項で述べたように、竈は北壁・西壁・東北壁にそれぞれ設置されているが、この中で7割弱の住居址が北壁で、残る2割強が西壁・東北壁であった。ところが竈は壁面の中央部に設置される場合と、中央部から左右のいずれかの壁側に片寄った位置にされる場合とが認められた。



第37図　竪穴住居址の主軸方位

まずⅠ群6軒の中で、50号・56号住居址が壁面中央に設置されているが、52号・53号・55号住居址は中央より右側に片寄った位置に設置され、これに対して54号住居址は左寄りであった。すなわち、中央および右寄り（東寄り）のものは4例中3例が竈を北壁面に設置したものであった。

II群ではプラン確認が出来なかった10号住居址を除く9軒のうち、8号・12号・100号住居址の3軒が壁面中央部で、この中で、8号住居址は西壁に、12号・100号は東北壁に竈を設置し、北壁のものは認められなかった。残る6軒すべてが右寄りで、6軒のうち西壁に壁置された91号住居址の他はすべて北壁に設置された例である。

このように竈の設置位置には、「中央」・「右寄り」・「左寄り」の3つのタイプが認められた。北壁に設置した11例中、「中央」は3軒、「右寄り」7軒、「左寄り」1軒であった。また「右寄り」で西壁に設置したもの2軒を加えると、9軒が「右寄り」であり、3タイプの中で主体を占めていた。

また竈の設置位置と住居址の規模を比較すると、まずAタイプでは、「中央」・「右寄り」・「左寄り」の3タイプすべてが認められる。中でも「右寄り」のものが主体を占める。Bタイプでは、「中央」・「右寄り」の2つのタイプがあり、Cタイプでは「右寄り」に限られる。このように、床面積の拡大縮少と、竈の設置位置との間に、一定の関連が指摘できるが、はたして偶然性によるものか、あるいは床面積の拡大に伴う住居構築の画一化によるものであろうか。もとより竈の設置方向・位置は、地形及び風向きなど、遺跡の置かれた自然環境に大きく左右されているはずである。その面でこうした分析結果は当時の自然環境が強く反映しているものと思われる。

(4)　住居の深さ

各住居址の掘り込みの深さは、それぞれ異なるが、全体に浅いものが多い。それは永年の耕作による上部からの削平の程度や、遺構そのもののプランを確認する際に地山面まで削り取らざるを得なかったという事情に大きく起因するものである。しかしこれらの住居址と明らかに時期の異なる住居址との床面のレベルを重複例で比較すると、たとえば89号住居址と90号住居址（5世紀代）では10～15cm、56号住居址と57号住居址（弥生前期）では20～25cmの差が認められた。他の重複例をみても同様である。すなわち、より時期が古い竪穴住居址ほど深く掘り込まれ、逆に時間の経過とともに序々に浅くなっていったことを裏付けている。

またⅠ群とII群とを比較すると、Ⅰ群に浅いものが多いが、必ずしもⅠ群の住居址が構造面での特色を示すものではない。現状では単に残存状態の違いによるものと考えざるを得ない。

(5) 柱　穴

16軒の中で、床面に柱穴を持たないものは９軒で、柱穴及び柱穴状の落ち込みを有するものは７軒であった。７軒のうち整然とした４本の主柱穴をもつものは64号・89号住居址の２軒で、片側に２本の主柱穴をもつものは1軒にすぎない。他の４軒については主柱穴と支柱穴との区別が困難であるか、不自然な配列をもつものである。特にＡ・Ｂタイプの小・中型住居に柱穴を持たないものや不自然な配列をもつものが多く、Ｃタイプの住居には４本の主柱穴を持つものが認められる。これは小・中型住居址が、竪穴の外側に主・支柱穴を設けた構造を採用した結果によるとも考えられる。このことは前項の住居の深さと残存状態でも明らかにしたように、実証するには至らなかった。少なくとも、床面積の最も小さい住居では床面に柱穴がないものが大半を占め、一方大型の住居では床面に整然として４本の主柱穴を設けるといった例が見い出せるのである。住居規模の大小によって、上部構造に差異があったことが想像される。

(6) 周溝・炉・貯蔵穴等

周溝が検出されたのは８号住居址１軒である。しかも北壁のみで途切れている。他の住居址には周溝は認められなかった。しかし床面は多くの場合、中央部分が硬く踏み固められているにもかかわらず高くなっていて、逆に四壁に沿う周辺部は軟かくわずかに低くなっている。周溝の機能について、古くは排水施設と考えた時期もあったが、その後周溝内に立て並べられた土留材の発見が相次ぎ、現在では土留の壁材を設置する溝との考え方が定着している。本来竪穴住居に土留の壁材を用いることは欠くべからざる条件の一つであると考えられる。したがって周溝を持たない本遺跡の場合、四壁に沿った床面が、中央部に比較して低くなる傾向を示すのは、明瞭な溝を掘削せずとも壁材を使用していたことを裏付けるものではなかろうか。また、他の遺跡の例で周溝内に小穴が発見される場合があり、これらは壁材を支えた杭の痕跡ではないかと考えられている。とすれば、単に壁材を立てならべ、若干の覆土によって、充分な耐久性があるものか否か。さらに他に支える技術があったか否かなど検討を要する課題である。

炉はどの住居にも認められなかった。規模の大小にかかわらず、「１軒に１つの竈」の形態が定着している。本遺跡における５世紀代の住居址の大部分が、床面の中央部からやや片寄った位置に１つの炉を持っていたのに比べると、この間食生活上に大きな変革があったことを物語っている。

貯蔵穴については明確な例は認められなかった。ただ47号住居址のものについては、柱穴との識別が困難であり、ただ他の柱穴に比べて大きく浅いために、その可能性を指摘したにすぎない。したがって本遺跡の場合、基本的には貯蔵穴を床面に設けることは無かったと考えられる。

またＩ群56号住居址の竈の右（東）側に、粘土壁で囲まれた長方形プランの空間の機能が問題となろう。すべて未焼粘土であるので、この空間で火を使用していたとは考えがたい。さらに竈に付設されているが、底は床面と同じレベルであるので食糧の貯蔵空間としては、条件を満たすものであるか否かは疑問である。類例を待って結論を出すべきであろうが、竈に隣接した施設である以上、竈に使用する道具類や燃料の保管場所などが考えられる。いずれにせよ竈と有機的に結びついた施設であったことは確かである。

(7) 出土遺物と住居の時期

出土遺物は概して少ないが、Ｉ群55号住居址を除く15軒の住居址すべてに土器の出土をみた。土器以外では106号住居址に砥石１点が出土したにすぎない。

出土遺物については、土器・石器とも完形品は無くいずれも欠ける部分があり、容器あるいは利器として用をなさないものである。しかもその大部分のものが細片である。各住居が所有した器種とその個数は旧状を示すものではなく、偶然性によるところが大きい。住居址廃棄の際に使用可能な容器・利器類は持ち出されるであろうし、発掘時の住居内の姿はまさしく住居廃棄直後とその後の埋没過程における遺物の混入した結果である。そして、出土遺物の中でも床面に密着して出土したものほど、その住居の使用時期に近いものであるはずである。ところが人が一定の期間定着して生活する以上、その時点で最もポピュラーなもの、さらにより古い型式のもの、より新しい型式のものを、常に携えていたと考えられる。さらにそれらの中から住居の廃棄時には破砕したもののみを放棄し、使用可能なものは持ち出るであろうから、調査者が手にした遺物は、わずかな手がかりを残しているにすぎない。したがって出土遺物から住居そのものの年代を導き出すことは極めて困難で、ましてごく短期間に使用を終えた集落では、住居間の同時性、非同時性を決定することはさらに困難な作業である。同じように本遺跡の場合も、出土した容器・利器が使用に耐えなくなった物のみで構成されているために、出土遺物からみた住居の時期についての印象は、一つの目安であり、傾向にすぎないと考えられる。

このような状況を前提として、以下各住居址の時期を推定しておきたい。

Ⅰ群

50号住居址は、土師器甕・須恵器高台付坏の２点にすぎない。特に、須恵器高台付坏にみられる高台は、底部周縁部に貼り付けられ、下外方へ開いている。こうした形態は、７世紀前半～中頃の所産と考えられる。52号は、１点にすぎない。土師器壺は５世紀後半頃に初現を見るが、成形・調整は粗さが目立つ。おそらく６世紀後半～末頃に降るものであろう。53号住居址は、器種、量とも比較的豊富である。土師器・須恵器ともほぼ単一時期の様相を示している。特に須恵器坏蓋は口径11～12cm前後で、天井部は平らで口径に比べて器高が高いなどの特徴から、６世紀後半～末頃と考えられる。また土師器甑は成形・調整手法は土師器に見られる伝統的なものであるが、頸部がくびれない鉢状の形態は須恵器甑の影響を強く受けた結果であろう。他の土器も同様の年代が考えられる。54号住居址の須恵器坏蓋（第11図１）および坏身（第11図２）は、６世紀末の特徴を示している。また土師器甑（第11図５）は、形態・手法とも土師器の甑特有のもので、53号住居址の土師器甑とは系譜が異なるものである。両住居址の土器群の間に型式上の差は無いので、この時期には系譜の異なる二種類の甑が使用されていたことがわかる。２点出土した須恵器鉢のうち、甕を焼成後に再加工したもの（第11図４）は他に例を見ないものである。55号住居址には出土遺物は皆無であった。56号住居址は須恵器細片２点にすぎない。高台付坏（第11図６）は高台部の破片であるが、径に対し高台が高く下外方に開く形態は、７世紀前半～中頃にかけての特徴を備えている。

以上のようにⅠ群住居址の出土土器の年代は、６世紀後半から７世紀中頃までの巾をもっている。しかし最も土器の残存状況が良かった53号あるいは54号住居址ではほぼ単一時期の様相を示していて、逆に残存状態が悪い住居址ほど、型式的なバラツキが目立っている。おそらく、冒頭で述べたように、住居の廃絶とその後の埋没過程を考えれば、このような傾向は当然の帰結であろうと考えられる。したがって、Ⅰ群の住居址群の使用時期は、６世紀後半から７世紀前半の範囲内から出ることはなく、その中心は６世紀末頃であったと考えられる。Ⅰ群の６軒は、54号と55号住居址が近接しているものの、重複はみられず、一定のまとまりをもった配列を示すことを考え合わせることから、ほぼ同時期に営まれ、しかも、ごく短期間に使用を終え、廃絶された集落であったと推定されるのである。

Ⅱ群

８号住居址は出土量は少ないが、須恵器の中で口縁部内面に小さなかえりを有する坏蓋や高坏柱状部の形態は、７世紀初頭の特徴であろう。土師器甕については６世紀後半から７世紀にかけては大きな変化が認め

られないので、これのみでの年代推定は困難である。10号住居址のうち、須恵器坏蓋は８号住居址の坏蓋に比較して型式的に先行するもの（第17図３）と後出するもの（第17図４）とがある。土師器鍋（第17図２）は、６世紀以前には見られなかった器種である。したがって、これらの土器の特徴から、７世紀初頭～中頃の年代が考えられる。12号住居址も出土数は少ないが須恵器蓋（第19図１）は口縁端部内面に小さなかえりがあり、７世紀中頃の年代が与えられる。土師器甕は２点出土しているが、形態・手法とも大きな変化は認められない。47号住居址は、II群の中で器種構成・量とも豊富である。特に須恵器坏蓋には二者があって、一つはツマミを持たない口径10～11cm前後の小型のもの(第21図８～10)と口径14～15cm・器高1.5cm～２cmの扁平な蓋（第21図11～13）である。後者はツマミを有する場合もあり、これとセットをなすものは、おそらく高台付坏（第21図15）などであろう。また後者は前者より後出する型式であるが、大きく隔るものではない。須恵器高台付坏は２点あるが、型式学的には新旧のものが混在し、高台が高く底部の内側に貼り付けたもの（第21図の15）と底部の境に貼り付けられたもの（第21図の16）とが認められる。他に須恵器高坏・小皿・甕・鉢・壺が出土している。以上の土器群は概ね７世紀前半～中頃の年代が与えられ、一部さらに下降する土器も含まれる。64号住居址は２点でいずれも土師器である。このうち鍋（第23図２）は10号住居址出土の鍋と類似している。89号住居址は、土師器高台付坏（第25図２）の高台部の特徴や、須恵器坏および坏蓋などから、７世紀中頃～後半にかけての年代が考えられ、II群の中では最も後出する形式を含んでいる。91号住居址は土師器・須恵器各１点にすぎないが、特に土師器高坏（第27図１）などがどの段階まで残るかが問題であろう。93号住居址は各種の須恵器の他に手ずくね状の土師器坏（第27図７）と高台付坏（第27図８）が注目される。須恵器坏蓋（第27図３）や高台（第27図５）は、７世紀の中頃の特徴をもっている。また須恵器の大型台付皿（第27図６）は７世紀中頃に出現し８世紀後半までつくられる器形であるが、この土器はその中でも初期の段階のものであろう。100号住居は出土数が少ないものの、須恵器坏蓋（第30図４）は、口径12.5cmを測り、口径に比べて器高が高い、おそらく６世紀終末頃の年代が考えられる。また須恵器甑の底部破片（第30図５）も出土している。106号住居址は口縁部と底部の一部を欠くもののほぼ完形に復原できた数少ない土器である。器面は赤味をおびた土師質であるが、タタキによる成形や全体的なプロポーションは、須恵器にあらわれる特徴である。この種の甑は福岡県二丈町の塚田１・２号墳周溝出土のものや同県二丈町赤岸遺跡（１号住）出土のもの[註1]に類似している。橋口達也氏による分類[註2]では「似非土師須恵器」に相当するものである。塚田例は、６世紀中～後半の所産とされているが、形態的には赤岸例のものに近い。赤岸例は、6世紀前後と考えられている。106号住出土のいわゆる赤焼き須恵器もこれらの年代に近いものであろう。

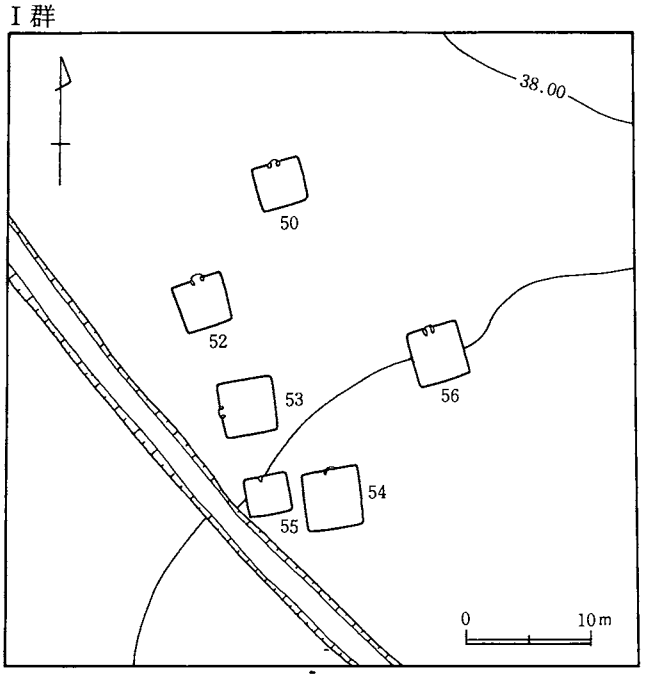
また、土師器小型丸底土器は口径と胴部径がほぼ等しい形態で、従来の編年からみると５世紀中頃のものである。細片であり混入した可能性が強い。他の土師器・甕・須恵器甕・鉢も甑と同じ年代であろう。

(8) 集落の構成と変遷

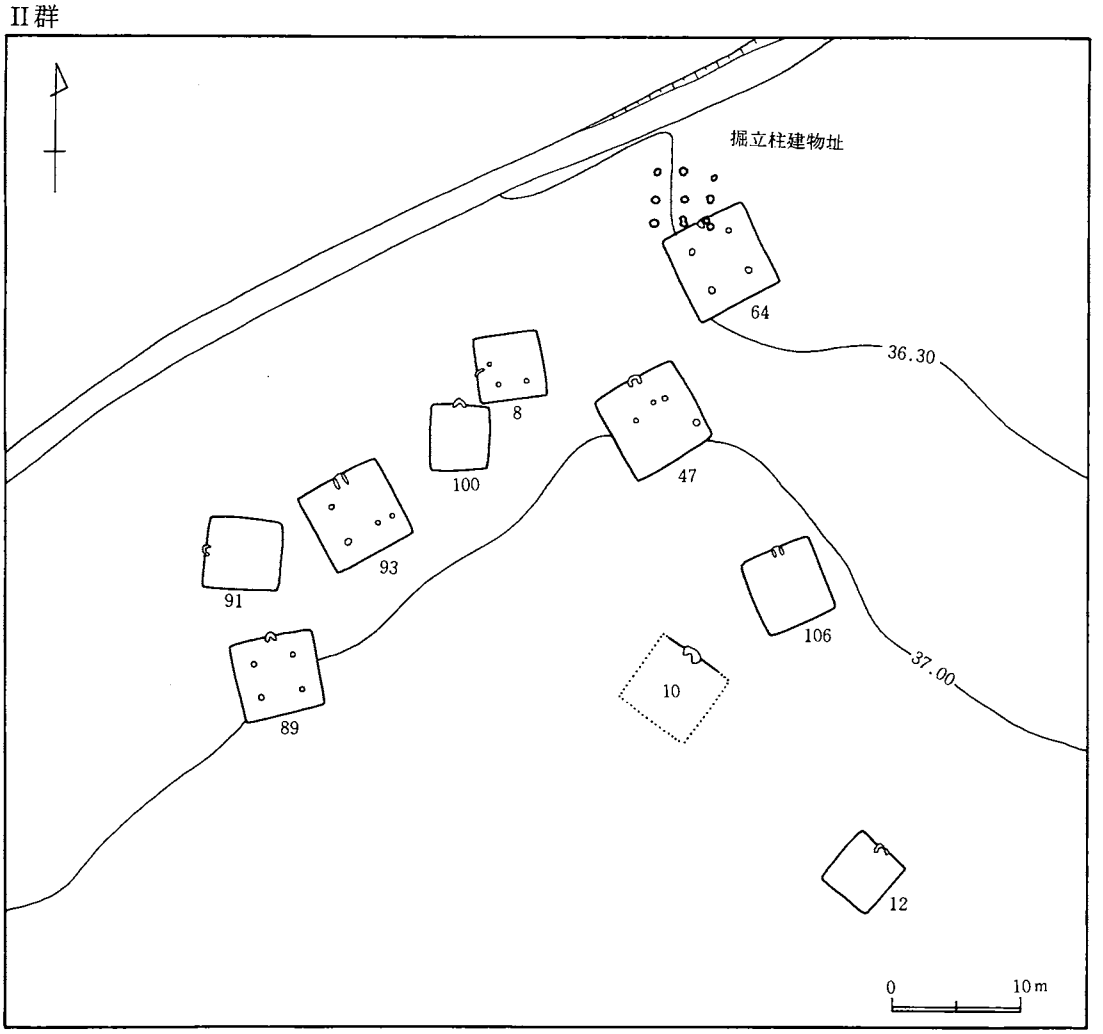
前節では各住居址の規模・構造・年代について述べた。特に住居構造については、住居そのものの残存状態が悪く特筆すべき点を見い出せなかったが、規模・年代等については漠然とはしているが一定の傾向が明らかになった。

Ｉ群は、６軒の竪穴住居址からなり、一部に「Ｌ」字状の配列をもち、まとまりが認められる。特に群の中で西側に南北に並ぶ52・53・55号の３軒のうち、52・55号の両端の住居址は竈を北に設けているのに対し、これに挟まれた53号住居址のみ竈を西側に設置されている。火災等をさけるための集落としての対策であったと考えられる。仮にＩ群６軒の同時併存を前提にすれば、竈の設置位置、すなわち住居の主軸方位によって、集落の単位を決定しようとする従来の方法に、一つの疑問をなげかけざるを得ない。また54及び55号住

I 群



II 群



第38図　集落の単位と変遷

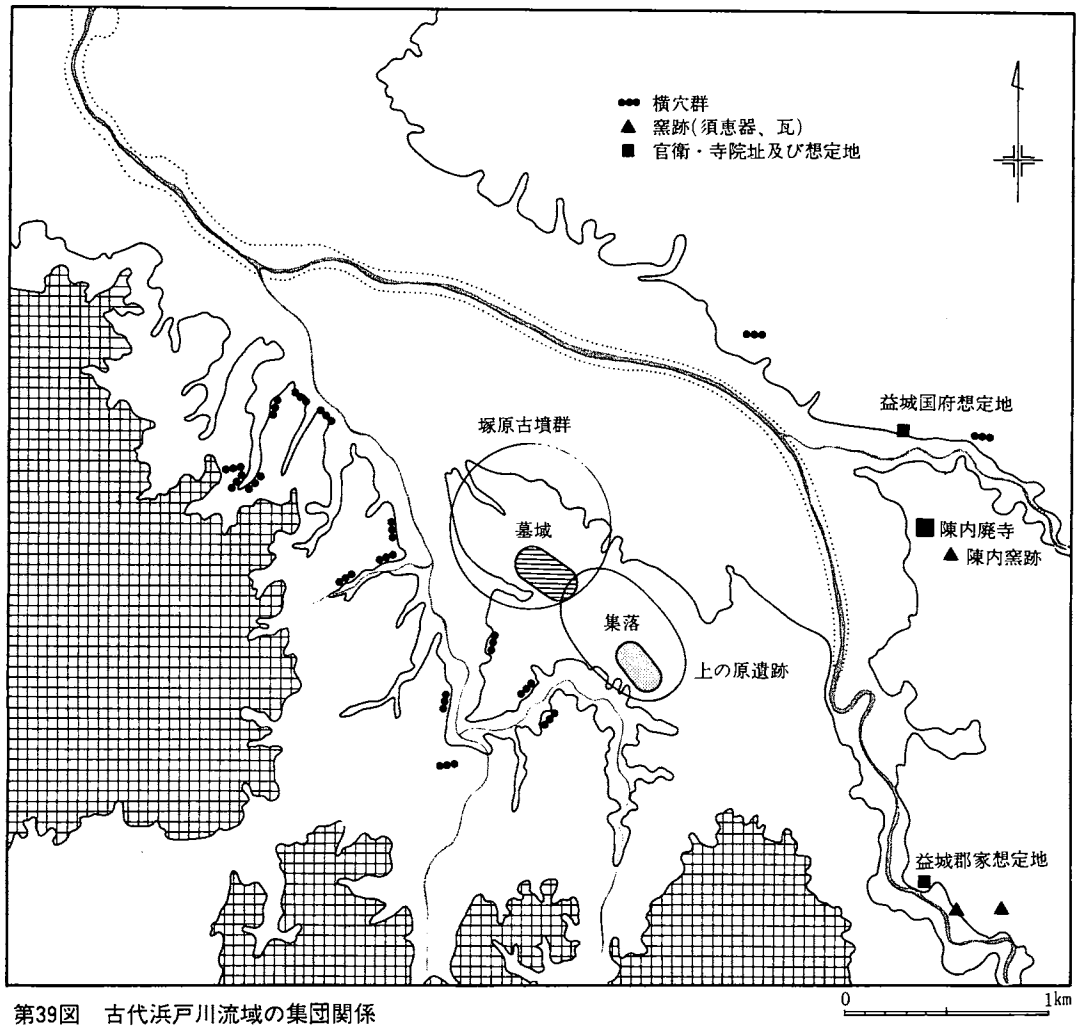
居址の同時併存については、先に疑問点を述べたが、54号住居址はⅠ群の中で不揃いの柱穴を有する住居であり、上部構造が竪穴の周辺にそれほど広い範囲に及ばなかったと考えれば同時併存は可能であるが、現状ではそのことを決定する根拠を見い出せない。また、Ⅰ群6軒に囲まれた中央の平坦部分は、南北20.6m・東西10.2m・面積210.12m²の「空白地」となっていて、集落内の共有地として住居の構築が規制されていたようである。出土遺物は型式的に幅をもったものが出土しているが、遺物の最も残存状態の良好な住居址では単一時期の様相が強く反映されていた。こうしたことからⅠ群の年代を6世紀末頃に位置づけた。そしてその使用期間も極めて単期間であったと推定される。このようにⅠ群6軒からなるひとまとまりの単位を客観的にみた場合6世紀終末段階における基礎的単位としての集落として位置づけることが可能ではなかろうか。

Ⅱ群はBタイプ（中型）とCタイプ（大型）からなるが、これらの間には出土遺物の上でも、若干の時期差が認められる。Bタイプ5軒は6世紀末のものも含むがその中心が7世紀初頭～前半にあり、Ⅰ群＝Aタイプとの間にわずかの型式差がある。またBタイプの中でも8号及び100号住居址については同時併存は不可能であるので、必ずしも5軒がひとまとまりの単位とは言えない。そこには改築が行なわれる程度の期間を加える必要がある。Cタイプの住居址及び10号住居址は、主として7世紀中頃から後半にかけての土器が出土し、一部7世紀中頃以前のものを含むが、その中心は7世紀中頃の年代が与えられる。このようにⅡ群は大きく区分して、7世紀初頭を中心としてBタイプ（中型）の住居址によって構成される単位と、7世紀中頃を中心としてCタイプ（大型）の住居址によって構成される単位の重複した結果と考えられた。図らずも住居址の規模による類別が、そのまま時間差を示すという結果となった。

またⅡ群は、北側（55年度調査区）へ広がっていて群全体の中では南側を構成するものであろう。ところがⅡ群の中には大別して2時期の住居址群があることはすでに述べた。これらの配置状態をみると第2期とした5軒すなわち12→106→8→10→91号の住居址は海抜37.00mの等高線上に沿ってほぼ弧状に並んでいる。これらの住居址の中で北側の東西に並ぶ91→100→8号の住居址に対して、南側に南北に並ぶ106→12号の住居址は、著しく住居全体の残りが悪く、106号の壁高は傾斜面の西側で0.10m、12号住居址では最大でも0.10m、最少では0.05mを残すにすぎず、10号住居址では竈部分をのぞいて四壁はほとんど失われている。したがってⅡ群2期では5軒の他にさらに南側に連続する数軒の住居が存在した可能性がある。それは本来想定地を通るはずの地山等高線（37.50m）が、南側に後退していることによってもある程度裏付けられる。機械力を多用する現在の調査がかかえる一つの弱点でもある。いずれにしても、Ⅱ群2期の住居址群は調査区内に納まる範囲内に分布している。これに対して3期の住居址群は10号を除く89→93→47→64号の4軒は南西から北東部へ並び、さらに北側へ続くものであろう。

以上のように上の原台地における6世紀以降の集落は、1期（Ⅰ群6軒）→2期（Ⅱ群5軒）→3期（Ⅱ群5軒）への変遷をたどる。1期6軒は、6世紀終末期を中心とした集落として成立したが、その存続期間は短く、2期へと移行する。1期の集落が小型の住居で編成され、その占有面積が小さかったのに対し、2期では、住居の大型化とともに、集落の占有面積は広くなる。3期になると住居址はさらに大型化し、頂点に達したかにみえる。2期と3期の集落は、一部重複するか、2期の分布の中心は南側のⅠ群寄りにあり、3期は北側にあるものと考えられる。したがって6世紀終末以降の集落は南から北へ、また丘陵の高地から低地へと移動したことがわかる。

一方上の原遺跡の北東部に隣接し一部重複する塚原古墳群は、上の原集落に直結した墓域である。ここでは4世紀～5世紀代の墳墓は台地の北東部に営まれ、時間の経過とともに墓域は南西部に移動する傾向にある。また同時代の集落は墓域の南端（＝集落の北端）から序々に南側へと移行している。そして6世紀の後半以後の墳墓は4～5世紀代の集落に重複して築造されている。このように墓域と集落とは一定の距離を保ちながらも、連動して移動をくり返してきた。ところが6世紀末を契起として集落の占地に大きな変化が現



第39図　古代浜戸川流域の集団関係

われる。すなわち、6世紀末の集落は5世紀代の集落が途切れた台地の南端に出現し、再び北東部へと移動を開始する。すでに墳丘を有する古墳の造営は終わり、墓制の主体は横穴へと移っていた時代である。

先に6世紀以降の集落を3時期に分けてその変遷の様子を推定した。各期の集落の単位は、1期＝5～6軒、2期＝5軒以上、3期＝4軒以上となり、1期を除いて全体の様子を把握できなかった後2時期の集落の単位は4ないし5軒以上ではあるが、最大でも10軒を超えることはなかったと考えられる。これに対して上の原集落における4～5世紀代の竪穴住居址の総数は442軒にのぼっている。これらが仮に、150年間に構築された数とした場合、1軒の住居の耐用年数を20年で換算すると62軒余りが、15年では44.2軒が一時期に営まれてきたことになる。このように5世紀以前と6世紀末以降とでは、集落を構成する住居の上で格段の差が認められるのである。しかも5世紀以前では数十軒の住居が集って一つの大集落を構成していたのではなく、いくつかの小単位に分かれ、小単位が集合した結果として一つの機能的な集落が構成されていたものと思われる。ところが6世紀代以降では、単一の集落が台地上を占有しつづけ、一定の変遷をたどって行くのである。この間に、集落における土地所有の在り方に大きな変化があったことを物語っているのである。

塚原・上の原台地の台地は、浜戸川及びその支流である滑川によって開析された舌状台地である。特に滑川の流域に形成されたいくつもの開析谷には、数多くの横穴群が存在する。正確な数は明らかではないが、現在のところ、15支群約500基近い横穴が知られている。年代は7～8世紀を中心とするものであり、これらの横穴群を造営した集団こそ、上の原集落の人々であったにちがいない。しかしながら、上の原集落の規模

と構成人数からすれば、滑川流域の横穴群はとてつもなく莫大な数である。横穴の一支群を一つの集落が造営したと仮定しても、集落の数は支群の数だけ存在しなければならない。すでに述べたように、上の原集落は単一の集落による占有の可能性が強く、いわば台地全体を領域とした集団の変遷過程でもあったのである。したがって15支群もの横穴群を営造した人々は、それぞれ一定の領域をもち自立した集落を形成していたと考えられる。滑川流域には滑川およびその小流によって開析されたいくつもの舌状台地が形成され、それぞれの谷間には横穴群が営まれている。まさにこうした台地ごとに集落が営まれたと考えられる。これこそ血縁的集落から、地縁的集落への過程を示すものと考えられる。

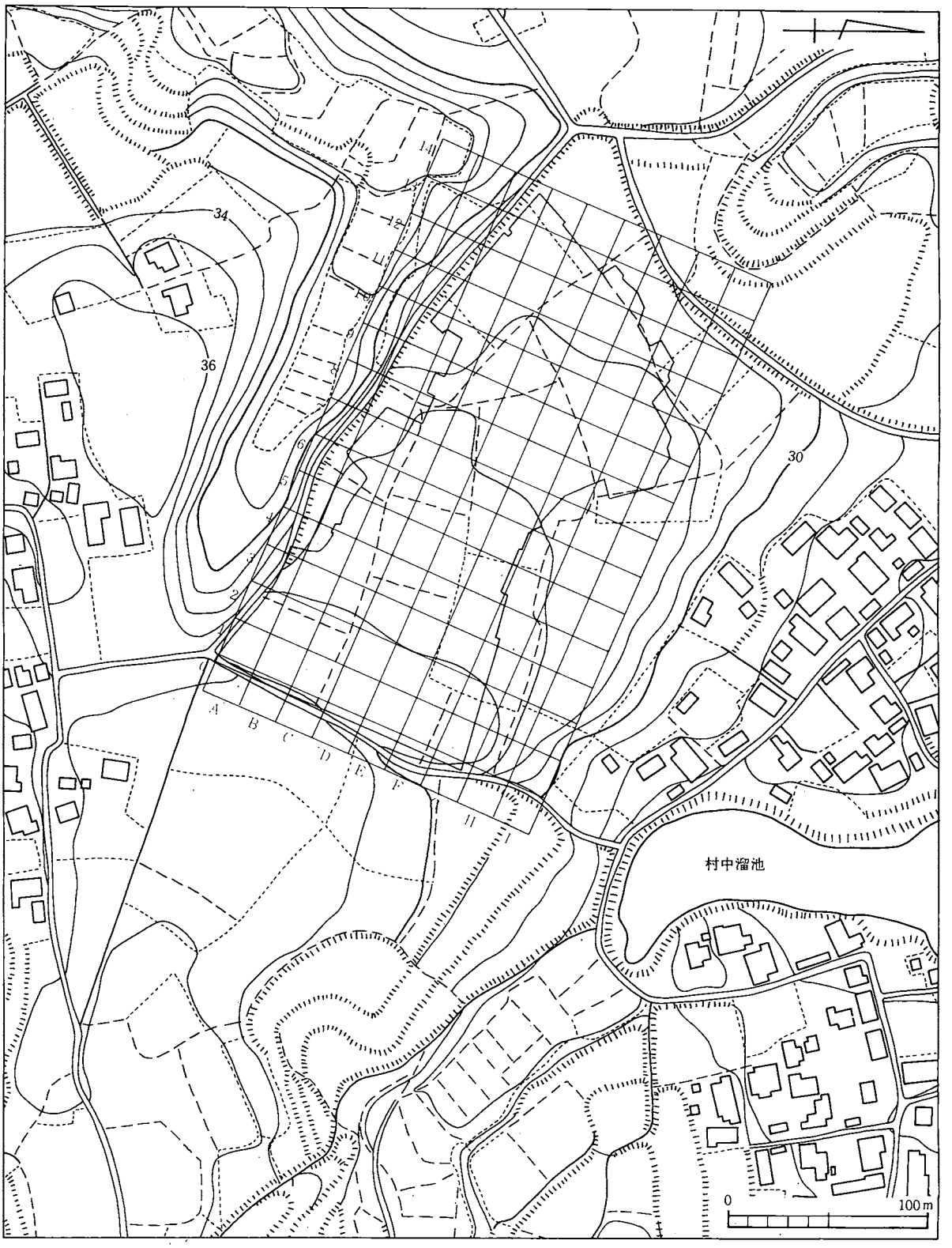
註

1．橋口達也・中間研志『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第７集　福岡県教育委員会　1970

2．橋口達也「北部九州におけるいわゆる赤焼土器について」『岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集　福岡県教育委員会　1982

第Ⅲ章　55年度調査の成果

1．調査の概要



第40図　55年度調査区全体図

昭和55年度の現地調査は55年５月に着手した。53年度の調査着手時、現地調査は２ヵ年間という計画であったが、54年度調査終了時点で面積にして約$\frac{1}{2}$、遺構数にすれば約$\frac{1}{3}$の進捗率であった。従前の調査経過からみて、充分な調査期間の確保はきわめて困難な状勢であり、調査員・調査予算などの調査体制を大幅に変更して調査に臨むことになった。残りの調査面積は53年度の試掘結果によって約2.4 ha と推定され、住居址数は270～280軒に達すると考えられていた。

調査の進展に伴い、調査面積は約３ ha に拡大し、４～７世紀の住居址数は350軒を数えた。さらに、53年度の試掘では確認されていなかった古墳が11基検出され、縄文・弥生・歴史時代の遺構・遺物も少数ながら各所に検出された。

55年度の調査は、54年度調査区の北辺に新設された農道から北側を対象とし、順次北側の塚原古墳群の方へ調査を進めた。調査区域が広範囲にわたり、遺構数も多いので、調査区の大区分には20m方眼のグリッドを設定した。53・54年度調査の主軸線に合わせて設定したため、方位などは任意のものである。地区表示は西から東へＡ～Ｉ、南から北へ０～14とした。遺構名は、住居址・土壙などについては区ごとに付し、区名を冠してＡ－１－１号住居址、Ｂ－１－１号土壙などとした。ただし、古墳については発見順に上の原１～12号墳（８号墳は欠番）とし、溝・道路状遺構など広域にわたる遺構についても独自の名称を付した。

55年度調査区においては確実に旧石器と言えるものはなく、縄文～近世の遺構・遺物がみられた。縄文時代の土器は約1,200点を数え、早期から晩期におよぶが、とくに早期・晩期の土器が全体の約95％を占めている。これらに伴う石器も約170点出土しており、石匙・尖頭器・石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石類などがある。遺構としては押型文土器を伴った集石遺構１基（Ｃ－４区）、詳らかな時期や性格が不明な土壙が３基検出されたにすぎない。

弥生時代の土器も各地区から出土したが、きわめて散発的で、総数も約60点である。時期的には前期～後期への連続性が認められる。Ｄ－11区、６号墳の周溝部分に中期後半の甕棺墓（Ｄ－12－１号甕棺墓）が検出されたが、これが55年度調査区における唯一の弥生時代遺構である。

古墳時代の遺構・遺物はきわめて多く、４～７世紀の住居址約350軒、古墳11基に伴って多量の土師器・須恵器・鉄製品・玉類などが出土している。

歴史時代の遺構・遺物は、包含位置が浅いことがあって、耕作などによる撹乱を受けたものも多く、良好な出土状態を示すものは少ない。

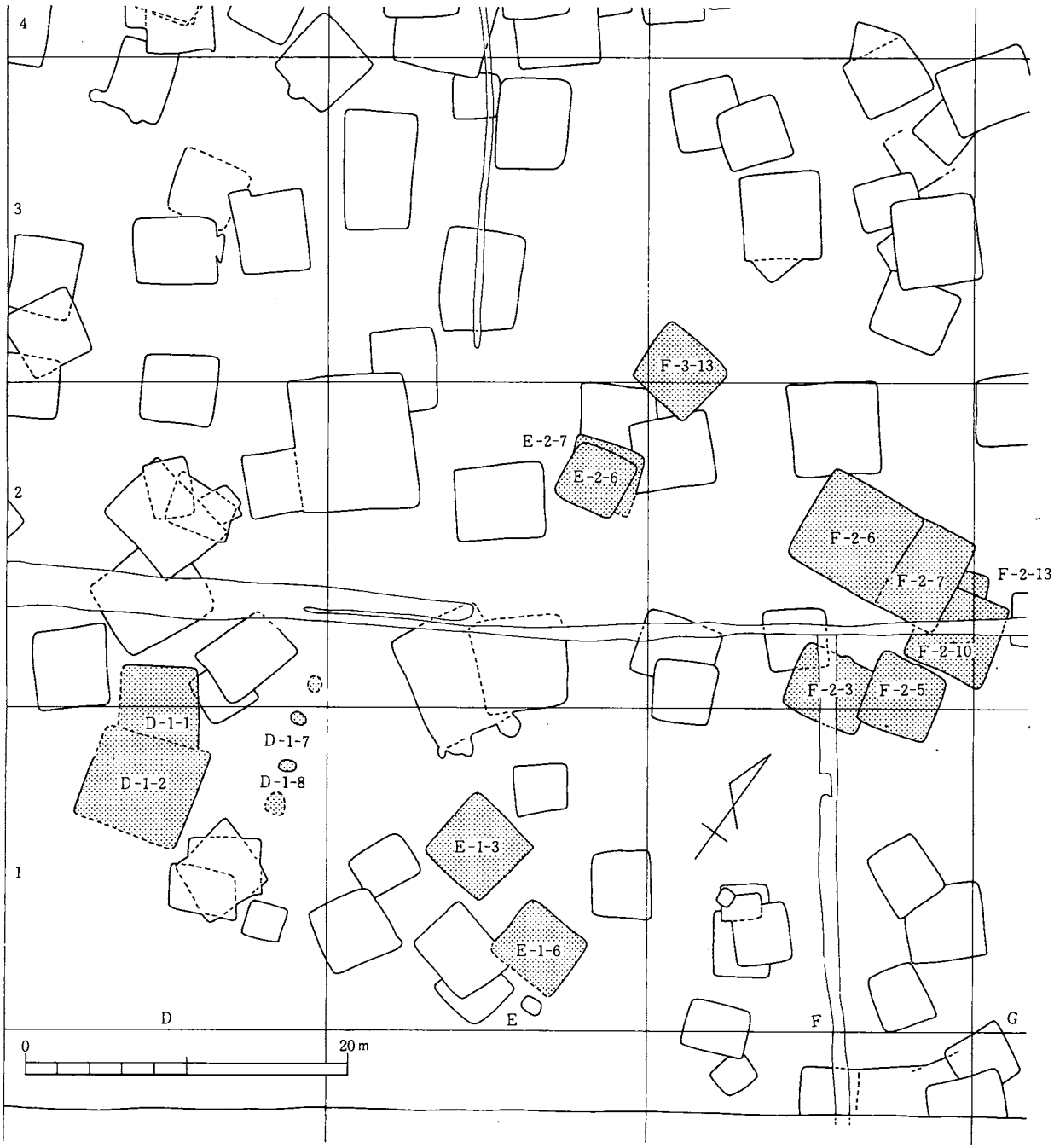
奈良～平安時代の遺物の多くはグリッドの１～３列に集中しており、１列には掘立柱建物と思われる柱穴も確認されたが、建物の復原はできなかった。この付近から54年度調査区にかけての一帯が、古代の生活面と想定される。古代の墳墓はＩ－10区に周溝墳墓が１基、Ｇ－１区・Ｃ－10区に土壙墓が各々１基発見された。遺構に伴わない古代の遺物は、須恵器・土師器・黒色土器・布目瓦・銙帯金具などが出土している。

中・近世の遺物はきわめて少なく、須恵質土器・瓦質土器・輸入陶磁器・近世陶磁器などが少量出土している。台地を縦横に走る溝はこの時期の所産で、台地の開発を示すものと考えている。

2．竪穴住居址（第41図、付図１）

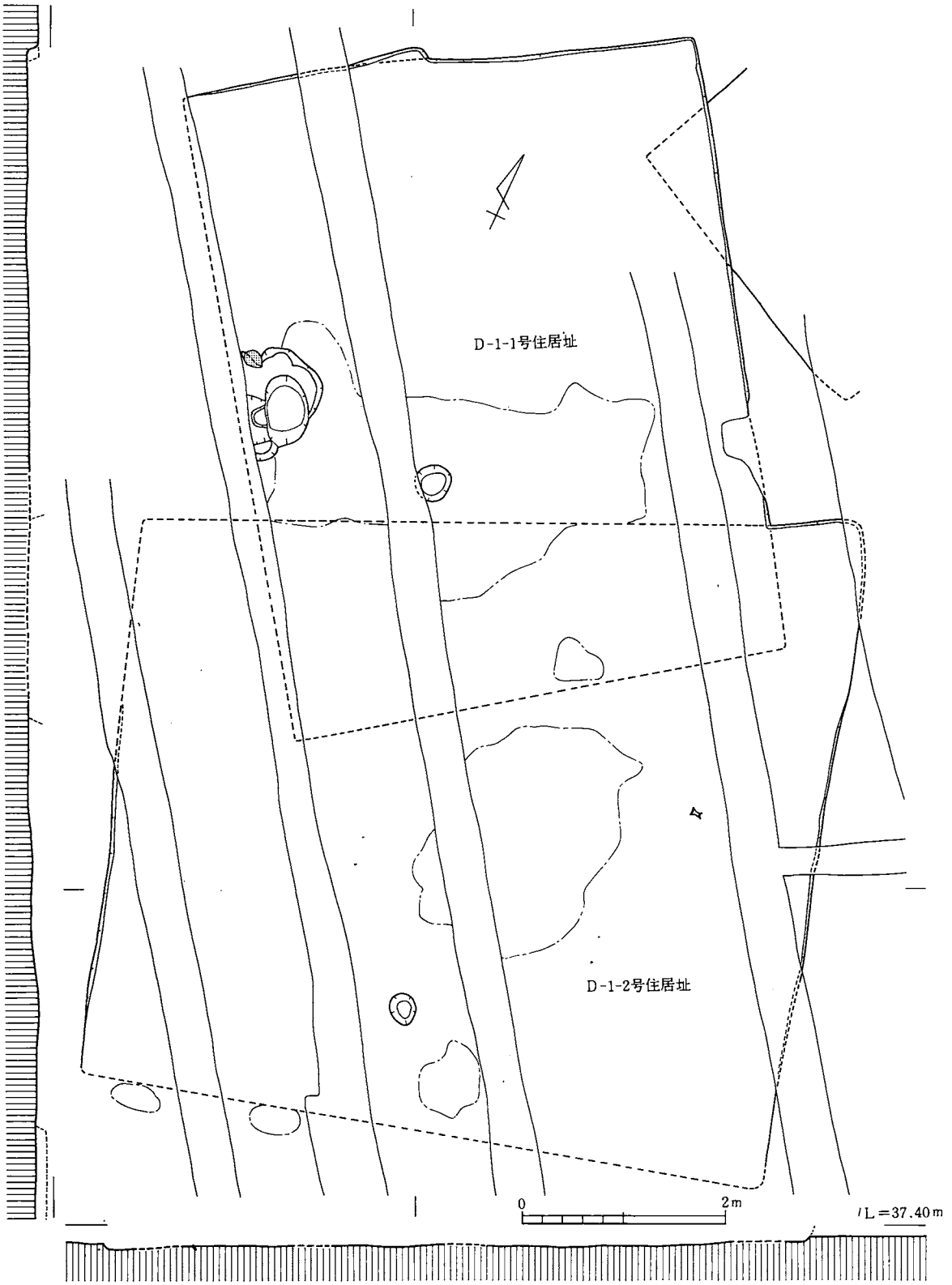
ここで報告する住居址はすべて７世紀代のもので、構造的には竈が付設されているのが特色である。この時期の住居址は、55年度調査区においては15軒が確認された。上部からの削平やゴボウの耕作による撹乱が著しく、３軒は竈・床の一部を残しているにすぎない状態であった。これらの住居址から土師器・須恵器が出土しているが、４～５世紀の住居址に比べると遺物量は少ない。

７世紀代の住居址群は、55年度調査区の南端、Ｄ－１・Ｅ－１・Ｅ－２・Ｆ－２・Ｆ－３区に集中しており、北側への広がりはない。南側への広がりは53・54年度調査区へと続いているが、全体としてもそう広範囲ではない。

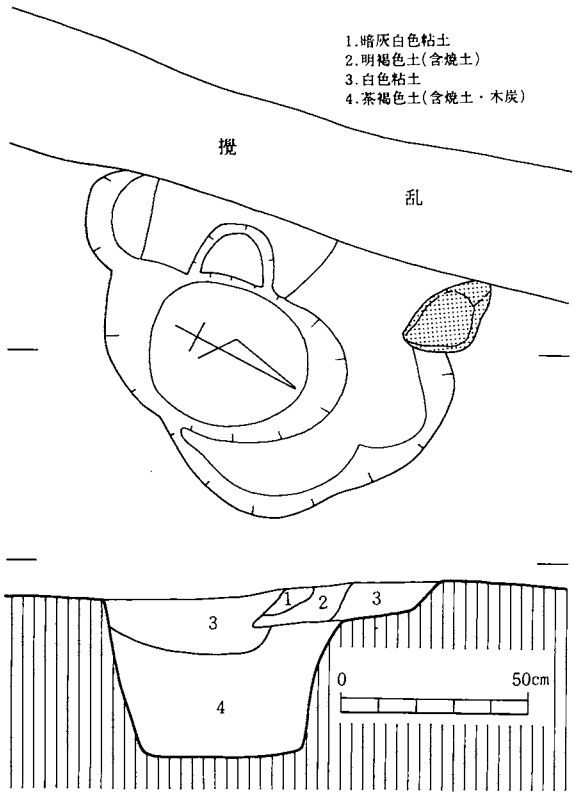


第41図　55年度調査区7世紀代住居址配置図（白ヌキは4～5世紀、網目は7世紀）

(1)　D－1－1号住居址（第42・43図）



第42図　D-1-1・2号住居址実測図



第43図　D-I-1号住居址竈実測図

ほぼ同時期の住居址であるD－1－2号住居址の北側に重複して築かれているが、床面での高低差はない。床面の状態から前後関係を判定すれば、2号住居址が先行し、後に1号住居址が築かれたものと考えられる。

上部からの削平やゴボウ耕作溝による撹乱が著しく、遺存状態は良くない。住居址の壁は北辺と東辺が確認されただけで、壁高は深い所で10cmを測るにすぎない。住居址の正確な規模は不明であるが、床面の状態や竈の位置からみて東西約5m、南北6～6.4mと推定される。

竈は西辺に設けられているが、西端をゴボウの耕作溝により切断されている。北側には粘土袖の一部がわずかに残るが、遺存状態は良くない。

柱穴は1個が確認されただけで、他は不明である。竈から東側にかけて、帯状に硬化面がみられる。

〔出土遺物〕

住居址に伴う出土遺物は皆無である。

(2)　D－1－2号住居址（第42図）

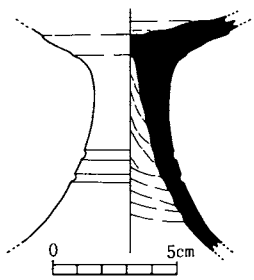
遺存状態が悪く、北・東・西側の壁の一部と床面を確認したにすぎない。1号住居址に先行する住居址である。

住居址の規模は東西6.9～7mを測り、南北は5.4～7.1mと推定され、やや不整な台形プランが想定される。住居址のほぼ中央部に硬化面と、その南側に柱穴が確認されたが、竈は検出されていない。

南壁想定線の南側にもわずかに硬化面が認められるが、調査担当者の所見では、別の住居址が存在した可能性が考えられるという。

〔出土遺物〕（第44図）

須恵器の高杯が1点出土した。杯部および脚下端部を欠失している。長脚の高杯で、脚の中位に2条の凹線を巡らす。胎土に微砂を含み、焼成不良のため軟質で、淡灰色を呈し、器面が荒れている。



第44図　D-I-2号住居址
出土遺物実測図

(3) D－1－7号住居址（第45図）

D－1区の北隅に焼土と硬化面の一部が検出されただけで、住居址の構造や規模は不明である。竈は検出されていないが、床面のレベルや状態などから7世紀代の住居址と考えられる。

〔出土遺物〕

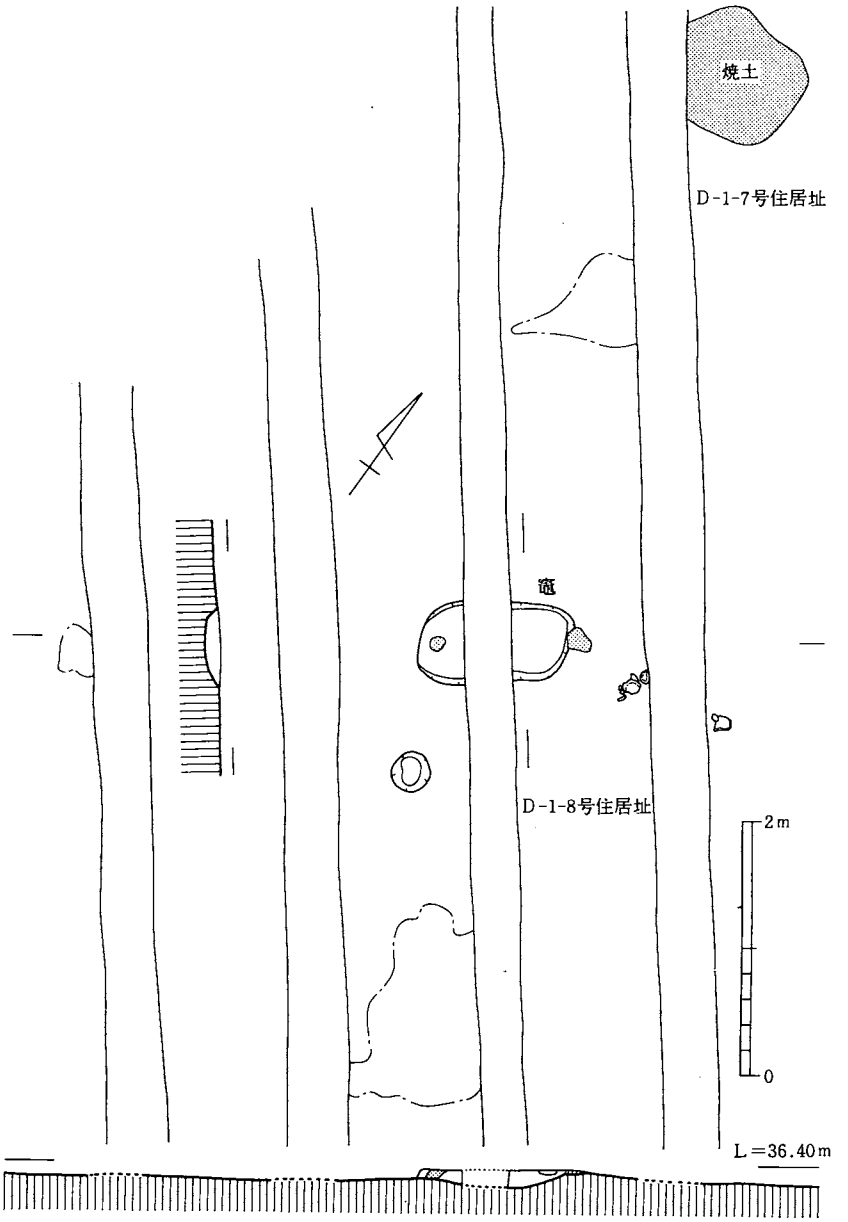
住居址に伴う出土遺物は皆無である。

(4) D－1－8号住居址（第45図）

D－1－7号住居址の南側に位置するが、遺存状態は良くない。竈の一部と硬化面、柱穴が確認されたが、壁は削平されて遺存しない。

竈は中央部をゴボウの耕作溝によって分断されている。竈の掘込みは東西に長く、長さ約1.2m、幅60cm前後を測り、東西に粘土塊がある。

竈の状態や硬化面の位置関係からみて、北辺に竈を設置した住居址とみられる。

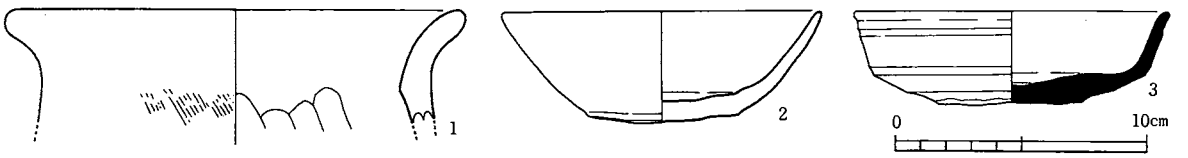


第45図　D-1-7・8号住居址実測図

〔出土遺物〕（第46図）

竈の東側から3個体分の土師器・須恵器が出土している。

1は土師器の甕で、横8cm、縦6cm程度の小破片である。復元口径は約18cmで、口縁部は器壁が厚く大き



第46図　D-1-8号住居址出土遺物実測図

く外反している。胴部外面は刷毛目の上を横ナデ、内面はヘラ削り調整である。胴部外面には薄く煤が付着している。

2は土師器の杯で、約$\frac{1}{2}$大の破片である。口径約13cmを測り、底部は丸味を帯びた平底である。焼成不良であるため軟質で、器面が荒れており、細かな調整は不明である。

3は口径12.5cmの須恵器杯で約$\frac{2}{3}$が遺存する。底部はヘラ切り離しのまま未調整で、突出気味の平底である。体部の調整は丁寧で、焼成も良く、灰色を呈する。

(5) E－1－3号住居址（第47図）

他の住居址との重複はなく、単独で存在する。北西―南東方向に走るゴボウの耕作溝により分断されているが、他は比較的遺存状態が良い。

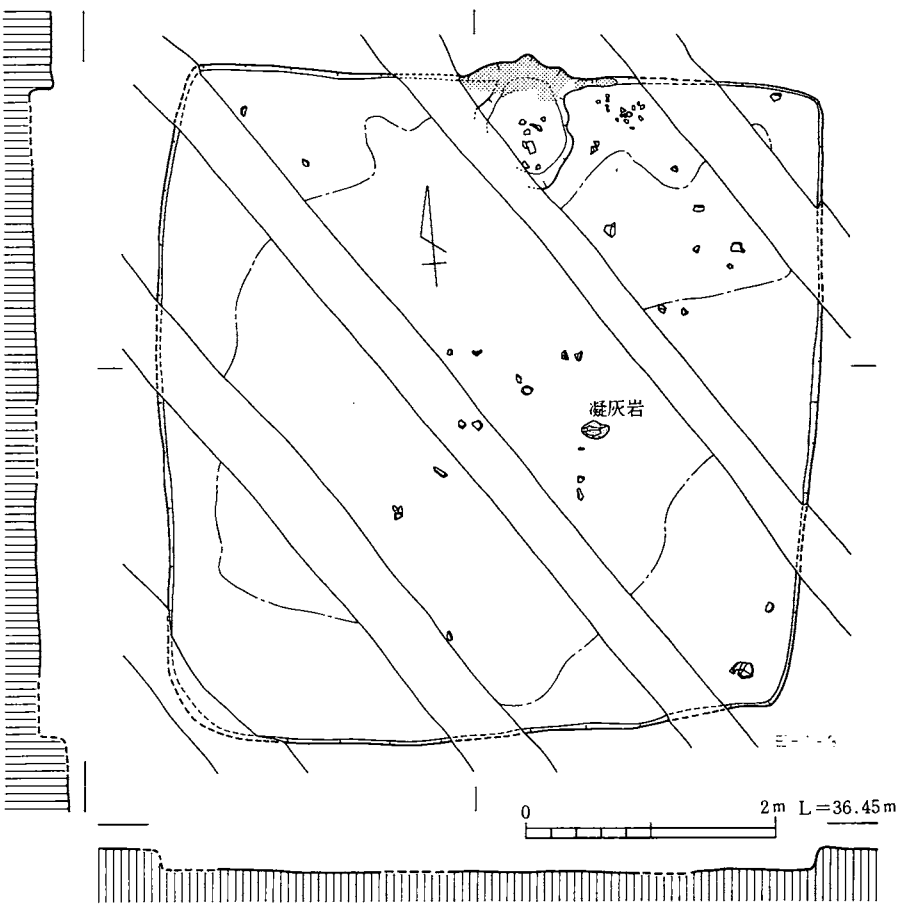
東西4.9～5.2m、南北4.9～5.2mを測り、やや不整な隅丸方形のプランを呈する。壁高は20cm前後を測り、竈は北辺のほぼ中央部に設けられている。

竈の遺存状態は悪い。掘込みは南北に長い卵形を呈し、北端に粘土塊があるが、袖の部分は遺存しない。

硬化面は住居址の中央部分に広がるが、柱穴は確認されていない。

〔出土遺物〕（第48図）

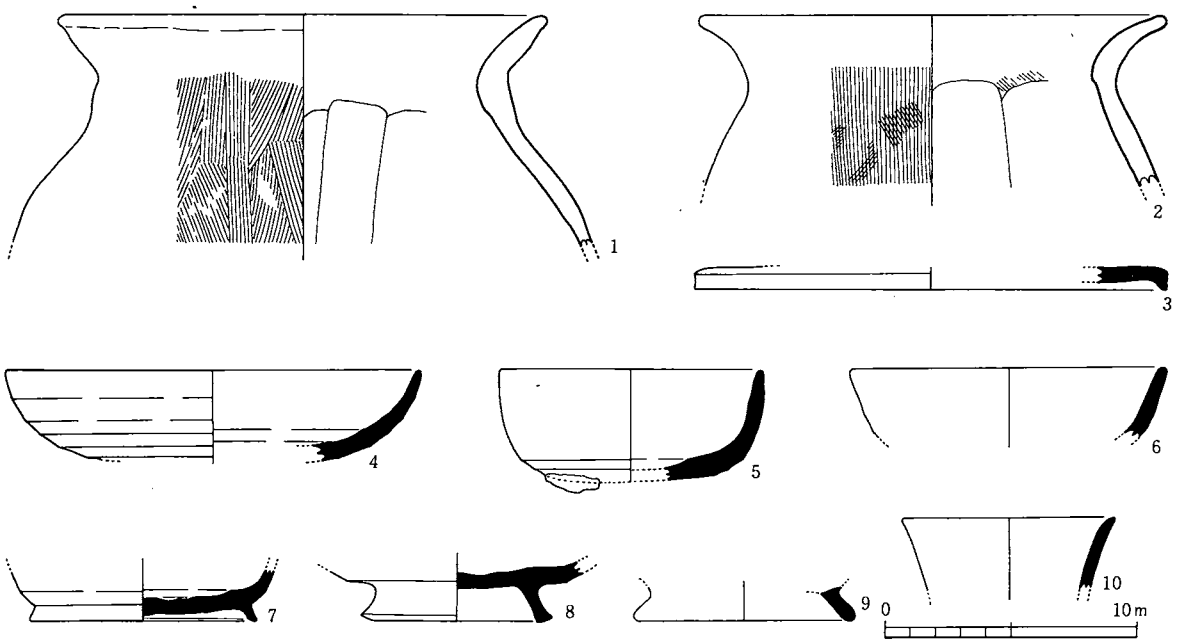
遺物は住居址の中央部、竈及び竈の東側にまとまって出土し、この時期の住居址としては出土量が多いが、すべて破損品である。1と9が竈内からの出土である。



第47図　E-1-3号住居址実測図

3は須恵器の蓋で、小破片からの復原計測であるので、口径はやや不正確である。天井部は扁平で、体部は直角に下方へ折れている。

4は復元口径16.5cmを測る須恵器杯で、底部を欠失しているが平底になると思われる。体部は丸味を帯びて内弯し、中位からやや下の体部外面はヘラ削りされている。5は平底の小型杯で、約$\frac{1}{4}$大の破片である。復原口径10.6cm、器高4.5cmを測り、体部の上位は直線的に直立している。体部外面にはわずかに自然釉が付着し、底部にも不純物が熔着している。



第48図　E-I-3号住居址出土遺物実測図

6は高台杯の体部破片で、復元口径12.6cmを測る。胎土・調整・焼成ともに良く、色調は灰色を呈する。7～9は高台杯の底部破片で、高台部の形態は各々異なっている。

10は壺の口縁部と考えられ、復元口径8.5cmを測る。口縁端部は尖り気味で、わずかに外反している。

住居址のほぼ中央部、床面から約10cmの覆土中から鉄片が2点出土している。原形は不明である。

その他、住居址のほぼ中央部から凝灰岩（長さ22cm、幅14cm）が1点出土している。竈の袖の芯に使用されたものと考えられる。

(6)　E－1－6号住居址（第49・50図）

5世紀代の住居址であるE－1－8号住居址の東側に重複して築かれている。西側約2mには同時期のD－1－3号住居址が位置し、両住居址の主軸方位はほぼ一致している。

南側の壁が検出できなかったので住居址の全形は知り得ないが、南側がやや広い台形を呈している。北側での東西幅約4.4m、南側での東西幅4.9m、南北の遺存長4.2mを測る。壁高は平均して10cm前後の深さである。

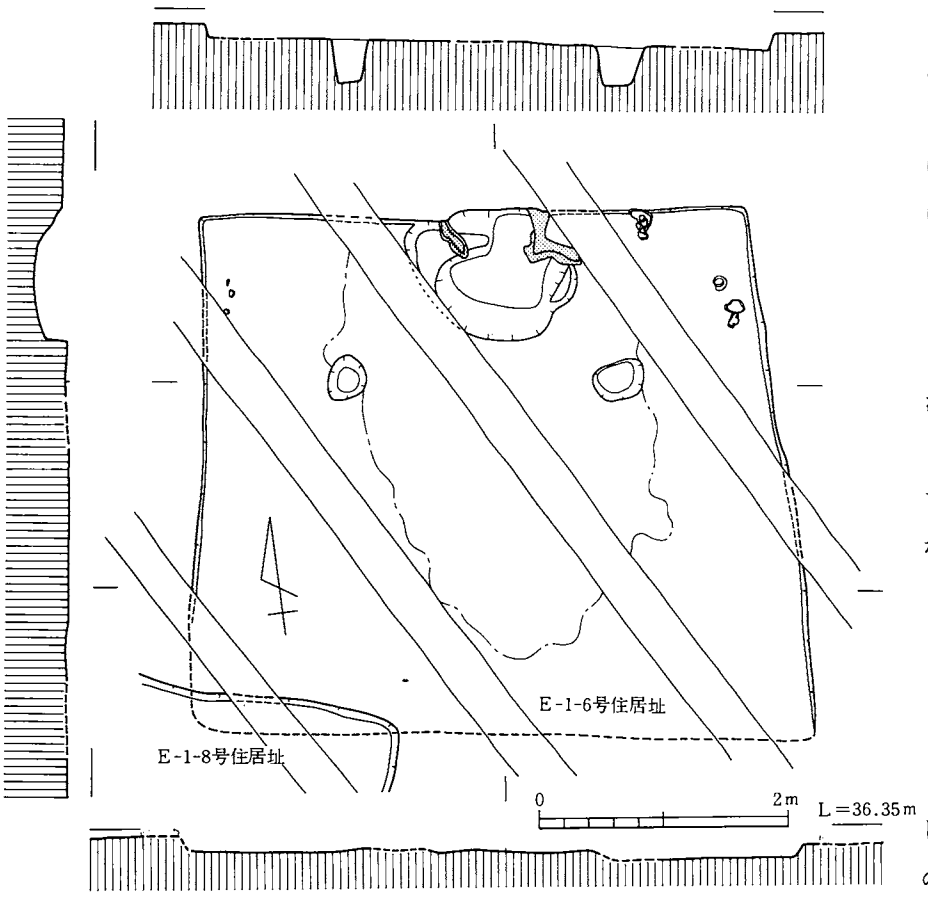
竈は北辺のほぼ中央部に設けられている。東西約1.4m、南北1mの大きさに掘込みがあり、粘土袖の一部が遺存している。粘土は乳白色の良質のものである。竈内には焼土や粘土の小ブロックが充満していた。

硬化面は竈から南側にかけて広がっている。柱穴は北側に2個検出されたが、南側には未検出である。北側の柱穴の配置からみて、本来は4本柱になるものと考えられる。

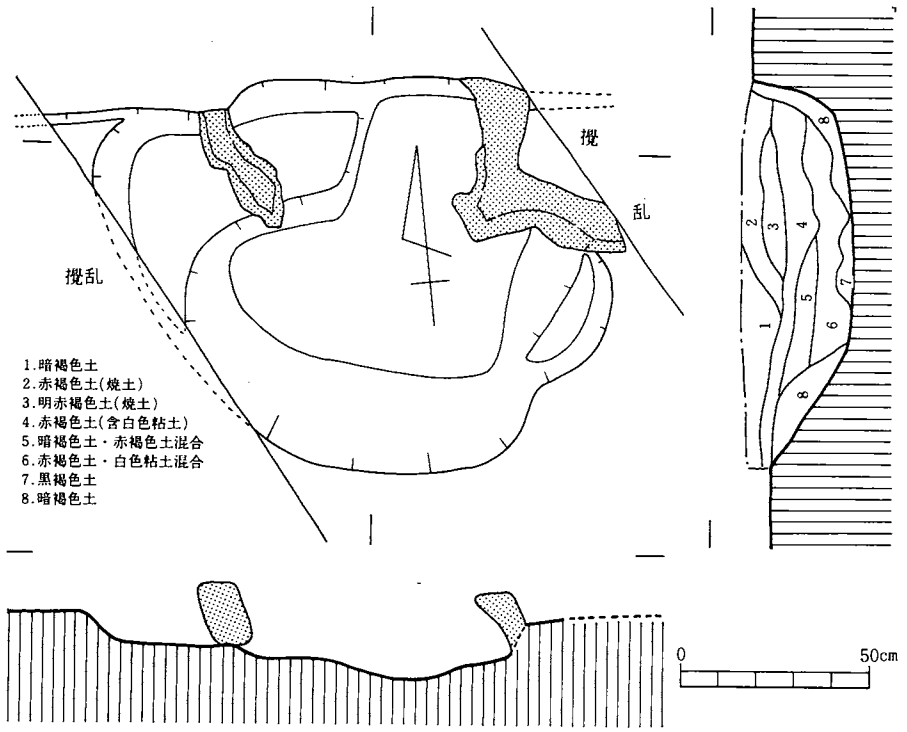
〔出土遺物〕（第51図）

住居址の北東隅と北西隅から土師器・須恵器が出土したが、量は少なく、4個体分を数えるにすぎない。

1は土師器甕の底部で、平底に近い丸底を呈している。遺存部の上位には黒斑が認められる。2は甑の胴部と底部の破片である。胎土・色調・器形などからみて、同一個体と考えられる。把手の先端部は剥落している。底部は肉厚の平底で、断面長方形の桟が中央に渡されている。3も甑と考えられる。復原口径30.6cm



第49図　E-1-6号住居址実測図



第50図　E-1-6号住居址竈実測図

を測る口縁部の破片で、胎土には微砂粒を多く含む。外面は横ナデ、内面はヘラ削り調整で、焼成は良く、比較的硬質である。

4は小型の須恵器杯で、口径8.8cm、器高3.3cmを測る。底部は平底で、ヘラ切りの後でわずかにナデを加えているが、調整が雑で小さな凹凸がある。

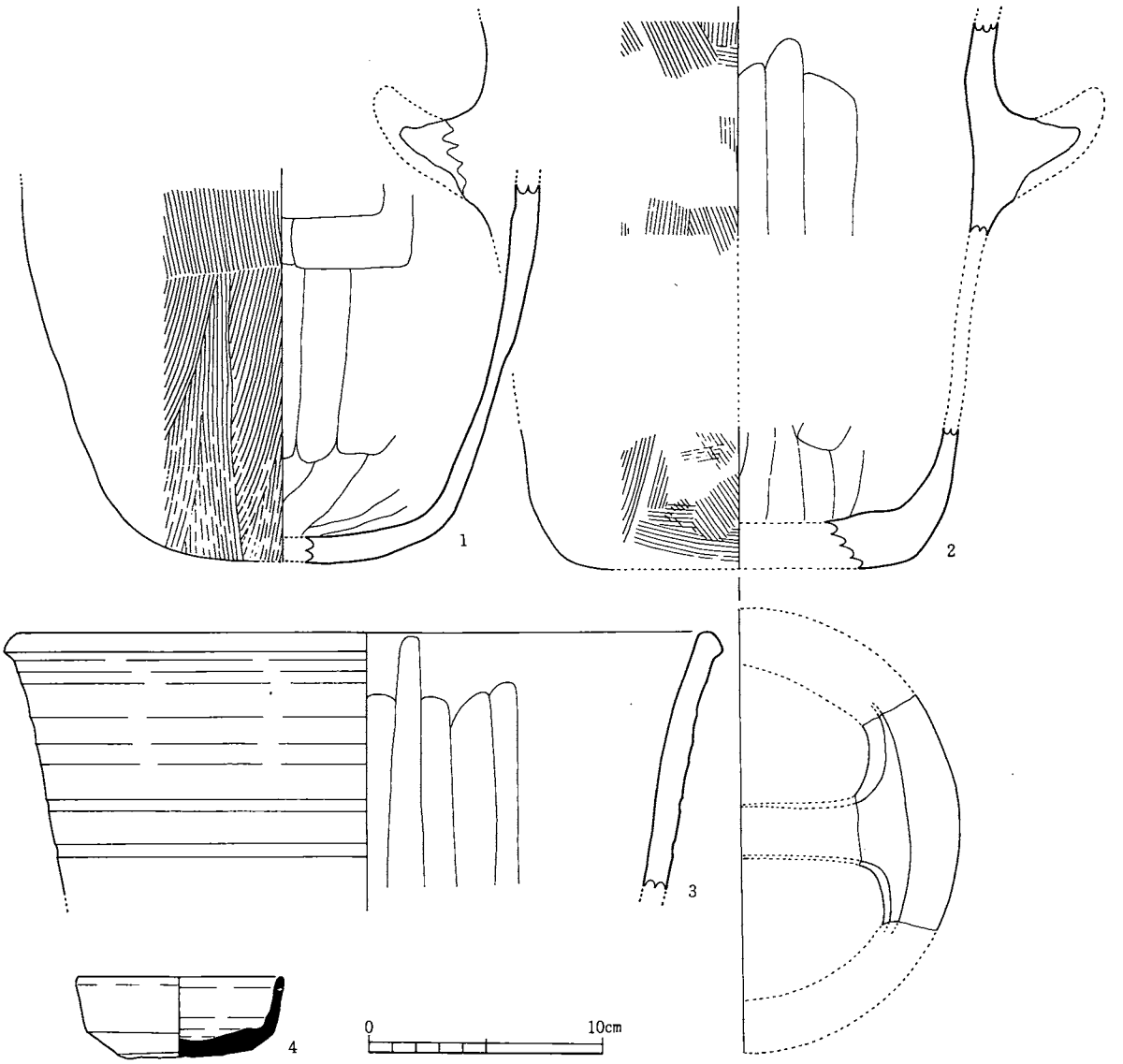
(7)　E－2－6号住居址（第52･53図）

E－2区の北隅に位置し、E－2－7号住居址の上に主軸をわずかに異ならせて築かれている。ゴボウの耕作溝による撹乱以外は比較的遺存状態が良い。

東西幅3.9～4.2m、南北長4.45～4.5mの長方形プランを呈し、遺存する壁高は6～10cm程度である。

竈は北辺の中央部からやや西側に片寄って造られている。竈の掘込みは南北に長い楕円形を呈し、灰白色の粘土による袖の一部が残っている。袖の部分は左側の遺存状態が良い。

硬化面は竈の東側に南北に帯状に認められたが、ゴボウの耕作溝によって分断されている。柱穴は



第51図　E-I-6号住居址出土遺物実測図

6個検出されたが、不規則な配置である。本来は4本柱の建物と推定される。

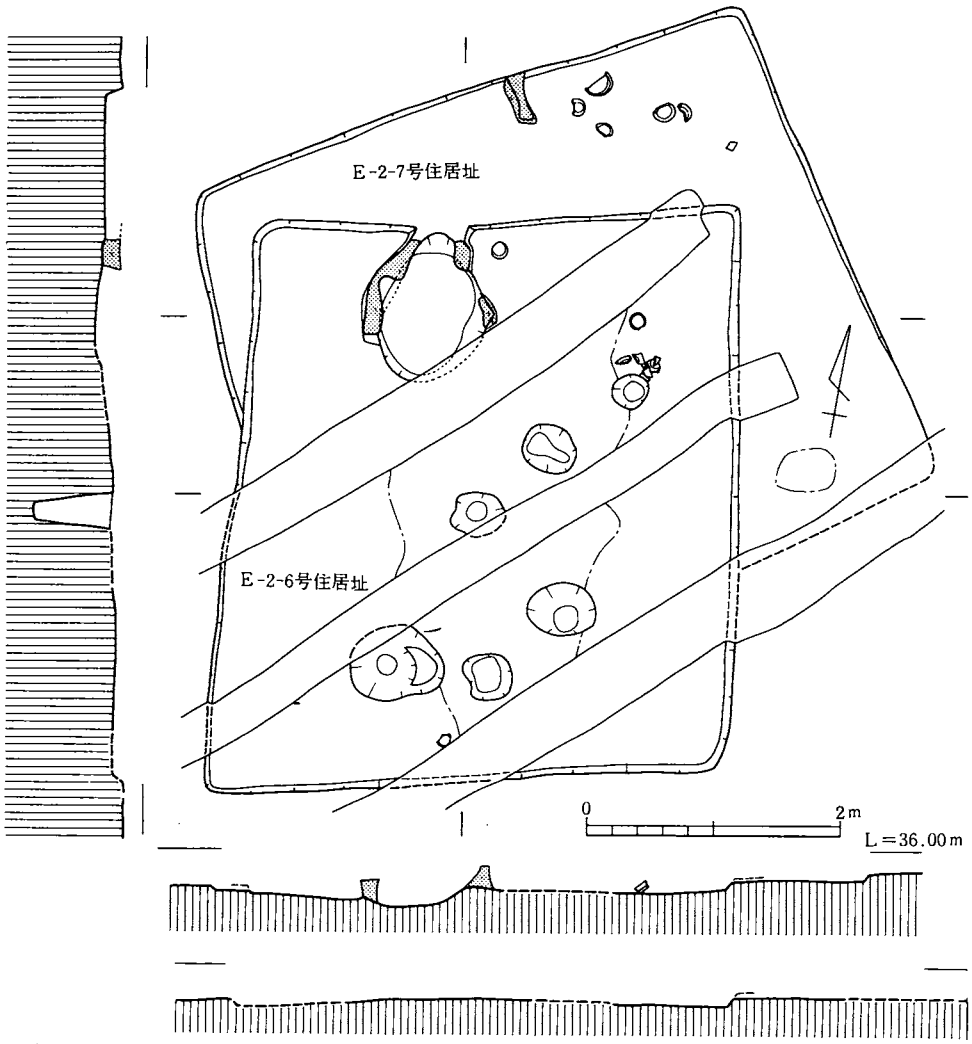
〔出土遺物〕（第54図）

出土遺物はすべて須恵器で、土師器は出土していない。出土地点は竈の東側にやや集中している。総個体数は5点であり、量は少ないが、完形品も含まれている。

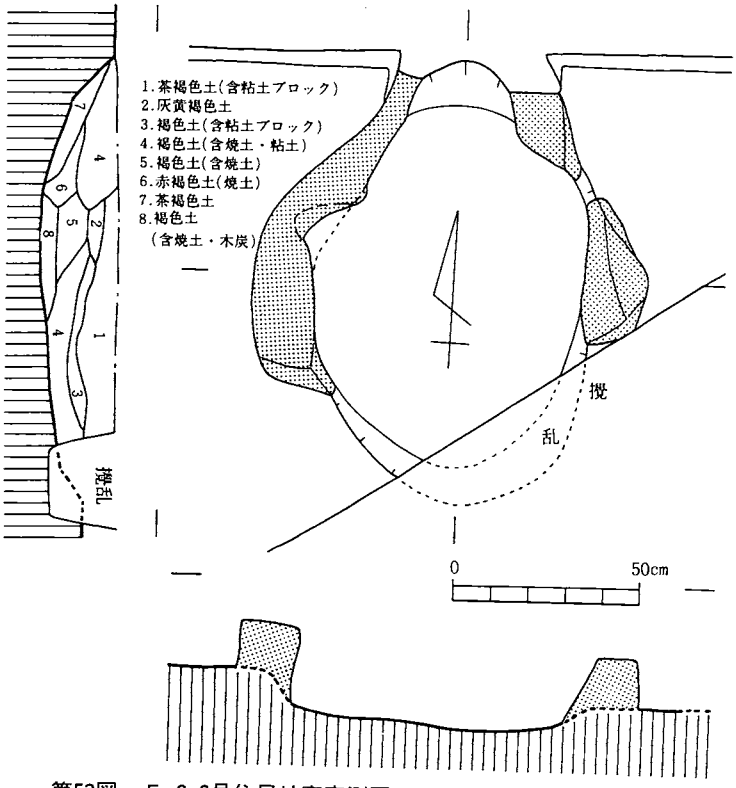
1～3は同タイプの高台杯である。いずれも焼成が悪く、赤茶灰色・灰白色を呈する部分があり、焼成具合はきわめて類似している。器形もきわめて類似しており、同一窯、同工工人によるものと考えられる。1は口縁部をわずかに欠くが、口径13.3cm、器高4.5cmを測る。2は口径13.4cm、器高4.5cmを測り、法量もきわめて近い数値を示している。

4は高杯で、杯部はほぼ完全に遺存しているが、脚部は欠失している。杯部口径17.2cmを測り、体部は大きく内弯している。1～3と同じく焼成が悪く、赤茶灰色を呈しており、軟質のため器表が荒れている。

5は高台付盤で、約$\frac{1}{4}$大の破片である。口径は23.7cmに復原される。体部は内弯ぎみに立上り、高台は高く外反している。体部外面の中位以下から底部にかけてはヘラ削りされ、他は横ナデ・ナデが加えられている。胎土・整形・焼成ともに良く、灰色を呈する。



第52図　E-2-6・7号住居址実測図



第53図　E-2-6号住居址竈実測図

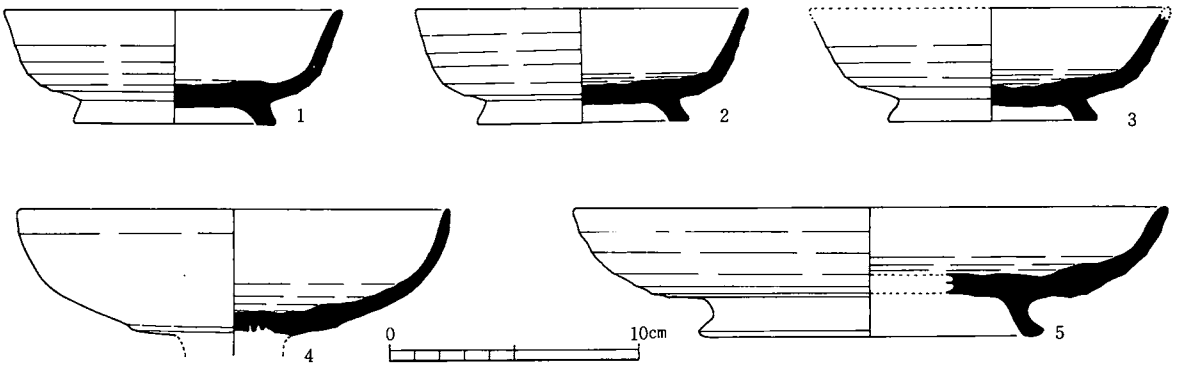
(8)　E－2－7号住居址

（第52図）

E－2－6号住居址によって切られているため、遺存状態は良くない。北辺での東西幅は4.6mを測るが、南北の長さは不明である。

竈は北辺に設けられているが、向って右側の袖の一部が残っているのみである。袖に使用されている粘土は、灰白色を呈する良質のものである。他の住居址では竈の中央部分に掘込みがみられるが、この住居址ではみられない。

硬化面は、検出部分の東南隅にわずかに認められたにすぎない。柱穴は未確認である。



第54図　E-2-6号住居址出土遺物実測図

〔出土遺物〕（第55図）

竈の東側を中心として、土師器と須恵器が出土している。

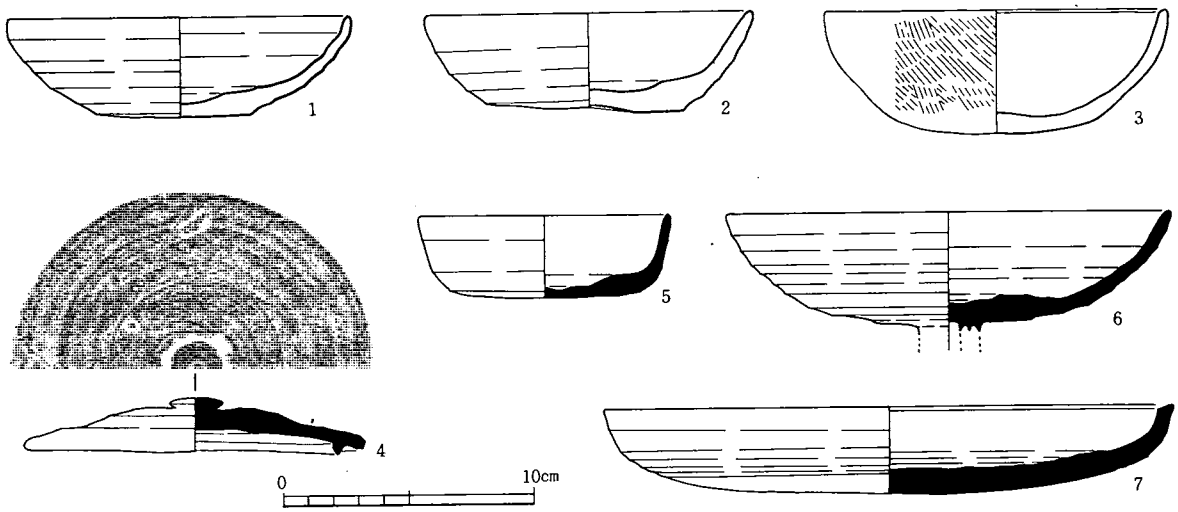
1・2は平底の土師器杯である。1は口径13.5cm、器高4cmを測る。器壁は薄く、体部は内弯しながら延びている。2に比べると丁寧な造りで、胎土・整形ともに良いが、焼成はわずかに不良でやや軟質である。2は口径13.2cm、器高3.7cm前後を測り、雑な造りで器壁も厚い。体部は比較的直線的に延びており、外底部はヘラ削り、内底部はナデ、他は横ナデ調整である。3は竈部分から出土したもので、約$\frac{1}{4}$大からの復原である。口径13.6cmを測り、底部は丸底である。体部外面には荒い刷毛目が施され、内面は横ナデ・ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く硬質である。その他、土師器の甕の破片が数点出土しているが、いずれも細片である。

4は扁平な須恵器蓋で、完形品である。実際にはほとんどつまめない扁平なつまみを有し、天井部にはヘラ記号がある。器形にややひずみがあるが、焼成は良くきわめて硬質である。内外面にわずかに自然釉が付着している。

5は完形の平底の小型杯で、口径10.2cm、器高3.3cmを測る。還元不足で部分的に褐色味を帯びているが、胎土・整形・焼成は良い。

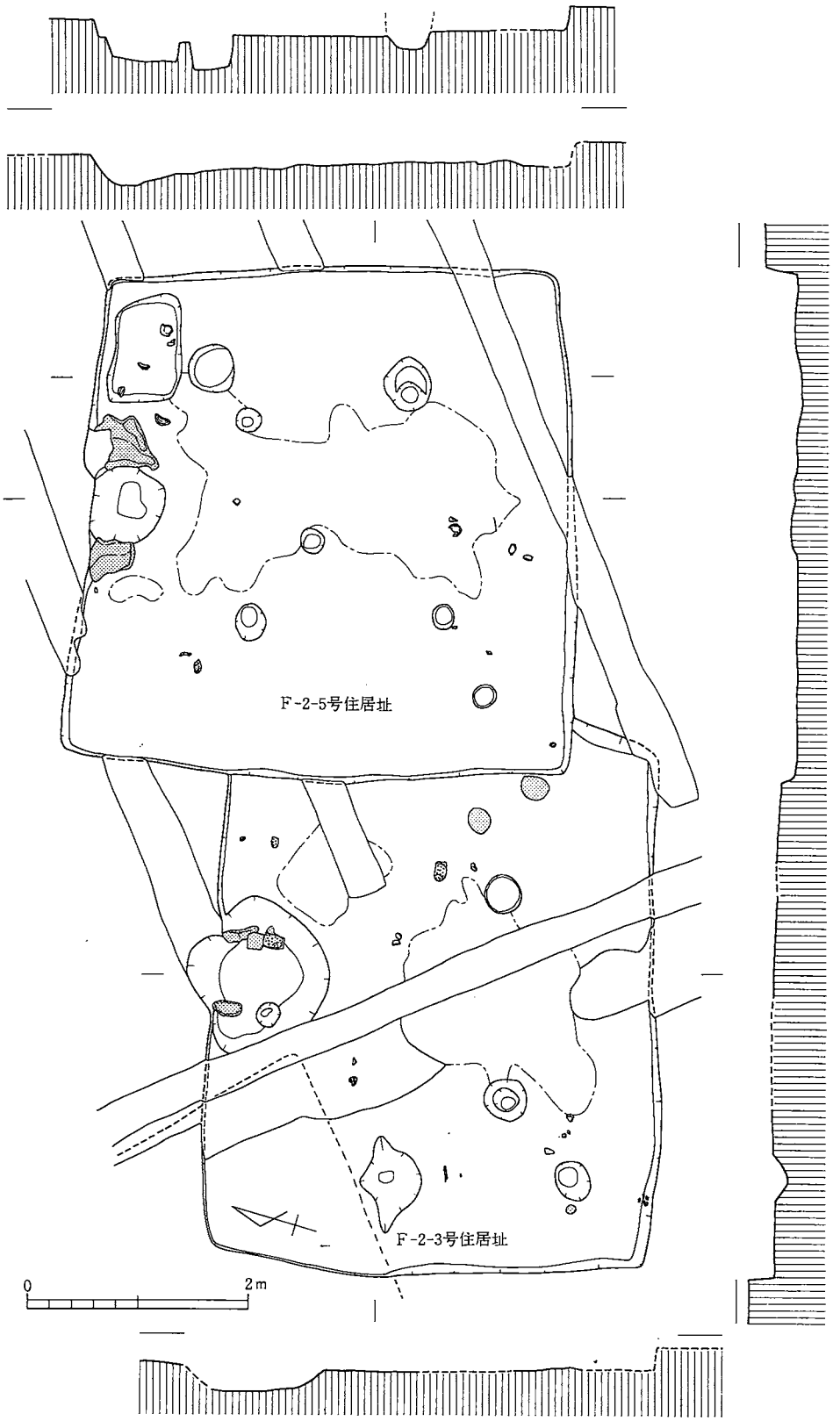
6は高杯で、杯部の約$\frac{2}{3}$程が遺存する。杯部口径17.7cmを測り、体部は内弯している。体部外面の中位以下はヘラ削りされ、全体的に器壁は薄い。焼成不良のためやや軟質で、灰白色を呈している。

7は口径22.7cmを測る盤で、約$\frac{1}{2}$が遺存している。底部はやや丸味を帯びた平底で、外底部は静止ヘラ削り調整である。焼成状態は6ときわめて類似し、軟質で灰白色を呈する。

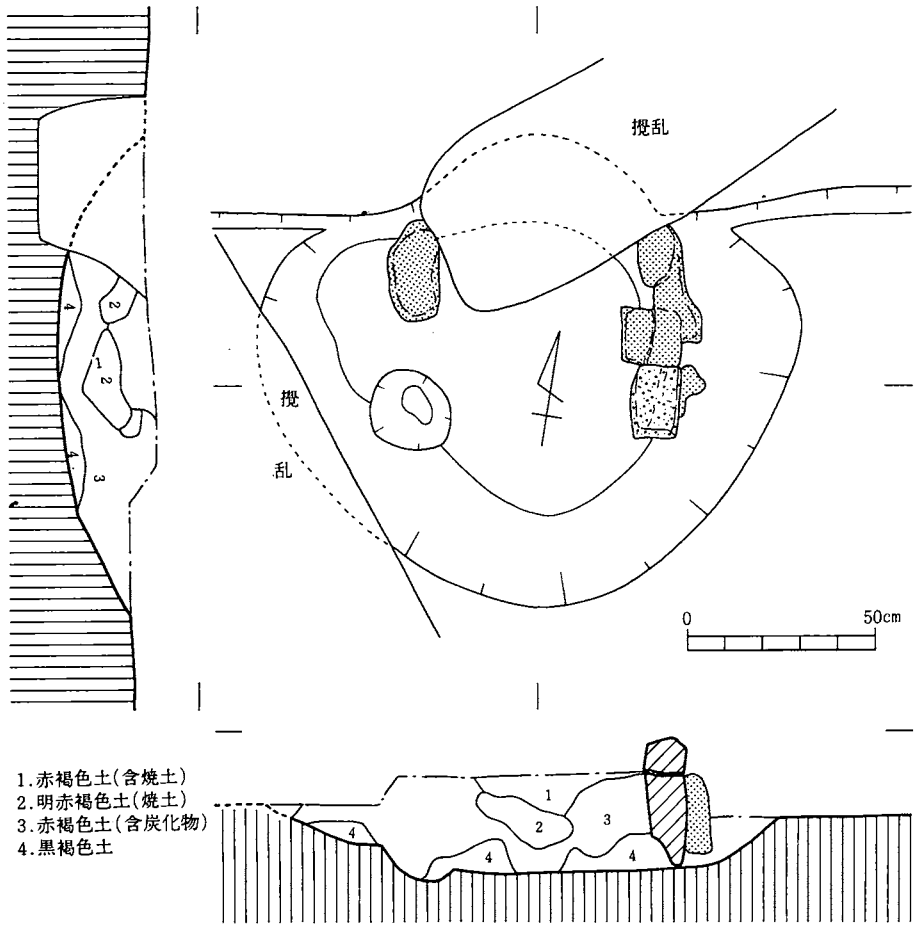


第55図　E-2-7号住居址出土遺物実測図

(9)　F－2－3号住居址（第56・57図）



第56図　F-2-3 ・5号住居址実測図



第57図　F-2-3号住居址竈実測図

F－2区からF－1区にかけて、2軒の7世紀代住居址が検出された。西側の古い住居址をF－2－3号、東側に重複して築かれた新しい住居址をF－2－5号住居址とした。この2基の真北にきわめて隣接して、F－2－6・7・10・13号住居址が位置する。

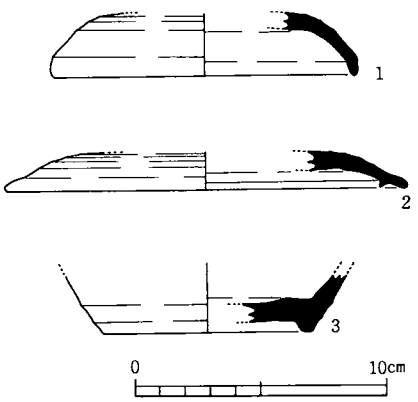
F－2－3号住居址は、5世紀代の住居址であるF－2－4号住居址の上に一部重複しており、北東隅の一部をF－2－5号住居址によって切られている。その他ゴボウの耕作溝や中・近世の溝によって部分的に撹乱を受けている。

住居址の平面形は長方形を呈し、南北3.9～4.2mを測り、東西は4.6～5mと推定される。北側の削平が強く、北側は壁高が低くなっている。南側は遺存状態が良く、20cm前後を測る。

竈は北辺のほぼ中央部に設けられているが、北側をゴボウの耕作溝、西側を溝によって切られている。竈の掘込みは東西に長い不整な楕円形を呈し、掘込みの深さは住居址床面から17～18cmの深さである。左右には白色粘土を用いた袖の一部が残り、袖の前面の左側には小さなピットが、右側には凝灰岩の面取り加工した柱状石が立てられている。左側にも石材が立てられていたものが、抜き取られたものであろう。竈に伴うものではないが、住居址の東南隅と西南隅とに薄い焼土が発見されている。

硬化面は竈の東南部、住居址の中心部から南側にかけて認められるが、面積は狭い。

柱穴は3個が検出されている。西南端のものは住居址に伴わず、他の2個とその北側に未検出の2個が対となった4本柱と推定される。



第58図　F-2-3号住居址出土遺物実測図

〔出土遺物〕（第58図）

出土量は少なく、出土状態も散在的である。しかも小破片が多く、図化できたものは3点である。

1は復原口径12.1cmを測る杯蓋である。天井部の大半は欠失しているがやや扁平化しており、体部は先端が屈曲してほぼ垂直に立っている。胎土・整形・焼成良く、硬質である。2は内面にかえりをもつ蓋であるが、全体に扁平な造りである。胎土・整形・焼成ともに良く、内外面とも灰色を呈する。

3は高台杯の底部破片であるが、器形からみて後出するもので、出土状態も覆土からの一括資料であり、混入遺物であろう。胎土・焼成は良いが、整形・調整はやや雑である。

その他、7世紀代の土師器の甕、須恵器の壺の破片や5世紀代の土師器片が若干出土している。

(10) F－2－5号住居址（第56・59図）

F－2－3号住居址の東側に重複しており、F－2－3号住居址を切って造られている。ゴボウの耕作溝によって部分的に撹乱を受けているが、比較的良く遺存している。

東西4.3～4.5m、南北4.1～4.6mを測り、やや不整な方形プランを呈する。壁高は最大で27cmを測る。

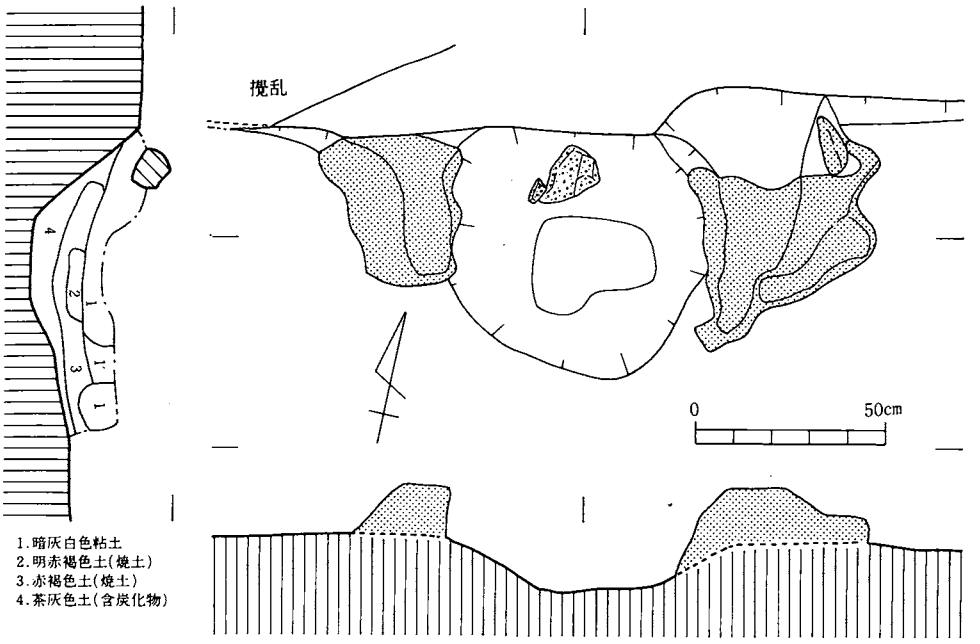
竈は北辺のほぼ中央部に造られており、粘土袖の一部が遺存している。竈の掘込みは不整な円形を呈し、煙出しは住居址の外へは張り出していない。粘土袖は良好な状態ではないが、左右に残っている。竈内堆積土の上層から軟質の凝灰岩片が出土しており、袖の前端に使用していたものと思われる。

硬化面は竈から南側にかけて帯状に確認され、柱穴は7個が検出された。P_1～P_4が支柱となる4本柱の構造である。

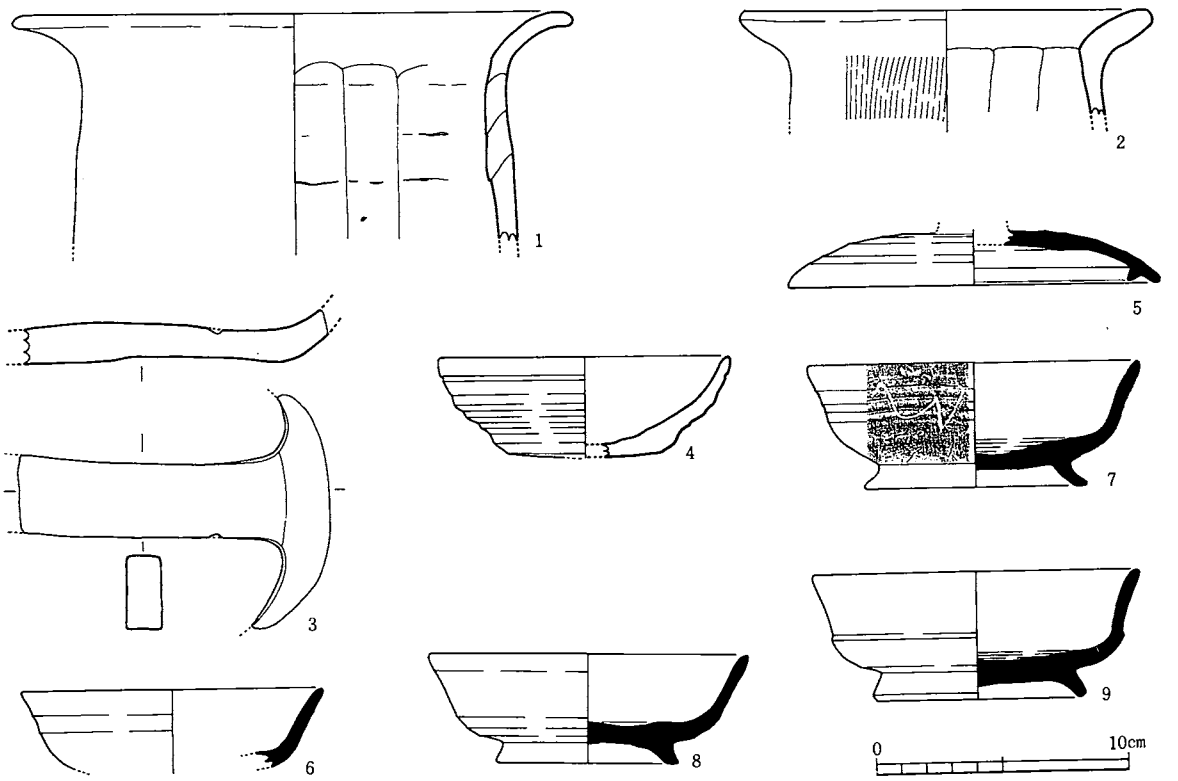
竈の東側、住居址の北東隅に貯蔵穴がある。東西80～96cm、南北60cm前後の大きさで、不整な長方形（台形）プランを呈する。深さは床面から20cm前後を測り、中から土器片が3点出土した。55年度に調査した15軒の7世紀代住居址の中で貯蔵穴を伴う唯一の例である。

〔出土遺物〕（第60図）

竈の東側、貯蔵穴付近にやや遺物が集中しているが、散発的な出土である。この時期の住居址としては出土量が多い。



第59図　F-2-5号住居址竈実測図



第60図　F-2-5号住居址出土遺物実測図

1は口径22.3cmを測る甕で、口縁部は大きく外反し、胴部上半はほぼ垂直に立っている。外面は横ナデ調整を加え、胴部内面はヘラ削りされている。胴部内面には粘土接合面が良く観察される。胎土・整形・焼成ともに良く、硬質で明褐色を呈する。2は口径19.4cmの小型の甕で、口縁部は器壁が厚く、大きく外反している。胴部外面は荒い刷毛目、内面はヘラ削り調整である。胎土に微砂粒を含むが、焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。

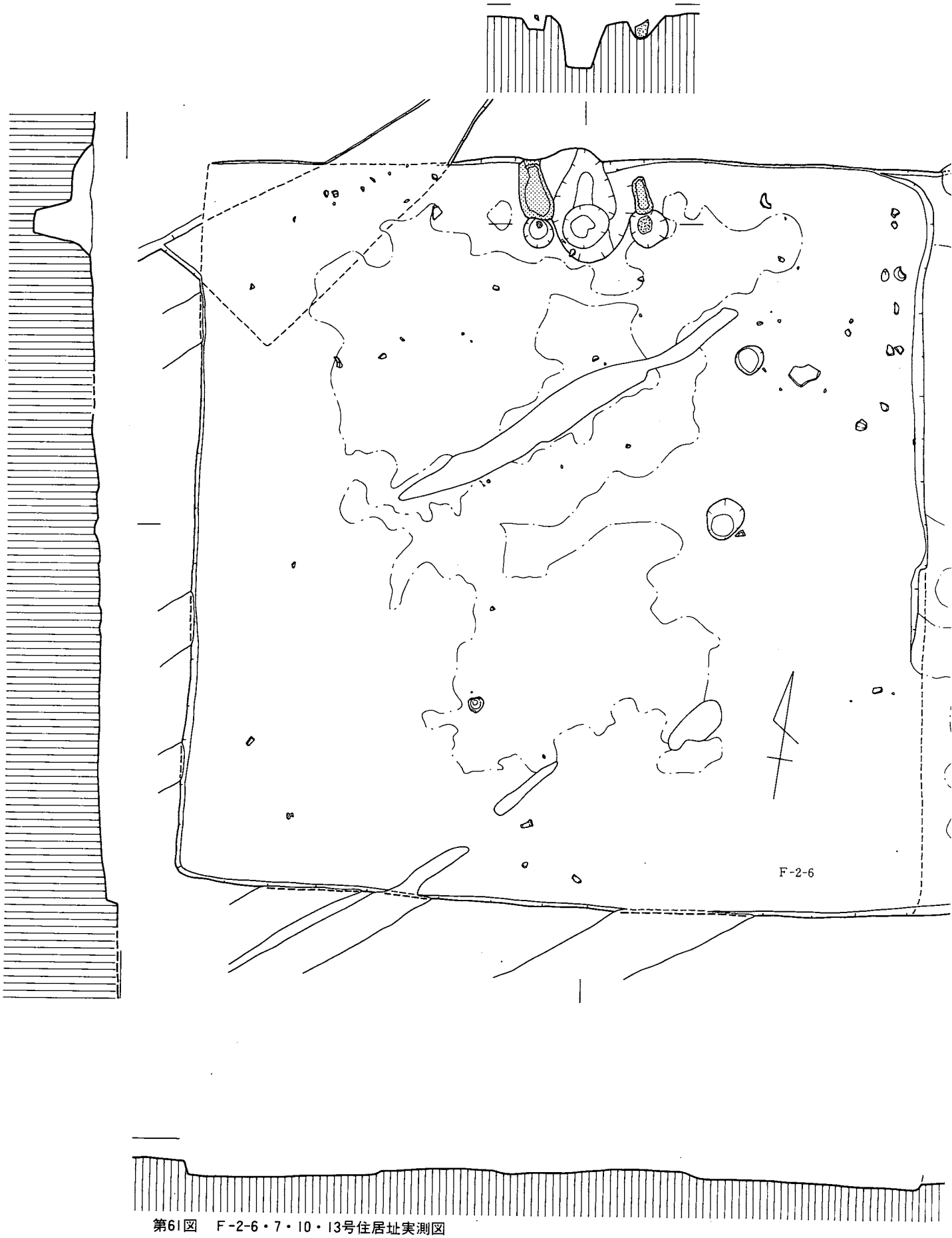
3は甑の底部破片で断面長方形の桟をもつ。胎土は良いが焼成がやや悪く、軟質で器面が荒れている。

4は復原口径11.7cmの杯で、底部は平高台状に突出する。体部内外面は丁寧な横ナデ調整であるが、外面には凹凸が多い。胎土・整形は良いが焼成が不良で、部分的に二次熱を受けていることもあり器面が荒れている。

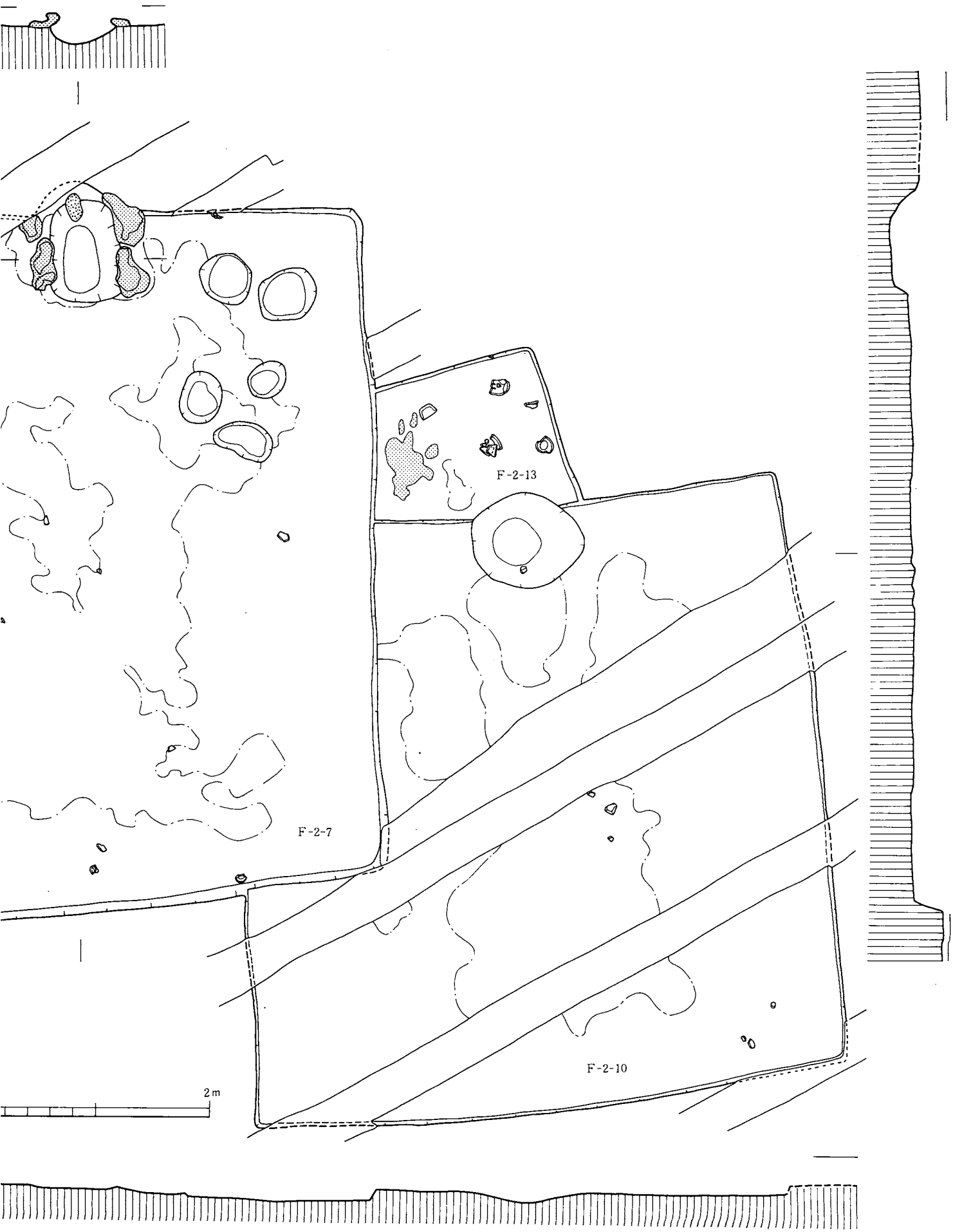
5は約$\frac{1}{2}$が遺存する。口径14.8cmを測る蓋で、天井部にはつまみの接合痕跡がわずかに残る。内面のかえりは比較的大きく、天井部のヘラ削りも丁寧である。やや軟質ではあるが、胎土・整形・焼成ともに良く、灰色を呈する。

6～9は高台杯で、高台や体部の形状はわずかに異なるが、基本的な特徴は同一である。6は底部を欠失するが、胎土・整形・焼成ともに良く、硬質で灰色～黒灰色を呈する。7は体部の約$\frac{1}{2}$を欠失する。底部から体部外面に黄緑褐色の自然釉が付着し、倒立して焼成されている。体部外面にW字形のヘラ記号を有する。8は約$\frac{1}{2}$大の破片であるが、やや軟質で灰白色を呈する。胎土・整形は良く、復原口径は12.8cmを測る。9は体部の約$\frac{1}{2}$を欠失し、全体にややひずみがある。底部と体部の境に段をつくり、体部はわずかに外反して延びている。胎土・焼成は良く、灰色を呈する。

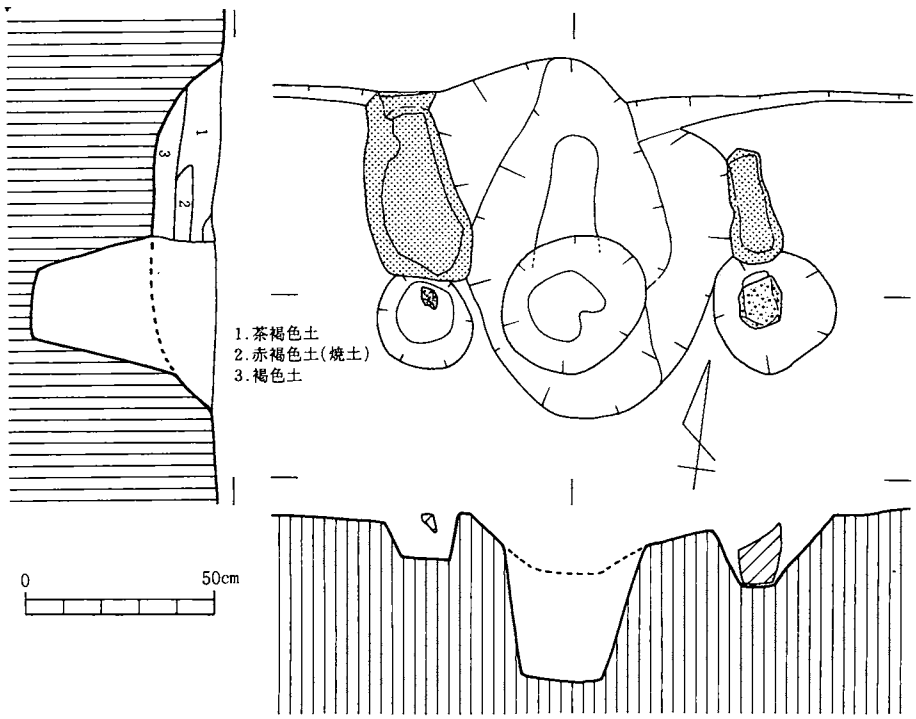
その他、須恵器の甕・高杯が出土しているが、いずれも小破片である。



第61図　F-2-6・7・10・13号住居址実測図


F-2-13
F-2-7
F-2-10
2m

(11) F－2－6号住居址（第61・62図）



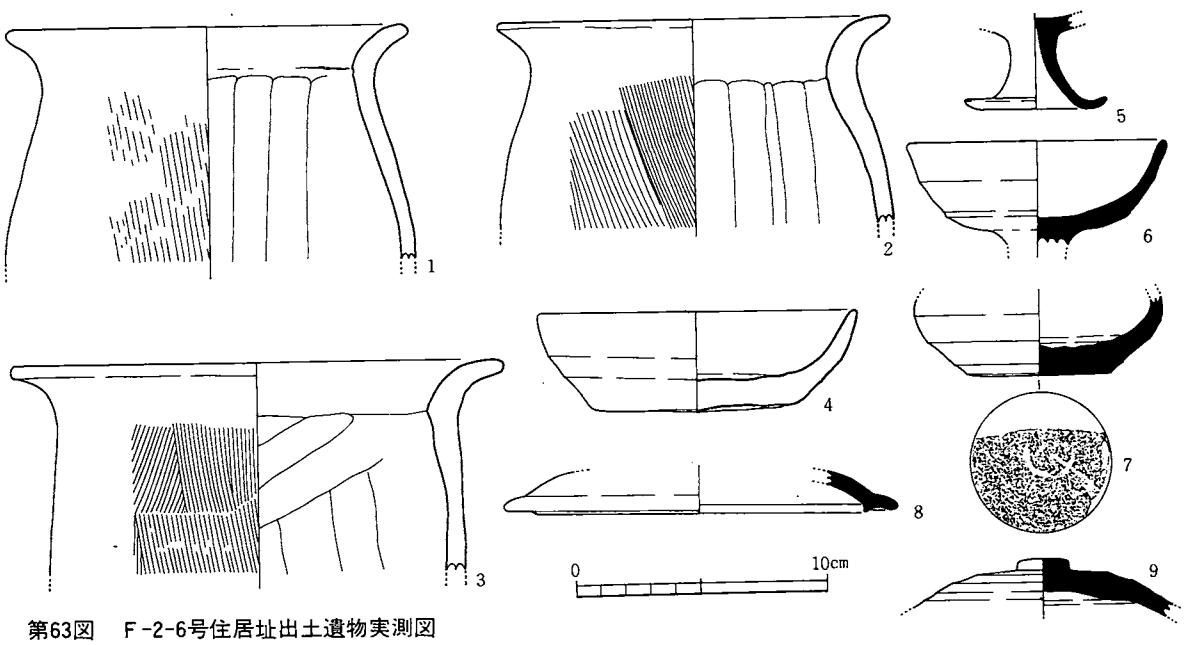
第62図　F-2-6号住居址竈実測図

F－2区の東側には7世紀代の住居址が4軒重複しているが、6号住居址が最も新しく、4軒の中では最も西側に築かれている。これら4軒の住居址の新旧関係は、13号→10号→7号→6号の順に築かれたものである。

6号住居址は東西6.1～6.3m、南北6.1～6.25mを測る大型の方形プランを呈する。上部からの削平が著しく、壁高は10cm前後を測るにすぎない。

竈は北辺に設けられており、竈の構造が良く窺い知れる。中央部に浅い楕円形の掘込みをし、その左右に白色粘土による袖を造っている。左右の袖の前面には円形のピットを穿ち、凝灰岩製の支柱を埋め込んでいる。両支柱の中間は一段と深く掘り込まれているが、これは後世のものである。凝灰岩支柱は、左側のものは細片が残っているにすぎないが、右側のものは六面体の柱状を呈している。

硬化面は竈の部分から南側にかけて広がっている。柱穴は東側に2個が検出された。他は確認できず、配置等は不明である。



第63図　F-2-6号住居址出土遺物実測図

〔出土遺物〕（第63図）

この時期の住居址としては出土量が多いが、出土状態は散在しており、住居址の各所から出土している。遺物の中には５世紀代の土師器、縄文土器がわずかに混入していた。

１～３は土師器の甕であるが、形態的には１・２が類似し、３は胴部の張りが少ない。口縁部はすべて大きく外反しており、底部は平底状の丸底になるものと考えられる。調整技法は、胴部外面は縦方向の刷毛目、胴部内面はヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ調整である。１の胴部外面には刷毛目のあと軽いナデ調整が加えられている。いずれも煮沸によって変色し、煤の付着や器面荒れがみられる。

４は口径12.2cm、器高3.9cmを測る平底の杯で、胎土は良いが整形・調整はやや雑で、焼成も良くない。底部はヘラ切り離しのまま未調整で、小さな凹凸が多い。

５は小型高杯の脚部である。脚部下端は大きく反り返っている。脚部内外面に自然釉が付着し、外面は黒色・黒灰色、内面は緑茶灰色・灰色を呈する。胎土・整形・焼成ともに良く、硬質である。６は高杯の杯部で、約$\frac{1}{2}$が遺存する。胎土・整形は良いが、焼成が悪く、軟質で淡灰褐色を呈する。外面は器面が荒れているが、内外面とも横ナデ調整であろう。

７は小壺の底部で、復原底径は5.7cmを測る。底部は平底で、胴部中位はかなり強く弯曲している。底部にヘラ記号がある。

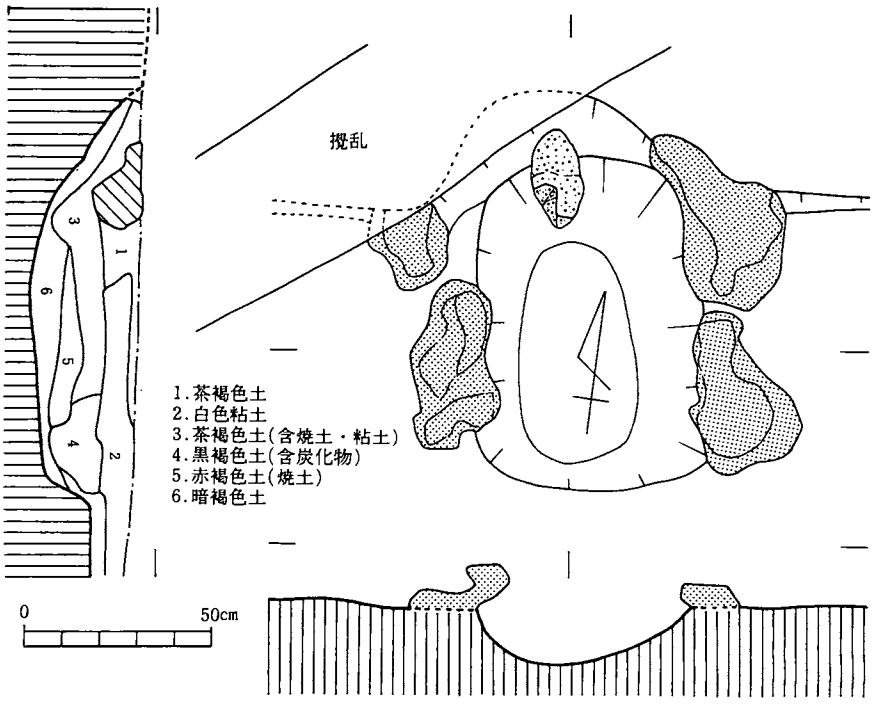
８・９は蓋の破片で、８は小破片からの復原である。８は復原口径15.7cmを測るが、小破片のため不正確である。天井部は丸味を帯び、内面のかえりは比較的強く突出している。９は天井部の破片で、つまみは円柱状を呈し、かろうじて実用に耐え得る程度である。天井部の中心寄りはヘラ削り調整されているが器壁は厚く、焼成も悪くやや軟質である。

その他、刀子の破片が１点出土している。身幅の細い（６mm）もので、切先部の小破片である。

⑿　Ｆ－２－７号住居址（第61・64図）

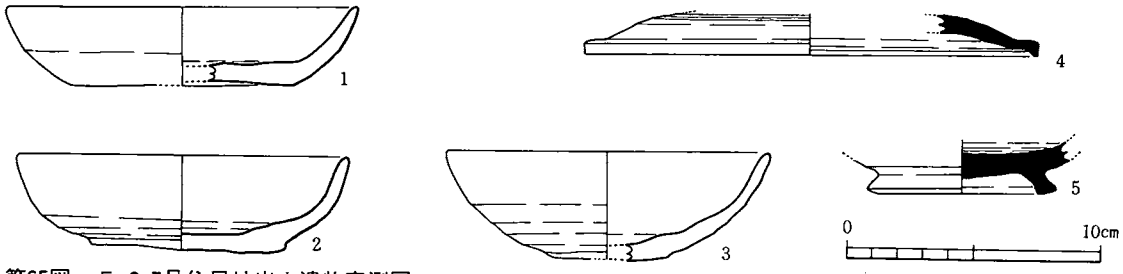
Ｆ－２－６号住居址の東側に位置し、Ｆ－２－６号住居址により切られている。６・７号住居址の方位はほぼ一致しており、７号住居址を西側へ平行移動した位置に６号住居址が位置する。

南北6.0～6.2ｍを測るが、東西幅は６号住居址によって切られているため不明である。竈が北辺の中央部に位置するのであれば、東西幅は５ｍ前後と推定されるが、この時期の住居址は方形プランに近いものが多いので、竈の位置が多少東側へずれている可能性が強い。



第64図　Ｆ-2-7号住居址竈実測図

竈は北辺に設けられ、



第65図　F-2-7号住居址出土遺物実測図

北端の煙出し部分はゴボウの耕作による撹乱を受けているが、左右の粘土袖の一部は比較的良く残っている。中央部の掘込みは南北に長い楕円形で、その北端から凝灰岩片が出土した。袖の芯に使用されていたものであろうが、本来の位置は留めていない。

硬化面は竈から南側にかけて広がり、北東隅に５個の柱穴が検出された。他の柱穴は未確認で、配置等は不明である。

〔出土遺物〕（第65図）

遺物量は少なく、出土地点も散在している。図示したものの他、土師器の甕、須恵器の高杯・甕などの細片があり、５世紀代の土師器片もわずかに混入していた。

１・２は土師器の杯で、底部の形態がわずかに異なる。１は胎土・焼成は良く硬質であるが、整形はやや雑である。底部はヘラ切り離しの後にわずかにナデを加えているが、小さな凹凸がある。２の底部は平高台状に突出している。１に比べて整形・調整は丁寧であるが、焼成が悪く、軟質のため器面が荒れている。３も土師器の杯であるが、１・２とは形態が異なる。約$\frac{1}{4}$大の破片であるが、全体的に丸味を帯び、半球形に近い。底部はわずかに平底であるが、不安定である。胎土・整形・焼成は良く、明赤褐色を呈する。

４は須恵器の蓋で、小破片からの復原であるが、復原口径17.9cmを測る。天井部にはやや丸味があり、先端部の屈曲は強い。

５は高台杯の底部破片で、高台は外開きで安定している。胎土・整形・焼成ともに良く、硬質で青灰色を呈する。

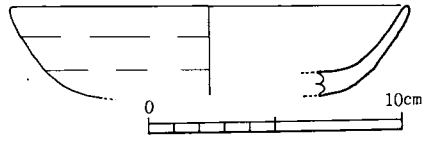
(13)　Ｆ－２－10号住居址（第61図）

Ｆ－２－13号住居址を切って築かれ、Ｆ－２－７号住居址に切られている。７号住居址によって西北隅の約$\frac{1}{8}$を切られ、東北一西南にゴボウの耕作溝が３条走っている。

東西・南北とも幅5.1～5.2ｍを測り、方形プランを呈する。掘込みは浅く、壁高は10cm未満である。

竈は北辺に設けられているが、東西に長い楕円形の浅い凹状の掘込みが残るだけで、粘土袖などは遺存していない。掘込みは東西約１ｍ、南北約80cmを測り、深さは中央部で約10cmである。この掘込みは、他の住居址では竈の主軸方向に長いが、この場合は直交方向に長い。

硬化面は竈から南側にかけて広がるが、やや断続的である。柱穴は１個も確認されていない。



第66図　第66図　F-2-10号住居址出土遺物実測図

〔出土遺物〕（第66図）

総点数は20点に満たず、すべて土師器である。この中には５世紀

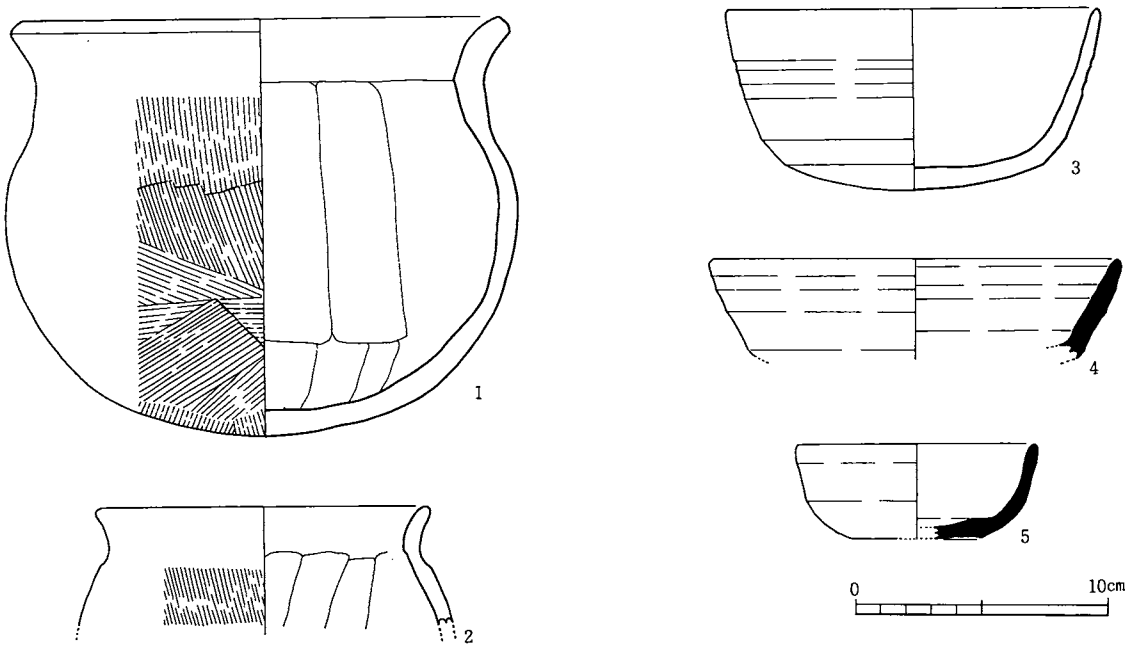
代の混入遺物も半数ほどあり、住居址に伴う遺物は少ない。

7世紀代の土師器には杯身と甕があるが、甕は胴部の破片である。図は約$\frac{1}{6}$大の破片からの復原であるが、復原口径15.7cmを測る。内外面とも横ナデ調整であるが、焼成がやや悪く、軟質のため器面が荒れている。

(14) F－2－13号住居址（第61図）

F－2－7号住居址によって西側を、F－2－10号住居址によって南側を切られており、北東隅のごく一部が残っているにすぎない。

竈も遺存しないが、検出部分の西端に白色粘土が認められ、竈の袖に使用されていたものであろう。



第67図　F-2-13号住居址出土遺物実測図

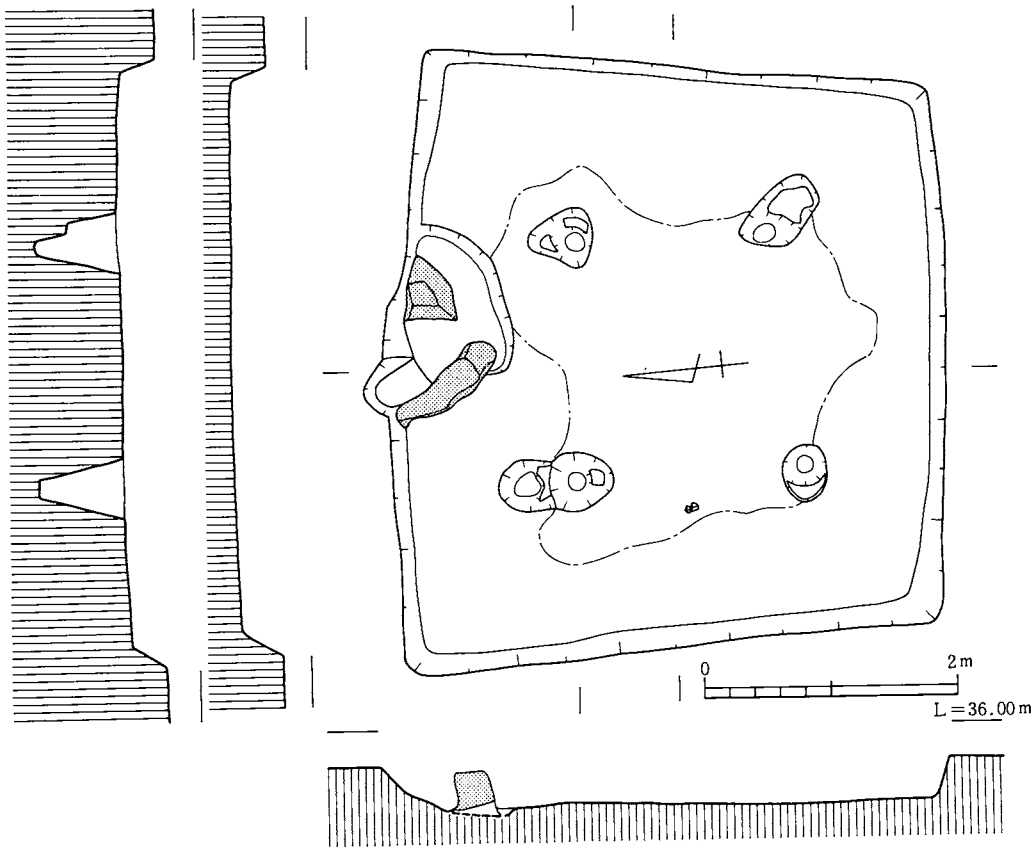
〔出土遺物〕（第67図）

住居址の遺存面積が狭少である割にはまとまった資料が出土している。7世紀代の土師器・須恵器の他、5世紀代の土師器も混入していた。

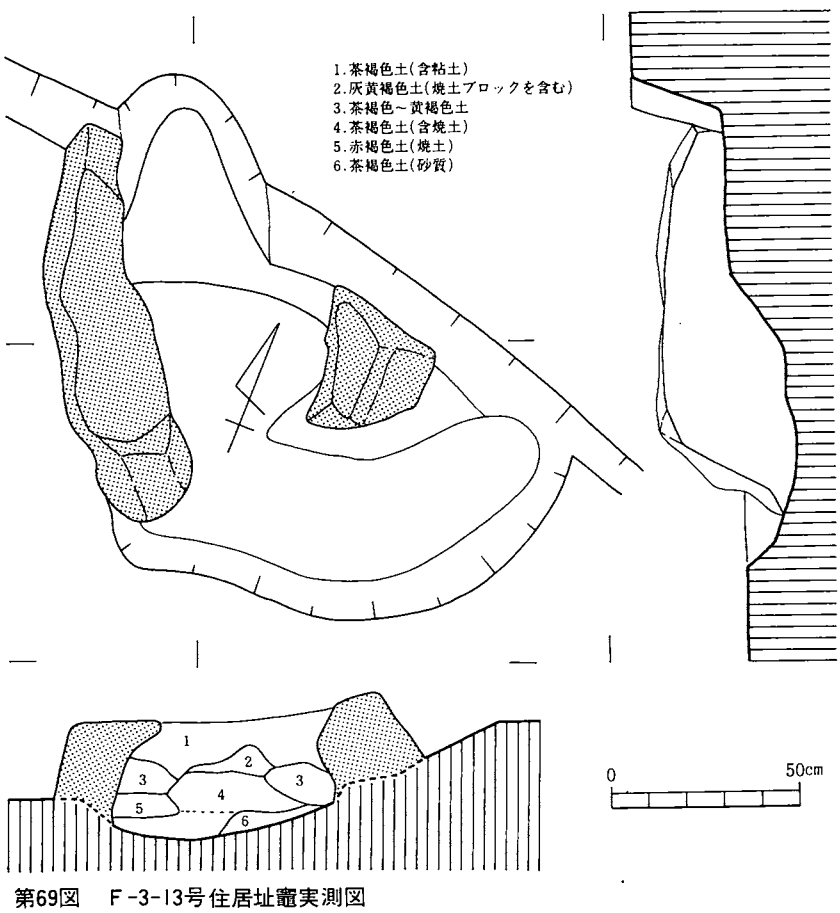
1は全体の約8割程度が復原できた。口径19.8cm、器高16.5cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、胴部の張りは少なく、丸底である。胴部内面はヘラ削りされているが、器壁は厚い。煮沸に供されているため、外面には煤が付着し、赤褐色に変色している部分もある。2は復原口径13.3cmを測る小型の甕で、外面は煮沸により器面が荒れている。器壁は薄くヘラ削りされている。

3は口径14.8cm、器高7.1cmを測る鉢で、ほぼ完形に復原できた。他に同様な個体の破片がある。底部はやや丸味をおびた平底で、体部は深く斜め上方にのびる。胎土・整形は良いが、焼成がやや悪く、軟質のためやや器面が荒れている。色調は明赤褐色を呈する。

4は高台杯の体部の小破片で、胎土・整形・焼成ともに良く、灰色を呈する。やや浅めの器形で、体部下端は強く屈曲するものと考えられる。5は小型の平底の杯で、還元不良のため淡灰褐色を呈する。約$\frac{1}{2}$大の破片で、口径9.6cm、器高3.7cmを測る。底部はヘラ切り離しのあとナデ調整を加えている。



第68図　F-3-13号住居址実測図



第69図　F-3-13号住居址竈実測図

(15)　F－3－13号住居址（第68・69図）

F－3区の西南隅に位置し、住居址の一部はE－2・E－3・F－2区にかかっている。南側に位置するE－2－7号住居址とは、約3mの距離がある。

ゴボウの耕作溝などによる撹乱もなく、遺存状態はきわめて良い。北側での東西幅4.9m、南側での東西幅4.3m、南北長4.3～4.4mを測り、わずかに隅丸の台形プランを呈する。壁高も高く、30cm前後を測る。

竈は北辺のほぼ中央部に設けられ、左右に粘土袖が遺存しているが、袖の位置

がわずかにずれており、本来の姿を止めてはいない。竈の掘込みは不整形で、床面から約10cmの深さで掘込まれている。この掘込みには焼土や粘土のブロックが充満していた。

柱穴は4個が検出され、典型的は4本柱である。柱穴の深さとは70cm前後を測り、北西のものは2個が重複している。

硬化面は住居址のほぼ中央部、4本の柱穴を結ぶような形で確認された。

〔出土遺物〕

住居址の遺存状態が良かった割には遺物が少なく、須恵器杯の細片が1点出土したにすぎない。小型の平底の杯身であるが、小破片であり、図化はできない。

3．墳　墓

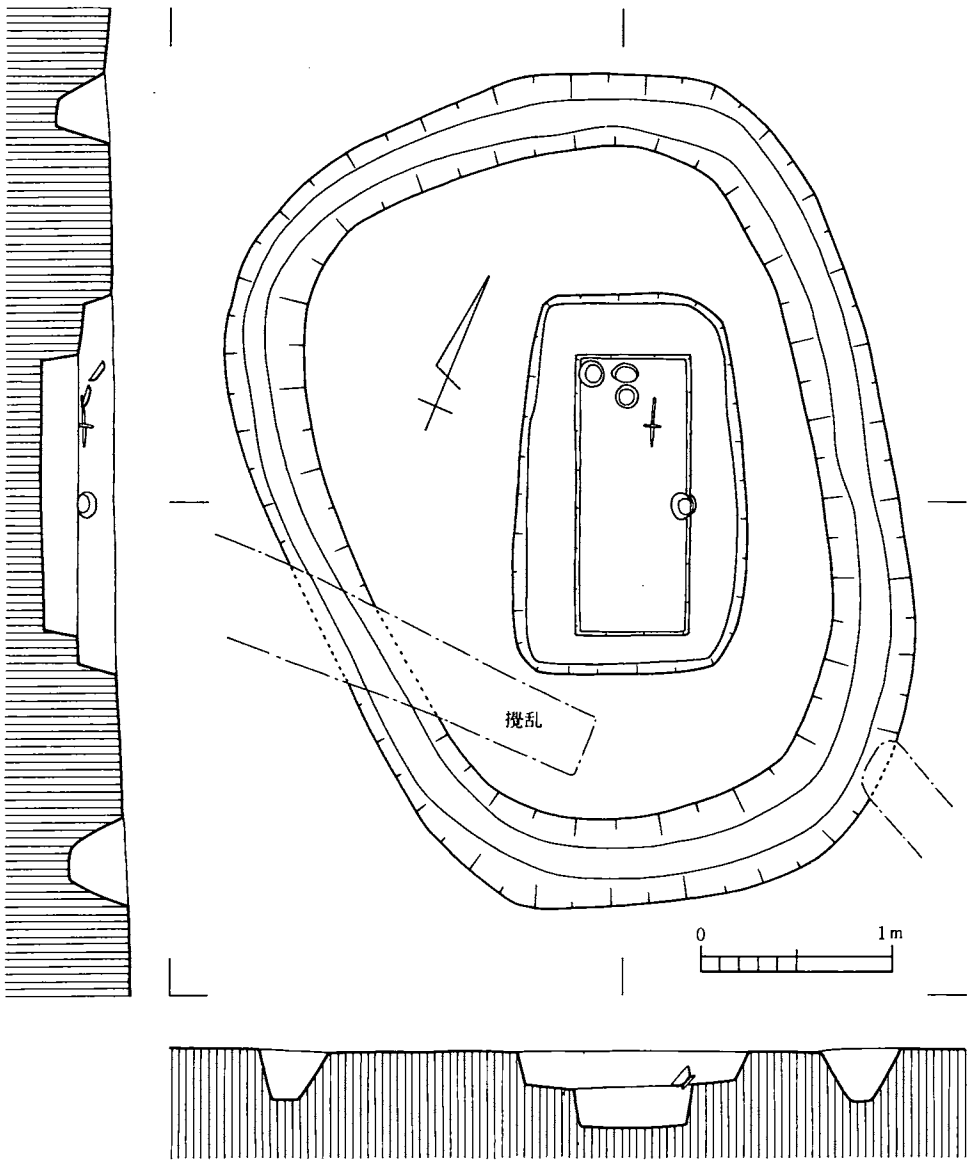
歴史時代の墳墓として周溝墳墓１基、土壙墓２基が検出された。周溝墳墓がＩ－10区、土壙墓がＣ－10区、Ｇ－１区に位置しており、きわめて散発的な分布状態である。年代をみても２基が７世紀・10世紀に属するが、他の１基は不明で、同一時期のものではない。

(1)　周溝墳墓（第70・71図）

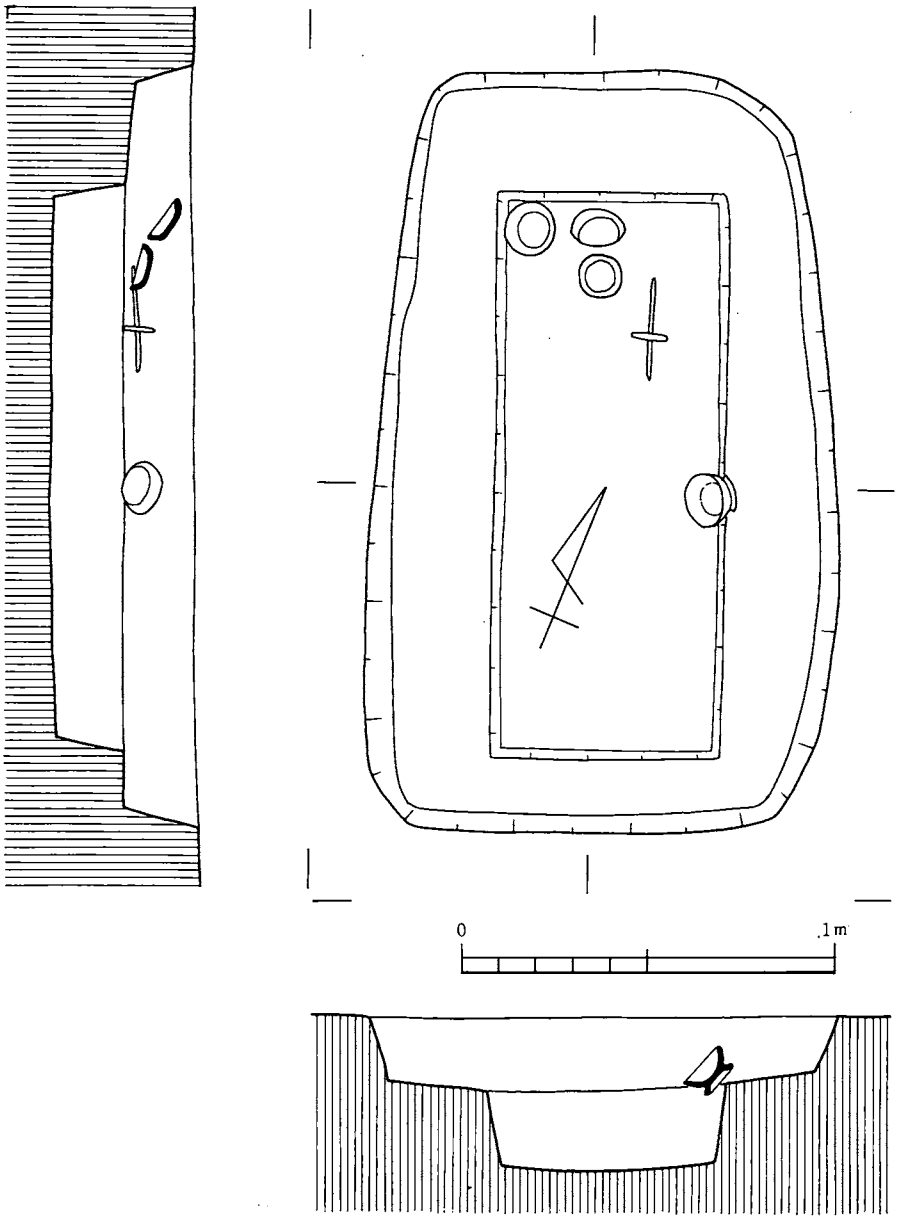
55年度調査区の東北端に位置し、古墳時代の住居址群、古墳群の間に造られているが、他の遺構との重複関係はない。

不整形な周溝を巡らし、木棺墓を主体部とする墳墓である。類例の少ない遺構であるが、周溝墳墓と呼ぶこととした。

周溝の外径は長さ4.4ｍ、最大幅3.3ｍを測り、平面形は不整な楕円形（卵形）を呈している。周溝は幅34



第70図　周溝墳墓実測図



第71図　周溝墳墓主体部実測図

～54cm、深さ30cm前後を測り、連続して掘られている。

畑地の中に埋没して発見され、上部は耕作などによって削平を受けており、墳丘の有無、規格などについては確認できないが、低墳丘があったものと想定される。

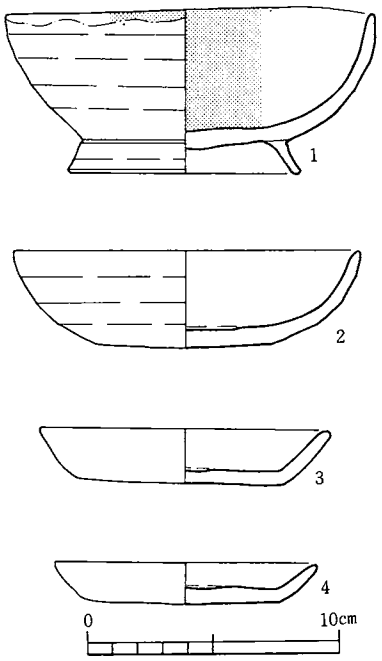
周溝で区画された面のほぼ中央に主体部が位置するが、主体部主軸（N－22°－W）と周溝主軸（N－41°－W）とはわずかにずれている。主体部は二段掘の土壙で、木質部などは遺存していないが、木棺墓と考えられる。一段目（外側）の土壙は隅丸長方形を呈し、長さ２ｍ、最大幅1.25ｍを測る。二段目（内側）の掘込みは長方形を呈し、長さ1.5ｍ弱、幅60cm前後を測り、掘込みの角度は急である。

副葬品として土器４点と鉄製品１点が出土した。いずれも内側の土壙の上面近くにあり、木棺上に置かれていたものと考えられる。木棺の腐朽に伴って若干の移動はあったであろうが、ほぼ埋葬時の位置と考えてよかろう。

内側の土壙の北西端には土師器の杯が１点と皿が２点、いずれも底部を上にして逆さに置かれていた。その東側には鉄製紡錘車があり、内側の土壙の東肩の中央部近くに黒色土器の椀が出土した。土壙中は撹乱を受けておらず、これらは一括資料と見做される。土器の形態や技法から、10世紀の年代が与えられよう。

〔出土遺物〕（第72～73図）

黒色土器（１）　内黒（黒色土器Ａ）の椀で、口径14.7cm、器高6.5cm前後を測る。高台はハの字形に開き、体部は丸味をもつ。体部内面と外面の上位約$\frac{2}{3}$は横・斜め方向のヘラミガキが施され、器表は滑沢である。

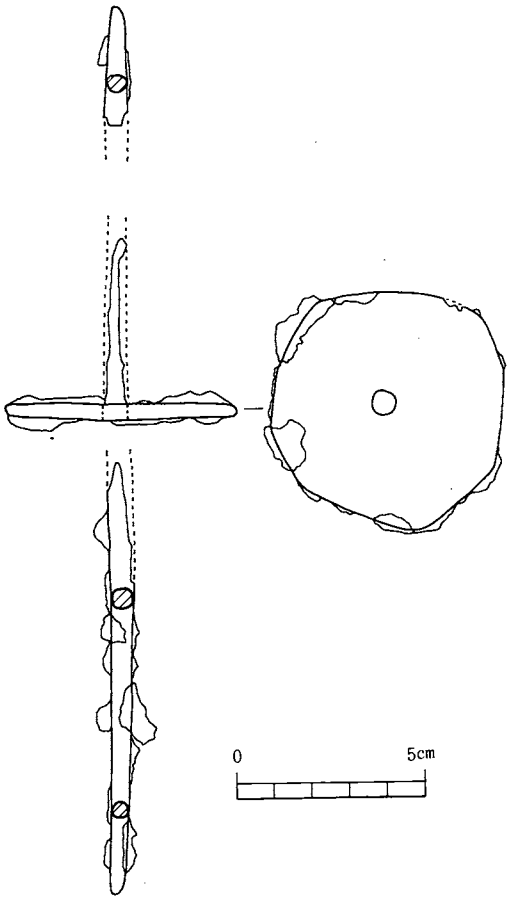


第72図　周溝墳墓出土土器実測図

土師器（２～４）　杯（２）は口径13.5cm、器高3.8cmを測る。全体的に丸味を帯びた器形で、底部と体部の境は不明瞭である。焼成不良のためやや軟質で、色調は明褐色を呈する。

皿（３・４）は法量にわずかに差があり、３は口径11.5cm、器高1.6cm、４は口径10.4cm、器高1.6cmを測る。底部はヘラ切り離しで、体部内外面は横ナデ、内底面は不定方向のナデ調整である。３は明褐色、４は淡赤褐色を呈し、いずれも焼成は良好である。

鉄製品（第73図）　鉄製紡錘車が１点出土した。出土時はほぼ原形を保っていたが、その後の劣化によって棒部は破損してしまった。出土時の長さは約25cm、直径４～６mmを測った。



第73図　周溝墳墓出土鉄製品実測図

(2)　G－１－１号土壙墓（第74図）

55年度調査区の東南端に位置し、周囲には５～７世紀代の住居址群がある。とくに、G－１－２号住居址とは約20cmの近距離にあるが、他の遺構との重複関係はない。

ゴボウの耕作によって一部に撹乱を受けているが、平面形は不整な隅丸台形を呈する。確認面での最大長2.16m、幅１m前後、深さ28～32cmを測り、床面はほぼ平坦である。

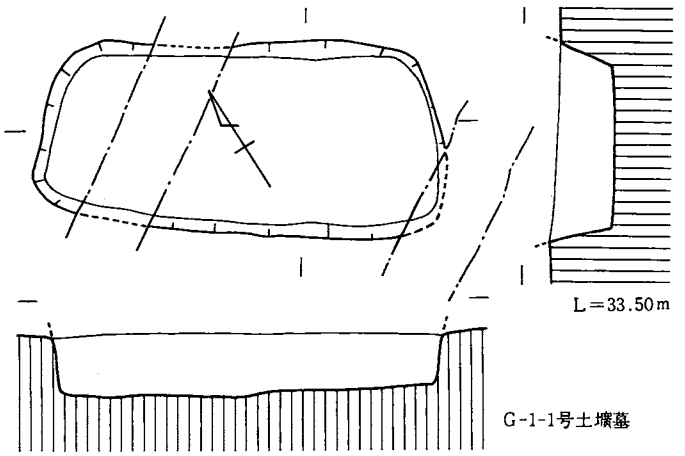
この土壙からは人骨や副葬品の出土はないが、住居址などに伴う該種の土壙が発見されていないため、その形状などから土壙墓と推定した。

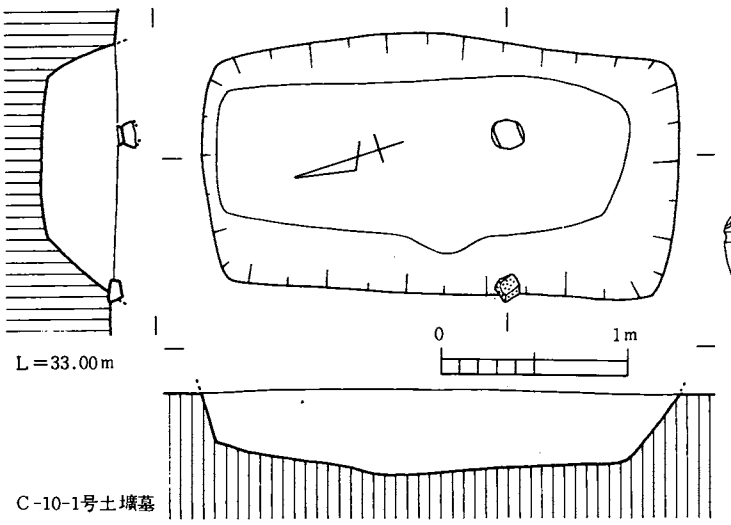
(3)　C－10－１号土壙墓（第74図）

C－10区の西端部に位置し、C－10－１号住居址の覆土の中に掘り込まれている。古墳群に比較的近く、最も近距離の５号墳まで約28mを測る。

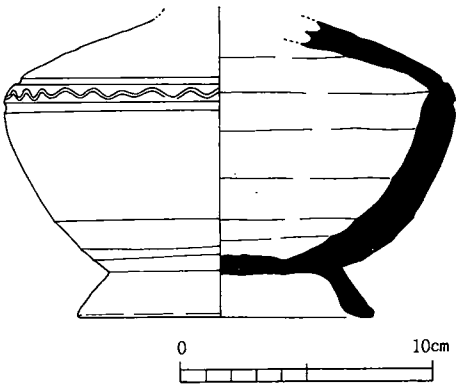
土壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ2.52m、幅1.2～1.35mを測る。住居址の覆土中にあったため上部の検出が困難であったが、確認面での深さは36～44cm前後を測る。土壙底は住居址の床面を掘抜き、ローム層に達していた。

土壙内から人骨などは検出されなかったが、土壙の上面から安山岩礫と須恵器が出土している。





第74図　土壙墓実測図



第75図　C-10-1号土壙墓出土須恵器実測図

〔出土遺物〕（第75図）

須恵器は副葬品と考えられ、器形は台付長頸壺である。頸部から上を欠失しているが、胴部はほぼ原形に復原できた。高台は比較的高く、ハの字形に開いている。胴部は肩部が強く屈曲し、肩部に２条の沈線を巡らす。沈線の間には１条の波状文を施している。胴部下半の外面はヘラ削り調整であるが、器壁はきわめて厚い。胎土に砂粒を多く含み、焼成不良のため淡灰色を呈し、軟質である。器形の特徴からみて、７世紀前半～中葉に比定されよう。

４．掘立柱建物

Ｂ－１区、Ｂ－２区に80個以上の柱穴が検出された。Ｂ－１区ではＢ－１－１、Ｂ－１－２、Ｃ－１－４、Ｂ－１－５号住居址の間の空間に62個が集中し、Ｂ－２区ではＢ－２－２号住居址の周辺に18個が検出された。柱穴の規模（径・深さ）、配列はまちまちで、いずれも建物を復原するには至らなかった。

柱穴の中からは、凸帯付胴張壺（調査中盗難に遇い、紛失した。）、平底の杯（第79図38）などが出土しており、奈良期のものと平安期のものとが混在しているようである。

5．道路遺構

調査区の西端に南北方向に延びる道路が検出された。道路の西側はやがて傾斜変換点となり、谷へと落込む。すなわち、この道路は台地の縁に沿って走っている。

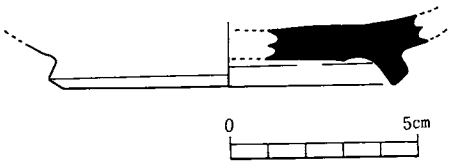
遺構の埋没面は比較的浅く、耕作などによる削平を受けており、遺存状態は良くなく、断続的である。A－1区からA－2区にかけて検出した3条を東から西へ道路1～3、B－10区の2条を東から道路4・5、C－11～12区の東側2条を東から道路6・7として説明を加える。

道路1　わずかに弧を描いて延びており、断続的に約11.5mを確認した。表土を除去した段階で硬化面が現われ、遺構面が浅いため遺存状態は良くない。硬化面の幅は40～70cmであるが、削平を受けているため本来の数値ではない。硬化面は第II層（黒褐色土）の上面にあり、層位的にみて古代以降のものと考えられる。

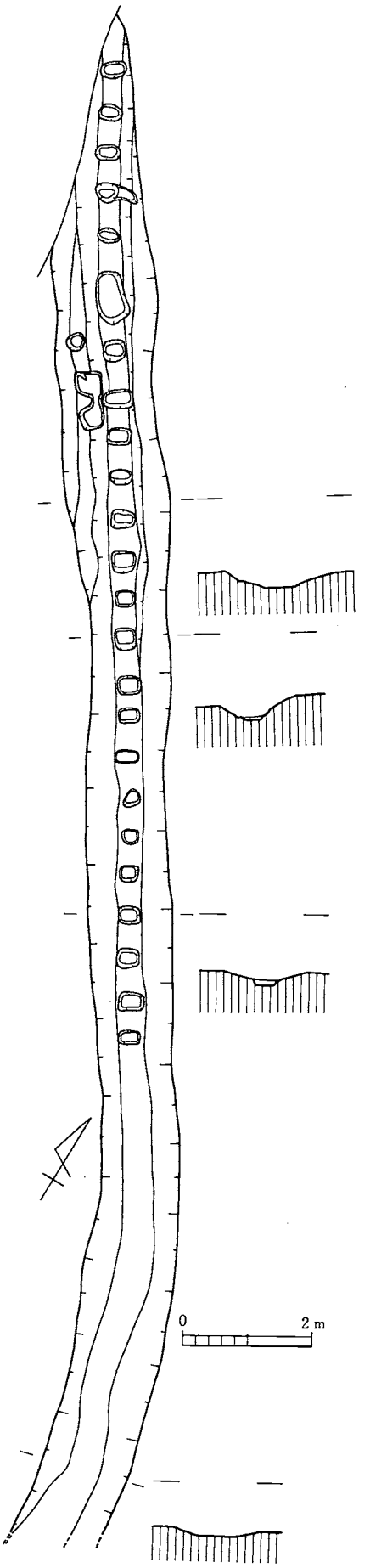
道路2　道路1の西側に約17mの長さを確認した。北側の約9mは溝状となり、溝の上幅は90～140cmを測る。南側は削平が著しく、幅40～50cmの硬化面が確認されたにすぎない。溝の北東方面から砂岩礫が出土したが、その他の遺物はない。

道路3（第76図）　道路2と交差しており、道路2を切って造られている。約24mの長さを検出したが、北側は直線的で、南側は緩やかに弧を描いている。遺溝面は比較的深く、第III層（黄褐色土）から一部第IV層（ニガ土）に達している。全体の形状は溝状に掘込まれた凹道で、検出部分での上幅は1.1～1.6m、下幅は30～60cmを測る。検出部分の北側約14.5mの底面には浅い窪みがほぼ等間隔に掘られている。この部分は南側に比べるとやや傾斜が強く、滑り止めのものであろう。

道路3からは、須恵器・土師器が数点出土している。図化できたものは第77図に示した高台杯だけで、他は細片である。これらの遺物は奈良時代後半と考えられる。



第77図　道路3出土須恵器実測図



第76図　道路3実測図

道路4～7　表土を除去した段階で硬化面が確認されたもので、削平などによって遺存状態は良くない。道路5は約41mにわたってほぼ連続している。道路4と道路7は接続する可能性が強い。道路4～7と1～3との間は約160mの距離があり、直接の関係は不明であるが、道路1と4～7はきわめて類似した状態である。

6．歴史時代の遺物

調査区のほぼ全域から歴史時代の遺物を出土しているが、量的には少ない。傾向としては調査区の南半分位に比較的多く、6～7世紀の住居址、掘立柱建物などの分布とほぼ符号している。これらの遺物の大半は、第II層の包含層や他時代の遺構覆土中からの出土品であるが、建物を復原できない柱穴などの出土品も含めて報告する。

(1)　須恵器（第78～81図）

歴史時代の遺物の中では最も量が多く、時期的には7～10世紀の幅がある。器種としては蓋、杯類、椀、盤、壺類、鉢、甕がある。

蓋（第78図1～33）

法量や器形によって数種に分類できる。1～5は内面にかえりをもつ蓋で、7世紀代の住居址からの出土品と同類である。いずれも小破片からの復原図で、口径はやや不正確であるが、大小の器形がある。内面のかえりにも相異があり、小さな時間差があるものと考えられる。

6～8はつまみをもつ蓋であるが、7・8のつまみは剝落している。6のつまみは大型の擬宝珠形で、天井部は水平に延びている。

9・10は小型の蓋で、端部は直角に折れている。この種の蓋の出現は7世紀代にあるが、他の器種との共伴関係が明らかではなく、8世紀に下る可能性もある。同様な特色は12・13にもみられ、同時期の所産と考えてよかろう。

14～24は、端部の形態などに差異があるが、奈良時代に属する蓋である。25～33は平安時代前半に比定されよう。後者の端部は簡略化され、全体に造りが雑になっている。

平底杯（第79図34～38）

7世紀のもの（34・35）と9世紀のもの（36～38）がある。34は丸味をおびた器形で、器壁はきわめて厚い。36～38は同様な器形で、38の底部には墨書銘（安）が良く残っている。38は掘立柱建物の一部と考えられる柱穴から出土したもので、この遺跡における古代遺構の性格の一端を示すものである。

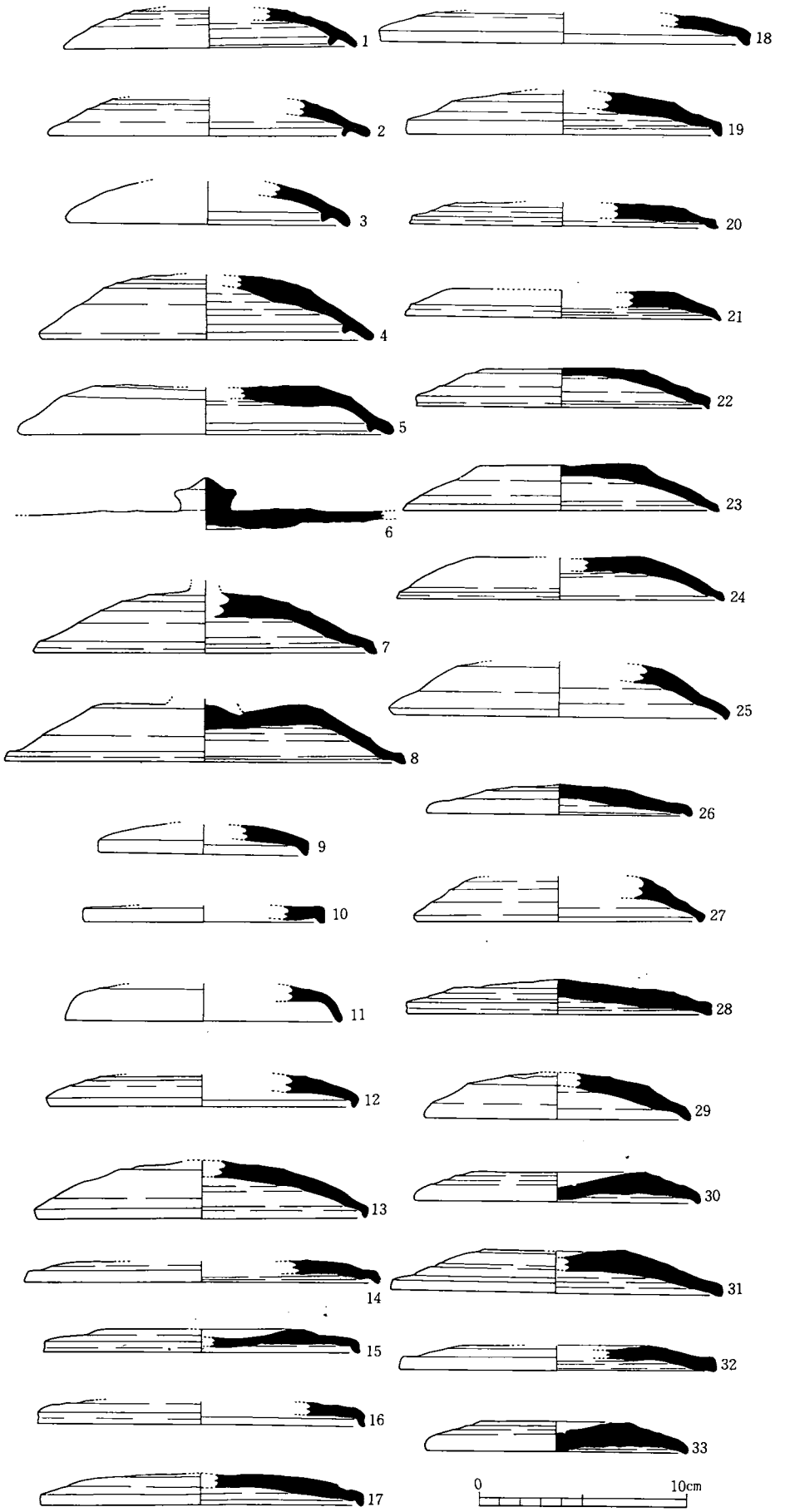
高台杯（第79図39～55）

40～44は7世紀代に属するもので、外開きの安定した高台と、張りのある体部に特色がある。各個体の造りは丁寧で、焼成も良い。43・44の内底部には鋭利な工具でのヘラ記号がある。

54・55の高台の下端部は外側から強くナデつけられ、畳付の部分は尖っている。この特徴が萩尾大溜池窯跡に認められることについてはかつて指摘したことがあるが、この2点は萩尾大溜池窯跡の製品と見做される。

椀（第79図56）

高台杯に比べて器高が1.5倍近い。高台部、体部の破片では両者の区別がつかない物も多い。



第78図　須恵器実測図

盤（第80図67～75）

法量の大小、器形（とくに体部の形態）など、各種のものが出土している。

壺（第80図76～87）

各種の器形があり、部分的な破片のみで全形を知り得るものはない。

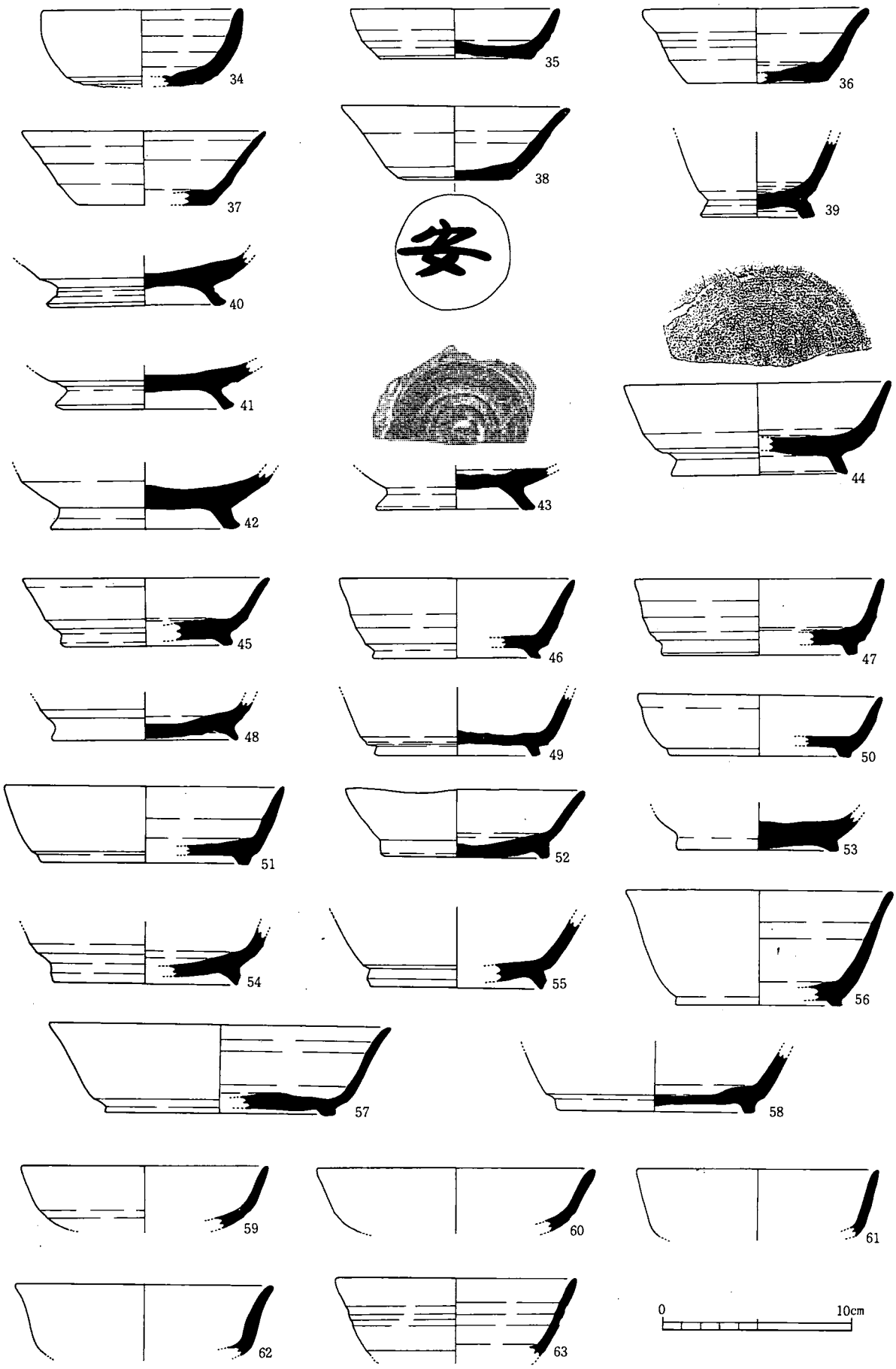
76は平底の小型壺で、肩の部分は逆くの字に折れている。

77は小破片であるが、肩部に凸帯を巡らした壺で、萩尾大溜池窯跡に類品がある。凸帯は高く、その基部には緑褐色の自然釉が付着している。

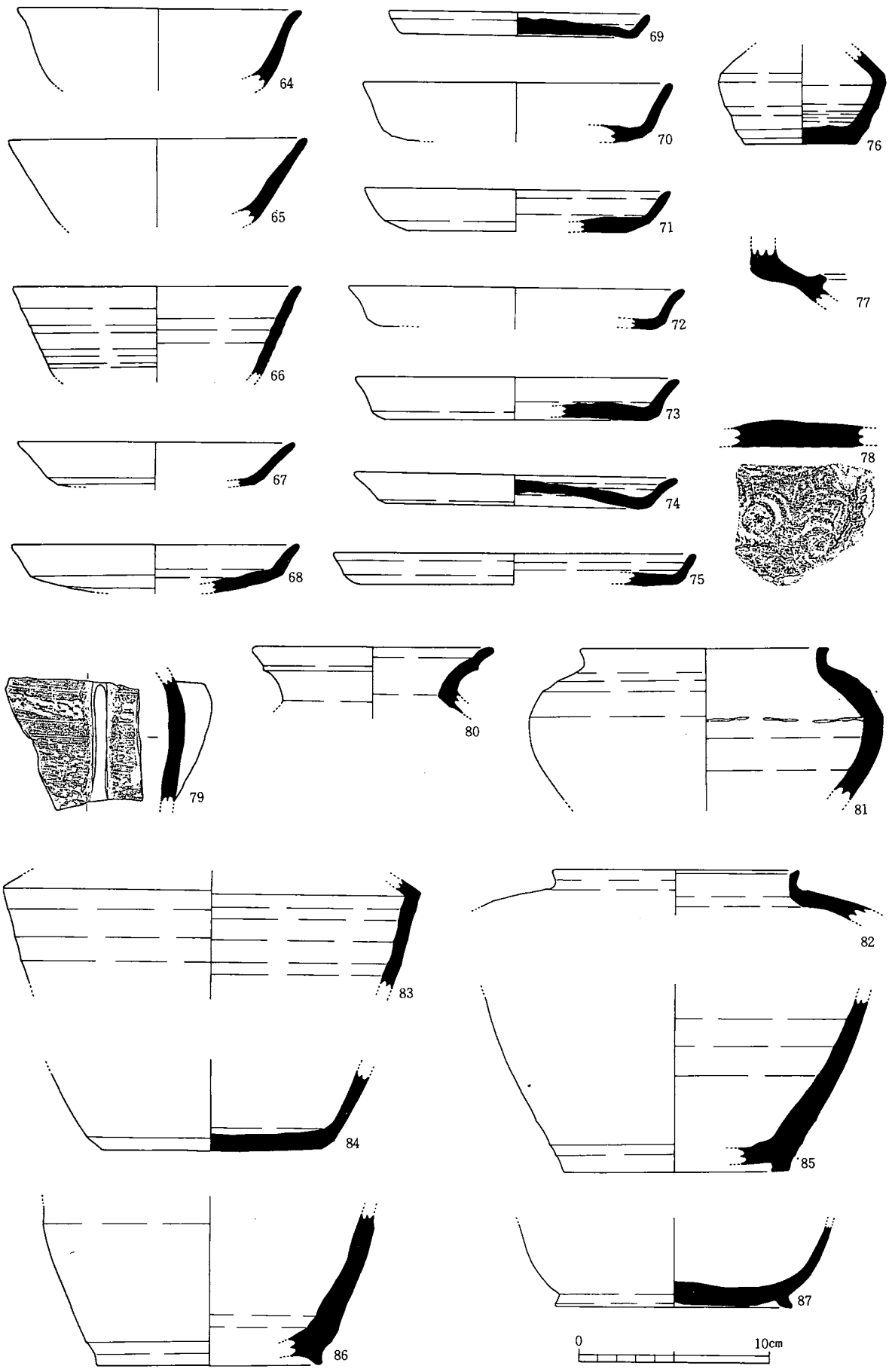
78は長胴壺の底部と考えられ、底部外面は同心円叩き目の上を軽くナデ調整を加えている。この技法は荒尾（小岱山）窯跡群の薬師前、北山浦、下谷窯跡のみに限られたものである。79は耳付の壺の破片で、これは78のような壺と組合さるものであろう。外面には格子叩き目、内面には布痕が観察される。

80は小型の広口壺で、口縁部は完存している。口径12.80cmを測り、口縁部は二重口縁風に屈曲している。

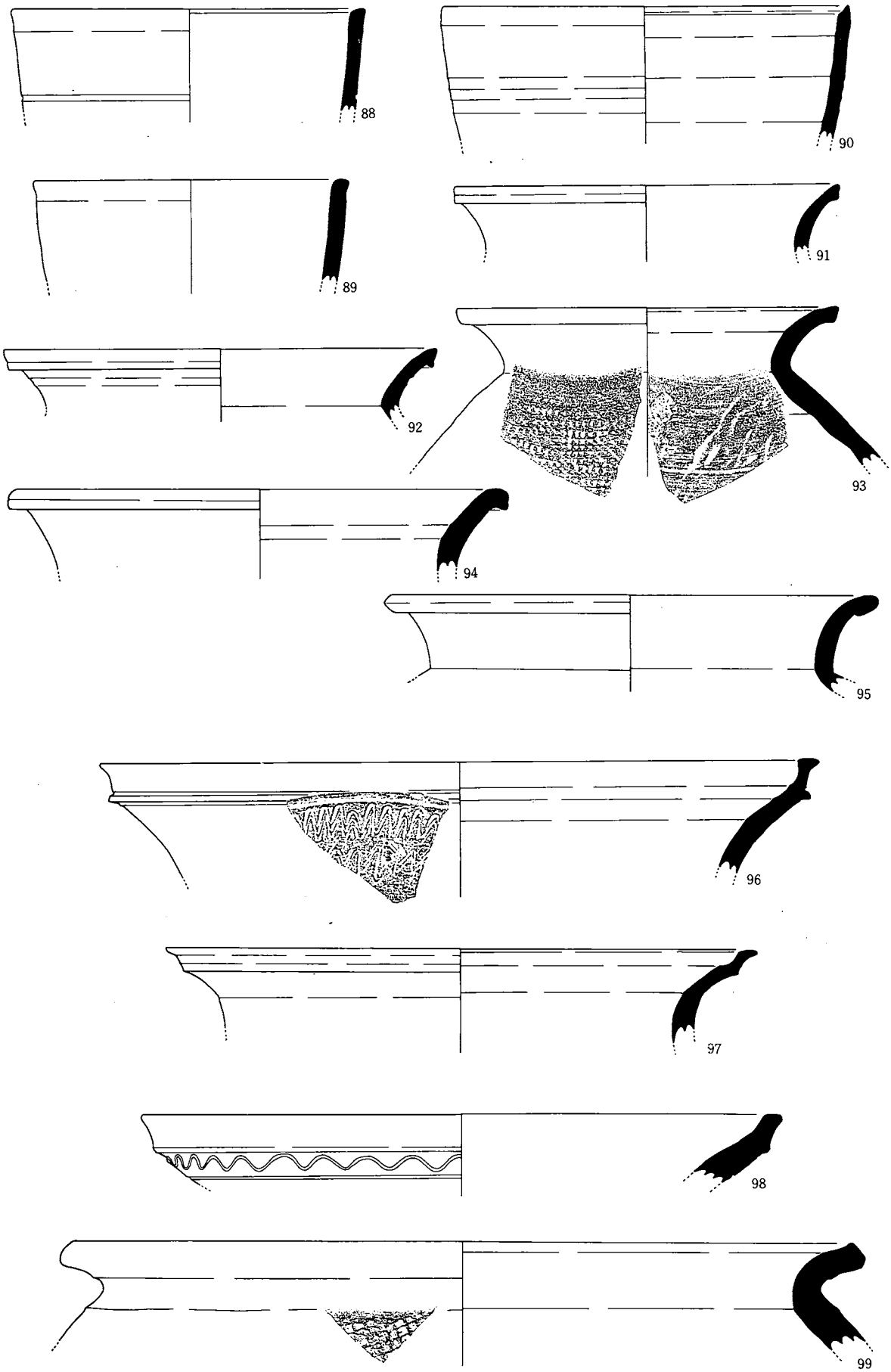
81・82は薬壺形の短頸壺である。81は口径13cm、胴部最大径18.5cmを測る小型品で、胴部器壁はき


34
35
36
37
38
39
安
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
0
10cm

第79図　須恵器実測図


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
0
10cm

第80図　須恵器実測図



第81図　須恵器実測図

わめて厚い。82は口径12.9cmを測るが、胴部は横に開いており、大型品となろう。

83は長頸壺の胴部と考えられ、肩部は鋭く屈曲している。84～87は壺の底部で、84～86は長胴壺の底部であろう。

鉢（第81図88～90）

いずれも口縁部の破片で、体部は直線的に延びている。88・89は法量、形態とも類似する。

甕（第81図91～99）

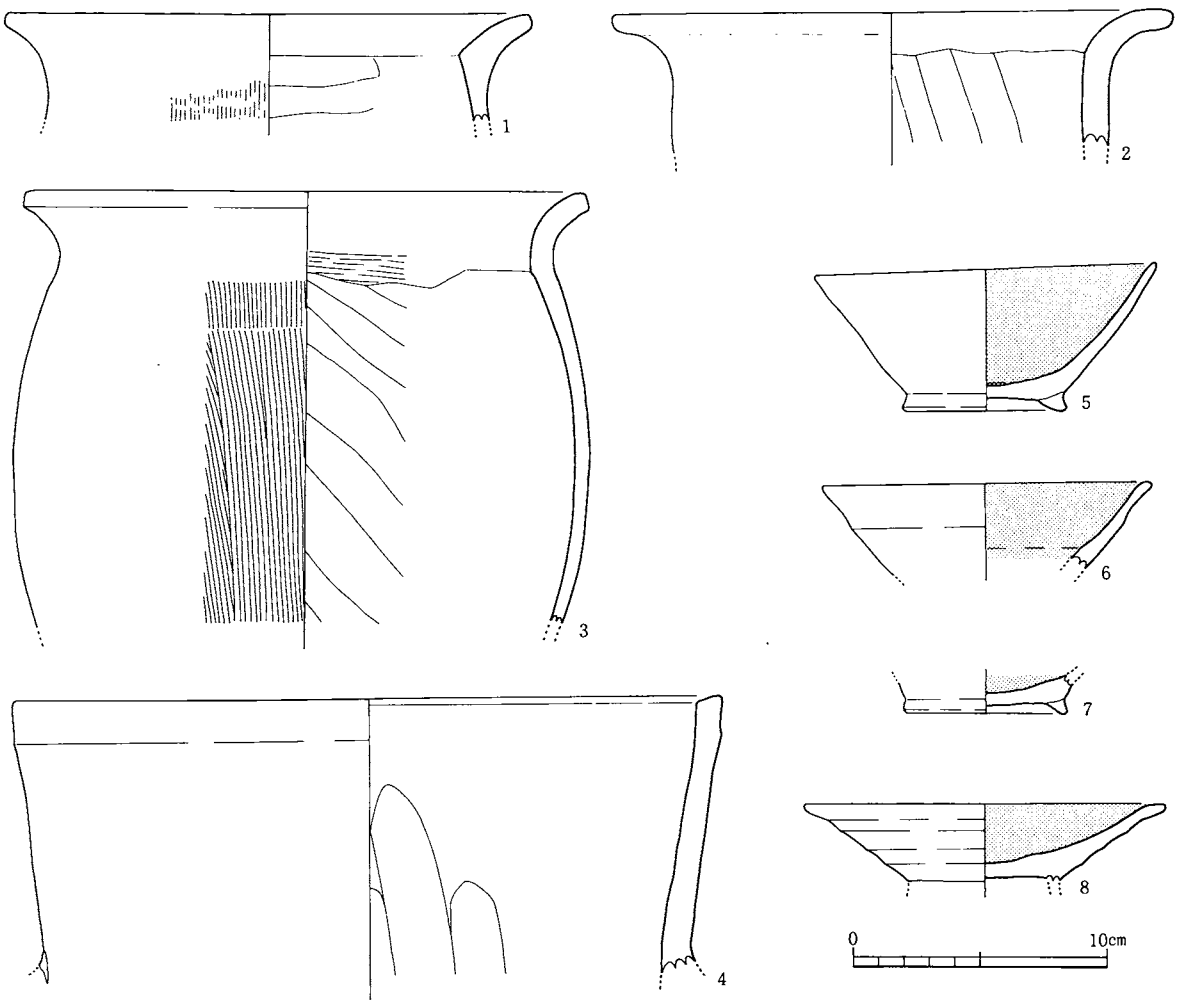
小型品（91～95）と大型品（96～99）がある。口縁端部の形態も各々異なっている。とくに96～98は年代的変化として理解されよう。

99は器形や胴部外面の格子叩き目などから年代の下降が考えられ、平安時代後半の所産であろう。胎土、焼成は良く、硬質で内外面とも灰色を呈する。

(2)　土師器・黒色土器（第82図）

調査区の南端を中心として土師器・黒色土器が出土しているが、須恵器に比べて破砕し易いためか、大半が小破片である。

１～３は土師器の甕であるが、器形や調整方法はわずかに異なっている。いずれも口縁部は大きく外反し、頸部内面には稜がつく。



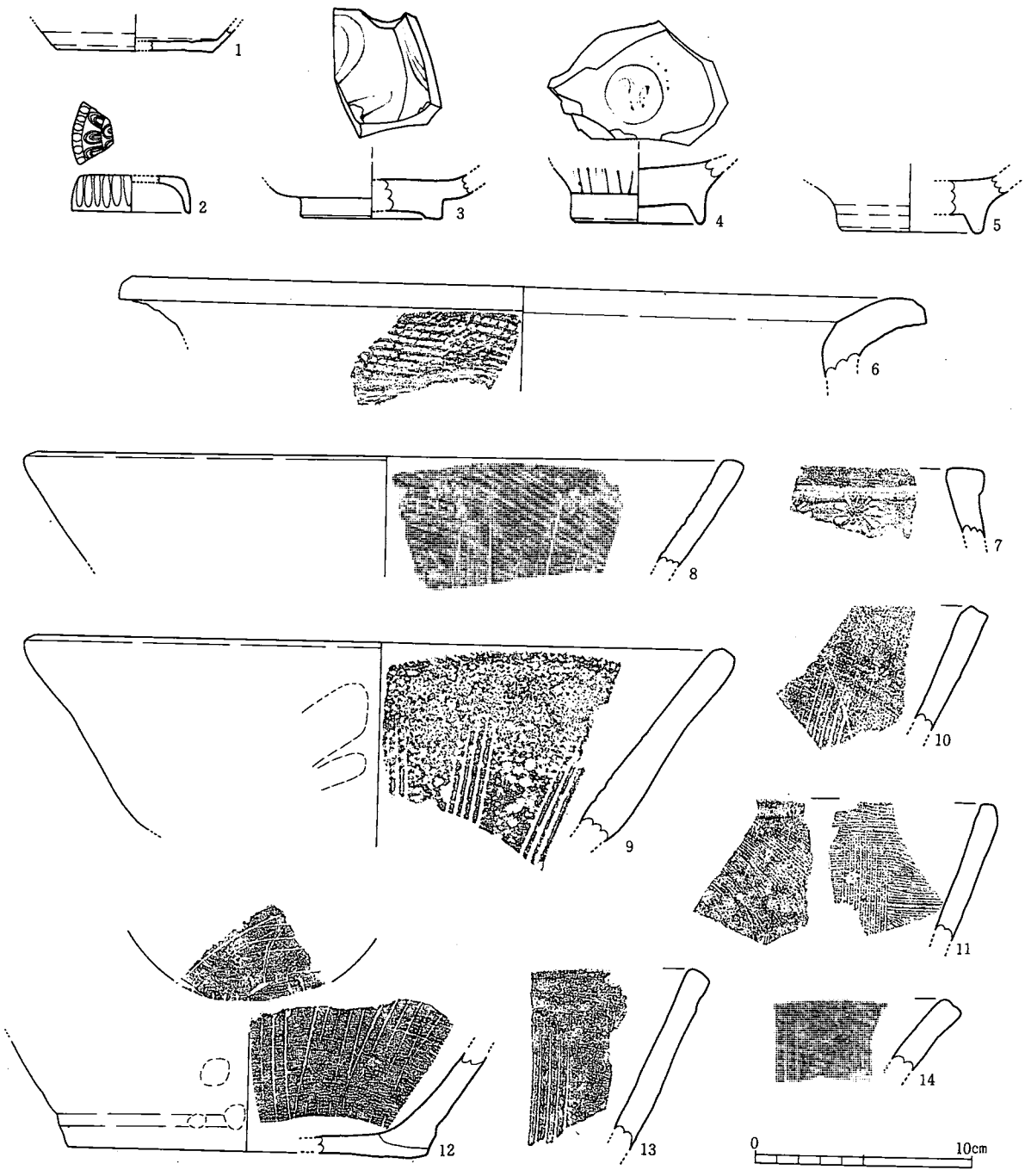
第82図　土師器・黒色土器実測図

4は甑の上半部で、胎土に砂粒を含むが、焼成は良く硬質である。把手の剝落痕がわずかに観察される。外面は横ナデ調整、内部は横ナデとヘラ削りが施されている。

5～7は黒色土器（A）の椀で、類似した器形である。低い高台から直線的な体部へと続く。体部内面は主に横方向のヘラミガキがみられ、器表は滑沢である。内面には炭素がよく吸着し、一部は口縁部外面にも及んでいる。

8は高台付の皿であるが、高台部分は欠失している。内面は縦・斜め方向のヘラミガキで炭素をよく吸着して漆黒色を呈する。

以上の資料のうち、遺溝の内容は不明確であるが、3・4・8は共伴資料と考えられ、9世紀に比定される。5～7もほぼ同時期であろう。1・2は7世紀と考えられる。



第83図　輸入陶磁器・須恵質土器・瓦質土器実測図

(3) 輸入陶磁器（第83図１～５）

総数で20点余りが出土したが、小破片が多い。

１は白磁皿で、乳濁色の釉がかかる。底部は部分的に釉が掻取られ、まばらに釉がかかっている。２は青磁合子の蓋で、復原径は5.5cmを測る。色調は淡青緑色を呈し、釉は透明度が強い。３は見込みから体部内面に草花文を施した青磁椀で、宋代龍泉窯系の所産と考えられる。畳付は水平で、畳付より内側は無釉である。釉は薄く、内外面とも貫入が多く、緑褐色を呈する。４・５は明代龍泉窯系と考えられる青磁椀で、畳付は丸く、高台の内側まで施釉されている。４は見込みに草花文を印刻し、体部外面には鎬蓮弁文の基部がみえる。胎土は白褐色を呈し、釉は透明な黄緑褐色を呈し、内外面に貫入が多い。５の胎土は灰色で釉は濃暗緑色を呈する。釉は厚くかかっているが、小さな気泡を多く含んでいる。

その他の小破片も宋～明代のもので、青磁椀の破片が多い。

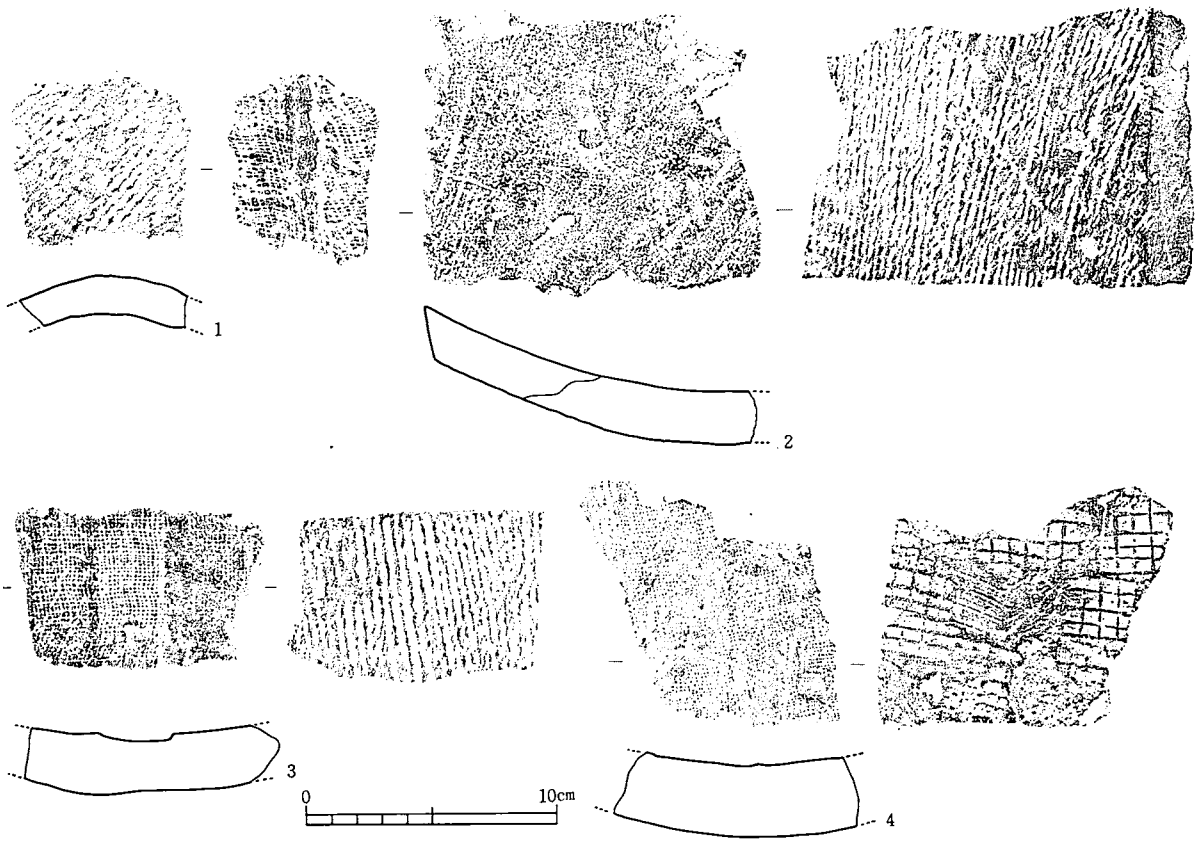
(4) 須恵質土器・瓦質土器（第83図６～14）

量的には少なく、小破片が多い。器形では摺鉢が最も多い。

６は須恵質の大甕で、復原口径37.3cmを測る。口縁部は大きく外反し、頸部外面には斜格子叩き目が明瞭に残る。内面は横ナデ調整で、色調は暗灰色を呈する。器壁の断面には粘土の縞模様が明瞭である。

７は菊花文を印刻したもので、火舎の口縁部であろう。器表は黒灰色を呈するが、内部は灰色を呈する。軟質の焼成で、瓦質を呈する。

８～14は摺鉢で、内面には数条を単位とするおろし目が刻まれている。内外面ともやや雑な指圧、横ナデ



第84図　布目瓦実測図

による調整が多いが、８・14の内面は刷毛目調整の上に横ナデを施している。11の内外面には刷毛目を施し、外面はその上をナデ調整している。焼成・色調はまちまちで、８・12は比較的硬質で灰白色、９は軟質で赤褐色、10・11・13・14は瓦質で黒灰色を呈する。

(5) 布目瓦（第84図）

近世の溝、撹乱層中から４点の布目瓦が出土した。

１は丸瓦の小破片である。須恵器質の硬い焼成で、暗灰色を呈する。凸面には縄目叩き目、凹面には不整な布目が残る。

２は側端部を残す平瓦の破片であるが、焼成不良のため軟質で、淡灰褐色を呈する。凸面には縄目叩き目が明瞭に残るが、凹面は器面荒れのためわずかに布目痕が観察されるにすぎない。粘土板合せ面が観察される。３も平瓦の小破片で、凹面には枠板圧痕が明瞭に観察される。４は凸面に５㎜前後の格子叩き目を施した平瓦で、凹面には布目痕とやや幅広の枠板圧痕がみられる。焼成はやや不良で、色調は灰白色を呈する。

上の原遺跡から最も近い瓦出土地は、東方約1.5kmにある陳内廃寺である。上の原遺跡の出土瓦は陳内廃寺の瓦に類似する点もあるが、相違点もある。出土点数も少なく、瓦の出自については保留しておきたい。

(6) 金属製品（第85図１）

古墳時代中期の住居址であるＦ－３－１号住居址の覆土最上層から、鋳帯金具の鉈尾が１点出土した。

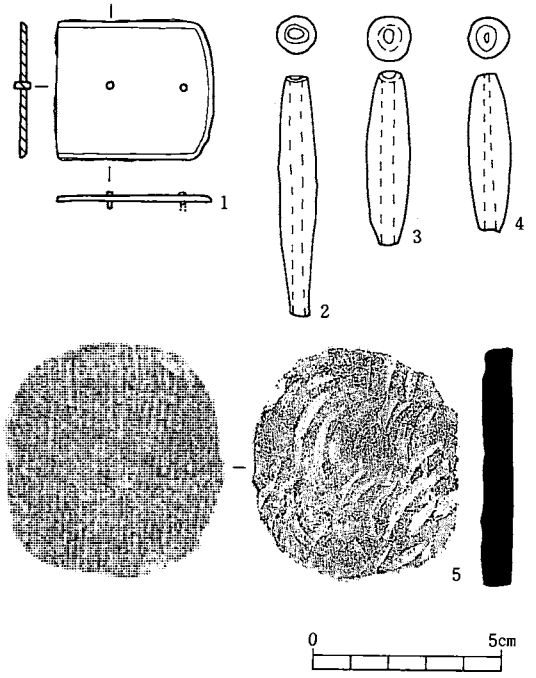
鉈尾は周縁部がごくわずかに欠けているが、ほぼ原形を保っている。縦3.6cm、横4.2cm、厚さ1.5㎜前後を測り、わずかに横長（縦横比１：1.16）である。基部は直線で、先端部は弧を描き、２個所に鋲留がある。表面には緑青や土などが付着しているが、部分的には地金を観察することができる。金銀の鍍金や漆膜は観察できない。

(7) 土製品（第85図２～５）

管状土錘と須恵器の転用品が出土したが、いずれも古墳時代の住居址覆土中から出土したものである。

管状土錘（２～４）はＦ－３区・Ｇ－２区の住居址から出土し、比較的近接した地点であるが、数は少ない。直径数㎜の棒に粘土を巻いて雑に仕上げたもので、３・４は二次熱を受けて変色している。２は5.25ｇ、3は4.90ｇ、４は5.20ｇを測る。

５は須恵器甕の胴部を円形に打欠いたもので、周縁は部分的に磨かれている。表裏面ともわずかに磨耗している。



第85図　金属製品・土製品実測図

7．考　察

(1) 住居址の構造と年代

55年度調査区においては、7世紀代の住居址を15棟検出した。そのうちの3棟は、削平や重複などによってきわめて遺存状態が悪く、詳細については明らかではない。以下、項目ごとに整理する。

住居址の規模

削平などにより遺存状態の悪い例を除いて、11棟についての計測値を第2表および第86図に示した。重複や削平などによって部分的に不明なものについては推定値を含んでいるが、大きく異なることはないと考えられる。

最大の住居址はD－1－2号住居址で、その推定床面積は約43m²を測る。これに次ぐのがF－2－6号住居址で、F－2－7号住居址も同程度の規模と考えられる。

床面積20m²前後の一群が最も多く、6棟がある。これらはほぼ隅丸の方形プランであるが、主軸長より幅の方がやや大きい横長プラン（長辺の一辺に竈が付設されている）のものが多い。

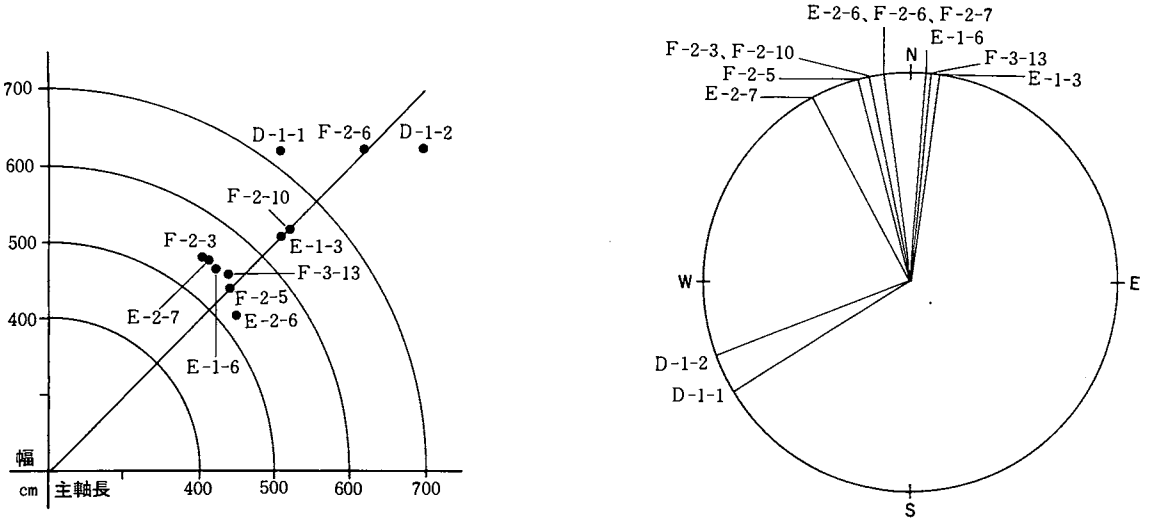
前二者の中間規模のものが2棟（E－1－3、F－2－10）あり、隅丸方形プランを呈し、床面積は約25m²を測る。

住居址の方位

計測値の値に関係なく、竈を設けた一辺を含む中軸線を主軸とし、その方位を計測した。したがって、この方位は、竈の設置方向とも換言できる。

第2表　55年度調査区住居址一覧表

名称	規模 (cm) 主軸長	幅	壁高	カマド 粘土袖	袖石	主軸方位	硬化面	貯蔵穴	柱数	出土遺物
D－1－1	(500～510)	(600～640)	8～10	○	－	(W－30.5°－S)	○	－	－	－
D－1－2	690～700	(540～710)	5～6	－	－	(W－20°－S)	○	－	－	須恵器
D－1－7	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－
D－1－8	－	－	－	○	－	－	○	－	－	土師器・須恵器・鉄片
E－1－3	490～520	490～524	16～18	○	(○)	N－7.5°－E	○	－	－	土師器・須恵器
E－1－6	(420)	436－496	8～10	○	－	N－4.5°－E	○	－	(4)	土師器・須恵器
E－2－6	445～450	390～420	6～10	○	－	N－8°－W	○	－	(4)	須恵器
E－2－7	(400～420)	460～(498)	5～8	○	－	N－28.5°－W	○	－	－	土師器・須恵器
F－2－3	390～420	460～(500)	11～20	○	○	N－12°－W	○	－	(4)	土師器・須恵器
F－2－5	412～462	430～450	16～27	○	(○)	N－15°－W	○	○	4	土師器・須恵器
F－2－6	610～625	612～632	10～14	○	○	N－8°－W	○	－	－	土師器・須恵器・刀子
F－2－7	600～620	－	14～32	○	(○)	N－8°－W	○	－	－	土師器・須恵器
F－2－10	510～526	514～520	8～10	－	－	N－12°－W	○	－	－	土師器
F－2－13	－	－	8～12	(○)	－	－	○	－	－	土師器・須恵器
F－3－13	430～440	430～490	27～32	○	－	N－5°－E	○	－	4	須恵器



第86図　住居址の規模と方位

削平や重複などによって、壁面の遺存しない住居址など３棟については計測できなかったが、12棟についての計測値は第２表および第86図に示すとおりである。計測可能な12棟のうち10棟が磁化を中心として36度の範囲に含まれており、N－8°－WからN－15°－Wには６棟が集中している。

前の10棟とは方向を異にする住居址（D－１－１・２）が２棟あり、西南に主軸を向け、前者とは90°～130°の角度差がある。D－１－１・２号住居址の出土遺物はきわめて少なく、２号住居址から須恵器の高杯の脚部が１点出土しているにすぎない。したがって、両者の相異が時期に起因するものかについては不明である。

住居址の構造

各々の住居址については前節で説明を加えたが、構造面、とくに竈・硬化面・貯蔵穴・柱穴などを整理したのが第２表である。

削平などによりきわめて遺存状態の悪かったD－１－２、D－１－７号住居址については竈の有無について確認できなかったが、他の13棟については竈が付設されている。住居、竈の付設方位に一定の規則性があることは先に述べたが、構造的にも類似性をもっている。

調査した竈の遺存状態は必ずしも良くなかったが、原形を復原し得る程度の資料は得られている。それによると、住居址の壁の一辺のほぼ中央に掘込み（主軸方向にやや長い不整な楕円形が多い）をし、両袖には白色粘土を使用している。袖の前面には軟質凝灰岩の袖石（支柱）を埋込んでいる。袖石は自然礫もあるが、面取り加工を施したものもある。煙出しの部分は住居址外へ張り出すものが多い。

硬化面は、住居址の中央部を中心として、不定形に確認される。確定的ではないが、主軸方向に細長いものが多いところから、竈の反対方向に出入口があり、竈と出入口とを結ぶ線を中心として放射状に住居内活動が行われたことが想定される。

貯蔵穴は、F－２－５号住居址に１基が付設されているにすぎない。竈の傍に設けられた長方形の小土壙で、土壙の上面から土師器（杯）・須恵器（高台付杯）が出土している。内部からの出土遺物はないが、日常生活上の機能をもつものと考えられる。

柱穴は、確認できなかったものや一定の配列を示さないものの方が多いが、F－２－５、F－３－13号住居址は規格的な４本柱である。その他、撹乱などにより柱穴の一部は未確認であるが、E－１－６、E－２－６、F－２－３号住居址も４本柱になるものと考えられる。４本柱の配列は、多少の誤差はあるが、ほぼ

対角線上に位置している。

これまで、15棟の竪穴を住居址として述べてきたが、これらの構造、および次に述べる遺物面から判断して、これらの竪穴はすべて住居址であるとみることができる。

住居址の出土遺物と年代

住居址の出土遺物としては土師器・須恵器・鉄器がある。遺物の出土状態についてはすでに説明を加えたが、散発的な出土状態で、全体的に遺物量は少ない。また、D－1－1、D－1－7号住居址の2棟は、無遺物である。これらの出土品が、その住居址に本来伴った全体像を示しているとは考え難いが、限られた資料の中でその構成を整理したのが第3表である。

土師器は、大半の住居址で甕を出土しており、それらには煤が付着して煮沸の跡がみられる。7世紀以降の甕は形態変化に乏しく、相互の比較が難しい。出土した甕の大半は頸部のくびれがきわめて少なく、胴部が直立する傾向にあり、口縁部は大きく外反している。その中で、E－1－3号住居址の甕(第48図1・2)は頸部のくびれを残しており、古い様相を残している。

次いで多いのが供膳具の杯で、6棟から出土している。杯は底部径の大小によって2種類に分類できるが、F－2－7号住居址では両者が共存しており、時期差ではないようである。

その他の器種には鉢・甑がある。第51図3、第61図3などは酸化焔焼成で土師質ではあるが、須恵器の影響を受けて製作されたものである。

須恵器は土師器に比べると出土量が多く、器種もやや豊富である。甕・壺などの貯蔵具は少なく、杯類・高杯・盤などの供膳具が大半を占める。

杯には平底杯と高台杯の二者があり、平底杯は形態によって2種に分類できる。E－2－7(第55図5)、F－2－13(第67図5)、E－1－6号住居址(第51図4)の出土品は口径9.6～10.6cmの小型品である。D－1－8号住居址出土品(第46図3)は口径12.6cmを測り、器形的にも前者とは異なり、後出の形態であろう。

高台杯は高台、体部の形態によって3種に分類できる。第60図7・9に代表されるものは、外開きの安定した高台が付き、体部下半には張りがあり、体部上半は外反ぎみに延びている。次の形態はE－

第3表　住居址出土遺物の構成

名称	土師器				須恵器							鉄器
	甕	杯	鉢	甑	甕	壺	蓋	高杯	平底杯	高台付杯	盤	
D－1－1												
D－1－2								○				
D－1－7												
D－1－8	○	○							○			
E－1－3	○					○	○		○	○		(鉄片)
E－1－6	○			○					○			
E－2－6								○		○	○	
E－2－7	○	○					○	○	○		○	
F－2－3	○					○	○					
F－2－5	○	○		○	○		○	○		○		
F－2－6	○	○				○	○	○				刀子
F－2－7	○	○			○		○	○		○		
F－2－10	○	○										
F－2－13	○		○						○	○		
F－3－13									○			

２－６号住居址の出土品（第54図１～３）に代表されるもので、高台部分は前者と大きな差はないが、体部上半は直線的に延びている。前者から後者へと変化するものであるが、Ｆ－２－５号住居址においては、後者の要素をもったもの（第60図８）も含まれており、大きな時間差ではなかろう。これらに先行すると思われるのが第48図８であるが、体部を欠失していて細部については不明である。先に述べたように、Ｅ－１－３号住居址出土の土師器甕にも先行的な要素が認められることと符号する。

蓋は大別して３種のものがある。Ｆ－２－３号住居址出土品（第58図１）は古墳時代的な蓋であるが、内面にかえりを有する蓋と伴っており、この種の蓋の最終的なものであろう。量的に多いのは、内面にかえりを有する７世紀に盛行する形態であるが、全体の器形や内面のかえりにはわずかに形態差がある。Ｅ－２－７号住居址出土品（第55図４）は古い要素を呈するものであろう。次に、蓋の内面にかえりがなく、端部を折り曲げた蓋がある。量的には少なく、Ｅ－１－３、Ｆ－２－７号住居址から各１点が出土しているにすぎない。

盤・高杯は重複関係をもつＥ－２－６、Ｅ－２－７号住居址から出土しており、微細な変化をみるのに好都合であるが、高杯についてはほとんど変化はみられない。盤（高盤）についても、体部と口縁端部にごくわずかな差異が認められるにすぎない。高杯についてはＦ－２－６号住居址から、Ｆ－２－６、Ｆ－２－７号住居址のものとは形態の異なる高杯が出土している。

甕・壺は良好な資料が出土しておらず、甕は胴部の破片がわずかに出土したにすぎない。壺はＥ－１－３、Ｆ－２－６号住居址から小型品が出土している。

鉄器はきわめて少なく、Ｆ－２－６号住居址から刀子片、Ｅ－１－３号住居址から鉄片が出土したにすぎず、後者は混入のおそれがある。

以上が住居址から出土した遺物の概要であるが、出土した土器からその年代を推定すると、７世紀中葉～後半を中心とする時期と考えられる。

住居址群の構成（集落復原のための前提作業）

55年度調査区において検出した15棟の住居址は、その配置から４棟（Ｄ－１－１・２・７・８号住居址）、２棟（Ｅ－１－３・６号住居址）、３棟（Ｆ－２－６・７、Ｆ－３－13号住居址）、６棟（Ｆ－２－３・５・６・７・10・13号住居址）の小群に分離できる。これを便宜上Ａ～Ｄ群として説明を加える。

Ａ群のうち、Ｄ－１－１・２号住居址は重複しており、Ｄ－１－７・８号住居址も一部重複する可能性が強く、同時併存は最大２棟となる。Ａ群の遺存状態はきわめて悪く、出土遺物もＤ－１－２、Ｄ－１－８号住居址に少量がみられるにすぎない。Ｄ－１－２号住居址出土の高杯脚部は比較的古い様相を呈し、Ｄ－１－８号住居址出土の杯は他の住居址出土のものに比べて新しい要素をもつ。

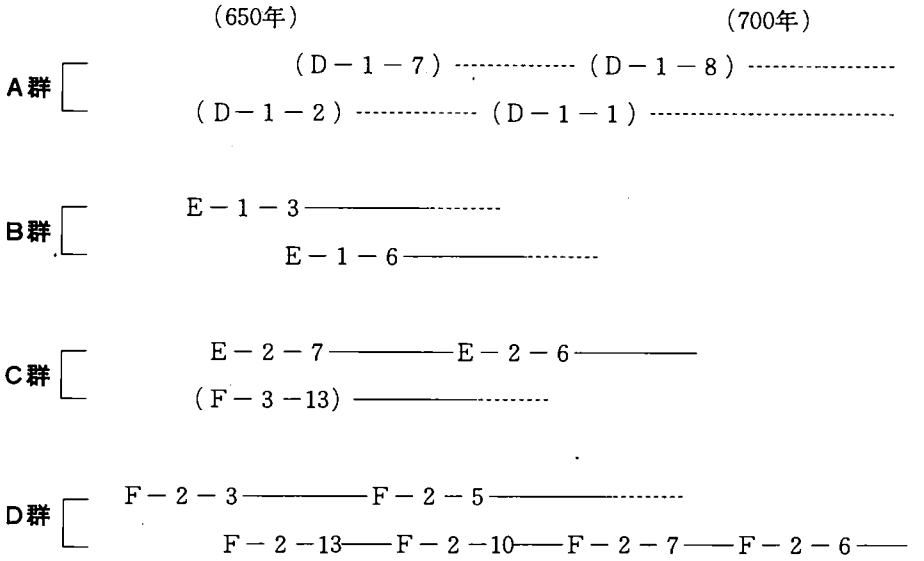
Ｂ群は方位を同じくした２棟からなる。重複はなく、住居址間の距離は約２ｍである。両者の出土遺物を比較すると、ほぼ同時期、あるいはＥ－１－３号住居址がわずかに先行すると考えられ、両者の存続期間の大半は重複するものと考えられる。

Ｃ群は重複する２棟（Ｅ－２－６・７号住居址）と、単独で存在する１棟（Ｆ－３－13号住居址）で構成される。出土遺物を比較すると、Ｆ－３－13号住居址はＦ－２－７号住居址と併行関係にあり、Ｃ群においても同時併存は２棟となる。

Ｄ群は６棟からなり、４棟・２棟の重複関係があり、２棟以上の同時併存はあり得ない。また、Ｆ－２－５号住居址とＦ－２－10号住居址はきわめて近接しており、Ｆ－２－５号住居址の竈の位置からみて、同時には存在し得ないであろう。次に遺物面を加味して考えると、Ｆ－２－５号住居址とＦ－２－７号住居址が

近接した時期と考えられる。F－2－3号住居址は出土遺物が少なく、比較が難しいが、F－2－13・F－2－10号住居址のいずれかと併行するものであろう。

以上のように、A～D群は2棟を基本的な単位とした構成であることが判明した。以上のことを整理し、群相互の序列を示すと次のとおりとなる。



当然のことながら、住居の構築や改廃、すなわち存続期間は一律に展開するものではなく、実際には錯綜した状況であろうし、出土遺物も住居に伴う全体像を反映するものではないが、集落を構成する小単位の構成と変遷の大筋については把み得たと思われる。

A～Dの小群は、2棟を1単位として、きわめて近接して設けられた住居単位であるが、再度配列による問題に立返れば、AB群・CD群の結合が想定される。A群―B群、C群―D群の距離は8m前後であるが、AB群―CD群間は約20mを隔てている。集落内における群構成としては、AB群、CD群が一つの単位を成すものと想定され、それが世帯共同体に比定できるものであろうか。

(2) 歴史時代の遺構と遺物

周溝墳墓について

55年度調査区の東北端、H－10区から周溝を巡らし、木棺を主体部とする平安時代の墳墓が1基検出された。古代の墳墓において、木棺墓は通有にみられる型式であるが、その周囲に周溝を巡らす例はきわめて稀である。調査例も少なく、名称なども統一されていないようであるが、ここでは周溝墳墓と呼ぶこととした。

類似の例として福岡県などで2～3の例があり、剣塚遺跡[註1]、鏡原遺跡[註2]などが報告されている。

剣塚遺跡では2基の円形周溝墓が調査されている。周溝の直径は3.5～3.85mで、平面形はわずかに楕円形を呈する。1号円形周溝墓では中央部に径75cmの土壙を穿ち、その中から少量の骨粉と炭化物・灰が検出されている。2号円形周溝墓では主体部は確認されていない。

鏡原遺跡の例は上の原遺跡と類縁性が強い。周溝は3.65×3.95mの不整円形で、周溝の一部には礫がみられる。主体部はほぼ中央部に土壙墓があり、土師器・瓦器が出土している。剣塚遺跡では年代を示す遺物を出土していないが、1号円形周溝墓は6世紀後半の古墳排水溝を切り、15世紀初頭～前半の火葬墓に切られている。鏡原遺跡は出土した土師器・瓦器から平安時代末に比定されている。

熊本県・上鶴頭遺跡[註3]では東西8.15m、南北8.3mの方形周溝に区画された遺構（S×02）が検出されているが、内部は強く撹乱を受けており、土壙などは確認されていない。塚があったとの伝承があり、墳丘を有していた可能性が強いという。周溝内から平安時代前半（9世紀）の土師器を出土している。

中世においても、福岡県安徳・道善遺跡[註4]、北牟田遺跡[註5]、熊本県尾窪遺跡[註6]などで周溝を伴う墳墓が調査されているが、その他の例をみても方形周溝が多いようである。

その他、近年各地で円形周溝遺構が検出されているが、大半が主体部などを伴わず、その性格については明らかにできていない。また、年代についても多くは弥生時代後半に比定されているものがあり、今後、資料を整理する必要がある。

上の原遺跡の場合は木棺墓の周囲を区画して周溝が巡らされており、古代墳墓の一型式であることは疑いない。周溝の内部には低墳丘があったものと想定され、周溝は墳墓の区画と排水を目的としたものであろう。本例の場合、出土した土師器・黒色土器から、平安時代前半～中葉（10世紀）に比定することができよう。

歴史時代の遺物について

歴史時代の遺物は、遺構に伴ったものは少なく、他時代の遺構や表土層、撹乱層から出土したものが多い。これらは飛鳥時代（7世紀）から室町時代（16世紀）の幅があるが、奈良時代～平安時代前半に属するものが多い。

量的には須恵器が大半を占める。7～10世紀のものがあるが、その中で産地推定のできるものが2・3例含まれている。第79図54・55の2点は萩尾大溜池窯の製品と考えられる。萩尾大溜池窯製品の特徴についてはかつて指摘しておいたが[註7]、この2点はきわめて酷似している。上の原遺跡の含まれる宇城地方には窯跡が点在し、宇城窯跡群と総称している。上の原遺跡と萩尾大溜池窯跡とは直線にして約3.5kmの距離があり、それより近距離にも須恵器窯跡が存在するが、製品の特徴からみて萩尾大溜池窯から運ばれた可能性が強い。また、第80図77の壺も同窯跡の製品である可能性が強い。萩尾大溜池窯の製品は、熊本市内からの出土品もあるが、北は緑川、南は球磨川以北を中心に分布するようである。

次に、県北の小岱山に分布する窯跡群のうち、北山浦・薬師前・下谷窯跡の製品と考えられるものがある。第80図78に示した長胴壺がそれで、底部外面に同心円叩き目をもつ。この種の器形で、外底部に同心円叩き目をもつのは、九州内においては管見の限り上記の3遺跡しかない。第80図79も内外面の整形・調整痕・色調などから同群の製品と考えられる。車輪文のある須恵器は、県内の窯跡では小岱山窯跡群のうち、上記の3遺跡の他、大別当、樺番丈窯跡の5遺跡が知られている。かつて、上の原遺跡の採集品として、車輪文のある須恵器片を故広瀬正照氏から示されたことがあったが、このことも小岱山窯跡群との需給関係[註8]を物語るものであろう。

須恵器の中には墨書土器（第79図38）が1点含まれている。完形品の杯の底部に「安」の1字がみえる。F－3区から出土した銅製鉈尾とともに注目される遺物である。53・54年度調査区出土の円面硯、越州窯青磁の出土とあわせ、奈良・平安期における当地域が、通常の集落ではないことが想定されるが、遺構については掘立柱建物の存在が想定されたにすぎず、実体については明らかにし得なかった。

布目瓦が4点出土したが、これらは他所から運ばれたもので、この遺跡には瓦を使用した建物は存在しなかったと考えられる。しかし、瓦の出土は、瓦の生産・使用地と当遺跡との関わりを暗示しているようでもあり、上記のことと照らして、単なる混入として見過せない。本文中でも延べたとおり、周辺の瓦出土遺跡との比較によると、陳内廃寺の瓦[註9]と類似しているが、量も少なく相異点もあり、決定的ではない。

以上のとおり、この遺跡は官衙・寺院址そのものではないけれども、それらと有機的な関連をもった衛星的な施設であった可能性が考えられる。

註

1．亀井明徳・中間研志他『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV』　福岡県教育委員会　1978

2．浜田信也「鏡原遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第2集』　福岡県教育委員会　1971

3．橋本康夫・鶴島俊彦『上鶴頭遺跡』　熊本県文化財調査報告　第63集　1983

4．佐久木隆彦・木下修・新原正典『安徳・道善・片縄地区区画整理事業地内埋蔵文化財調査概報』　那珂川町教育委員会　1979

5．福岡県教育委員会「福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI』1979

6．桑原憲彰・石田彰紀他『尾窪』　熊本県文化財調査報告　第12集　1973

7．松本健郎・勢田広行他『生産遺跡基本調査報告書II』　熊本県文化財調査報告　第48集　1980

8．松本健郎「須恵器生産をめぐる諸問題」註7書に同じ

9．松本雅明「陳内廃寺調査報告」『城南町史』　1965

第Ⅳ章　総　　括

――塚原台地における古墳と集落の動態――

昭和53～55年度の３ヵ年度にわたる上の原遺跡の発掘調査において、検出した竪穴住居址の総数は約470軒を数える。これらの住居址を年代によって大別すると、縄文時代のものはなく、『上の原遺跡Ⅰ』で報告した弥生時代（前期末～中期初頭）に属するものが13軒[註1]、本書で報告した６～７世紀に属するものが31軒、他はすべて４～５世紀に属するものである。

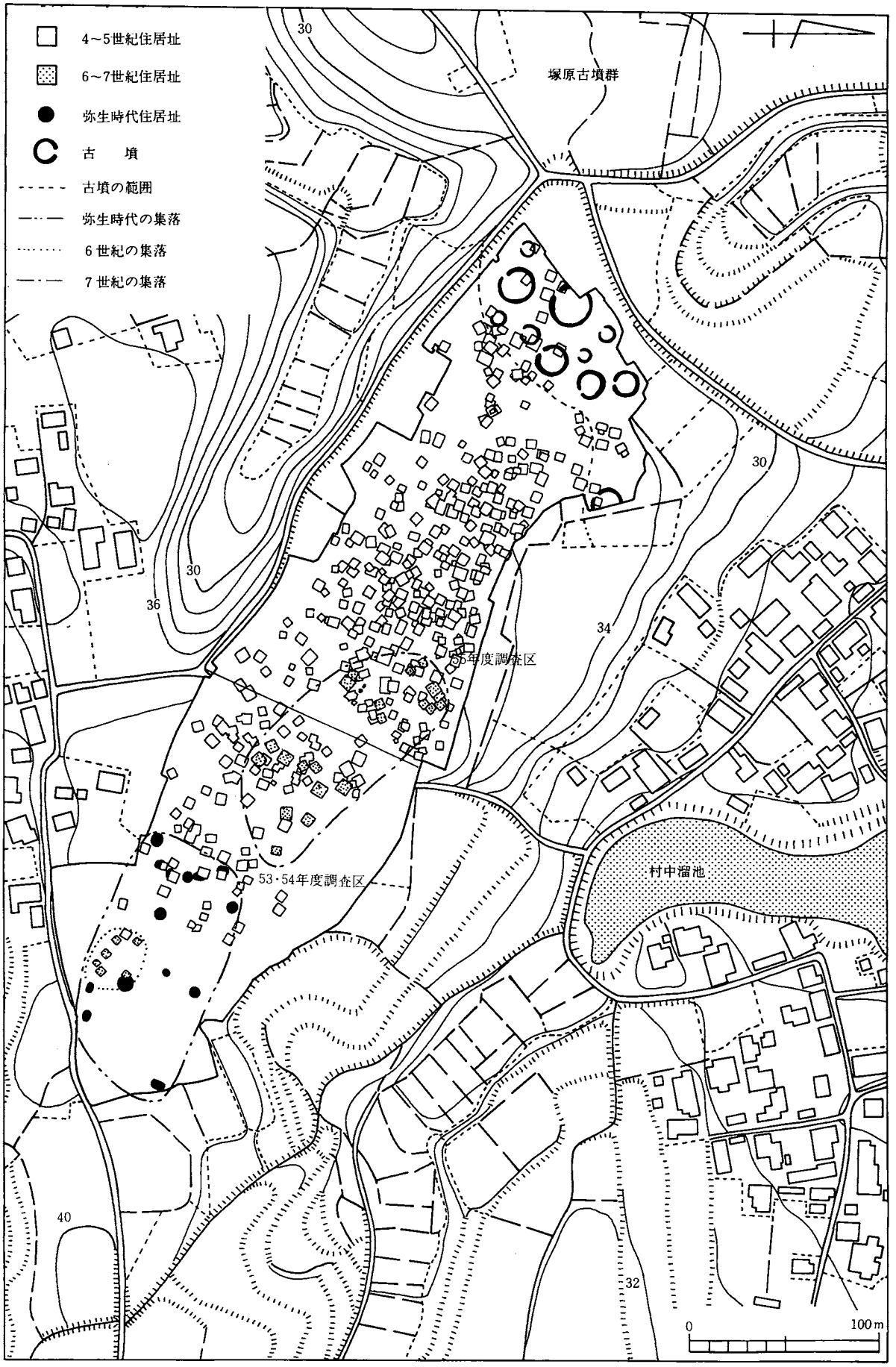
一方、上の原遺跡の北西に隣接する塚原古墳群は、現存する古墳は残骸を含めて10基にすぎないが、昭和47～48年、九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査によって約30,000m²の範囲から方形周溝墓39基、前方後円墳２基、円墳42基、石棺18基、石蓋土壙１基などが墳丘を削平され埋没した状態で発見された[註2]。その後の範囲確認調査[註3]や、上の原遺跡の北端に発見された11基の円墳の調査成果[註4]から、塚原古墳群の最大推定範囲は約240,000m²におよぶものと考えられ、古墳総数（方形周溝墓・円墳・前方後円墳・石棺）は350～400基に達するものと考えられる[註5]。

これら古墳の造営は４世紀後半に開始され、６世紀終末まで追葬が行われているが、新たな築造は６世紀中葉頃にはほぼ終りをつげている。古い時期の古墳は、方形周溝墓を中心として台地の北側緩斜面に多く分布しており、漸次台地の頂部へ、さらに北側を除く台地の周縁部へと墓域を拡大したものと考えられる。

上の原遺跡と塚原古墳群の地理的関係をみると、両遺跡の中心部の境に南北から谷が弯入し、古墳群の中心部（縦貫道）付近で約500ｍを測った台地の幅が急に狭くなり、70～80ｍ幅のくびれ部となっている。従来、このくびれ部を塚原古墳群の東限とみていたが、上の原地区に埋没した古墳11基が発見されたことによって、その見解は修正せざるを得なくなった。しかし、時期を限ってみれば、このくびれ部が両遺跡（墳墓域と居住域）の境界をなしている時期がある。

すなわち、４～５世紀においては、このくびれ部が墳墓域と居住域との自然境界をなしている。上の原地区にはほぼ全面に住居址が分布し、その総数は420軒を越える。もちろん同時併存ではなく、１世紀以上の時間幅をもっている。この時期の住居址の資料整理が完了していないので、詳細な検討はできないが、60～90軒程度の大集落となろう[註6]。住居址の分布は第87図に示すとおり、55年度調査区の北東部に密集度が高く、古墳群に近い調査区西端では密度が低くなっている。この段階では、古墳はすべてくびれ部より西に築造されており、上の原地区は完全な居住域となっていた。

やがて、５世紀後半には集落規模が縮小し、６世紀初頭には上の原地区からすべて姿を消す。集落の消滅理由[註7]は明確にし得ないが、その動きに符号して上の原地区への古墳築造が始まる。上の原地区の、古墳群に近い55年度調査区北端に発見された11基の古墳がそれで、４～５世紀の住居址と重複して古墳が築造され、塚原古墳群の東限と、集落と古墳の占地について重要な視点を提供することとなった。上の原地区の古墳(上の原支群）は６世紀前半～中葉に築造され、６世紀後半まで追葬が行われている。６世紀前半代において、くびれ部より西側での古墳築造が飽和状態に近くなり、集落規模の縮小に伴ってそれまでの居住域へ墓域が拡大したものと考えられる。約１世紀の空白の後、６世紀終末期（第４四半期）には、上の原地区の東南端に小規模な集落が再現する。第Ⅲ章において報告した竪穴住居址６軒がそれで、弥生時代の集落の一角に重複している。集落の存続期間は比較的短期間で、６世紀終末を中心として、一部７世紀におよぶものと考えられる。この集落の存続時には、上の原地区への新たな古墳築造は行われていないが、追葬は一部に行われている。集落と上の原支群（古墳）との距離は320～380ｍを測る。



第87図　上の原遺跡遺構配置図

7世紀代になると、上の原支群への埋葬行為は終るが、上の原地区の集落も再び姿を消す。[註7] 7世紀中葉になると再度集落が出現する。53・54年度調査区から55年度調査区にかけて占地しており、総数で31基を数える。この集落は上の原地区のほぼ中央部に位置し、古墳群との距離は約110～150mに接近する。この時期の集落の存続期間は、7世紀中葉前後から7世紀後半の約半世紀[註8]である。集落の構成については各々第II章・第III章で若干の考察を加えたが、同時に存在した住居址の数、つまり集落規模は10軒前後と考えられる。

7世紀代の墳墓は、調査区域内では55年度調査区、C－10区に土壙墓が1基検出された。副葬された須恵器から、7世紀中葉の年代が与えられ、7世紀代住居址の初期のものと併行するものと考えられる。おそらく、7世紀代集落の住人を被葬者とみて大過ないであろう。人骨、副葬品などはないが、G－1－1号土壙も形状が類似しており、同時期の土壙墓である可能性が強い。

このように、上の原遺跡における集落と墳墓の動態は、4～5世紀、6世紀、7世紀に大きな画期がみられ、さらにそれぞれに小画期があり、相関的な対応関係のもとに連動している。

6世紀前半代、7世紀前半代には、調査区内では住居址は検出されていないが、それは集落の断絶を示すものではなく、調査区外への移動を考えるべきであろう。しかし、一集落の規模の上では4～5世紀と6～7世紀とでは大きな相異点がある。数十軒を単位とする大集落から、数軒～十数軒を単位とする小規模集落への変遷—それはおそらく集落数の増加に対応するものであろう—は、社会変化に対応するものであり、その変遷は墓制の上にも反映されている。

古代になると、53・54年度調査区と55年度調査区の境界付近に掘立柱建物が営まれている。建物の復原は充分ではないが、その分布は7世紀代の集落とほぼ一致する傾向にある。その他、本来の遺構に伴わず、他時期の遺構や包含層から奈良・平安時代の遺物が出土している。その多くは土師器・須恵器であるが、布目瓦・円面硯・墨書土器・銙帯金具・越州窯青磁などが出土しており、単なる集落とは見做せない面が多い。この地域は、古代においては益城郡に属する。益城郡には益城、加西、坂本、当麻（たうま）、子挨（このくら）、麻部（おうべ）、富神（とひら）、宅部（やかべ）の8郷[註9]があり、浜戸川中流域の左岸、陳内・塚原・阿高一帯は益城郷に比定[註10]される。益城郷には、白鳳時代創建と考えられている陳内廃寺[註11]、益城郡家（大明神遺跡）[註12]などの古代遺跡が点在する。

これらとの関連で考えるとき、上の原遺跡の古代遺構・遺物は、地方官衙に関連を有する可能性が高い。遺構の内容が不明確であるので決定はできないが、8世紀後半頃から出現する「富豪輩」の居館等をも考慮すべきであろう。

註

1．野田拓治「弥生時代の遺構と遺物」『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第58集　1983

2．野田拓治他『塚原』熊本県文化財調査報告第16集　1975

3．隈　昭志・緒方　勉・杉村彰一『塚原古墳群調査報告書』熊本県教育委員会　1976
　豊崎晃一・下村悟『塚原古墳群松手地区調査報告書』城南町文化財調査報告第2集　1979

4．松本健郎・森山栄一・田尻悦子「塚原古墳群（上の原支群）の調査」『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第58集　1983

5．松本健郎「塚原古墳群の範囲」『上の原遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第58集　1983

6．4～5世紀の集落については、資料整理が完了していないので、大まかな概数である。詳細については59年度以降に報告の予定である。

7．集落が完全に消滅するのではなく、調査区外への移動が考えられる。

8．この年代観は、第II章の記述とは異なるが、須恵器の年代観の相違によるものである。

9．池辺　彌『和名類聚抄郷名考證』1976

10. 原田敏明監修『熊本県の歴史』 1957
松本雅明「古代」『城南町史』 1965
11. 松本雅明「陳内廃寺調査報告」『城南町史』 1965
12. 松本雅明「益城郡家」『城南町史』 1965

付論　塚原古墳群(上の原支群)出土の馬歯について

西中川　駿(鹿児島大学農学部)

1．はじめに

塚原古墳群（上の原支群）は、熊本県下益城郡城南町塚原字上の原にあり、この古墳から出土した馬歯3体分を調査する機会を得たのでここにその概要を報告する。

熊本県下で、馬歯、馬骨の出土した遺跡は、宮之壮（轟）貝塚[3]、西平貝塚[4]、黒橋貝塚[2]、馬出古墳[8]、塚原古墳[8]および宇土城跡[6]などである。上の原支群から出土した馬歯は、1号墳周溝1区、6号墳周溝4区、12号墳周溝1区、12号墳周溝4区の4ヵ所からであるが、今回調査したものは、6号墳を除く3ヵ所のものである。出土馬歯の年代は1号墳が6世紀後半、12号墳は6世紀前半とされている。馬歯の出土状況については、すでに「上の原遺跡Ⅰ」に報告されているので省略するが、土壙の片隅に頭部があり、そこに臼歯とわずかな骨がみられたが、他の全身の骨格は出土していない。しかし、土壙の広さからみて、全体躯を埋葬したものと推定される。

ここでは出土臼歯について、肉眼的、計測学的[1]に調査し、日本在来馬であるトカラ馬ならびに現代馬のサラブレッド種のものと比較検討した。

2．出土馬歯の概要

馬の歯式は、J$\frac{3}{3}$、C$\frac{0}{1}$($\frac{0}{0}$♀)、P$\frac{4}{4}$、M$\frac{3}{3}$であらわされ、臼歯は、P^2：上顎第二前臼歯、P^3：上顎第三前臼歯、P^4：上顎第四前臼歯、M^1：上顎第一後臼歯、M^2：上顎第二後臼歯、M^3：上顎第三後臼歯である。また、P_2、P_3、P_4、M_1、M_2、M_3は、下顎の臼歯をあらわす。一方、臼歯の咬面の各部位の名称は、Fig.1に示した。

以下、各古墳の出土馬歯について記述することにするが、臼歯の計測値はTable 1、2に示した。

(1)　1号墳周溝1区出土の馬歯（PLⅠの1－8参照）

1号墳からは左側の上、下顎臼歯が噛合って出土しているが、上顎臼歯はほとんど破損している。総重量は121gである。P^3とP^4のみが副柱、中柱、後柱を残しており、そのエナメル質の歯冠保存長は、それぞれ26.3mm、26.7mmである。下顎臼歯は、P_2～M_3が存在するが、P_2、M_2、M_3はほとんど破損し、計測不能である。P_3は後丘、原丘の前縁および歯根部が欠如しているが、保存最大

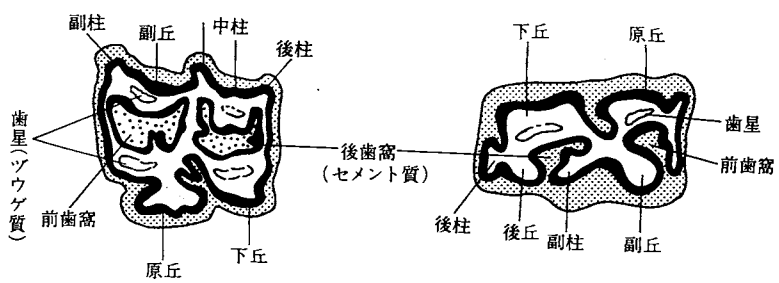


Fig 1　上顎、下顎臼歯咬面(左側)
濃厚な線はエナメルヒダ(エナメル質)を示す。

歯高は53.1mm、歯冠長×幅（エナメルヒダ）は、27.5×15.5(mm)である。P_4の咬面はエナメルヒダのみで、歯冠長×幅は27.4×14.8(mm)である。M_1は副後柱が破損し、エナメルヒダは明瞭で、その歯冠長×幅は25.0×14.2(mm)である。以上の臼歯の咬面の形状は、トカラ馬や塚原古墳出土のものに類似しているが、上顎の原丘は大きく、特徴的である。また、咬面の磨滅や、歯冠から歯根分岐部までの長さなどから、10才以上の馬のものと思われる。

(2) 12号墳周溝1区出土の馬歯（PL.Iの9－20参照）

左右の上、下顎臼歯の出土で、総重量512gであり、保存状態は本遺跡の中でもっともよい。まず、左側の臼歯をみると、上、下臼歯は噛合っており（PLIの12参照）、また、下顎の歯根部には小骨片が附着している。上顎臼歯はP^2～M^3まで存在していたが、P^2とM^3は取り上げる際に脆く崩れ、計測不能であった。P_3は保存最大歯高51.9mm、歯冠長×幅は28.6×21.8(mm)で、P^4の咬面は副柱から前縁が破損しているが、歯冠長×幅は28.3×26.0(mm)である。M^1はゾウゲ質、セメント質は欠如しているが、咬面のエナメルヒダはほぼ原形をとどめ、その歯冠長×幅は24.8×25.0(mm)で、保存最大歯高は58.2mmである。M^2は後柱を欠如し、エナメルヒダのみで、歯冠長×幅は24.2×24.8(mm)である。また、これら臼歯のエナメルヒダの形は、トカラ馬のそれとよく類似していたが、原丘の幅は11.5mmでトカラ馬より大きい。下顎臼歯は、P_2がわずかに破損しているが、P_3～M_4は歯根部を除きほぼ原形をとどめ、臼歯列長は16.8cmである。P_2の保存最大歯高は56.5mmで、セメント質が欠如するために歯頸は不明である。P_3の保存最大歯高は74.0mmで、咬面はエナメルヒダからなり、その歯冠長×幅は27.8×16.2(mm)である。P_4もP_3と同じくエナメルヒダからなる咬面で、歯冠長×幅は27.7×15.2(mm)である。M_1M_2では副後丘が突出してみられ、歯体中央部の所に下顎骨片が附着している。歯冠長×幅はそれぞれ24.6×13.9(mm)、24.5×13.3(mm)である。これら臼歯の咬面のエナメルヒダはトカラ馬のそれに類似する。

次に右側の臼歯をみると、上顎臼歯は P_2～M_3まで存在し、P_2とM_3を除き他はほぼ原形をとどめている。P^2は原丘、副丘、副柱も破損している標本で計測不可能である。P^3は後柱、下柱の後端の一部が欠如しているが、保存最大歯高は62.3mm、歯冠長×幅は29.1×25.8(mm)である。P^4は後柱の一部が欠如しているが、他はほぼ原形をとどめ、その歯冠長×幅は27.2×26.5(mm)である。M^1は副丘、後丘の所が分離し、副柱、下柱も破損しているが、歯冠長×幅は25.9×25.7(mm)である。M^2の咬面の各丘や柱は破損している。上顎臼歯のエナメルヒダの形は、1号墳のものと同じく、トカラ馬のものに類似しているが、原丘は幅広い。下顎はP_2～M_3までみられるが、M_3は小歯片になっている。P_2はエナメルヒダが明白で、その歯冠長×幅は、33.8×13.3(mm)である。P_3の保存最大歯高は71.6(mm)で、咬面はエメメルヒダが明白で、歯冠長×幅は28.6×15.1(mm)である。P_4はその保存最大歯高がもっとも高く（80.5mm）、歯冠長×幅は27.5×15.9(mm)で、幅は最も広い。M_1もP_2～P_4と同じ保存状態で、歯冠長×幅は、26.1×13.8(mm)で、M_2のそれは25.2×13.3(mm)である。

以上、12号墳の左右の臼歯について述べたが、咬面の磨滅状態や歯冠から歯根分岐部までの高さなどからみて、5～6才の馬の歯であることが推測される。

(3) 12号墳周溝4区出土の馬歯（PL. Iの21－24参照）

左右の上、下顎臼歯の出土で、総重量140gである。右側の上顎臼歯はほとんど破損し、また、右側の下顎臼歯は上顎と噛合うことなく、独立して左側の下顎臼歯の近くにみられる。また、右側下顎臼歯は、P_2～M_2

まで存在したが、土から取り上げる際にすべて破損した。左側の上顎臼歯は、P^2～M^2まで存在したが、これらもすべて計測不能である。下顎臼歯は P_2～M_2 があったが、P_2は破損が著しく、P_3は原丘前縁が欠損しており、歯冠長×幅は27.3×14.9(mm)、保存最大歯高は62.5mmである。P_4は歯星や歯窩に堆積物があり、エナメルヒダは明瞭でない。M_1の歯星は深く、エナメルヒダは明瞭であり、歯冠長×幅は25.7×14.0(mm)で、保存全長64.8mmである。これらの臼歯の咬面の形状は、トカラ馬に類似しており、また、咬面の磨滅状態や最大歯高などから、6才以上の馬の臼歯と推定される。

3．考　察

1920年長谷部[3]が、熊本県宇土市の宮の荘（轟）貝塚から臼歯3個を、鹿児島県出水市出水貝塚から切歯、臼歯2個などを発見し、石器時代に馬ありと報告して以来、全国各地から馬骨、馬歯の出土が報告されている。芝田[7]は全国の先史時代の馬の発見地として、75ヵ所をあげ、九州でも11ヵ所を報告している。熊本県下の馬歯、馬骨の出土は、前記した6遺跡がある。

今回調査した上の原古墳群の馬歯は、臼歯のみであったが、三体ともに土壙の片隅から出土している。これは頭部のみを埋葬したことも考えられるが、土壙の広さや頭蓋骨などが消失していることから、やはり全体躯を埋葬し、他の全身骨格は酸性土壌のために消失して、歯のみが残った例と考えたい。臼歯の保存状態は12号墳周溝1区のものがもっともよく、また、歯の高さや咬面の磨滅状態から、1号墳は10才、12号墳1区は5才、4区は6才前後のものと推測される。

次に出土臼歯の計測値を比較すると（Table 1、2参照）、上、下顎臼歯のエナメル質での歯冠長や幅は、宇土城三ノ丸跡[6]や塚原丸山26号墳[8]出土のものと類似しており、また、エナメルヒダの形状もこれらに似ている。

Table 1　上顎臼歯の計測値の比較

※歯冠長、幅はエナメルヒダで計測。　(mm)

			P^2			P^3			P^4			M^1			M^2			M^3			報告者
			最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	
上の原	1号墳1区	左					26.3+	16.3+		26.7+	18.5+										
	12号墳1区	左				51.9+	28.6	21.8	64.5+	28.3	26.0	59.2+	24.8	25.0	62.9+	24.2	24.8				
		右				62.3+	29.1	25.8	64.8+	27.2	26.5	59.5+	25.9	25.7	63.7+	23.6	24.2				
宇土城跡		左		35.0	24.1	73.9+	28.8	26.5				79.2+	25.6	24.2	73.4+	26.2	24.2				西中川
		右		24.6+	23.8							70.2+	25.5	25.7	83.0+	25.2	24.4				
日本在来馬	トカラ馬雄	1	46.7	34.4	22.1	48.0	26.0	25.3	56.1	24.6	25.2	50.0	22.2	24.2	56.0	23.9	24.0	55.0	24.2	20.4	西中川 広田
		2	65.4	34.9	23.5	70.3	38.4	27.5	70.7	23.4	27.4	61.4	23.7	24.7	68.5	23.7	24.0	66.5	25.1	22.3	
		3	62.2	35.0	25.0	70.0	28.4	25.9	75.4	26.1	23.9	72.0	24.8	24.2	75.5	25.1	22.6	69.5	20.9	17.4	
	トカラ馬雌	1	48.2	34.3	19.5	53.8	25.4	24.1	56.1	23.3	24.2	41.6	20.3	23.5	40.8	20.5	22.9	43.8	25.3	20.0	
		2	53.7	32.2	22.6	56.2	25.1	23.8	59.8	23.3	24.3	49.9	22.1	23.1	52.4	22.1	22.1	56.6	25.2	20.5	
		3	67.0	37.1	24.0	71.9	29.0	25.5	74.2	24.9	24.5	72.3	25.4	24.3	79.8	24.8	24.4	72.4	25.8	19.3	
現代馬	サラブレッド	1	56.1	39.3	25.7	79.0	30.6	28.1	68.8	25.1	26.9	85.6	30.0	28.0	76.2	27.7	26.3	77.7	30.3	23.4	
		2	76.5	38.0	24.5	83.0	32.8	26.2	91.8	30.3	24.5	90.0	29.9	24.7	81.8	27.7	25.5	92.0	30.5	20.5	

一方、現生のトカラ馬やサラブレッド種などと比較すると、臼歯の大きさや形状は、トカラ馬のものに類似している。しかし、上顎臼歯の原丘はトカラ馬のものより大きく、むしろサラブレッド種の方に近似する（ＰＬＩの25～30参照）。歯の大きさから、馬の体高を推定することは難しいが、トカラ馬[(4)]と御崎馬[(4)]との中間位の大きさ、すなわち、115～130cmのウマであったことが推測される。

吉倉[(8)]は、熊本県の古墳時代の馬具出土遺跡として、28ヵ所を上げている。本遺跡からもくつわなどの出土がみられ、また、５～６世紀の熊本は、すでに牧が開かれていたといわれていることから[(6)]、当時は沢山の馬が飼育され、乗馬や労役に使用されていたものと考えられる。また、１頭、１頭丁寧に埋葬されていることから、食用としたのではなく、死後埋葬されたものと考えられる。

Table 2　下顎臼歯の計測値の比較

(mm)

			P2			P3			P4			M1			M2			M4			報告者
			最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	最大歯高	歯冠長	歯冠幅	
上の原	1号墳1区	左	42.4+	26.6+		53.1+	27.5	15.5	58.2+	27.4	14.8	46.4+	25.0	14.2	44.3+						
	12号墳1区	左	56.5+	30.9+	13.0	74.0+	27.8	16.2	89.9+	27.7	15.2	68.1+	24.6	13.9	73.3+	24.5	13.3	54.5+		12.1	
		右	54.2+	33.8	13.3	71.6+	28.6	15.1	80.5+	27.5	15.9	69.4+	26.1	13.8	69.0+	25.2	13.3				
	12号墳4区	左	40.2+	16.8+	9.7+	62.5+	27.3+	14.9	64.0+	28.3	12.3+	65.0+	25.7	14.0	61.5+						
		右							60.5+	25.5	13.2	61.3+	22.9+	14.1							
出水貝塚										22.8	16.0										林田
黒橋貝塚									56.4+	24.4	13.9										木村
塚原	丸山26号墳	左		28.0+	13.0		28.0	17.0		27.0	15.0	52.0+	24.0	14.5	57.0	24.0	12.0	45.0+	28.0+	10.0+	吉倉
		右																			
	39号方形周溝墓					35.0+	30.0	10.0+	52.0+	27.0	8.0+	47.0+	23.0+	8.0+							
宇土城跡		左				66.7+	28.0	17.2										71.5+	30.5	13.5	西中川
		右	46.7+	30.9	16.2	81.8	28.2	17.7		24.2	13.8		23.3	15.0		25.0	14.2				
日本在来馬	御崎馬	1		30	15		24	15		24	15		21	14		22	13		19	12	林田
		2		33.0	16.4		30.8	19.3		29.5	19.0		27.0	16.0		31.0	16.8				
	トカラ馬 雄	1	45.1	25.8	14.5	63.3	25.9	15.4	69.8	23.5	14.0	69.1	23.1	13.3	72.0	25.2	12.3	63.0	33.0	11.1	西中川 広田
		2	54.0	29.4	13.8	69.6	27.3	15.9	74.9	25.3	14.3	78.0	23.8	15.1	82.5	24.8	13.0	74.4	28.2	12.0	
		3	60.4	31.0	14.0	73.6	28.0	14.9	83.1	26.8	14.0	83.8	26.0	13.1	80.1	25.3	11.9	76.2	27.0	11.1	
	トカラ馬 雌	1	42.1	26.6	13.3	53.2	24.1	12.3	62.6	23.3	13.4	55.7	21.2	13.8	67.4	22.5	12.3	62.5	29.6	11.1	
		2	44.6	26.8	11.9	55.8	25.6	13.6	60.7	22.7	14.1	63.6	21.9	14.6	68.7	22.6	12.7	63.6	26.3	11.7	
		3	60.7	30.5	13.4	77.4	27.7	14.6	84.1	26.9	13.3	85.4	26.5	13.8	85.3	26.0	12.0	76.0	27.8	9.5	
現代馬	サラブレッド 雄	1	66.8	32.8	15.2	81.5	29.5	17.7	86.8	28.3	16.8	85.8	27.2	15.2	88.5	27.4	15.8	78.8	31.8	16.1	
		2	70.5	31.8	14.7	83.6	30.6	15.5	97.7	29.7	15.3	90.3	28.1	15.0	91.0	27.1	13.2	84.8	27.1	15.5	

＋現保存長　　トカラ馬　雄　No.1　14才、No.2　8才、No.3　6才　　サラブレッド　No.1　6才、No.2　5才
　　雌　16才　14才　6才
　　御崎馬　No.1　25才、No.2　3.5才

4．要　約

6世紀前半～後半の塚原古墳群（上の原支群）の1号墳、12号墳1区および12号墳4区から出土した馬歯3体分を調査した。

1．臼歯3体分の総重量は773.0gで、それらの計測値はTable 1、2に示した。

2．臼歯の大きさは、塚原丸山26号墳や宇土城跡出土のものと同じで、また、現生のトカラ馬よりわずかに大きい。

3．エナメルヒダの形状は、ほぼトカラ馬に類似しているが、上顎臼歯の原丘は大きく（M^1で11.5mm）、サラブレッド種（11.6mm）のものに近い値を示した。

参考文献

1．Dreisch A.: A guide to the me asurement of animal boneos from archae alogical sites. pl－137. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ. USA (1976)

2．熊本県教育委員会：木村幾太郎、黒橋、熊本県文化財調査報告書、20、p78（1976）

3．長谷部言人：石器時代の馬に関して、人類学雑誌、40、4、251－252（1925）

4．林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究、p1－180、中央競馬会、東京（1978）

5．直良信夫：日本および東南アジア発見の馬歯、馬骨、p1－174、日本中央競馬会、東京（1970）

6．西中川駿：宇土城三ノ丸跡出土の動物骨について、宇土城三ノ丸跡、p71－82、宇土市教育委員会（1982）

7．芝田清吾：日本古代家畜史の研究、p1－248、学術出版会、東京（1969）

8．吉倉真：塚原古墳群出土の馬歯、塚原熊本県文化財調査報告、16、p323－337、（1972）

Plateの説明

1～8：上の原1号墳出土の馬歯（左側臼歯、外側面）

1．P^3（上顎第三前臼歯）　2．P^4（上顎第四前臼歯）　3．P^3の咬面

4．P_2（下顎第二前臼歯）　5．P_3（下顎第三前臼歯）　6．P_4（下顎第四前臼歯）

7．M_1（下顎第一後臼歯）　8．P_4の咬面

9～11：上の原12号墳1区出土の馬歯（右側臼歯）

9．P^4（外側面）　10．P^3（内側面、下は咬面）　11．P_2（上咬面、下外側面）

12～20：上の原12号墳1区出土の馬歯（左側臼歯、上段は上顎、下段は下顎）

12．左側上顎、下顎臼歯の出土状況　13．P^2、P_4（内側面）

14．P^3（外側面）、P_3（内側面）　15．P^4（内側面）、P_4（外側面）

16．M^1（内側面）、M_1（外側面）　17．M^2（内側面）、M_2（内側面）

18．M_3（内側面）　19．P^4の咬面　20．P_3の咬面

21～24：上の原12号墳4区出土の馬歯（左側臼歯、外側面）

21．左側上顎、下顎臼歯の出土状況　22．P_4

23．P_3　24．P_4の咬面

25～30：上の原出土、トカラウマ、サラブレッド種の臼歯の比較

25・28．上の原12号墳1区出土のP^3、P_4（内側面と咬面）

26・29．トカラウマP^3、P_3（内側面と咬面）

27・30．サラブレッド種P^3、P_3（内側面と咬面）

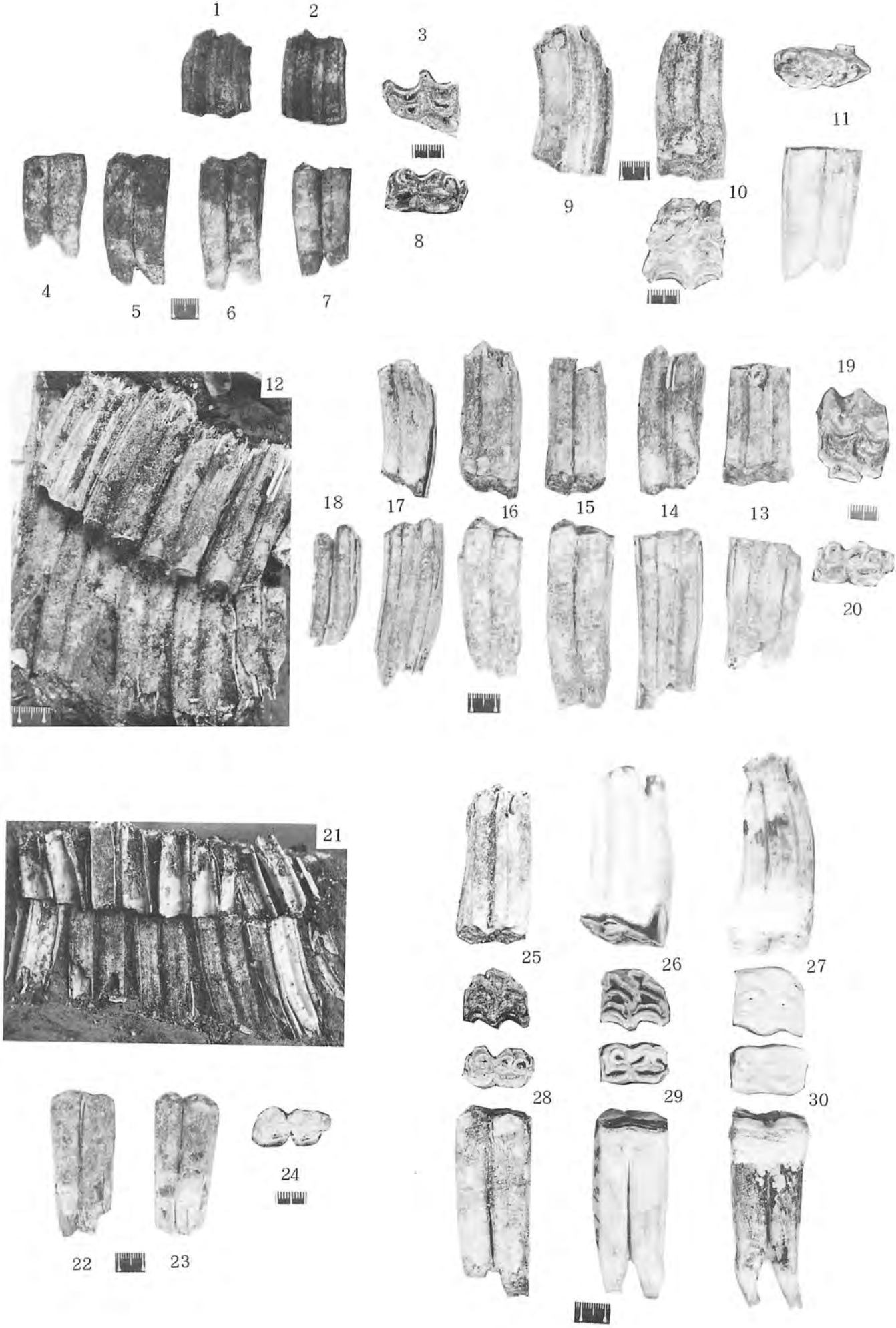
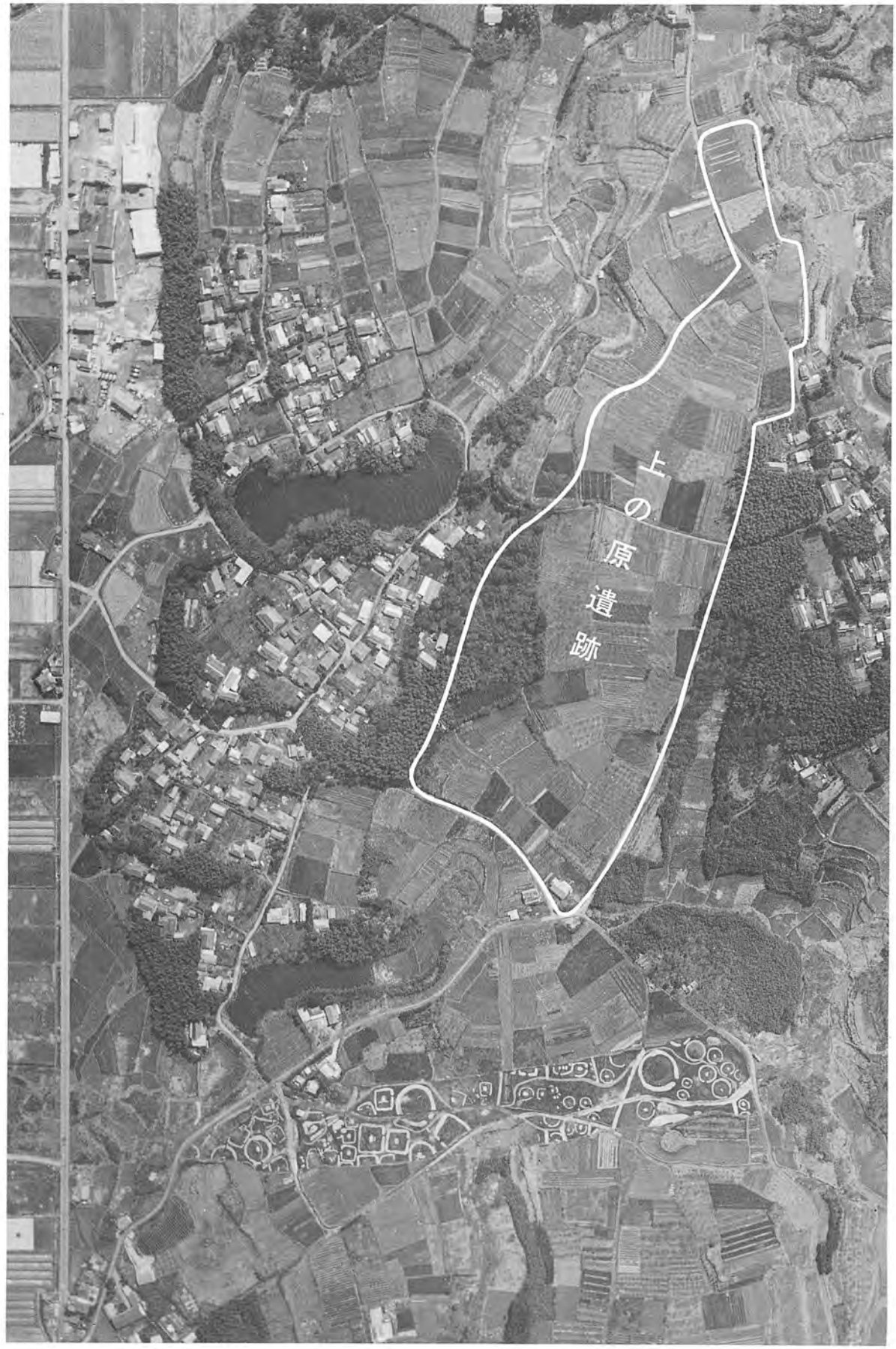

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

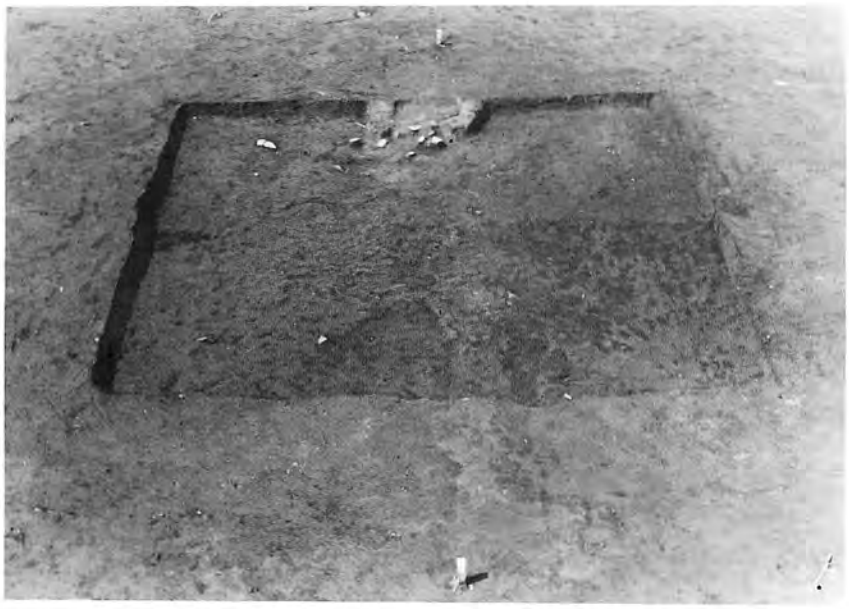
図　　版



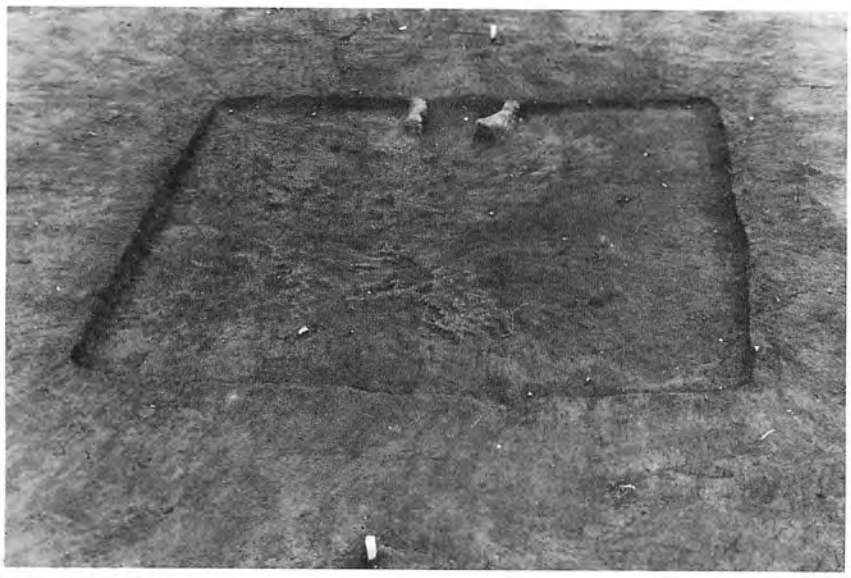
図版１　上の原遺跡空中写真（下は塚原古墳群）

図版２　上の原遺跡遠景（北東から）

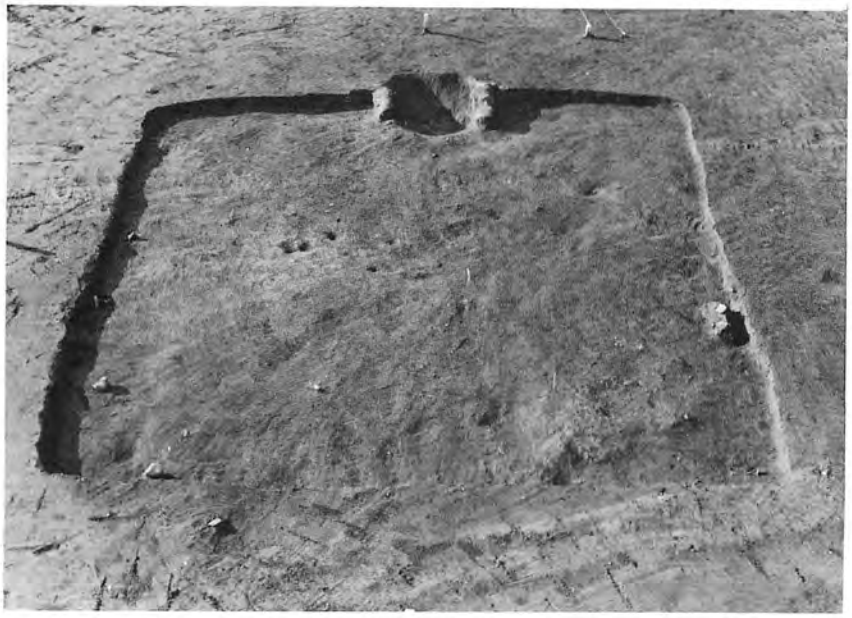
図版３　上の原遺跡空中写真（昭和53・54年度調査区）



上の原50号住居址



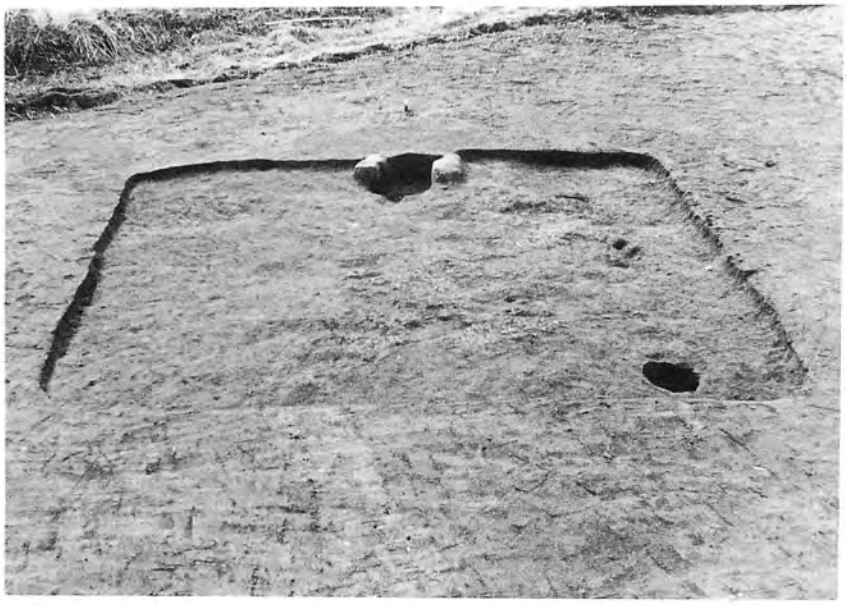
上の原50号住居址



上の原52号住居址

図版 4　上の原50・52号住居址（Ⅰ群）

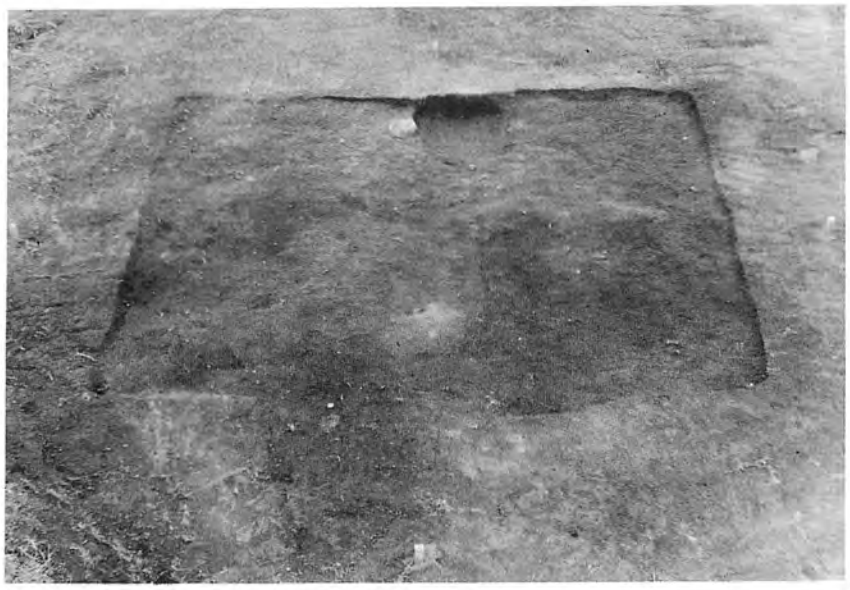
上の原53号住居址



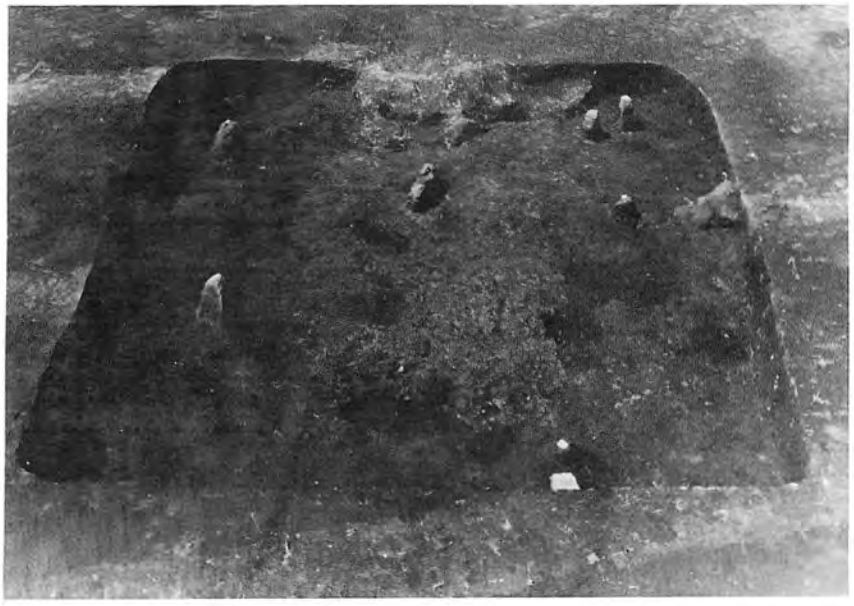
上の原53号住居址

上の原54号住居址

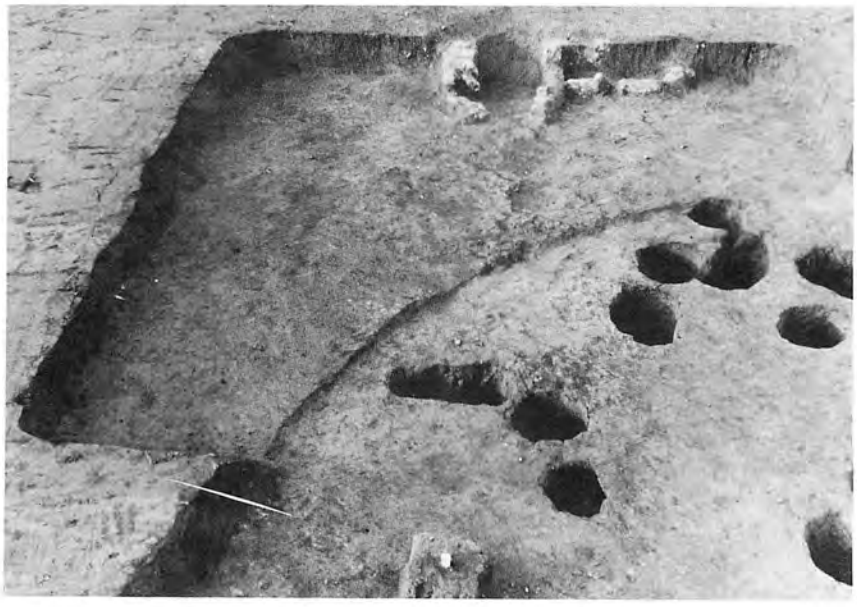
図版５　上の原53・54号住居址（Ⅰ群）



上の原55号住居址

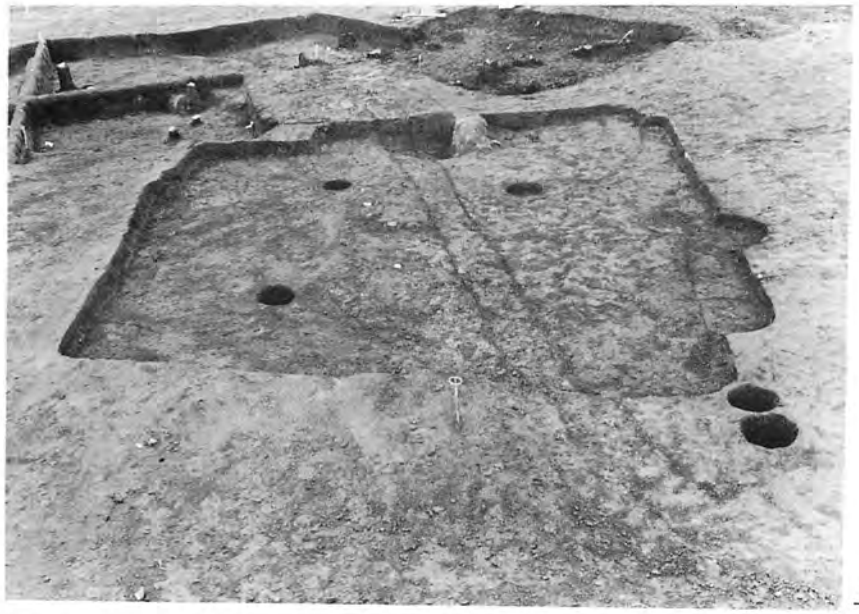


上の原56号住居址

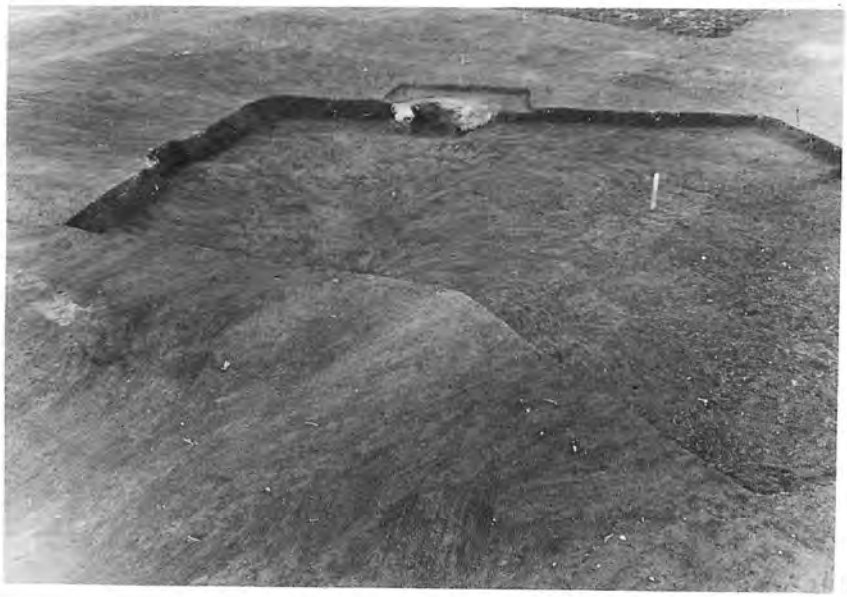


上の原56号住居址

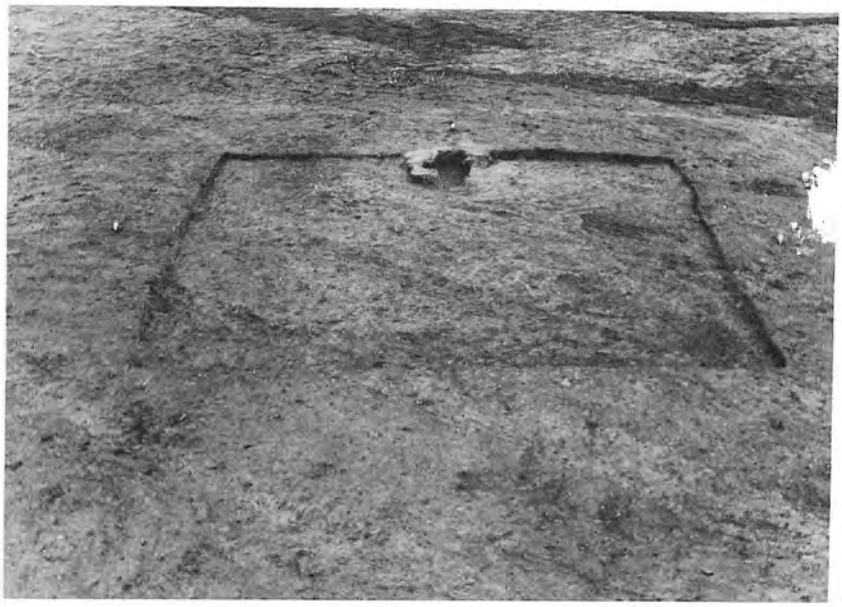
図版 6　上の原55・56号住居址（Ⅰ群）



上の原８号住居址



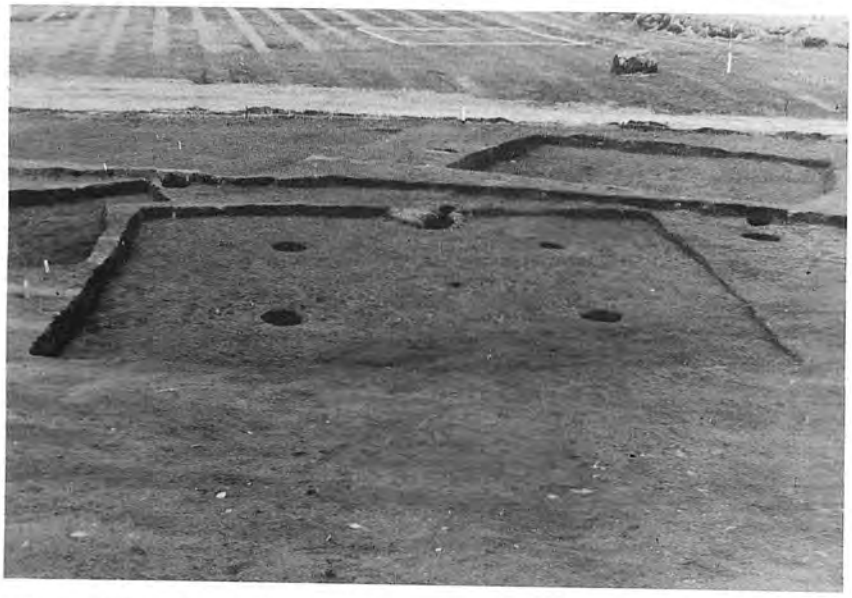
上の原10号住居址



上の原12号住居址

図版７　上の原８・10・12号住居址

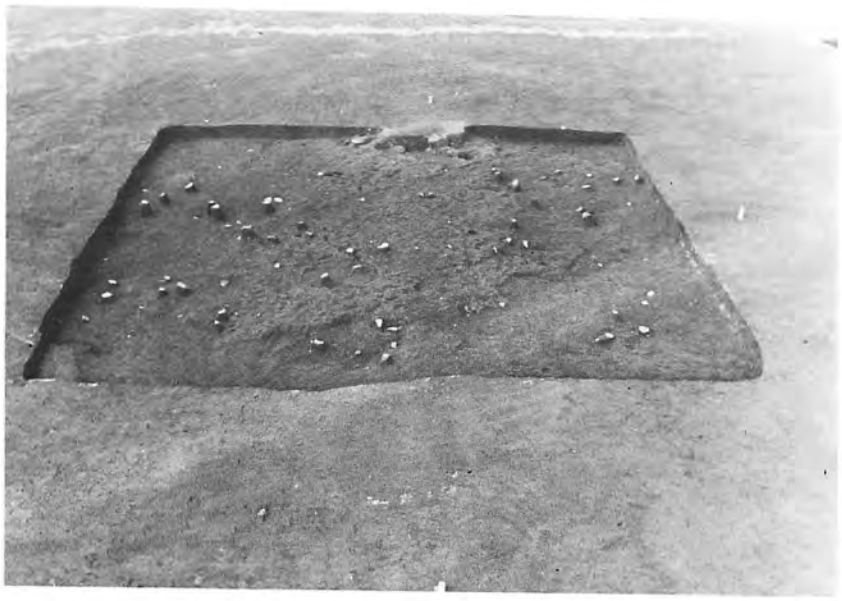
上の原47号住居址



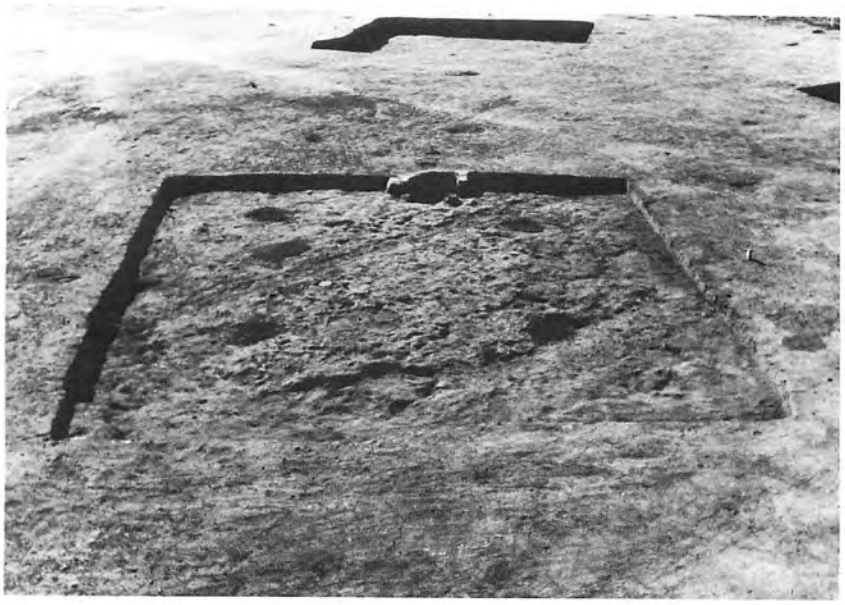
上の原64号住居址

上の原89号住居址

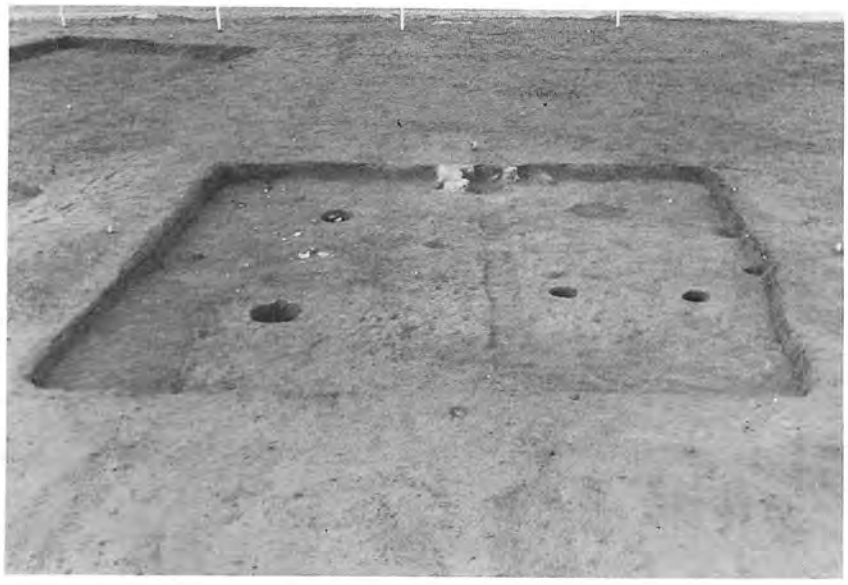
図版 8　上の原47・64・89号住居址



上の原91号住居址



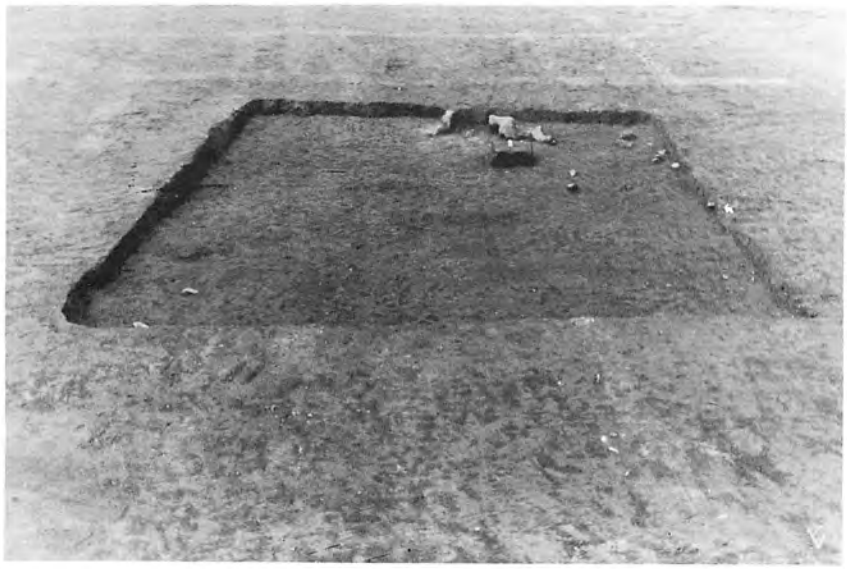
上の原91号住居址



上の原93号住居址

図版 9　上の原91・93号住居址

上の原100号住居址



上の原106号住居址

掘立柱建物址

図版10　上の原100・106号住居址、掘立柱建物址

53－9

53－8

53－5

53－1

55－5

12－3

47－2

図版11　53・55・12・47号住居址出土遺物

47－7

47－8

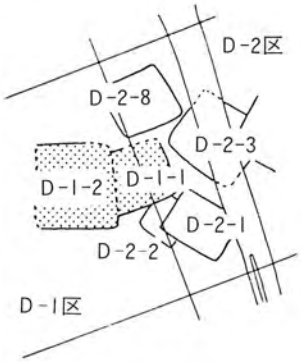
47－19

106－4

掘立柱建物址周辺

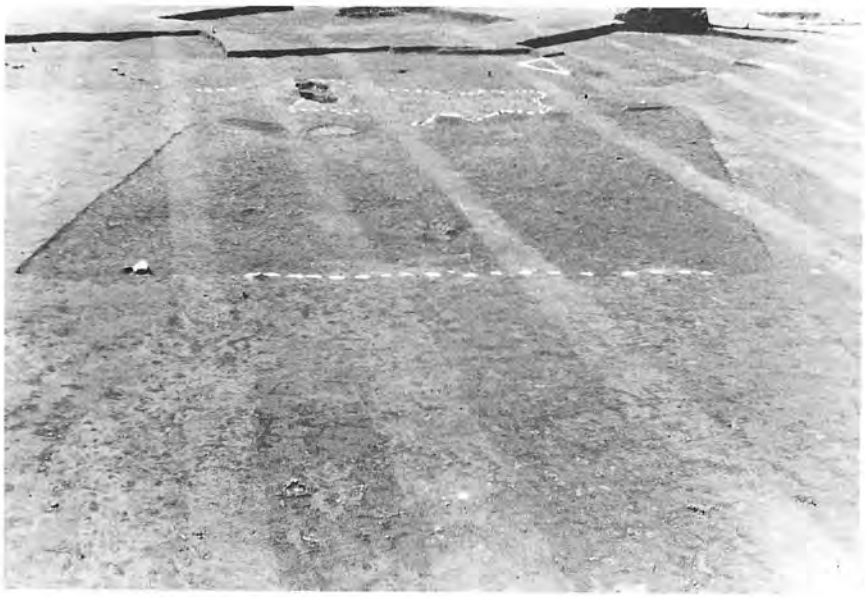
掘立柱建物周辺

図版12　47・106号住居址、掘立柱建物周辺の出土遺物



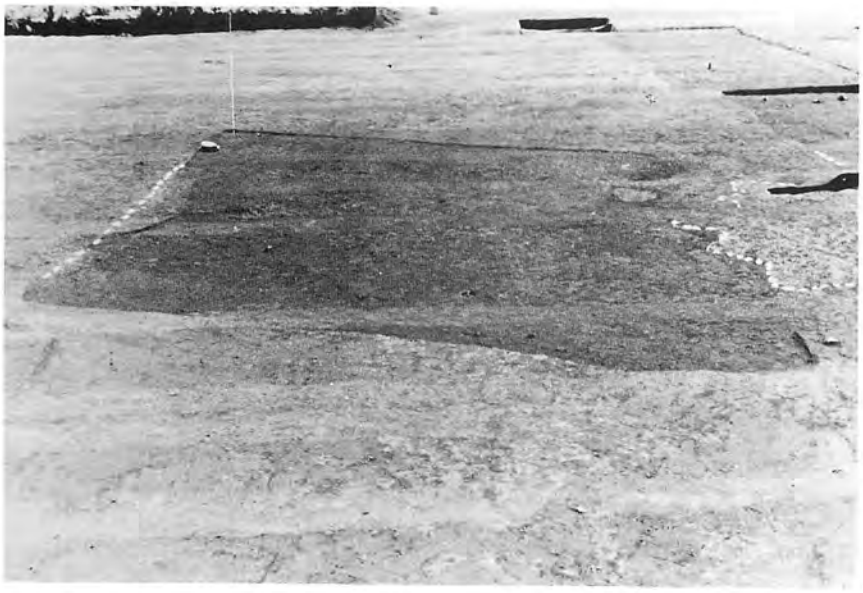
D-1・2区住居址検出状況

D-1-1(左)、D-1-2(右)号住居址

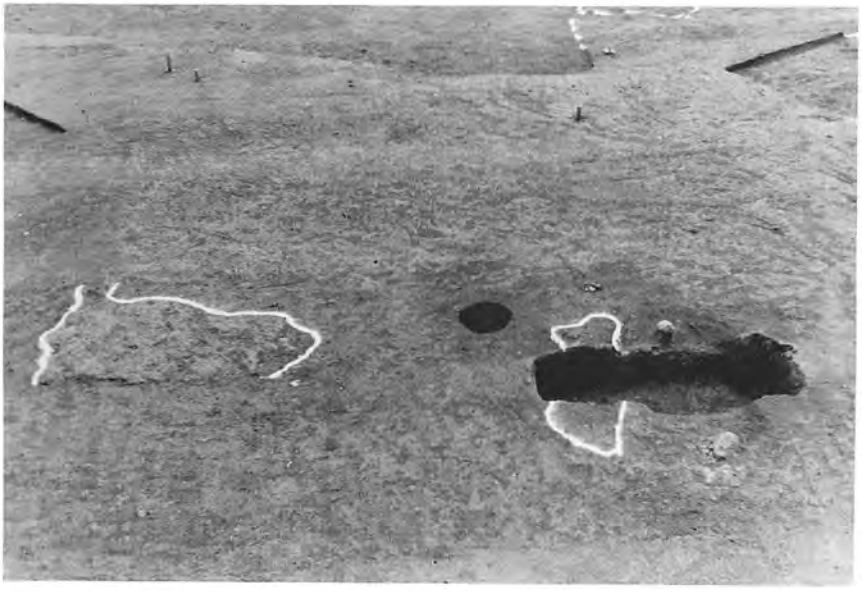


D-1-2号住居址

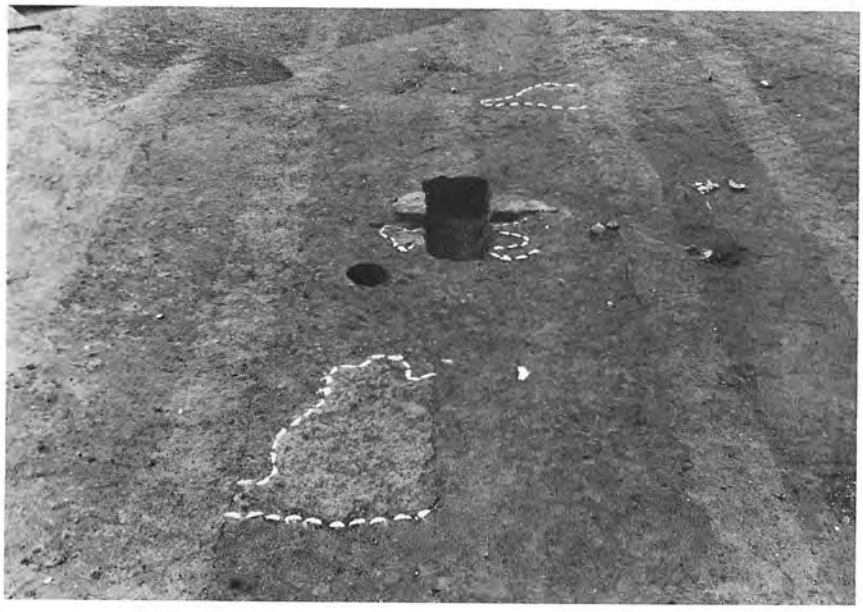
図版13　D-1-1・2号住居址



D-I-2号住居址

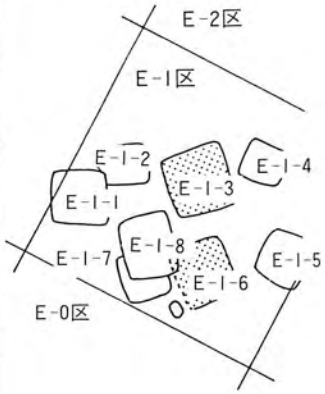


D-I-8号住居址



D-I-8号住居址

図版14　D-I-2・8号住居址

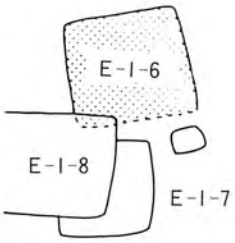


E-1区住居址検出状況

E-1-3号住居址

E-1-3号住居址

図版15　E-1-3号住居址

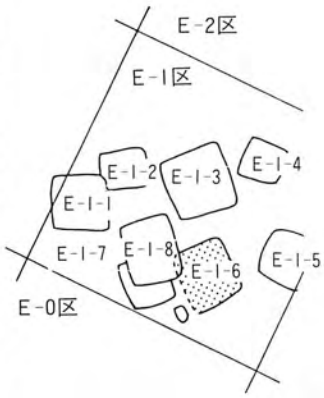


E-I-6号住居址

E-I-6号住居址カマド

E-I-6号住居址カマド

図版16　E-I-6号住居址

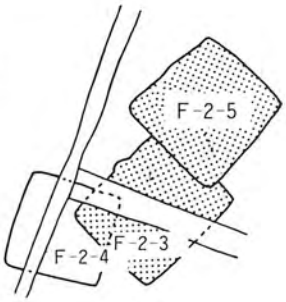


E-1-6号住居址

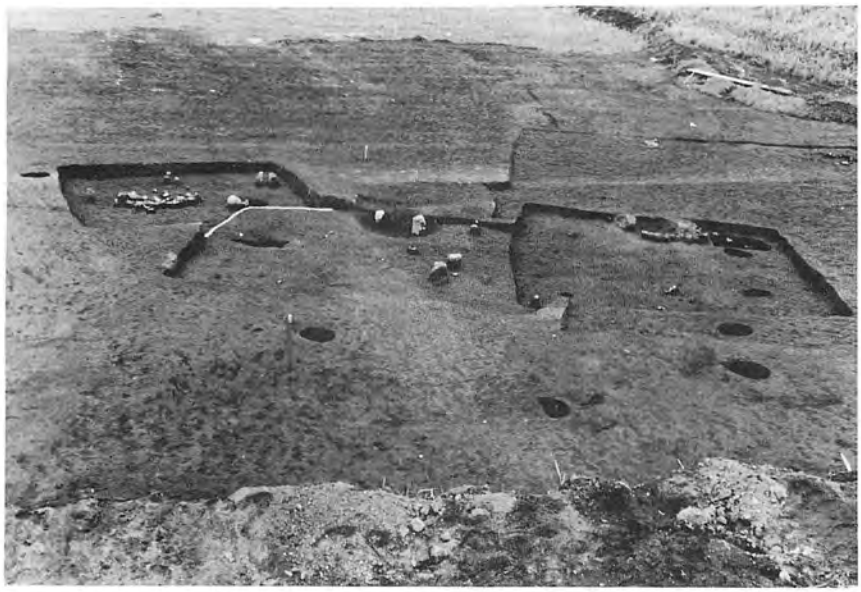
E-1-6号住居址

E-1-6号住居址

図版17　E-1-6号住居址



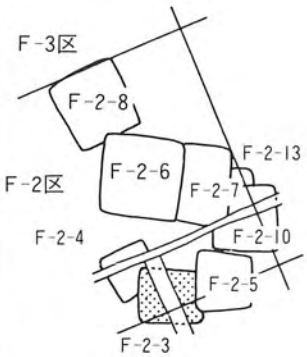
F-2-3・5号住居址



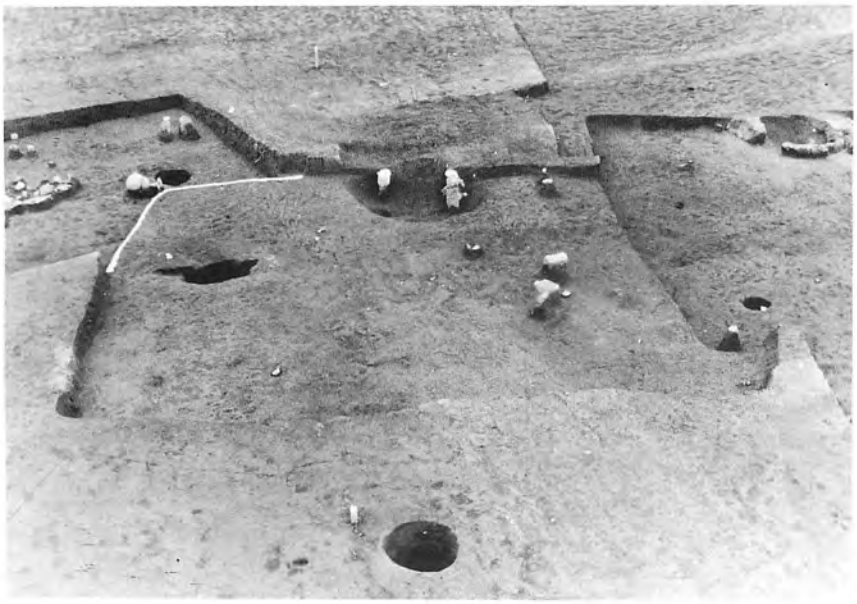
F-2-3・5号住居址

F-2-3・5号住居址

図版18　F-2-3・5号住居址



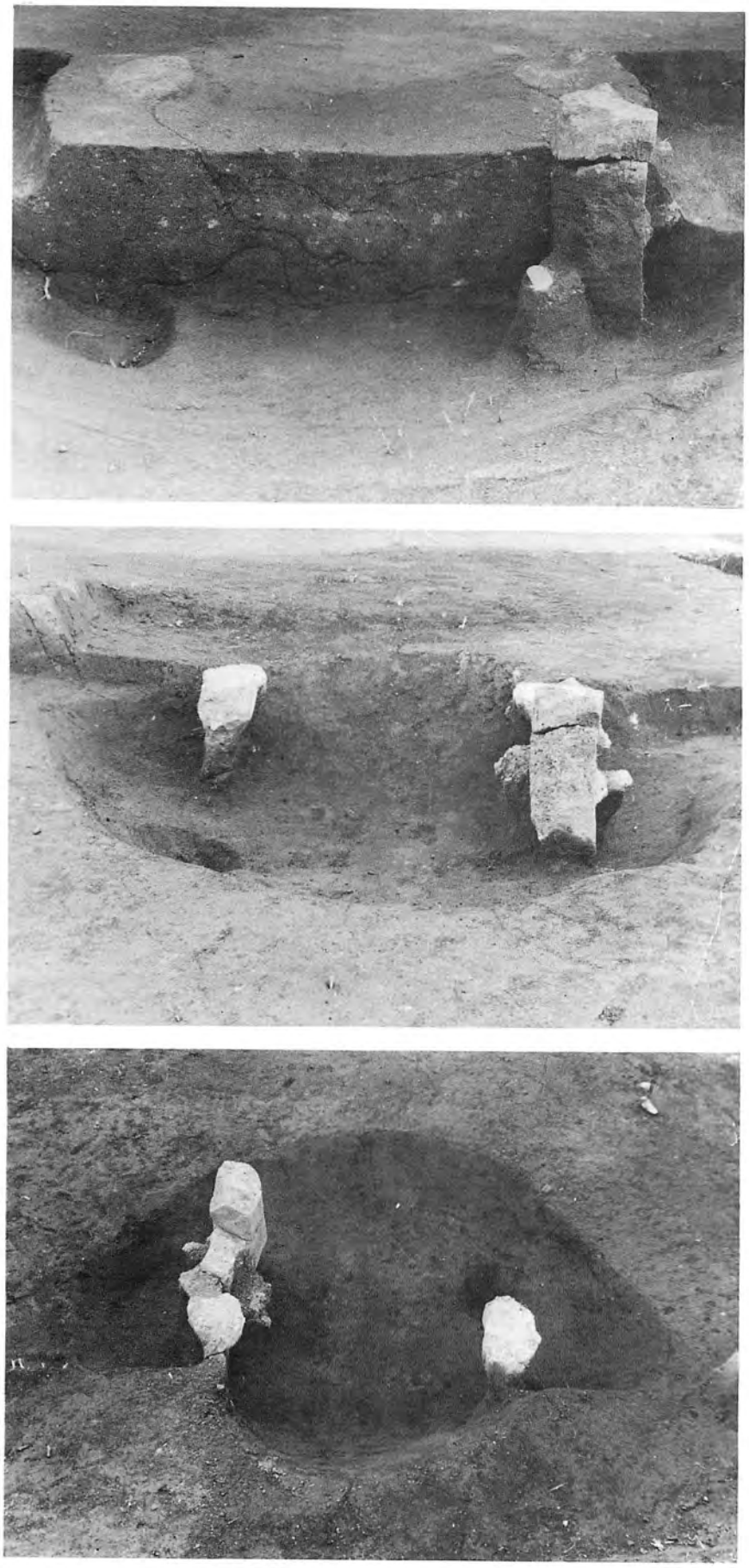
F-2-3号住居址



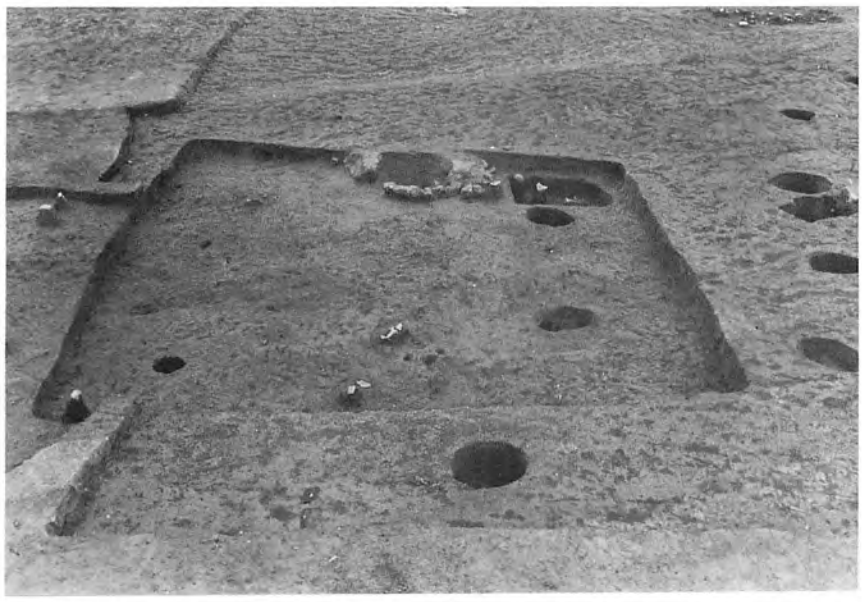
F-2-3号住居址

F-2-3号住居址

図版19　F-2-3号住居址



図版20　F-2-3号住居址竈

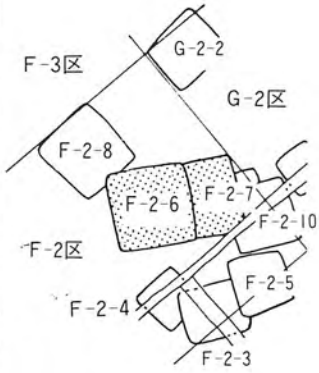


F-2-5号住居址

F-2-5号住居址貯蔵穴

F-2-5号住居址

図版21　F-2-5号住居址



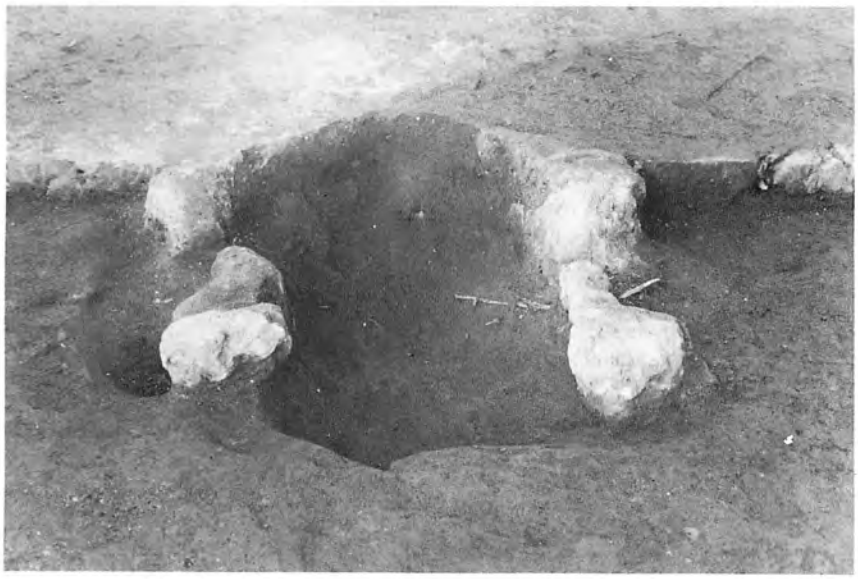
F-2-6・7号住居址

F-2-6号住居址

F-2-6号住居址カマド

図版22　F-2-6・7号住居址

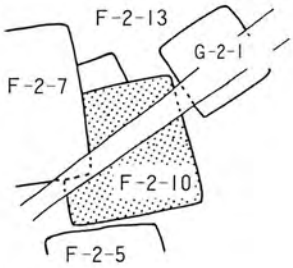
F-2-7号住居址



F-2-7号住居址カマド

F-2-7号住居址カマド

図版23　F-2-7号住居址

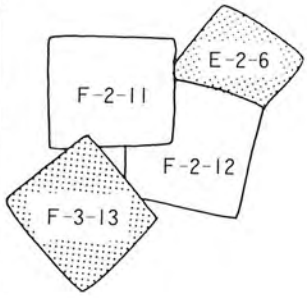


F-2-10号住居址

F-2-13号住居址

F-2-13号住居址

図版24　F-2-10・13号住居址

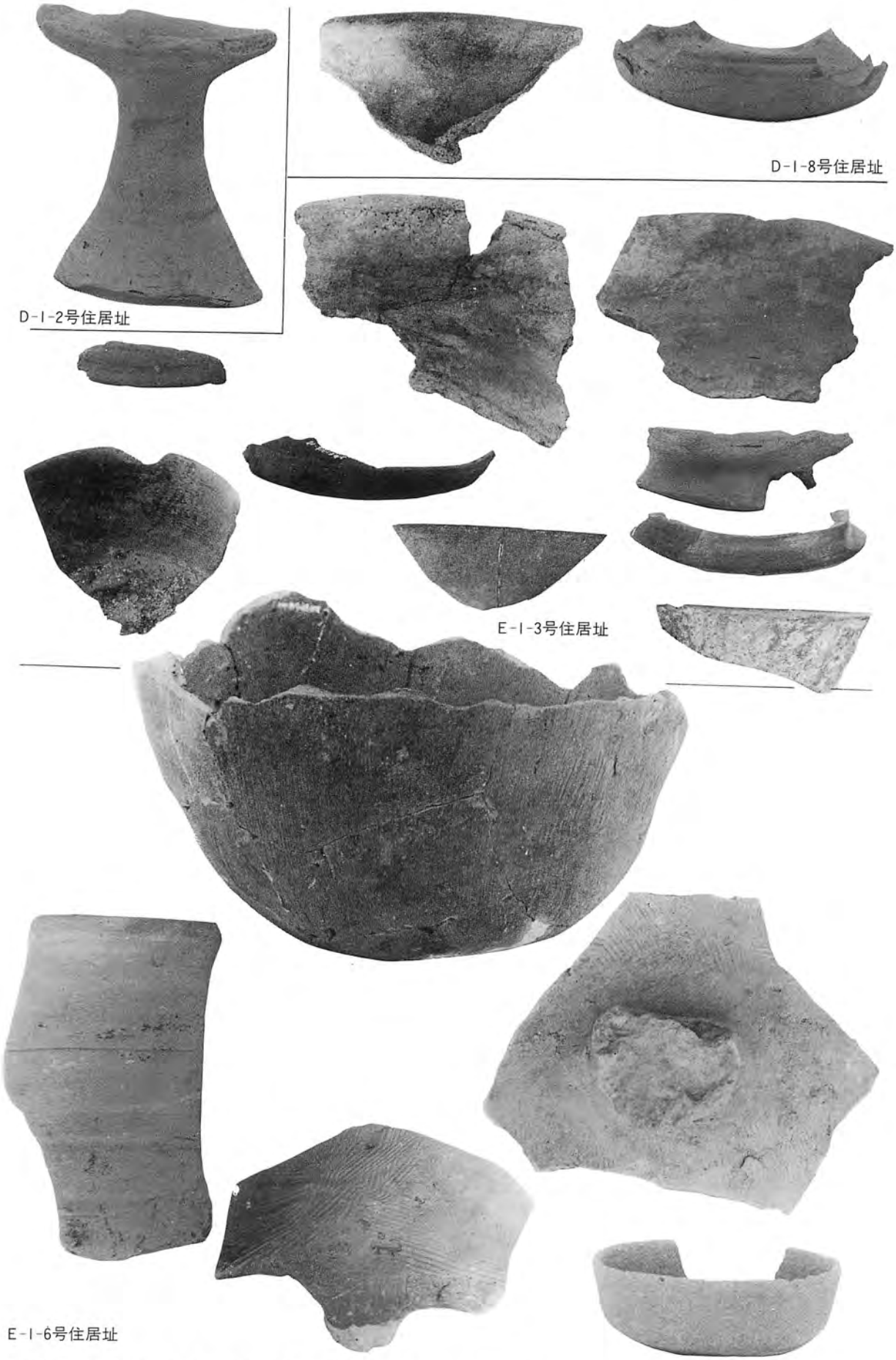


E-2-6、F-3-13号住居址

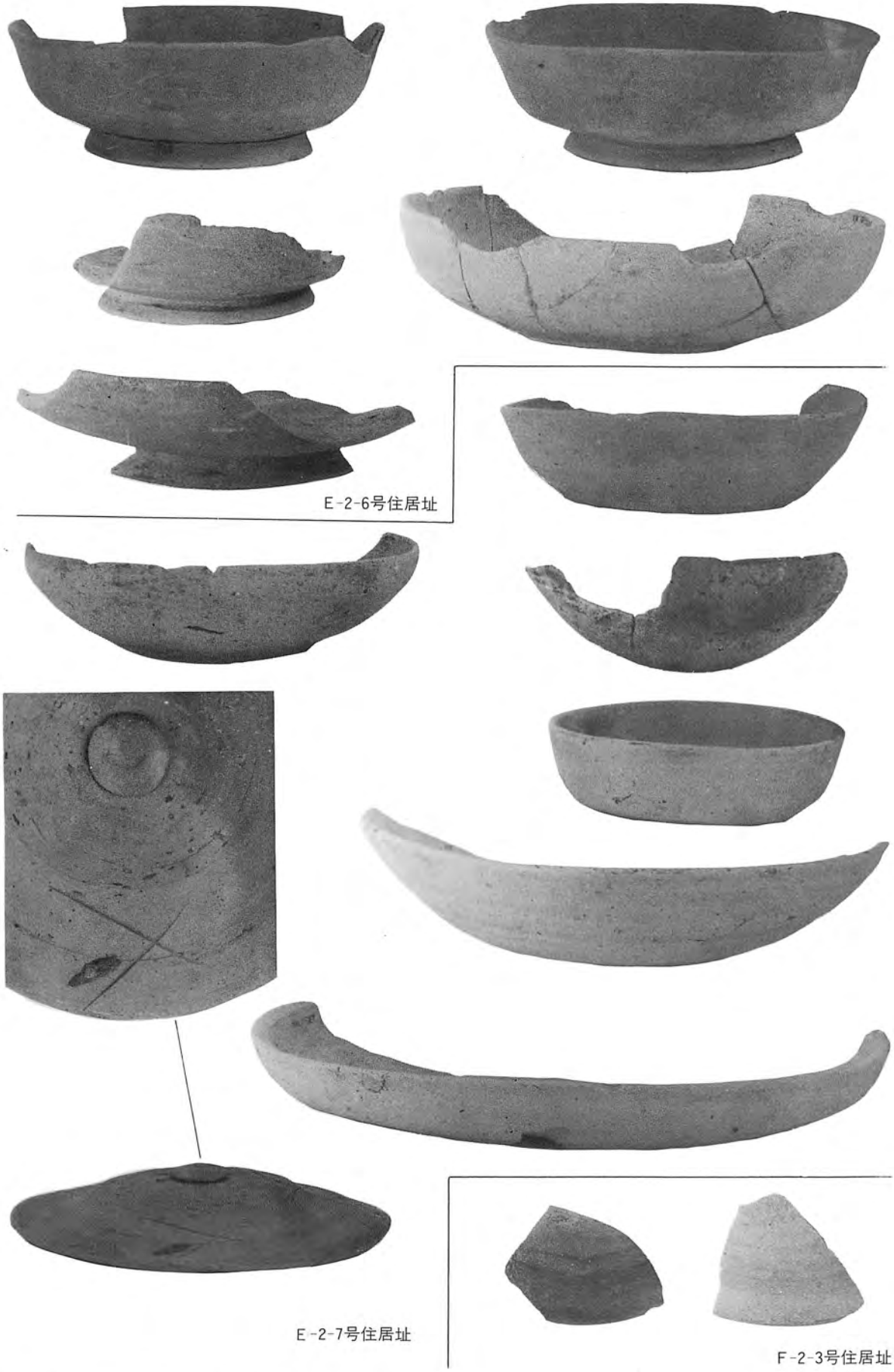
F-3-13号住居址竈

F-3-13号住居址竈

図版25　E-2-6、F-3-13号住居址



図版26　D-I-2・8、E-I-3・6号住居址出土遺物　S≒1/2



図版27　E-2-6・7、F-2-3号住居址出土遺物　　S≒½

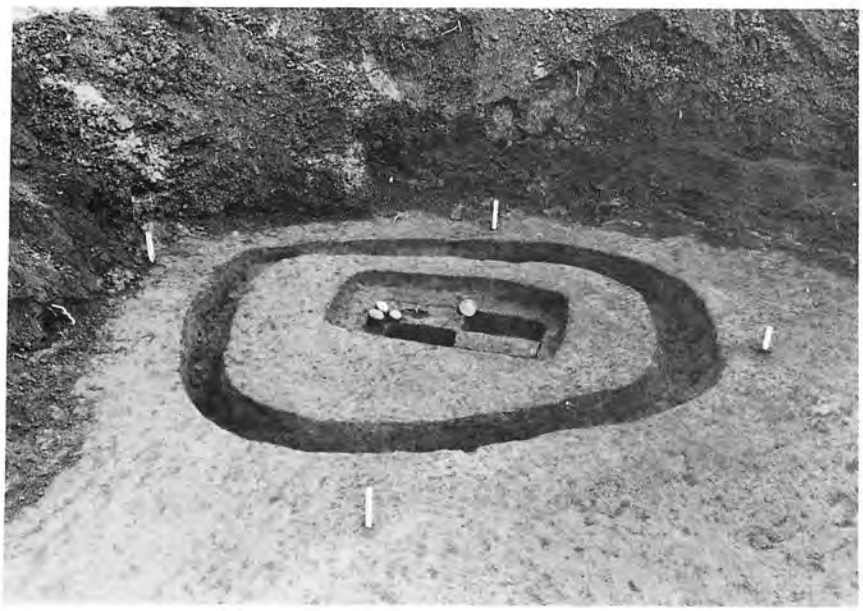
F-2-3号住居址

F-2-5号住居址

図版28　F-2-3・5号住居址出土遺物

S≒½

図版29　F-2-6・7・10・13号住居址出土遺物　　S≒½

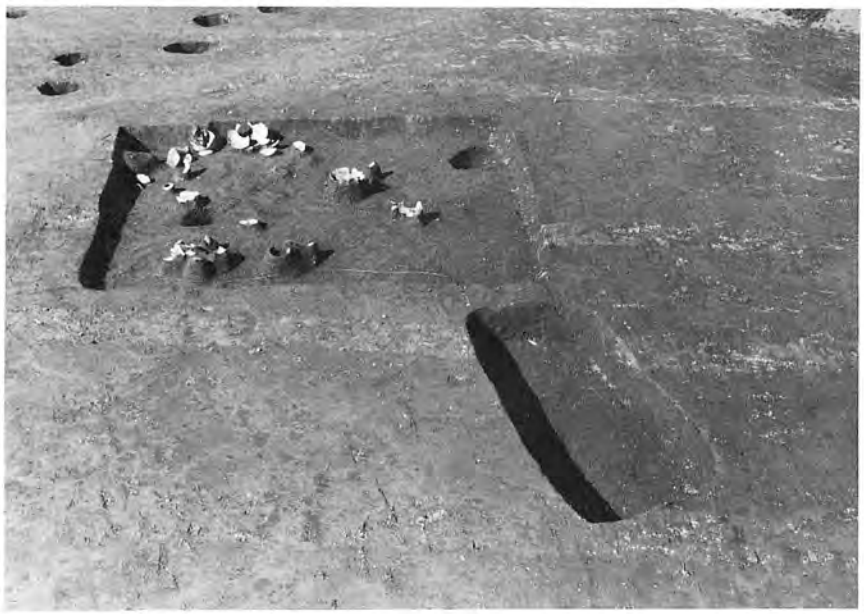


周溝墳墓全景

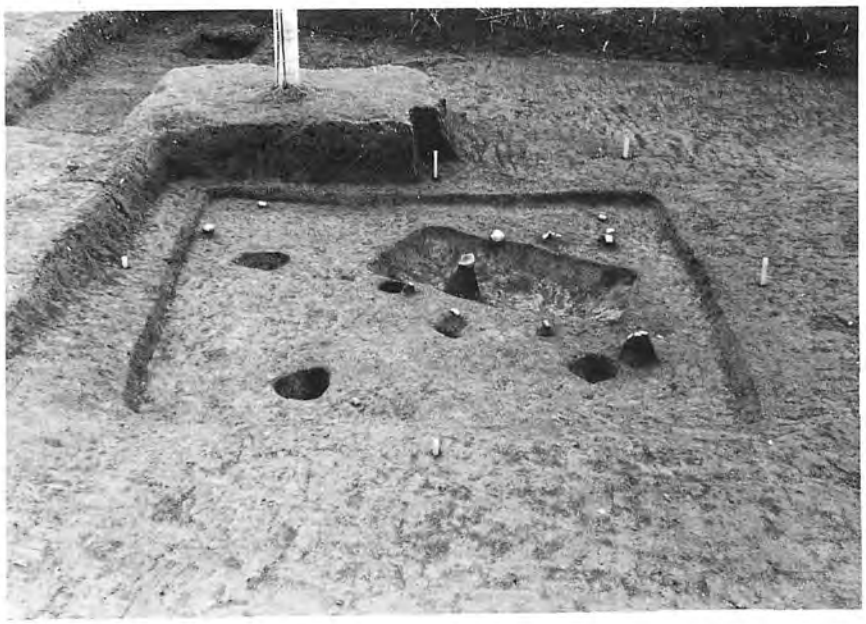
周溝墳墓主体部と出土遺物

周溝墳墓出土遺物　S ≒ 1/3

図版30　周溝墳墓と出土遺物



G-I-I号土壙墓



C-10-I号土壙墓

図版31　土壙墓と出土遺物

掘立柱
（F-1・2、G-1・2区）

道　路

溝（C列）

銙帯金具（S＝1.5倍）

図版32　歴史時代の遺構と遺物

熊本県文化財調査報告　第64集

上の原遺跡 II

昭和59年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通2－1－82
電気ビル別館5階
☎ (092) 771－2161

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 64 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上の原遺跡 2
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日